（ピット類）　主柱穴以外のピットとしては、P_9～P_{14}がある。その詳細は第３表に示す通りである。表からもわかるように、これらのピットの中でP_{12}とP_{14}は他のピットと性格を異にしている。両者のうち、P_{12}は住居跡内のピットでは特に大きな不整円形のピットで、埋土中には焼土及び炭化物が含まれ、中から土器片や礫が多数出土している。その位置関係からみて、かまどに付属した施設の一部と考えることが出来よう。P_{14}は住居跡との切り合い関係や、出土遺物からみて住居跡に直接関係あるかは不明であるが、位置関係から見て、住居跡に付属する可能性が大きい。

（かまど）　かまどは、南壁及び東壁で各１基ずつ発見されている。

南壁かまど　南壁に構築されたかまどは、耕作により削平されているが、検出時点で左側袖が長さ1.08m、巾0.54m、高さ0.05m、右袖が長さ0.64m、巾0.24m、高さ0.05mの規模でそれぞれ残っていた。両袖には壁体を補強する礫や土器片などが含まれていなかった。両袖に狭まれた、火床部と推定される部分には1.3×0.6の範囲で焼土の堆積層が検出された。煙道は住居跡の南壁にほぼ直角に作られ、真北より130°東方向に約1.16m伸びているが、煙道は検出面から0.06mほどの深さでほぼ水平に延び、その先端部に直径0.34×0.3m、深さ0.14mの平面不整円形の摺鉢状の煙出し部がついている。

東壁かまど　このかまどは、住居跡の埋没以前に破壊されており、煙道部のみが検出された。煙道は住居跡東壁に対してほぼ直角に作られ、真北より40°東方向にほぼ水平に1.1m伸びている。煙道部は検出面から深さ0.02～0.1mを測り、先端には直径0.46×0.36m、深さ0.3mの平面不整円筒形の煙出し部がついている。

以上の２基のかまどのうち、時間的には南壁に構築されたかまどが新しく、住居跡廃絶時まで使用されたと推定される。

（焼土推積遺構）　住居内の中央付近２ケ所から橙～暗赤褐色の焼土堆積層が検出された。焼土層下の床面はほぼ平坦で周りを囲む礫なども発見されなかった。位置的な関係から地床炉跡と思われたが、焼土層の周辺部から土製フイゴ口の破片、焼けた粘土塊、それにかなり多くの鉱滓、鉄器類が出土していることからむしろ、小型鍛治炉跡の可能性が大きいといえる。

〔埋土〕　住居跡を覆う埋土は地山の土層とほとんど同質同色の褐色系のシルト質軽埴土層が主体であるが、場所によって混入物や色調に幾分の違いが見られる。また、かまどや煙道部や一部のピットなどでは焼土や炭化物層が部分的に卓越している。

〔遺物出土状況〕　住居内の遺物出土状況は第10図に示した通りである。図からもわかる様に遺物は住居跡全体に広く分布している。その多くは須恵器や土師器などの古代の焼物類の破片であるが、他に鉄器類、鉱滓、土製フイゴ羽口、砥石、土錘などが出土している。これらの遺物のうち、焼物類は床面からも出土しているが、多くは埋土中から発見されており、住居跡廃

絶後、埋没するまでの間に混入堆積した様相を呈している。また、鉄器類は、住居跡の中心部に集中する傾向が見られ、鉱滓やフイゴ羽口などとともに、床面中央部の焼土遺構との関連が予想された。

〔**遺物**〕　（第11～13図、第４表、写真11、19－１、5、9、20－1、3、21－３～７、22－２）

住居跡内から出土した遺物は、層位的な確認が充分にできなかったので、すべて一括遺物として扱う。そのうち、全体形状のよく知られるものを第11～13図に図示した。

（焼物類）　**坏類**　第11図、１～５は坏類であるが、そのうち１、３はＡ群Ｉ－2a類に、２はＩ－2b類、４はII－1a類、５はⅣ－2a類にそれぞれ分けられる。

小型カメ類　６、13～15は小型のカメ類であるが、６、15以外はロクロを成形したＢ群III類の小型カメ類である。６はII－１類に含まれるが、15は磨滅が進み、一部技法的に不明であるが６と同類であろう。

長胴カメ類　７～９、11、12は長胴カメ類である。いずれも破片で全形のそろっているものはないが、そのうち、７はＣ群Ｉ－1c類、８はＩ－1d類に含まれるであろう。９、11、12はロクロ調整痕のあるグループで、そのうち９はII－$2a_3$類、11、12はII－$2a_1$類に含まれる。

鉢、壺類　10は内黒の鉢類でＤ－１類に分類されるものである。第12図１、５～９は須恵器の中～大型の壺類である。そのうち１、６、７はＦ群III－2b類、８はIII－2c類、９はIII－1b類、２はＦ群の中型器形のいずれかにそれぞれ含められる破片資料である。

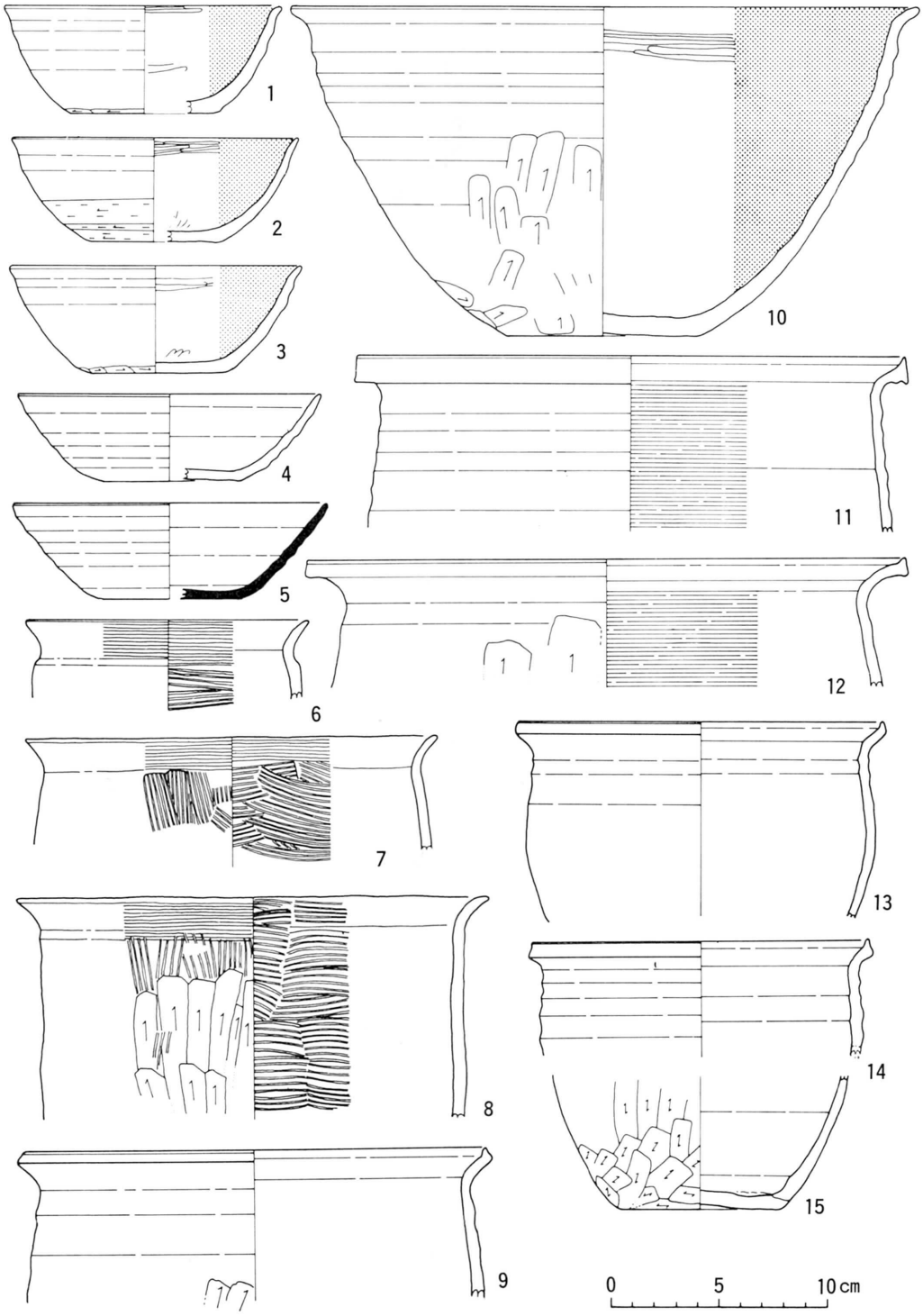
長頸瓶類　３～４は、須恵器の長頸瓶で、いずれもＧ群Ｉ－１類として分類される資料である。特に、住居跡南西隅より出土した４は全形を復元し得る稀有な例である。

（鉄器）　鉄器としては、第13図１～18に図示した18点の鉄器類が出土しているが、断片になったり、腐蝕されたりしているため器種の不明な個体が多い。

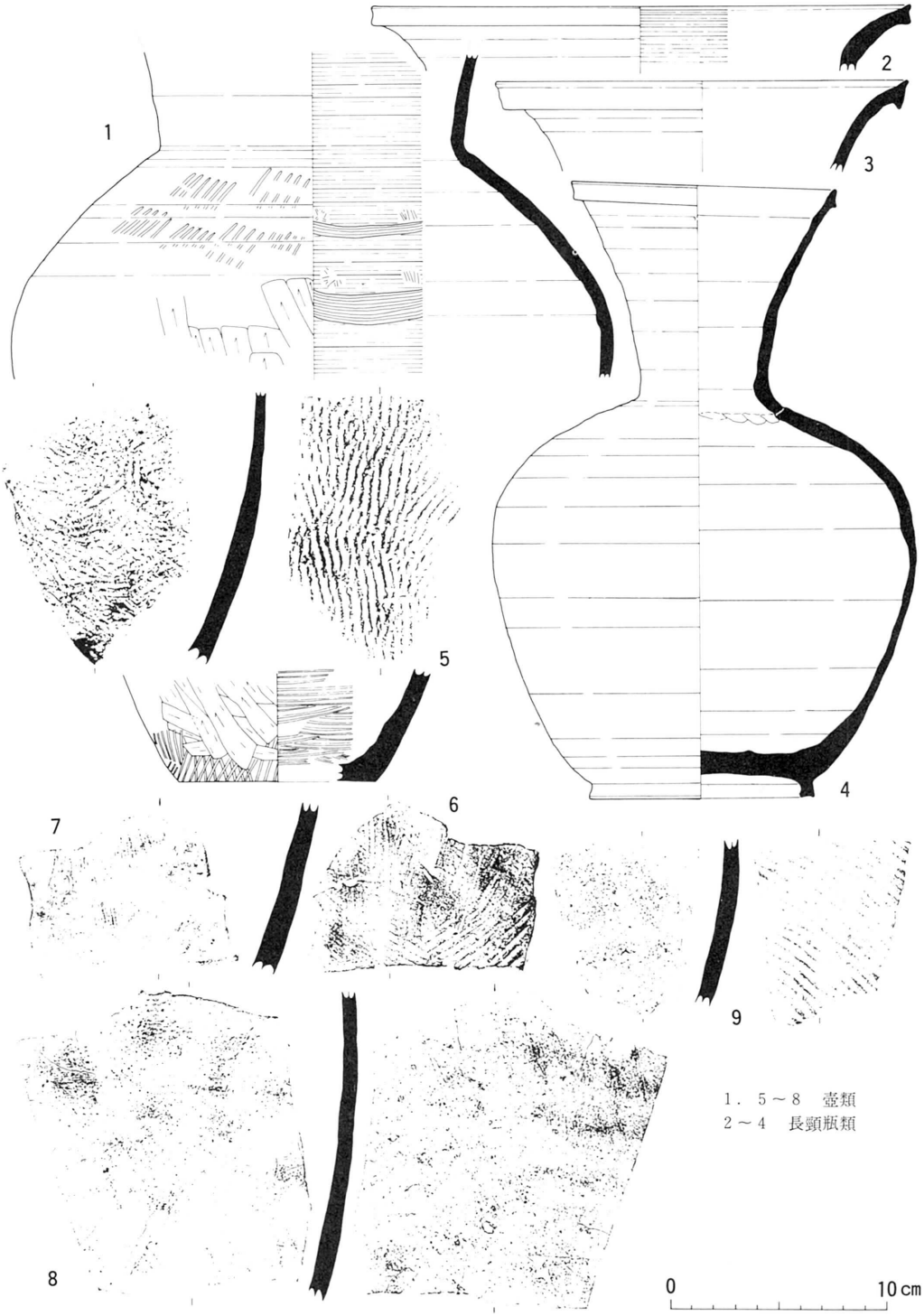
その中で、８、10、15、18は刀子ないしその破片と思われる。13、17は鏃と思われ、１、２、３なども同類と推定される。ただ、12などとの類似から釘状金具の可能性も予想される。４、５、６、７、９、11、14、16などは今のところ性格が全く不明である。

（石器）　石器としては19の小型砥石１点が、住居跡の南西隅よりの西壁際の床面より出土している。材質は風化の進んだ流紋岩で、研摩面は３面ある。

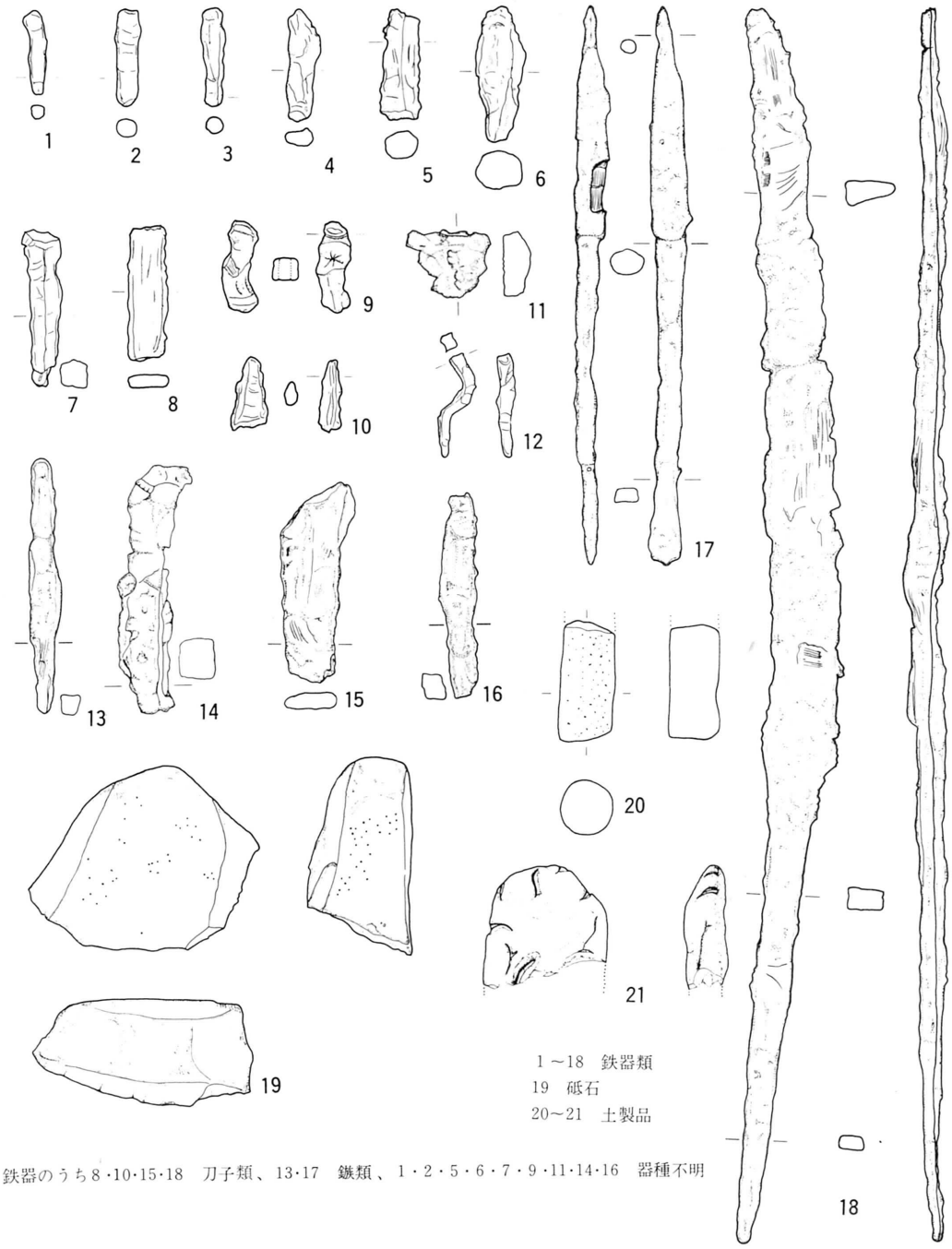
（土製品）　容器以外の焼物として、20、21に掲げる様な性格不明の土製品２点が出土している。そのうち20は折れた円柱状の土製品であるが、胎土中は砂が多く含まれ、にぶい橙色を呈している。21は橙色を呈した、やや厚みのある円盤状の土製品であるが、やはり欠けている。色は橙色を呈し、胎土中に含まれる砂は20より少ない。なお、この他に住居跡内からは土錘２点が出土しているが、調査終了後、行方不明になっている。



第11図　AF03住居跡出土遺物実測図(1)



第12図　ＡＦ03住居跡出土遺物実測図(2)



第13図　AF03住居跡出土遺物実測図(3)

第４表　ＡＦ０３住居跡出土遺物一覧表

焼　物

実測図番号	写真番号	焼成による分類	器種名	出土遺構層	口径	底径	器高	その他の法量値	外壁色調	胎土の状況	残存部位
12－1	—	須恵器	小型壺類	東煙道	15.0cm	— cm	残推14.9cm	cm	灰	砂少量混入	口縁部～体部
2	—	須恵器	?	床部埋土	上推24.6 下推19.8	—	残 2.8		暗　灰	砂少量混入	口縁部
3		須恵器	長頸瓶	床部埋土	18.8	—	残推 3.8	体部径残推13.8	暗　灰	砂少量混入	口縁部
4	11－2	須恵器	長胴瓶	床部埋土	12.3	10.2	28.0～28.4		濃　灰	細砂少量混入	完形
5	—	須恵器	大型壺	床部埋土	—	厚0.7～0.9	長12.8	頚部径巾　8.8	黒灰～灰	砂混入	体部
6	—	須恵器	壺 ?	床部埋土	残14.0	推 9.0	5.0		灰	砂少量混入	体部～底部
7	—	須恵器	大型壺	床部埋土	—	厚0.8～0.9	長 7.7	頚部径巾　9.6	灰	砂混入	体部
8	—	須恵器	大型壺	床部埋土	—	—	長14.7	体部径巾　13.2 脚部高厚0.6～0.7	灰	砂混入	体部
9	—	須恵器	大型壺	床部埋土	—	厚 1.0	長 8.0	頚部径巾　7.3	暗黒褐	砂混入	体部
11－1	11－4	土師器	内黒坏	床部埋土	12.8	6.6	5.0		にぶい黄橙	細砂少量混入	口縁部～底部
2	3	土師器	内黒坏	床部埋土	推13.2	推 6.0	4.8		にぶい黄橙	細砂少量混入	口縁部～底部
3	6	土師器	内黒坏	床部埋土	推13.4	5.8	5.0		にぶい黄橙		口縁部～底部
4	8	須恵器	坏	床部埋土	推14.0	6.0	4.0		浅黄橙～灰白	細砂少量混入	口縁部～底部
5	7	須恵器	坏	床部埋土	推14.4	推 6.4	4.4			砂混入	口縁部～底部
6	—	土師器	小型カメ	床部埋土	推13.2	—	残推 4.0	頚部径推　10.8 体部径推　12.6	橙	砂混入	口縁部
7	—	須恵質～土師質土器	小型カメ	床部埋土	推19.0	—	残推 5.3	体部径推　8.4	浅黄橙	砂混入	口縁部～体部
8	—	土師器	長胴カメ?	床部埋土	推22.0	—	残推10.0	体部径推　17.4	橙	砂混入	口縁部～体部
9	—	土師質土器	長胴カメ	床部埋土	21.2	—			橙～にぶい橙	砂混入	口縁部
10	11－1	土師器	大型内黒鉢	床部埋土	推29.0	8.8	15.2		にぶい黄橙	細砂混入	口縁部～底部
11	—	須恵質土器	長胴カメ	南カマド袖付近	推25.6	—	残推 8.0	体部径推　12.1	黄　白	砂混入	口縁部
12	—	須恵質土器	長胴カメ	床部埋土	推28.0	—	残推 5.4	体部径推　25.0	にぶい褐	砂混入	口縁部
13	—	土師器	小型カメ	東カマド付近	推17.0	—	残推 9.0		明赤褐	砂混入	口縁部～体部
14	—	土師～須恵質土器	小型カメ	床部埋土	推15.6	7.4	残推 5.0	体部径推　14.8	橙	砂混入	口縁部～体部
15	11－9	土師器	長胴カメ	床部埋土	—	7.4	残 6.3	体部径推　18.7	橙	砂混入	体部～底部
—	5	土師器	内黒坏	床部埋土	—	6.0	4.5		橙	砂混入	体部～底部

石　器

実測図番号	写真番号	器種名	出土遺構層	最大長	最大巾	最大厚	重　量	材　質	備　考
13－19	19－5a.b	砥　石	床部埋土	5.2cm	6.4cm	2.9cm	95g	流紋岩	2面共擦痕あり

土製品

実測図番号	写真番号	器種名	出土遺構層	最大長	最大径ないし巾×厚	色　調	胎土の状況	黒　斑	磨滅状況
13－20	19－9	円柱状土製品	床　面	3.5cm	1.5cm	にぶい橙色	砂混入	な　し	やや著しい
21	〃	扁平板状土製品	〃	3.6	1.2	赤褐色	砂混入	〃	あまり進んでいない

鉄　器

実測図番号	写真番号	器種名	出土遺構層	最大長	最大巾	最大厚	体部横断面形	保存状況	備考
13－1	21－3	釘？	床部埋土	2.4cm	0.4cm	cm	不整円形	不良	
2	〃	釘？	床部埋土	2.8		0.4～0.7	楕円形	〃	
3	〃	？	床部埋土	2.8	0.5		不整円形	〃	
4	〃	刀子？	床面	3.1	0.08～0.09	0.04～0.07	不整楕円形	〃	
5	〃	？	床部埋土	3.9	0.85～1.1	0.75	不整円形	〃	
6	〃	？	床部埋土	4.45		0.8～1.3	不整円形	〃	全体の銹化が目立つ
7	21－7	釘？	床部埋土	3.8	0.8	0.8	不整四角形	〃	かなりの銹化有り
8	3	刀子の柄	床面	2.6	1.1	0.3～0.35	不整長方形	やや良	錆が若干付着して有るが残存部分の原形がわかる
9	〃	釘？	床部埋土	2.1	0.7	0.45	不整四角形	不良	銹化著しい
10	〃	刀子の先	床面	2.9～1.4			不整円形	〃	
11	21－6	刀子	床面	3.0	1.9	0.5～0.8	不整長方形	〃	
12	3	釘？	床部埋土	7.2			不整四角形	〃	
13	7	鉄鏃	床部埋土	7.05	0.55～0.4	0.5	台形状	やや良	錆はあまりなくほぼ原形をとどめる
14	〃	？	床部埋土	5.65	0.95～1.0	0.5	長方形	不良	錆こぶ有り
15	〃	刀子	床部埋土	5.8	1.35～1.85	0.13～10.5	不整長方形	〃	
16	〃	？	床部埋土	14.8	0.5～1.1	0.7	不整長方形	〃	
17	21－5	刀子	床面	14.8	0.6～1.1	0.35～0.9	不整円形と台形	良	原形をとどめている
18	4	刀子	床面	35.6	0.35～2.15	0.35～1.1	長方形及び台形	〃	錆はあるが原形が明確

ＥＪ53住居跡　（第14～16図、第５表、写真10－４、14－４、５）

〔位置〕　調査区中央部北寄りの東辺に位置している。

〔重複関係〕　ＥＩ50ピットに切られている。

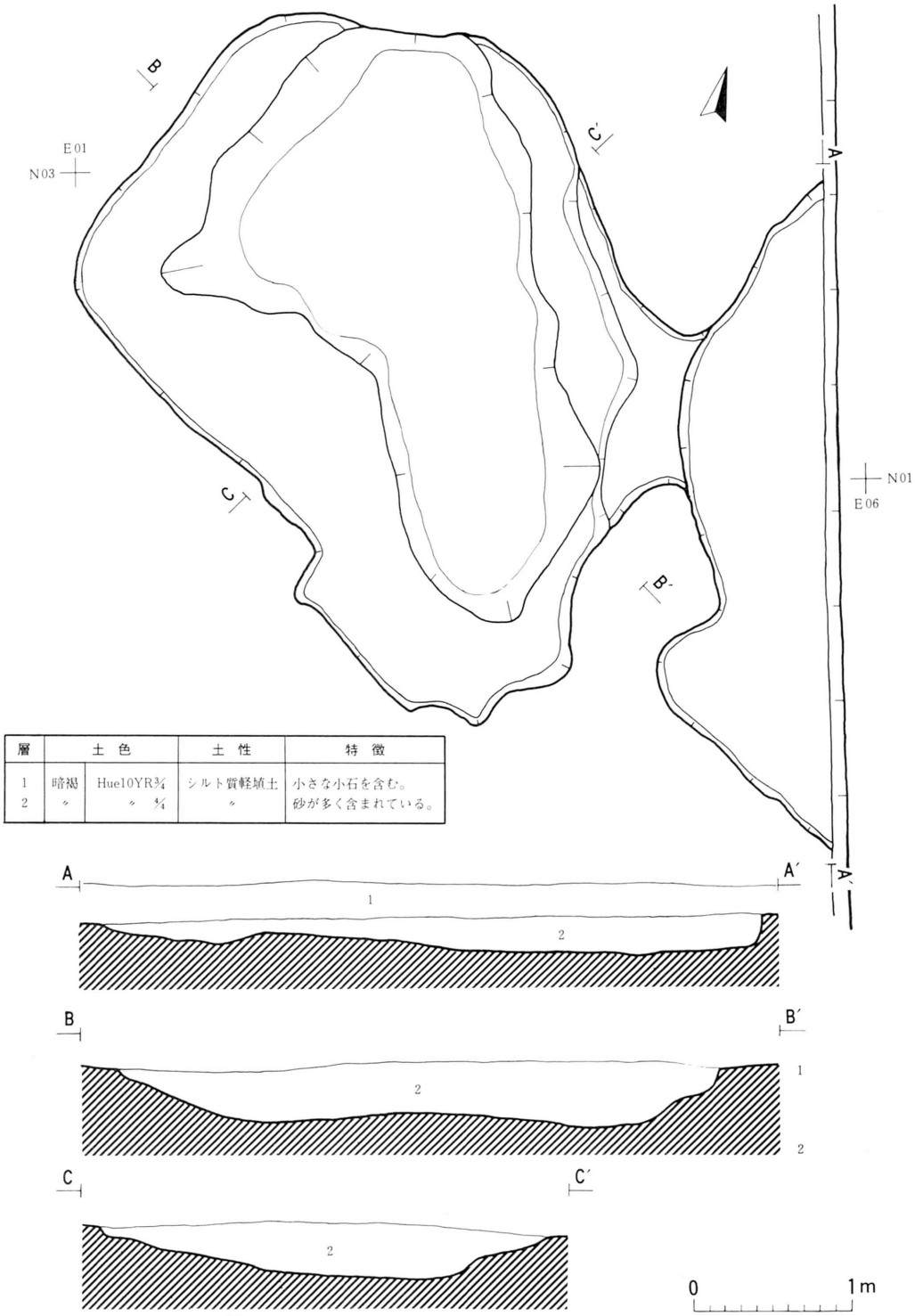
〔形状、規模〕　調査区の東辺の巾約0.5ｍ、長さ約4.2ｍの範囲にわたって検出された竪穴住居跡である。その全形は、遺構の大部分が調査区域外にあるため不明であるが、隅丸方形である可能性が強い。床面は検出面より約0.18m内外下がるが全体的に北高南低のレベルを示す。

〔埋土〕　床面を直接に覆う埋土は、ＥＪ50ピットとほとんど同質の砂質軽埴土層であるが、その上には水田の耕作土が乗っている。

〔遺物出土状況〕　遺構の埋土中～下層の全体から、古代の焼物類の破片が出土している。

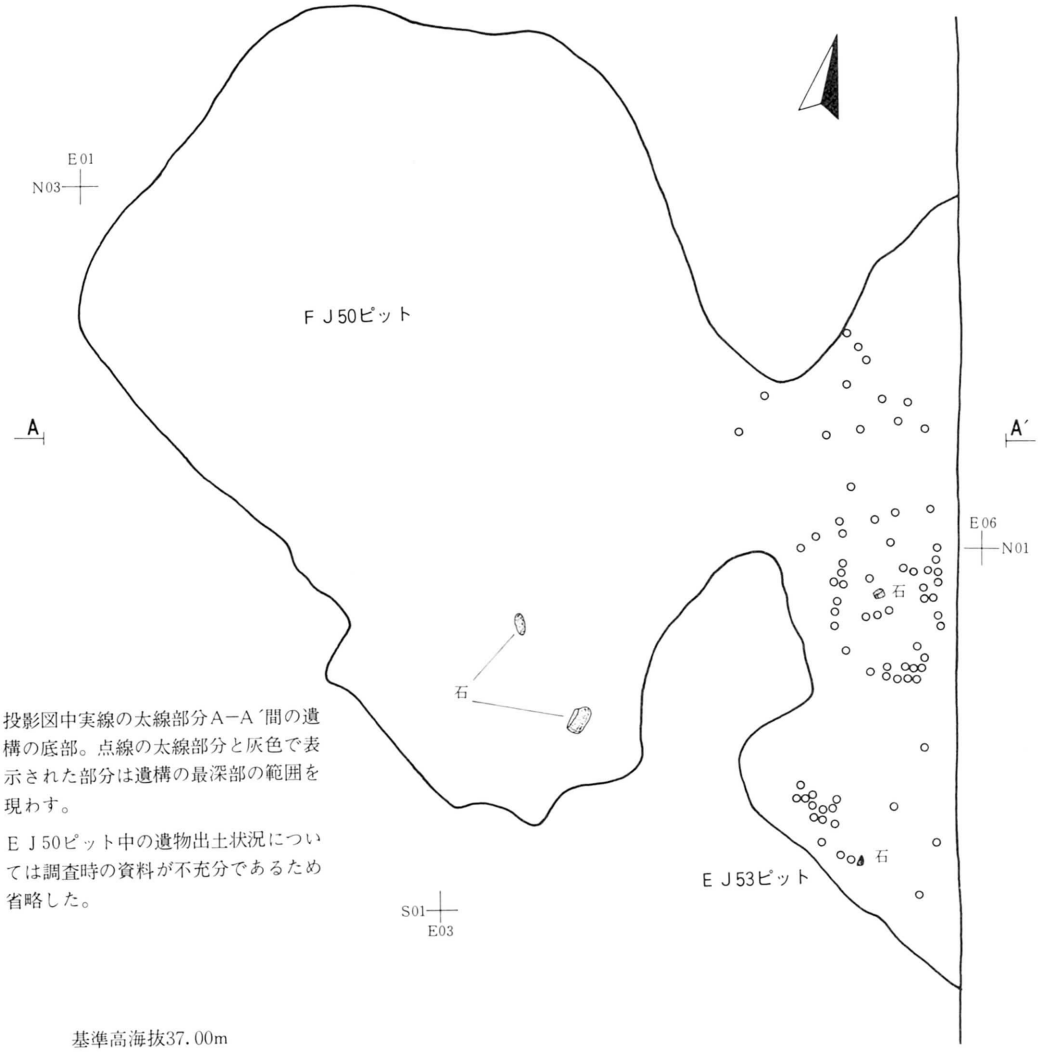
〔遺物〕　（第16図、第５表、写真14－４、５）

（焼物類）　出土した78点の古代の焼物類の中には、Ａ群Ⅰ、Ⅲ、Ⅳ類の坏やＢ、Ｃ群、Ｆ群などの各器形が認められる。そのうちで全形の比較的よく知られる資料を第15図に図示した。１～７まではＡ群の坏類であるが、そのうち１、３、４はⅠ－2a類である。２、５はⅠ－１類がⅠ－２類であるか、底部が無く、磨滅が著しいので不明である。６はＡ群Ⅰ－$1a_3$類、2b 類の破片である。以上のほかに８の小型土器が出土している。この土器は分類上、一応Ｊ群Ⅰ－１類とされているものである。



層	土色		土性	特徴
1	暗褐	Hue10YR3/4	シルト質軽埴土	小さな小石を含む。
2	〃	〃 4/4	〃	砂が多く含まれている。

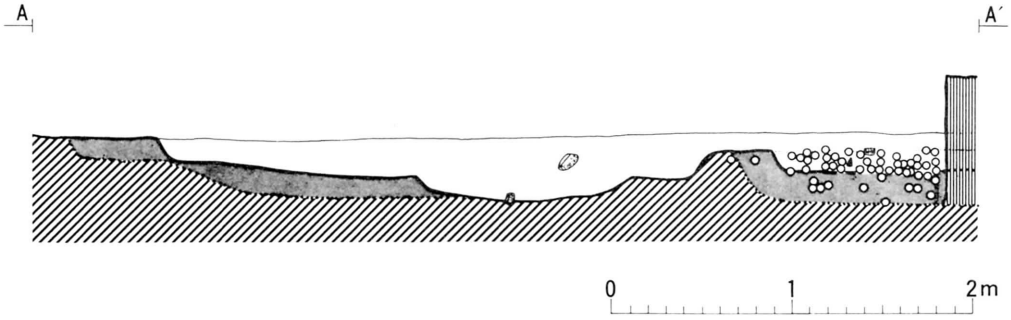
第14図　EI 50ピット・EJ53住居跡平断面実測図



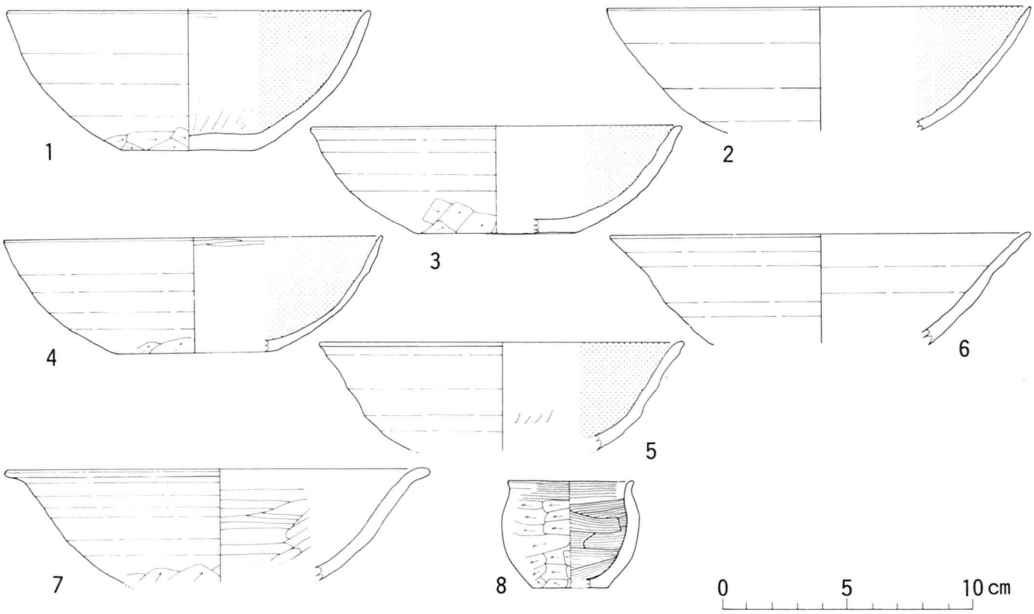
投影図中実線の太線部分A−A′間の遺構の底部。点線の太線部分と灰色で表示された部分は遺構の最深部の範囲を現わす。

E J50ピット中の遺物出土状況については調査時の資料が不充分であるため省略した。

基準高海抜37.00m



第15図　EI 50ピット・EJ 53住居跡遺物出土状況図



第16図　EI 50ピット・EJ 53住居跡出土遺物実測図

表５表　ＥＪ５３住居跡出土遺物一覧表

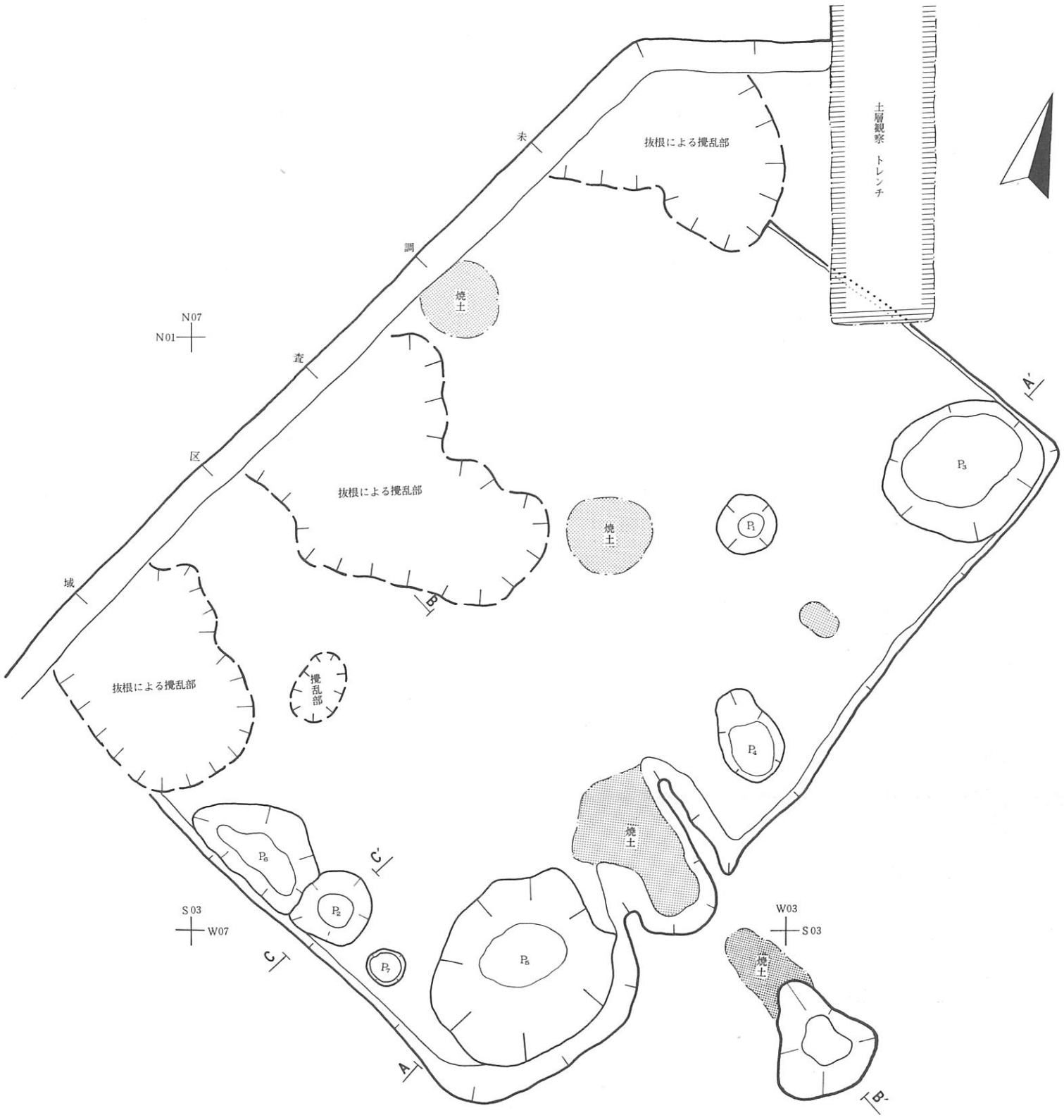
焼　物

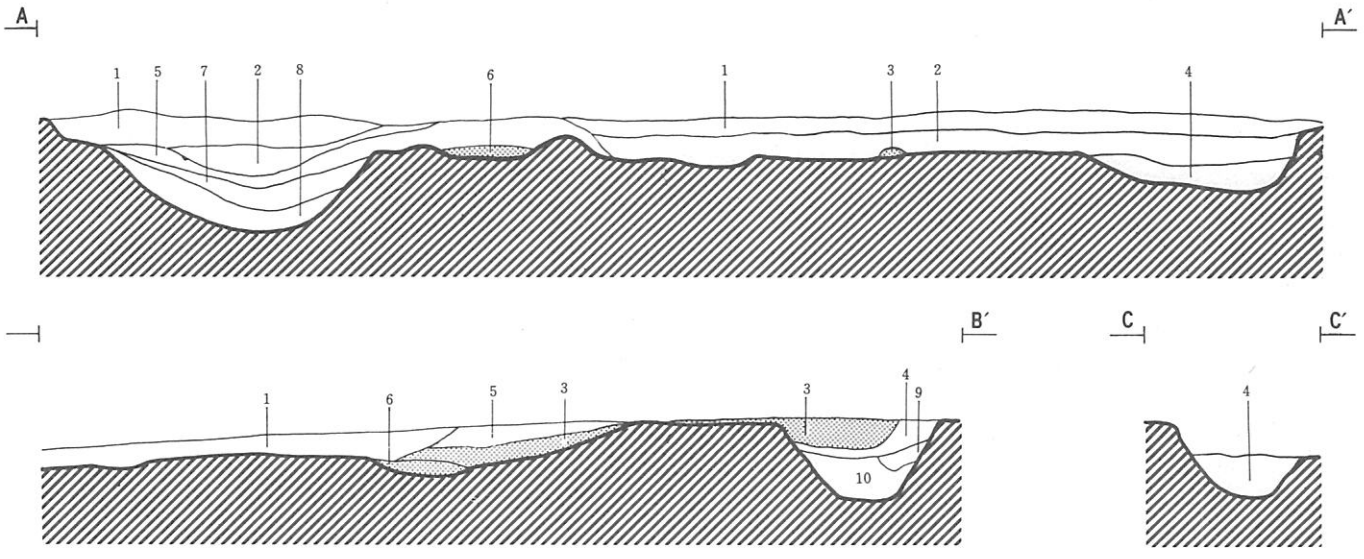
実測図番号	写真番号	焼成による分類	器種名	出土遺構層	口径	底径	器高	その他の法量値	外壁色調	胎土の状況	残存部位
15－1	15－4	土師器	内黒坏	床部埋土	推14.6cm	推 5.5cm	5.6cm	cm	にぶい黄橙	細砂少量混入	口縁部～底部
2	15－5	土師器	内黒坏	〃	推17.0		残推 4.8	体部径推 7.8	鈍い黄橙	砂少量混入	口縁部～体部
3	—	土師器	内黒坏	〃	推14.8	推 6.3	4.3		にぶい橙	砂少量混入	口縁部～底部
4	—	土師器	内黒坏	〃	推15.2	推 5.5	推 5.1		浅黄橙	細砂少量混入	口縁部～体部
5	—	土師器	内黒坏	〃	推14.6	残 7.6	推 4.3		にぶい褐	細砂混入	〃
6	—	土師質～須恵質	杯	〃	推16.9	—		体部径推 9.0	橙	細砂混入	口縁部、体部
7	—	土師質土器	坏	〃	推17.0	—		体部径推 8.2	〃	〃	口縁部、底部
8	—	土師器	小型壺	〃	推 5.0	推 3.0	推 4.2		〃	細砂少量混入	口縁部～底部

ＦＡ06住居跡　（第17～20図、第６、７表、写真３、12、18、20～22）

〔**位置**〕　調査区中央部北寄りの西辺に位置している。

〔**規模、形状**〕　一辺６ｍ内外、検出面からの深さ0.20ｍ内外の隅丸方形の竪穴住居跡で、そ





（注）土層注記は第18図参照の事

0 1 2m

第17図　FA 06住居跡平断面図実測図

層	土色		土性	特徴
1	にぶい黄褐	Hue10YR5/4	砂質シルト	やや粒子の粗い砂や焼土、炭化物が少量混入している。
2	褐	Hue10YR5/4	〃	1と同質の土であるが焼土や炭化物の量が1より多い。
3	橙	Hue5YR6/8	シルト質焼土	木炭が混入している。
4	褐	Hue10YR5/4	シルト質軽埴土	やや粘りがあり、焼土を多く含んでいる。
5	暗褐	〃	砂質シルト	2とほぼ同質であるが、焼土や炭化物の含有量がさらに多い。
6	橙	Hue2.5YR6/8	焼土	強く火を受け固くしまっている。
7	黒褐	Hue10YR3/2	砂	多量の炭化物と灰を含んでいる。
8	〃	〃	〃	7層より粗い砂の層で木炭や土器片を多く含んでいる。
9	〃	Hue10YR4/6	シルト質軽埴土	暗褐色（Hue10YR3/4）シルト質軽埴土がブロック状に混る。
10	黒褐	Hue10YR3/2	砂混り軽埴土	多量の煤が混入し、やや粘りがある。

第18図　FA06住居跡床面直土出土状況平面図

の東辺は真北に対して、約30°東に振れている。西半部は杉の木の抜根によって大きく破壊されており、調査当時一部が、道路敷の下に埋没していたため完掘できなかった。

（柱穴）　住居跡に伴なう柱穴状のピットとしては、南壁際の東寄り部分にP_7ひとつが発見されただけある。

〔付属遺構〕　付属する遺構としてはP_1～P_6の各ピットと、かまど及び焼土遺構1基がある。

（ピット類）　P_1～P_6は住居跡の床面上ピット類であるが規模や形態については第6表を参照されたい。以上のピットのうち、P_1は検出された住居跡の床面の中央部に位置し中からは須恵器の大形容器の破片が多数出土しており、当該容器の据え穴である可能性が大きい。P_2は南壁に接する浅い摺鉢状ピットである。P_6はP_2と接して、西側に位置する浅い舟底形のピットである。両者はいずれも焼土で埋められていたが、その新旧関係は不明である。P_3は住居跡の北東隅に位置する平面円形の摺鉢状ピットである。中には焼物の破片の混った焼土、木炭の混合層が何枚か重なっており、貯蔵穴ないしは灰捨て穴と思われた。P_4はかまどの北側にある平面楕円形の浅い変形舟底状のピットである。P_2などと同様焼土がつまっていた。P_5は住居跡の南東隅に位置する不正円形の摺鉢状のピットである。このピットには、かまど部分の壁体崩落土と思われる焼土まじりの暗褐色土が流入している他、炭化物や焼土塊の混入した何枚かの土層が堆積している。このピットからもP_3と同様、多量の焼物破片が出土しており、性格的には同類と推定される。

第6表　FA06住居跡ピット一覧表

ピット名	平面形	断面形	平面規模(m)	深さ(m)	埋土状況	出土遺物
P_1	円形	U字形	0.2 ×0.2	0.16	焼土	なし
P_2	不整円形	摺鉢形	0.5 ×0.48	0.18	焼土、炭化物含みシルト質軽埴土単層	焼物類
P_3	〃	浅い鍋底形	1.1 ×0.9	0.16	〃	〃
P_4	〃	皿形	0.65×0.42	0.07	〃	焼物類
P_5	〃	摺鉢形	1.22×1.12	0.4	〃	〃
P_6	横長円形	舟底形	0.9 ×0.58	0.21	〃	〃
P_7	円形	U字形	0.26×0.26	0.15	暗褐色シルト質軽埴土単層。	なし

（かまど）　東壁の南寄り部分にほぼ直角に作られている。埋没時の攪乱等によって、相当破壊されているが、火床部には固く焼けた焼土層が残り、その南東部には検出面からの深さ約0.4m内外の平面不正隅丸四角形状の摺鉢状ピットが見られる。このピットは煙出し部分の痕跡と思われる。火床部とピット間の距離は両端部約1.65mを測る。

（焼土遺構）　遺構と言うべきか不明であるが、住居跡床面の３ケ所にやや強く火を受けた、最大径0.5ｍ内外の焼土区域が見られたが、ＡＦ03住居跡で推測された鍛治炉の様な施設かどうか確認できなかった。

〔埋土〕　住居跡床部の主な埋土は粗砂及び焼土や炭化物の少量混入したにぶい黄褐色ないし褐色のシルト質土層である。以上の埋土以外かまど部や煙道には燈色の焼土が見られ、P_1や煙出し部には煤の混入した黒褐色の砂土や軽埴土が見られる。

（遺物出土状況）　遺物は住居跡の床面やP_1、P_3、P_4、P_5などの各ピットを被う埋土層中からバラバラに出土した。その中でも特に出土点数の多いのは、P_3、P_5で、他にP_1からは須恵器の壺の破片が多数まとまって出土している。杉の抜根穴からの出土品も含めて、総計1115点を数える遺物の大部分は、土師器や須恵器など古代の焼物類の細片で占められている。他に土錘が一点、鉄器としては、P_3と北側の壁に挟まれた床面から鉄製の鋤先金具１点と床面中央部から性格不明の鉄器２点の計３点が出土している。

〔遺物〕　（第19、20図、第７表、写真12、18－４、20－５、21－11、22－１）

住居跡から出土した遺物は、調査時に層位別に採集する事が困難であったため、一括してＦＡ06住居跡の出土資料とした。そのため、やや時間的前後関係は不正確になるが、比較的形状のよく知られるものを第19、20図に図示した。

（焼物類）　**坏類**　第19図１～９、11～15、17は坏類である。そのうち、１～５はＡ群Ｉ－２類の中に入るもので、磨滅が著しいためヘラ削りの技法のよくわからない２、５を除いて、すべてＩ－2a類に含まれるタイプである。そのほか６はＩ－$1a_1$類、11がＩ－$3b_2$類、７、９、12、14はII－1a類、17がII－２類、以上の坏以外、10は回転糸切の底部を有する須恵器であるが、その器形は坏か、それ以外の小型器種なのか不明である。８は焼成不良の須恵器である。

小型カメ類　15はＢ群III－１類の小型カメの下部破片である。18、19は小型カメ類の上半部破片で、II－２類に含まれる資料である。21はやや大振りであるが、一応II－１類に含められる口辺～胴体部資料である。

長胴カメ類　16、22～24はＣ群の長胴カメ類の破片であるが、そのうち16、20はＩ－1a類の破片と思われる。23はＩ－１類の破片であるが内部に横方向のヘラ削りが施されている。22、24はII－$2a_1$類の破片であるが、24は磨滅が著しく、削り調整痕は不明瞭である。

壺類　25は、P_1から出土したＦ群III－1b類の須恵器の大型容器である。８は焼成不良の須恵器。

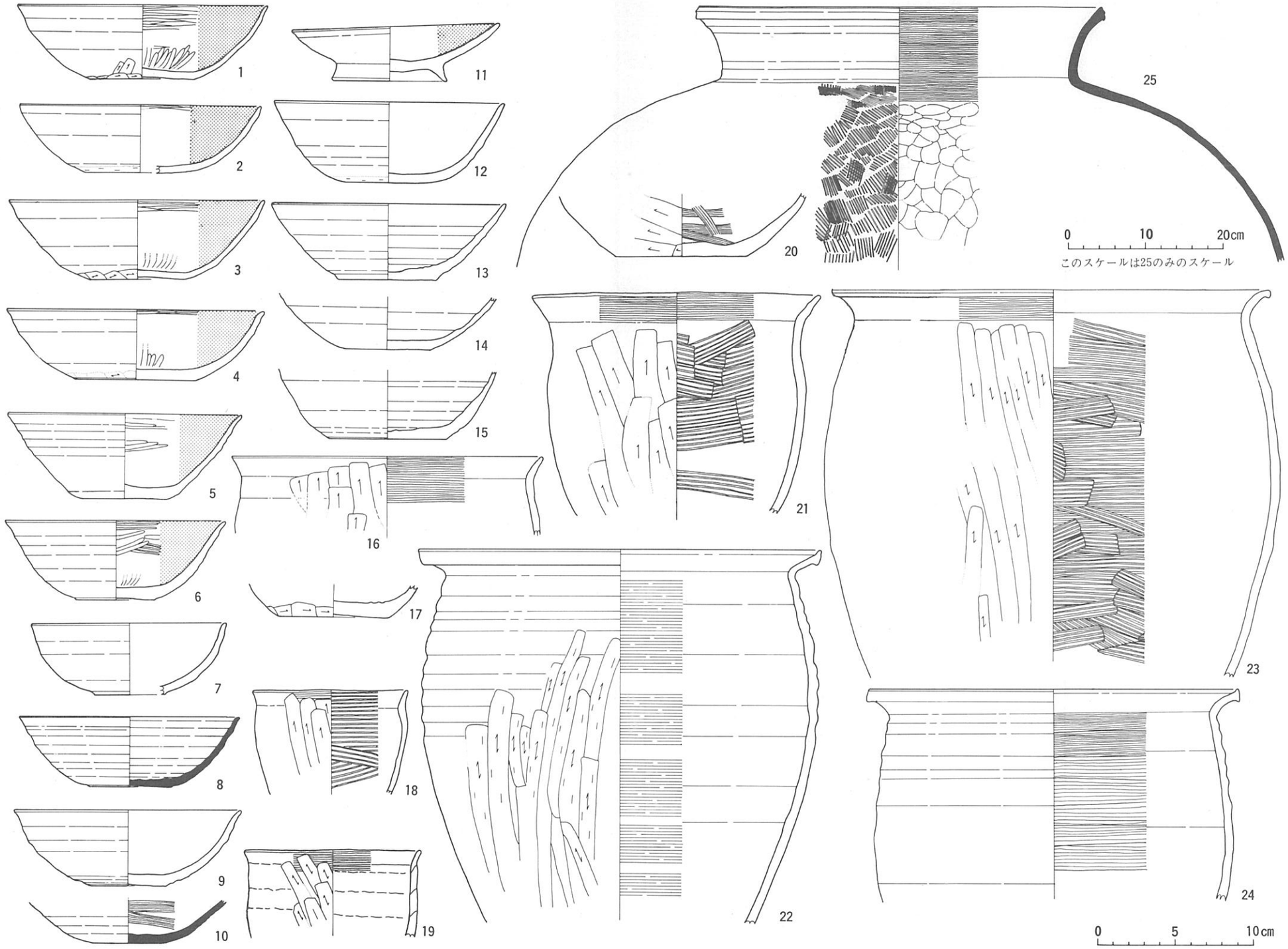
（鉄器）　鉄器としては、第20図１～４に示すものが、床面の各所から出土している。１は鉄製鋤先金具で銹化が著しいが、全体の形状は比較的よく保存されている。２、３は刀子の刃部刃片であろう。３は釘状の鉄製品であるがその用途は不明である。

（土製品）　容器以外の焼物として５に示した様な紡錘型の土錘が１個床面から出土している。

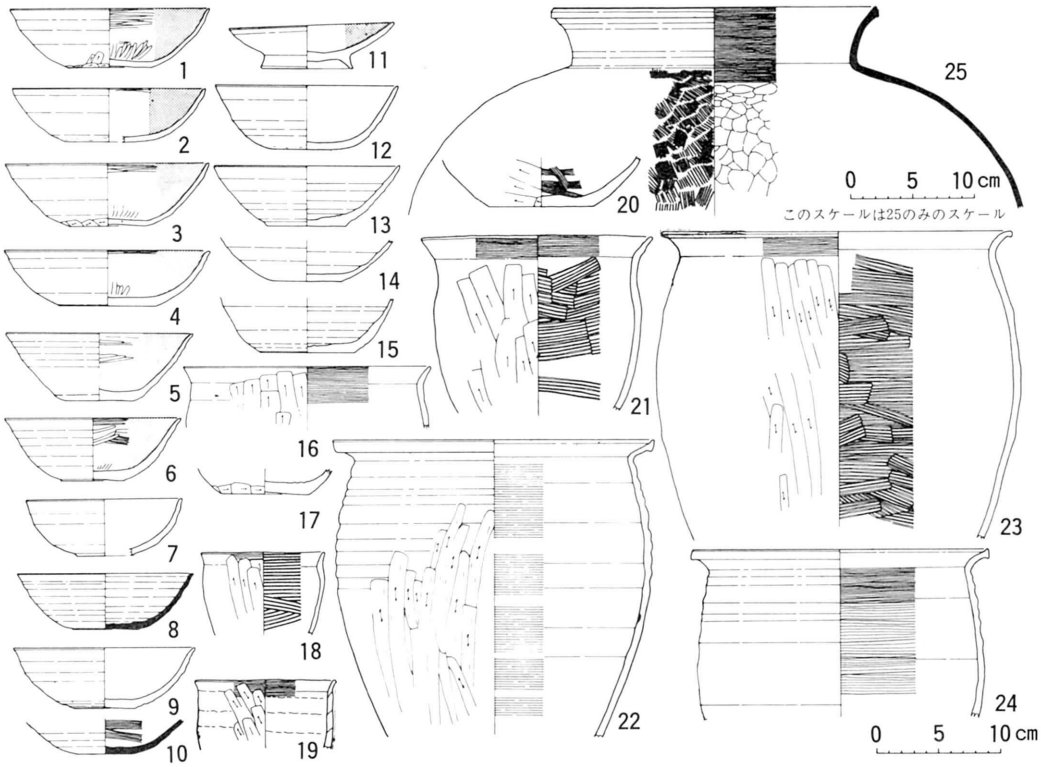
第7表　ＦＡ０６住居跡出土遺物一覧表

焼　物

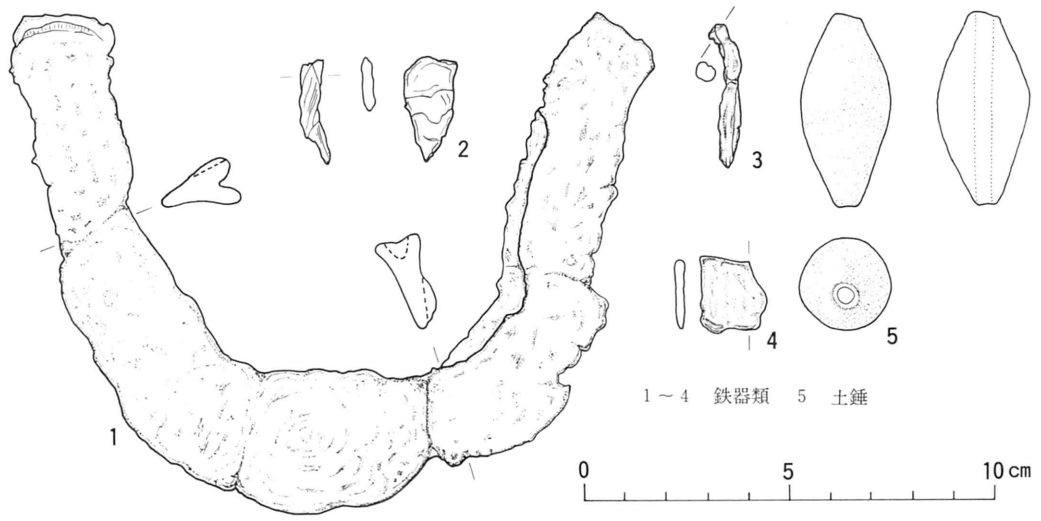
実測図番号	写真番号	焼成による分類	器種名	出土遺構層	口径	底径	器高	その他の法量値	外壁色調	胎土の状況	残存部位
19－1	—	土師器	内黒坏	かまどかわ	16.0cm	6.6cm	4.8cm	cm	にぶい橙	砂少量混入	口縁部～底部
2	—	土師器	内黒坏	床部埋土	推15.7	推 7.0	推 4.4		浅黄橙	砂少量混入	口縁部～底部
3	12－6	土師器	内黒坏	かまどかわ	推16.4	6.2	5.1		にぶい黄橙		口縁部～底部
4	5	土師器	内黒坏	かまどかわ	推16.6	7 8	4.5		にぶい黄橙	細砂少量混入	口縁部～底部
5	4	土師器	内黒坏	床部埋土	推15 0	推 5.6	5.5		浅黄橙	砂少量混入	口縁部～底部
6		土師器	内黒坏	P_1	推14.2	5.0	5.1		浅黄橙～にぶい褐	細砂少量混入	口縁部～底部
7	9	土師器	坏	床部埋土	12.6	推 5.5			にぶい橙～にぶい褐	砂混入	口縁部～底部
8	8	生須恵焼器	坏	P_5	推14.2	5.4	4.5		オリーブ灰～橙	細砂少量混入	口縁部～底部
9	10	土師器	坏	床部埋土	14.6	4.8	4.9		橙	石英砂混入	口縁部～底部
10	—	須恵器	坏？	P_3	—	4.6	推 2.7	体部径残12.8	オリーブ灰	細砂少量混入	体部～底部
11	7	土師器	坏	床部埋土	推13.3	6.9	3.2～3.8	脚部径　7.4	浅黄橙	細砂少量混入	口縁部～脚部
12	12	土師器	坏	ピット	推14.8	6.0	5.2		にぶい橙	細砂少量混入	口縁部～底部
13	11	須恵器	坏	P_6	推15.0	6.4	4.9		淡黄色	石英質の砂混入	口縁部～底部
14	—	土師器	小型カメ	床部埋土	—	5.9	残 3.5	体部径残推14.0	浅黄橙	砂混入	体部～底部
15	—	須恵器	小型カメ	P_5	—	7.4	残 3.7	体部径残推14.0	浅黄橙～にぶい褐	砂混入	体部～底部
16	—	土師器	坏	P_5	推20.0	—			にぶい橙～にぶい褐	砂混入	口縁部
17	—	土師器	小型カメ	床部埋土	—	5.9	残 3.5	体部径残推14.0	浅黄橙	砂混入	体部～底部
18	—	土師質～須恵器	小型カメ	P_5	推10.0	—	推 6.4	体部径　9.8	橙	砂混入	口縁部～体部
19	—	土師質～須恵質土器	小型カメ	P_5	推11.4	—	残推 6.2	体部径推11.0	黒　褐	砂混入	口縁部～体部
20	—	土師器	小型カメ	P_5	—	8.4	残 4.0	体部径推16.0	橙	砂混入	底　部
21	12－1	須恵器	長胴カメ	床部埋土	残18.6	—	推14.0	体部径推16.8	赤褐～にぶい褐	砂混入	口縁部～体部
22	2	須恵器	長胴カメ	P_5	推26.0	—	残24.0	推　25.7	にぶい黄橙	砂混入	口縁部～体部
23	3	土師器	長胴カメ	P_4	推28.2	—	残24.8	体部径　29.5	にぶい橙	砂混入	口縁部～体部
24	—	土師質～須恵質土器	長胴カメ	床面埋土	推24.0	—	残13.4	体部径推13.2	浅黄橙～にぶい褐	砂混入	口縁部～体部
25	—	須恵器	大型壺	P_3	推52.4～53.2	—	推残32.4	頚部径推46.2 体部径推99.0	オリーブ灰	砂混入	口縁部～体部



第19図　ＦＡ06住居跡出土遺物実測図(1)



第19図　FA06住居跡出土遺物実測図(1)



第20図　FA06住居跡出土遺物実測図(2)

土製品

実測図番号	写真番号	器種名	出土遺構層位	最大長	最大径ないし巾×厚	端部直径	孔径	重量	保存状況	色調	胎土の状況	黒斑	磨滅その他
20－5	18－2	土錘	床部埋土	4.8cm	2.2cm	0.5~0.6cm	0.35cm	17.9g		にぶい橙色	しま模様有り	有り	著しい

鉄　品

実測図番号	写真番号	器種名	出土遺構層	最大長	最大巾	最大厚	体部横断面形	材質	備考
20－1	22－1	鋤先金具	北側床面	12.5cm	11.8cm	cm 1.2～1.2	抉りのある楔形	比較的良	金具身部の巾 3.4cm内外、合成樹脂含浸による保存処理実施
2	21－11	刀子の先端？	床部埋土	3.1	0.3～1.25	0.3	平板形	不良	
3	〃	？	〃	3.45	0.4	0.5	方形	？	
4	〃	刀子の破片	〃	1.6	1.9	0.2	平板形	不良	

FC09住居跡　（第21～28図、第８、９表、写真４、13、14、18、20～22）

〔**位置**〕　調査区中央部の西辺にあり、ＦＡ06住居跡の南方部に位置している。

〔**重複関係**〕　北東隅がＦＣ06ピットと重複しているが、時期はそれより新しい。

〔**規模、形状**〕　西辺3.80m内外、南北辺3.40m内外、検出面からの深さ0.35m内外の、南辺が膨んだ不整な隅丸方形の竪穴住居跡である。その東西辺は真北に対し約25°東に振れている。床面はほぼ平坦で、壁面はかなり急に立ち上がっている。

（**柱穴**）　砂質の床には柱穴状のピットP_1～P_4が検出されている。これらのピットは直径0.2m内外、深さ0.2m内外の丸底円筒状ピットである。ピット間の心々距離はP_1～P_2が1.45m、P_1～P_3が2.0m、P_3～P_4が3.1mをそれぞれ測る。上屋に関連した支柱穴と思われるがはっきりしない。

〔**埋土**〕　住居跡内の埋土は砂質軽埴土、シルト質軽埴土などを主体にしそれらに焼土、炭化物、遺物をいろいろな割合で含んだ各層よりなる。各層の堆積状況は大体自然堆積した様相を呈している。部分的には堆積状況の判然としない個所も見られるが、調査資料が不足なので詳細は不明である。

〔**付属遺構**〕　以上のピット以外の住居跡関連遺構としては、かまど２基、貯蔵穴状ピット１がある。

（**かまど**）　かまどは南壁の中央部～東寄り部分に２ケ所設けられているが、いずれも煙道を有するかまどである。壁体の保存状態は二者とも不良で原形がほとんど残っていなかった。さらに、両者とも、その火床部には平面楕円形状の浅い舟底形ピットがあり、そこに焼土や焼物

の破片などが詰まっていた。両者のうち西側のかまどはやや大きく、壁体の残存状況も幾分良好であった。おそらく前者の廃絶後に、後者が新たに築かれたのであろう。なお両者とも南方部に延びる煙道を有するが、その長さは西側で約1.6m、東側で約0.5mを測る。煙出し部の形状は東側の場合はっきりしないが、煙道の先端部に摺り鉢状のピットが形成されている。

（貯蔵穴状ピット）　P_5で図示されたこのピットは住居跡南東隅に位置し、東側かまどに隣接して作られた楕円形のピットである。その大きさは、長径0.92m、短径0.7mほどで床面からの深さ0.18mを測る。壁側を除くピットの周囲には高さ0.1m、巾0.2m前後の土手状の盛土が廻り、その一部に大人の拳～足大の礫が3個置かれていた。ピット中の埋土は焼土や木炭の多く混ったシルト質の土で、その中下部には小型カメ1個と完形を2個含む多数の坏片が埋没していた。坏類の多くはA群Ⅰ－2類、中でも特にⅠ－2a類が多かった。

以上の様なP_5の性格としては、その位置関係と出土遺物からかまどに伴った灰捨て穴ないし貯蔵穴状の施設が予想された。

（その他）　この住居跡に直接関連した遺構ではないが、住居跡北東隅の北側には約1.5m付近に直径0.35m内外の円形焼土区域がある。

〔遺物出土状況〕　遺物は床面埋土の1、4、5、7の各層やP_5の埋土14などから多数出土している。その多くは土師器や須恵器などの焼物の破片であるが、その他に鉄器類や鉱滓、土錘などが少数出土している。焼物類の中ではA群の坏類が多く特にⅠ－2a類の坏が多い。遺物の出土状況を見ると、P_5では坏の完形品か大破片がピット中に放置された形で発見されている。床部埋土中の遺物は、ほとんど細片で第21図にも示した様に住居跡のやや南西寄り部分を中心に住居跡のほぼ全域に散らばっている。その密度は概して1層下部から4～7層上部にかけて濃厚であり全体的な状況から住居跡廃絶後、埋没するまでの間に廃棄された遺物と推定される。

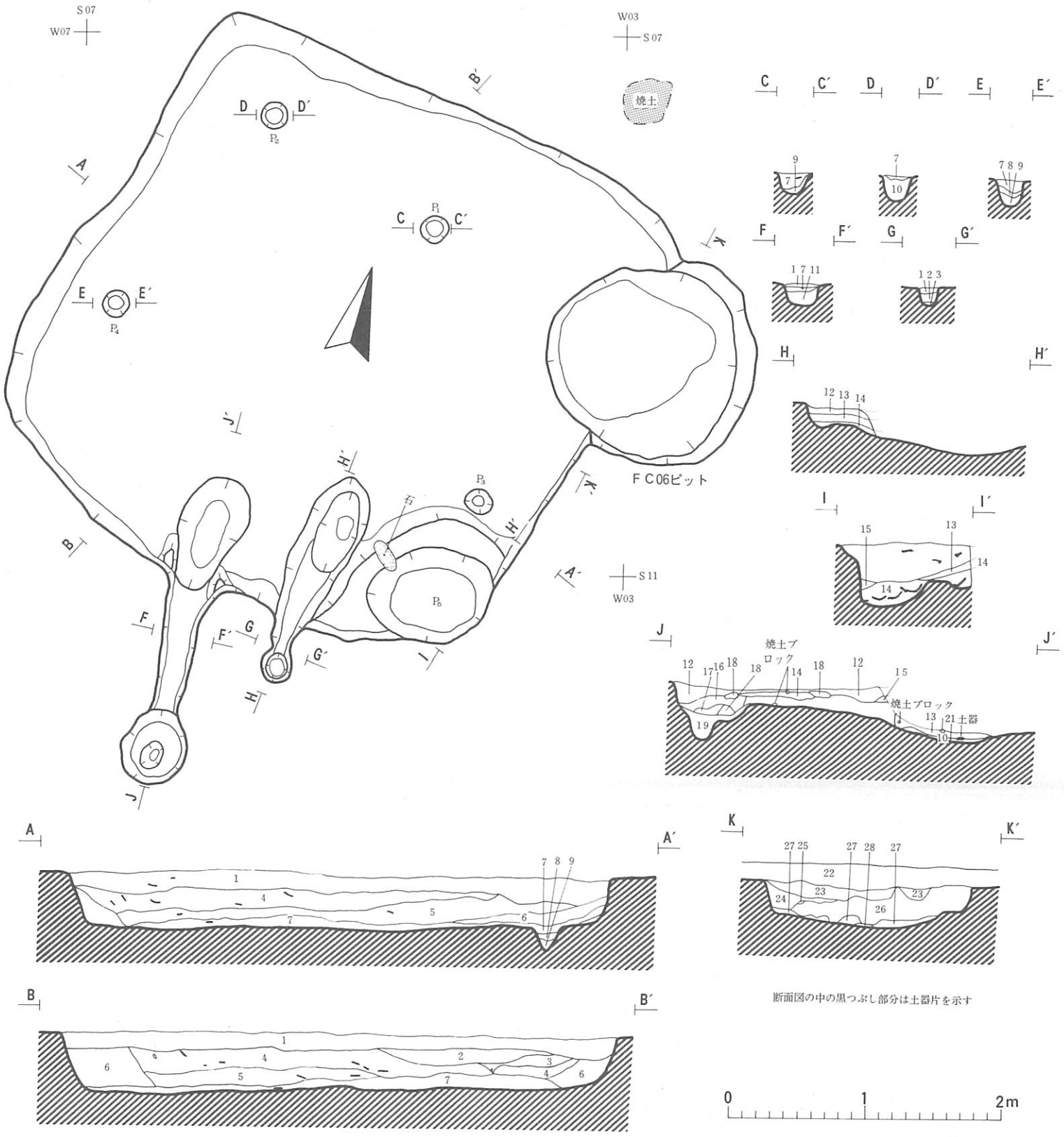
第8表　FC09住居跡ピット一覧表

ピット名	平面図	断面図	平面規模	深さ(m)	埋土状況	出土遺物
P 1	円形	U字形	0.2 ×0.2	0.14	焼土含み砂質土2層	なし
P 2	〃	〃	0.2 ×0.2	0.18	単層	〃
P 3	〃	〃	0.22×0.19	0.17	3層	〃
P 4	〃	〃	0.2 ×0.2	0.2	単層	〃
P 5	楕円形	鍋底形	0.92×0.7	0.18	砂質、シルト質の堆積層	焼物類、鉄器

〔遺物〕　（第23～28図、第9表、写真13･14、18－2・5・8・9・12、20－2、21－12、22－4）

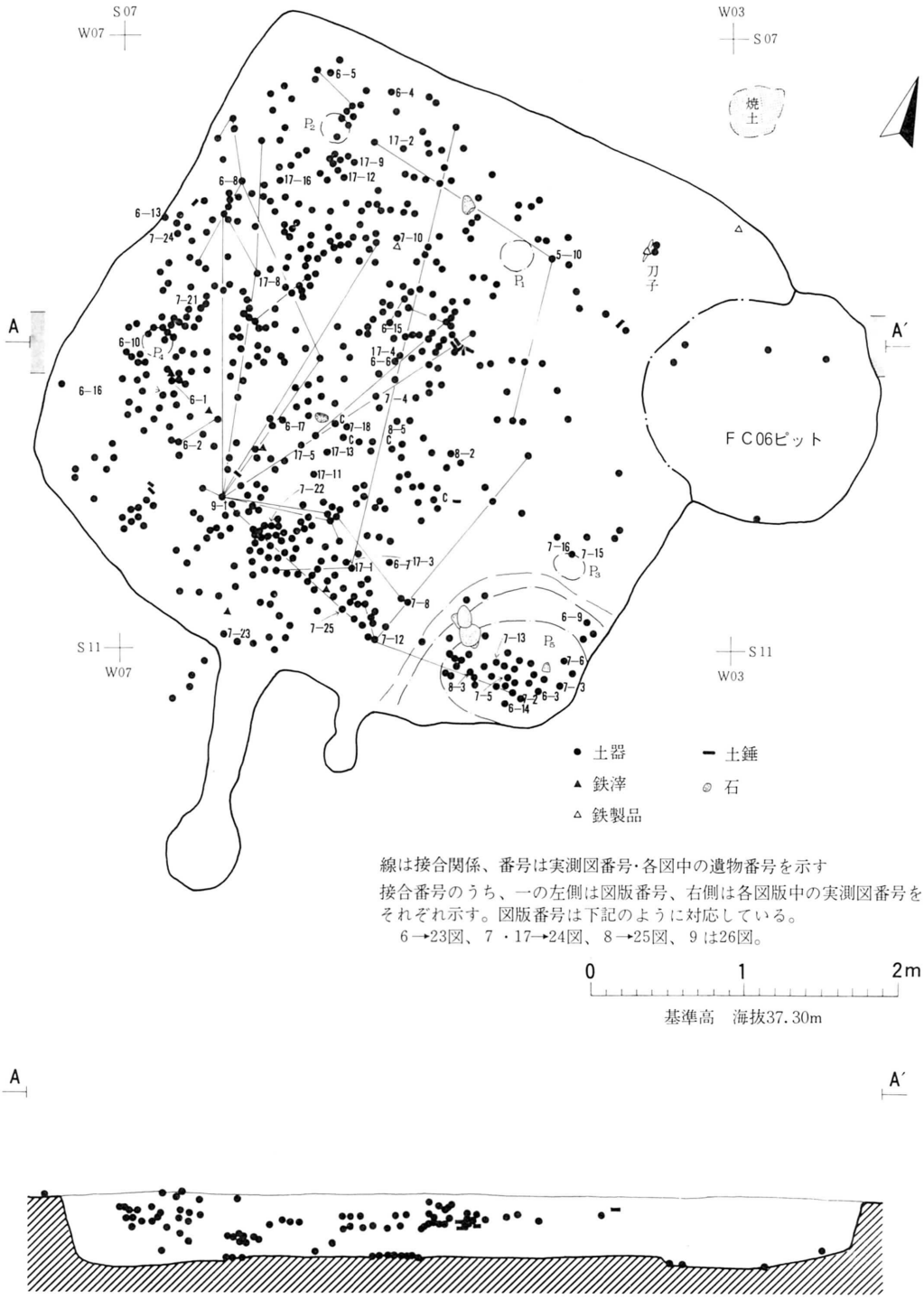
住居跡内の遺物は、床部埋土中のものとP_5のものを坏などで比較する限りほとんど同一技法で作られている事が知られた。他に、調査時に遺物を層位毎に採集できなかった事もあり一括して扱う事にした。そのうち図化しうる資料を第23～28図に図示した。なお第27図にはFC09住居跡出土の焼物類のうち遺構検出作業時に出土したものと出土場所の不詳のものを図示した。

（焼物類）　**坏類**　以上の各遺物のうち第23図1～18、第24図6～18、第27図2～6は坏類で



層	土色		土性	特徴
1	にぶい黄褐	Hue10YR5/3	砂質軽埴土	炭化物を含む。
2	〃	Hue10YR5/3	〃	1より砂と炭化物が多い。
3	褐色	Hue10YR5/4	シルト	炭化物焼土混入している。
4	にぶい黄褐	Hue10YR5/3	砂質軽土	2と同質であるが焼土が多く含まれ、粘性も強い。
5	黒褐	Hue10YR3/2	〃	4より粘り強く、焼土、炭化物、灰を含んでいる。
6	〃	Hue10YR3/2	〃	5と同質であるが砂が多い。
7	〃	Hue10YR3/2	〃	5～6と似ているがそれより砂が多い。
8	〃	Hue10YR3/2	砂質シルト	シルトと炭化物と焼土が混入している。
9	褐	Hue10YR5/4	〃	砂、焼土のまじり。
10	〃	Hue10YR5/4	砂	混入物なし。
11	にぶい黄褐	Hue10YR5/3	砂～シルト質軽埴土	地山層に似た土。
12	〃	Hue10YR5/3	砂質軽埴土	1とほぼ同質であるが、焼土や炭化物が多い。
13	暗赤褐	Hue5YR3/2	〃	やや粘り強く、焼土、鉱滓などを含む。
14	褐	Hue10YR5/6	〃	12と同様の層であるが、焼土が少ない。
15	暗褐	Hue10YR3/4	シルト質軽埴土	焼土、炭化物含む。
16	にぶい黄褐	Hue10YR5/3	砂質軽埴土	12と似ているが砂が多い。
17	褐	Hue10YR5/6	〃	14と同質。
18	〃	Hue10YR5/4	砂土	粒子の荒い砂を多く含んでいる。
19	暗褐	Hue10YR3/3	シルト質埴土層	炭化物と粘。
20	褐	Hue10YR5/6	砂質軽埴土	14より焼土片少ない。
21	〃	Hue10YR5/4		砂、焼土片、炭化物片を含む。
22	にぶい黄褐	Hue10YR5/3	砂壌土	炭化物を少量含む、洪水堆積土。
23	〃	Hue10YR5/3	〃	22と同質土、小石、砂が含まれる。土器片若干有り。
24	暗褐	Hue10YR3/3	シルト質軽埴土	若干粘性有り、炭化物片、焼土ブロックを含む、砂若干含む。
25	褐	Hue10YR5/4	砂土	砂と炭化物片が混じり合っている。
26	黒褐	Hue10YR2/3	シルト質軽埴土	焼土ブロック、炭化物、土器片を含む。
27	褐	Hue10YR5/4	砂土	砂と焼土ブロックが混じり合っている。
28	暗褐	Hue7.5YR3/4	砂質シルト	焼土。

第21図　FC09住居跡平断面実測図



第22図 FC09住居跡遺物出土状況平面図・A－A′面投影図

ある。そのうち第23図１～18、第27図４はＡ群Ｉ－2a類に含まれるが、ほとんど2a類に入る浅底口広の坏である。第24図２～３はＩ－2b類、４、13はＩ－1a類、７、15はＩ－3a_2類、６はＩ－３b_1類にそれぞれ含まれる。１、16および第27図３～４はＩ類であるが、磨滅や破損のため詳細な技法が不明な個体である。さらに第24図５、６、８、17、18および第27図２はII－１類と思われる。９はII－２類ないしIII－２類の底部破片である。11はIII－１ないしIV－２類に相当し、10、11はIV－２類の破片である。

小型カメ類　第24図19～21、23、第25図４、第27図、７～８、15、16は小型カメ類である。そのうち、第24図19～21はＢ群Ｉ－１類の各種、23はII－1a類、第25図４および第27図７～８、15はIII－１類の各種、16はII－2a類である。いずれも破損したものが多く全形の知られる資料は少ない。

長胴カメ類　第24図24、25、第25図１、２、第27図９～12は長胴カメ類である。そのうち第24図24はＣ群Ｉ－1f類、第25図１および第27図11、12はII－2a_2類、第25図２はII－1a類、第27図９、10はＩ－ｅ類である。

壺・カメ類　第24図22、第27図13、14、第26図１はＦ群に含まれる中型の壺型容器である。そのうち第24図22はＦ群II－１類、第26図１、第27図13はIII－2c類、14はＩ－１類に含まれる。第27図13は焼成が甘く灰色は呈しているものの、全体に風化が進んでおりIII－2c類というべきか疑問が持たれる資料である。

第９表　ＦＣ０９住居跡出土遺物一覧表

焼　物

実測図番号	写真番号	焼成による分類	器種名	出土遺構層	口径	底径	器高	その他の法量値	外壁色調	胎土の状況	残存部位
23－１	13－８	土師器	内黒坏	床部埋土	推12.6cm	6.5cm	4.8cm	cm	にぶい黄橙		口縁部~底部
2	14－５	土師器	内黒坏	床部埋土	推13.8	5.3	4.4		浅黄橙		口縁部~底部
3	7	土師器	内黒坏	床部埋土	14.0	5.8	3.9~4.3		橙	細砂少量混入	口縁部~底部
4	6	土師器	内黒坏	床部埋土	14.8	6.0	4.4		浅黄橙	砂混入	口縁部~底部
5	9	土師器	内黒坏	P_5	推15.3	6.2	4.5		橙～にぶい橙		口縁部~底部
6	4	土師器	内黒坏	P_5	推15.0	推 6.2	4.4		にぶい黄橙	細砂少量混入	口縁部~底部
7	13	土師器	内黒坏	床部埋土	14.8	5.6	4.5		にぶい橙	細砂少量混入	口縁部~底部
8	15	土師器	内黒坏	床部埋土	15.1	6.3	4.6~4.8		にぶい橙		口縁部~底部
9	11	土師器	内黒坏	床部埋土	15.4	6.3	4.7		にぶい黄橙	細砂少量混入	口縁部~底部
10	—	土師器	内黒坏	床部埋土	推14.5	推 6.2	推 4.3		橙～浅黄橙	砂混入	口縁部~底部
11	14－10	土師器	内黒坏	床部埋土	推14.0	推 5.0	5.1		にぶい橙	細砂少量混入	口縁部~底部
12	—	土師器	内黒坏	P_5	推14.0	推 5.4	5.4		にぶい橙	細砂少量混入	口縁部~底部
13	14－３	土師器	内黒坏	床部埋土	14.3	4.8	4.6		橙	砂混入	口縁部~底部
14	—	土師器	内黒坏	床部埋土	14.5	5.2	4.6		にぶい橙	細砂少量混入	口縁部~底部

その他　その他に第27図１に掲げたＥ群II－１類の内黒鉢や第25図３に示したＩ群Ｉ－１類に

実測図番号	写真番号	焼成による分類	器種名	出土遺構層	口径	底径	器高	その他の法量値	外壁色調	胎土の状況	残存部位
23－15	14－1	土師器	内黒坏	P5	推15.1cm	6.0cm	3.8cm	cm	橙 暗灰褐	細砂混入	口縁部～底部
16	14－2	土師器	内黒坏	P5	推15.0	推 7.0	4.5		浅黄橙～黒	砂混入	口縁部～底部
17	8	土師器	内黒坏	床部埋土	推15.6	6.0	残推 4.4		にぶい橙	砂多量混入	口縁部～底部
18	—	土師器	内黒坏	床部埋土	推15.6		推残 4.8	体部径残推 7.4	にぶい黄橙～橙	細砂少量混入	口縁部～底部
24－1	—	土師器	内黒坏	床部埋土	推14.0	推 5.0	推 4.4		にぶい橙～黒	—	口縁部～底部
2	14－6 18－12	土師器	内黒坏	床部埋土	推14.8	6.4	4.4		にぶい橙～黒	雲母少量混入	完形
3	—	土師器	内黒坏	床部埋土	推14.2	5.6	推 4.3		にぶい黄橙	細砂少量混入	口縁部～底部
4	13－12	土師器	内黒坏	床部埋土	推14.2	5.2	推 5.7		浅黄橙～黒	細砂少量混入	口縁部～底部
5	11	土師質～須恵質土器	坏	床部埋土	14.3～13.6	5.5	4.6～5.4		灰褐 にぶい橙	砂多量混入	完形
6	14－12	土師質～須恵質土器	坏	床部埋土	推14.8	4.8	5.5～4.5		にぶい褐	砂混入	口縁部～底部
8	6	土師質土器	坏	床部埋土	推14.0	5.1	残 3.7		灰褐～橙	細砂少量混入	口縁部～底部
7	13－10	土師器	内黒高台付坏	床部埋土		6.9	3.5		浅黄橙	細砂少量混入	口縁部～脚部
9	13	須恵質土器	坏	床部埋土	推13.9	推 5.4	残 2.7	体部径残推11.0	橙	細砂微かに混入	体部～底部
10	9	須恵器	坏	床部埋土	推14.6	6.6	4.0		橙～にぶい黄橙	砂少量混入	口縁部～底部
11	—	土師質土器	坏	床部埋土		6.5	4.9～5.0		橙～にぶい褐	砂混入	口縁部～底部
12	—	須恵器	非内黒坏	床部埋土		残 5.2	残 3.4	体部径推 14.7	灰白	細砂少量混入	口縁部～底部
13	—	土師器	内黒坏	床部埋土	推14.0	5.1	4.7		灰褐～橙	砂少量混入	口縁部～脚部
14	13－7	土師器	内黒高台付坏	床部埋土	推15.8	6.9	3.5		浅黄橙	細砂少量混入	口縁部～底部
15	—	土師器	内黒高台付坏	P5	16.8	7.5	5.1＋α	脚部高 0.8＋a 脚部径 8.3＋b	灰～灰褐、橙、暗赤褐	砂少量混入	口縁部～底部
16	—	土師器	内黒坏	床部埋土	推15.1	—	残 4.2	体部径推 8.5	にぶい橙～灰	〃	口縁部～底部
17	—	土師質土器	坏	床部埋土	推15.2	推 4.8	4.8		浅黄白～灰白	細砂混入	口縁部～底部
18	—	土師質土器	坏	床部埋土	推15.2	—	残推 3.9	体部径残推 8.2	橙	—	口縁部～底部
19	—	土師器	小型内黒カメ	床部埋土	推16.0	—	残 2.4	体部径残 14.3	浅黄橙	細砂量混入	口縁部
20	—	土師器	小型内黒カメ	P5	推18.0	—	残 4.0	体部径推 17.	黒	細砂少量混入	口縁部
21	13－5	土師器	小型内黒カメ	P5	推17.2	—	残 3.4	体部径推 17.2	黒 橙	砂混	口縁部～体部
22	—	土師質土器	直口壺	P5	推12.1	—	残 7.5	体部径残 18.8	にぶい橙～灰褐	砂混入	口縁部
23	—	土師質土器	小型カメ	床部埋土	推19.6	—	推残 5.2	体部径推 16.6	灰白～灰褐	砂混入	口縁部
24	—	須恵質土器	長胴カメ	床部埋土	推19.2	—	残 7.0	体部径推 19.6	にぶい橙	砂混入	口縁部～体部
25	13－2	土師器	長胴カメ	床部埋土	推27.1	—	残 7.8	体部径 18.6	淡 橙	砂混入	口縁部
25－1	—	土師器	長胴カメ	床部埋土	推20.2	7.5	残34.1		にぶい橙～灰褐	砂混入	口縁部～底部
2	13－3	須恵質土器	長胴カメ	床部埋土	推10.8	—	残 7.3	体部径残 20.2	灰白～灰褐	砂混入	口縁部
3	1	土師器	盌形容器	床部埋土	推16.1	8.8	10.2	体部径 14.8	にぶい褐	砂混入	口縁部～底部
4	4	土師質土器	小型カメ	床部埋土	推 7.0	6.9	14.2～14.7	体部径 7.0	淡 橙	砂混入	口縁部～底部
5	—	土師質～須恵質土器	コップ状容器	床部埋土	推 6.7	推 3.4	推 5.2		にぶい褐～黒褐	砂混入	口縁部～底部
26－1	—	須恵器	壺	P5	推25.6	—	残26.4	頸部径推 16.6 体部径推 33.6	橙～灰褐	砂少量混入	口縁部～体部
27－1	—	土師器	内黒鉢	埋土上層	推13.8	—	推 8.5		明赤褐色	細砂少量混入	口縁部～体部
4	—	土師器	内黒坏	埋土上層	推13.6	推 6.4	4.4		浅黄橙	細砂少量混入	口縁部～底部
5	—	土師器	内黒坏	埋土上層	推14.4	推 5.0	推 4.9		灰 褐	砂混入	口縁部～底部

鴻ノ巣館遺跡

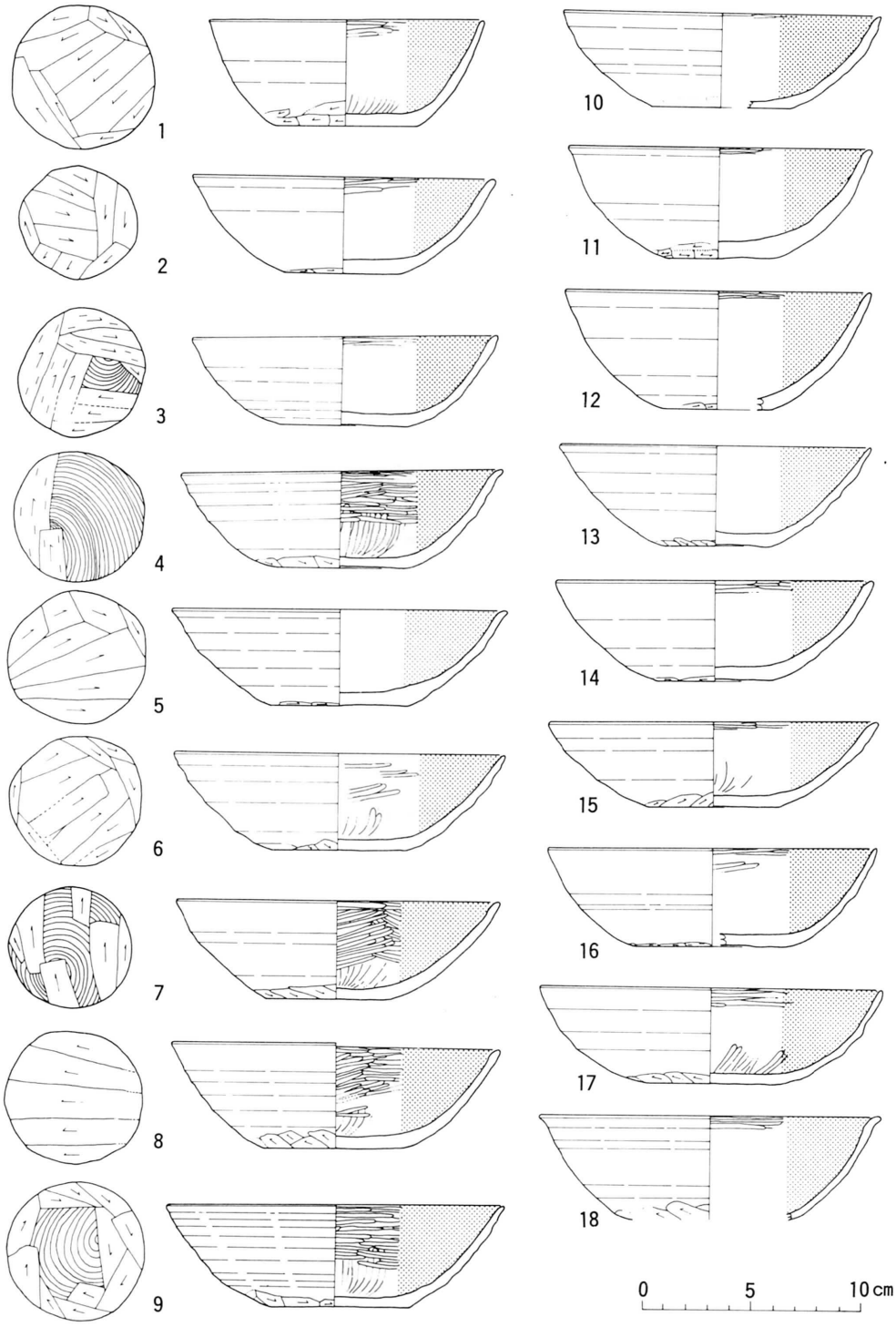
実測図番号	写真番号	焼成による分類	器種名	出土遺構層	口径	底径	器高	その他の法量値	外壁色調	胎土の状況	残存部位
27－6	11－16	土師器	内黒坏	埋土上層	推15.6cm	推 7.0cm	推 4.4cm	cm	橙～にぶい黄橙	砂少量混入	口縁部～底部
7	—	土師器	小型カメ	埋土上層	推12.5	—	残推 5.0	体部径推 12.8	にぶい橙	砂混入	口縁部
8	—	土師質土器	小型カメ	埋土上層	推17.7	—	残推 5.0	体部径推 16.4	橙	砂混入	口縁部～体部
9	—	土師器	長胴カメ	埋土上層	推18.7	—	残推 5.2	体部径推 18.2	橙	砂混入	口縁部～体部
13	—	須恵器	壺	埋土上層	推14.5	—	残推 5.5	体部径残推23.8	灰白	砂混入	口縁部～体部
14	—	土師器	壺	埋土上層		—	残推 9.3	体部径残推23.8 下28.2中29.4	にぶい橙 にぶい褐	砂多量混入	体部
2	—	須恵質土器	坏	埋土上層	推14.5	—	残推 3.8	体部径残推 9.8	橙	—	口縁部
3	—	土師器	内黒坏	埋土上層	推14.8	5.0	5.5		にぶい赤褐	—	口縁部～底部
13	16－16	土師器	長胴カメ	埋土上層	推20.4	—	残 7.0	体部径残 19.6	浅黄橙、十灰褐点	砂混入	口縁部
11	—	土師器	長胴カメ	埋土上層	推21.5	—	残5.8+α	体部径残 21.6	橙～にぶい橙	砂混入	口縁部
12	—	土師器	長胴カメ	埋土上層	推22.4	—	残18.0	体部径残 18.6	浅黄橙	混混入	口縁部～体部
15	—	土師器	小型カメ	埋土上層	推11.4	—	残 3.0	体部径残 11.4	にぶい橙	砂混入	口縁部
16	—	土師器	小型カメ	埋土上層	推 6.4	—	残 4.0	体部径推 6.4	灰褐	砂混入	口縁部

土製品

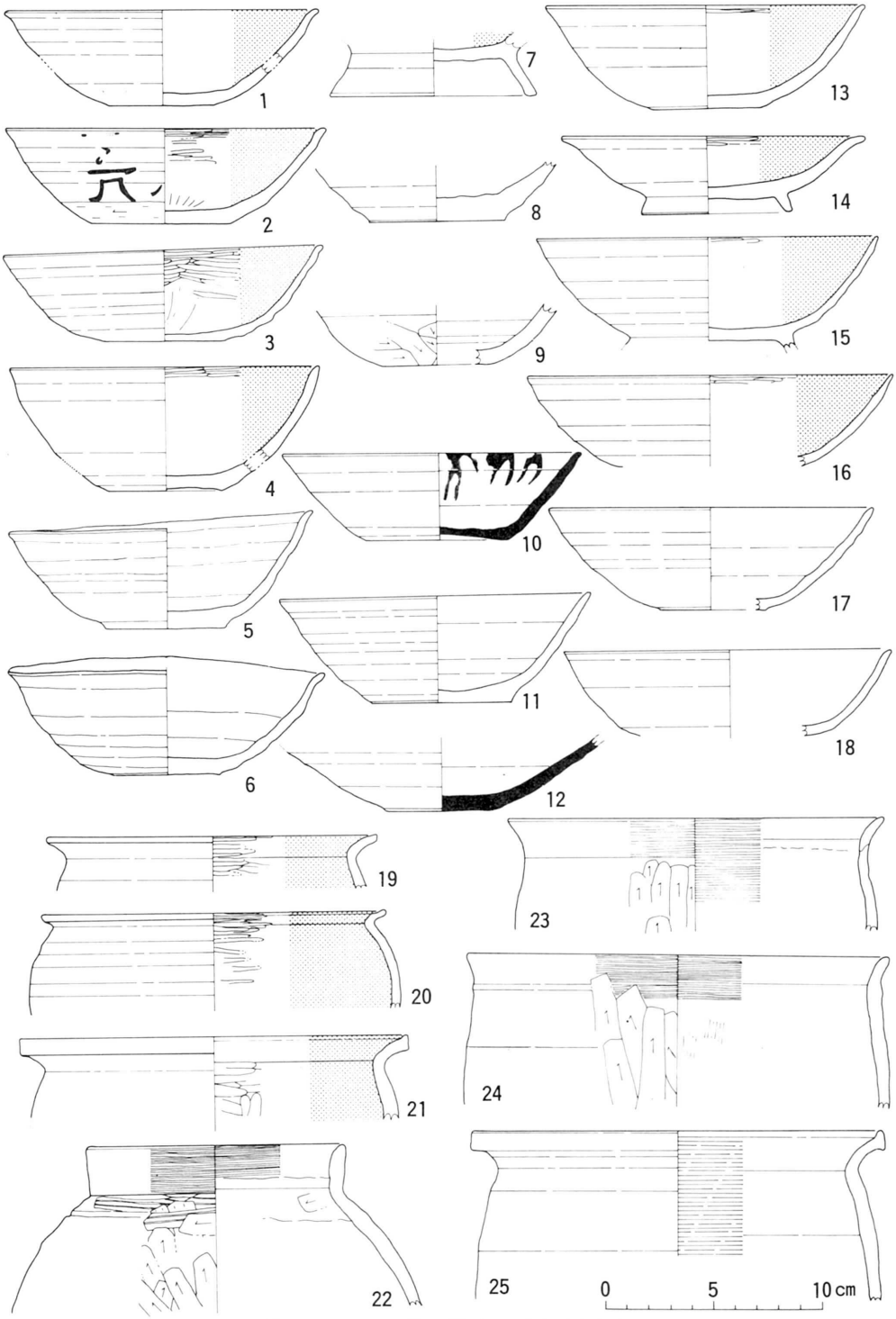
実測図番号	写真番号	器種名	出土遺構層位	最大長	最大径ないし巾×厚	端部直径	重量	最大長	色調	胎土の状況	孔径	黒斑	磨滅その他
28－5	18－2	土錘	床部 埋土上層	2.5cm	0.9cm	0.4cm	1.55 g	両端部一部欠損	黒褐色～黒灰	—	0.2cm	有り	著しい
6	〃	土錘	床部 埋土上層	2.5	0.9	0.4	1.6	両端一部欠損	灰黄	—	0.2	有り	著しい
7	〃	土錘	床部 埋土上層	2.7	1.0	0.5～0.6	1.95		浅黄橙	—	0.3		著しい
8	〃	土錘	床部 埋土上層	2.6	0.95	0.5	1.9	端部一部欠損	にぶい橙色	—	0.3		かなり著しい
9	〃	土錘	床部 埋土上層	2.8	1.0	0.5	2.35	端部一部欠損	にぶい橙色	—	0.25		著しい
10	〃	土錘	床部 埋土上層	2.8	1.0	0.5	1.4	端部一部欠損	明黄褐色	細砂少量混入	0.3		著しい
11	18－5	土錘	遺構検出面	1.4	0.8	0.5～0.6	—	半分欠損	黒褐色	細砂少量混入	0.25	全体に有り	著しい
12	2	土錘	床部 埋土上層	2.5	1.0	0.5	1.9	両端欠損特に一端の欠損大	浅黄橙色＋明黄橙色	—	0.3		著しい
13	〃	土錘	床部 埋土上層	2.6	1.1	0.4～0.5	1.6	新しいキズ有	浅黄橙色	—	0.3		著しい
14	〃	土錘	床部 埋土上層	2.2	0.9	0.4～0.5	1.6	端部著しく欠損	浅黄橙色	—	0.2		著しい
15	〃	土錘	床部 埋土上層	2.2	0.8	0.5	5.5	両端欠損	全体黒色	—	0.25	有り	著しい
16	〃	土錘	床部 埋土上層	2.8	1.5	0.8～0.9	5.25		浅黄橙色	細砂少量混入	0.5～0.6	有り	著しい
17	〃	土錘	床部 埋土上層	3.1	1.5	0.9	5.0		浅黄橙～橙	砂多量混入	0.6		著しい

鉄　器

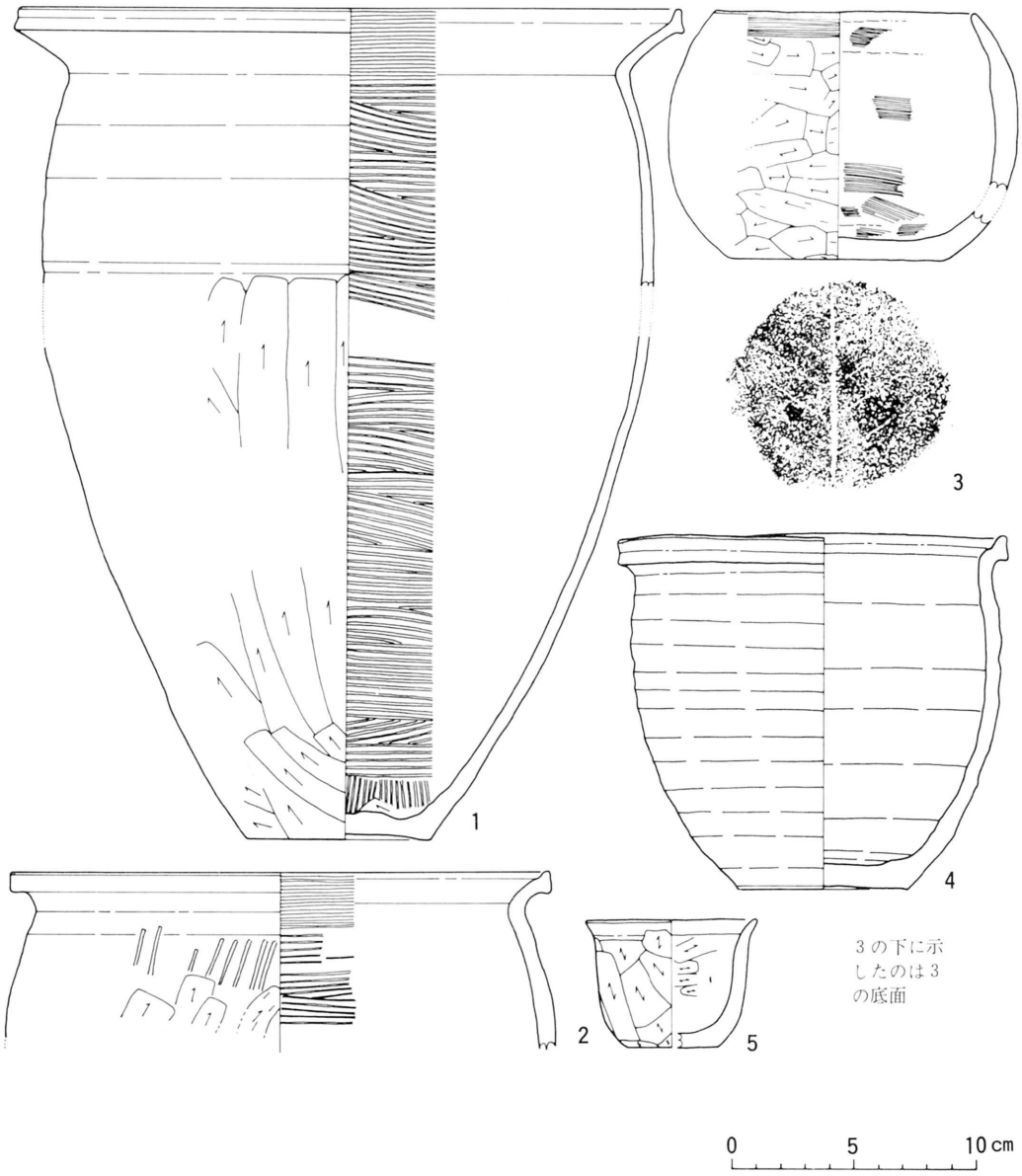
実測図番号	写真番号	器種名	出土遺構層	最大長	最大巾	最大厚	体部横断面形	保存状況	備　考
28－1	21－12	?	床部 埋土上層	3.1cm	1.1～2.1	0.5cm	不整円形	不良	
2	〃	刀子	床部 埋土上層	17.2	1.1～2.1	0.2～0.5	薄い台形状	やや良	
3	〃	?	床部 埋土上層	6.8	—	—	不整円形及長方形	不良	
4	〃	刀子	床部 埋土上層	9.6	0.55～1.65	0.3～0.5	不整長方形	良	



第23図　FC09住居跡出土遺物実測図(1)



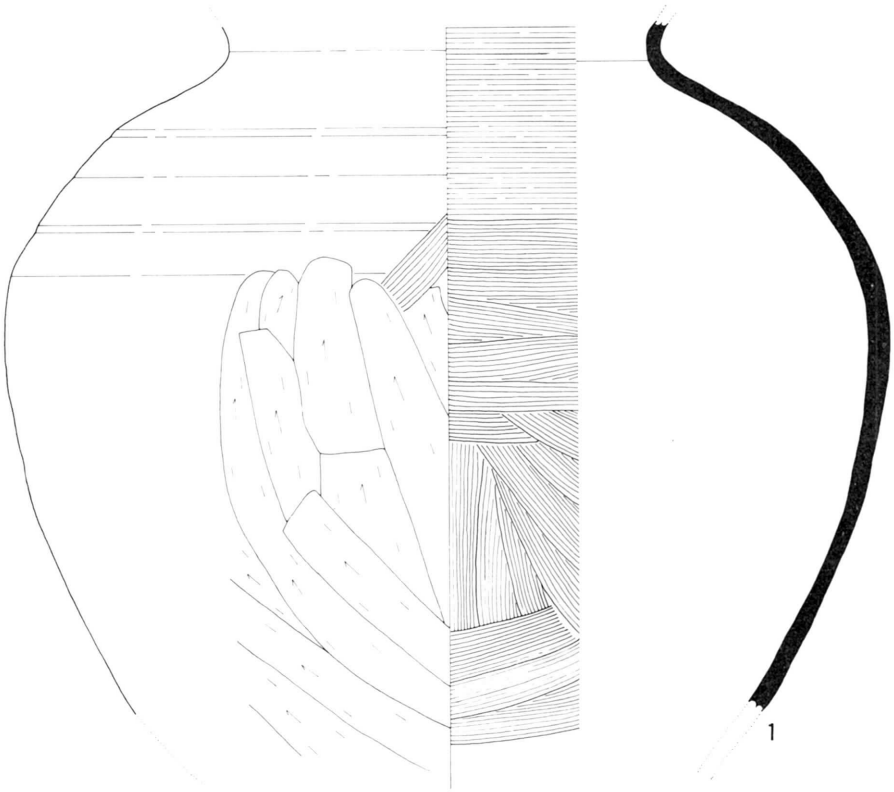
第24図　FC09住居跡出土遺物実測図(2)



第25図　FC09住居跡出土遺物実測図(3)

属する木の葉底の球型土器や5のJ群Ⅰ－1類の小型土器が出土している。

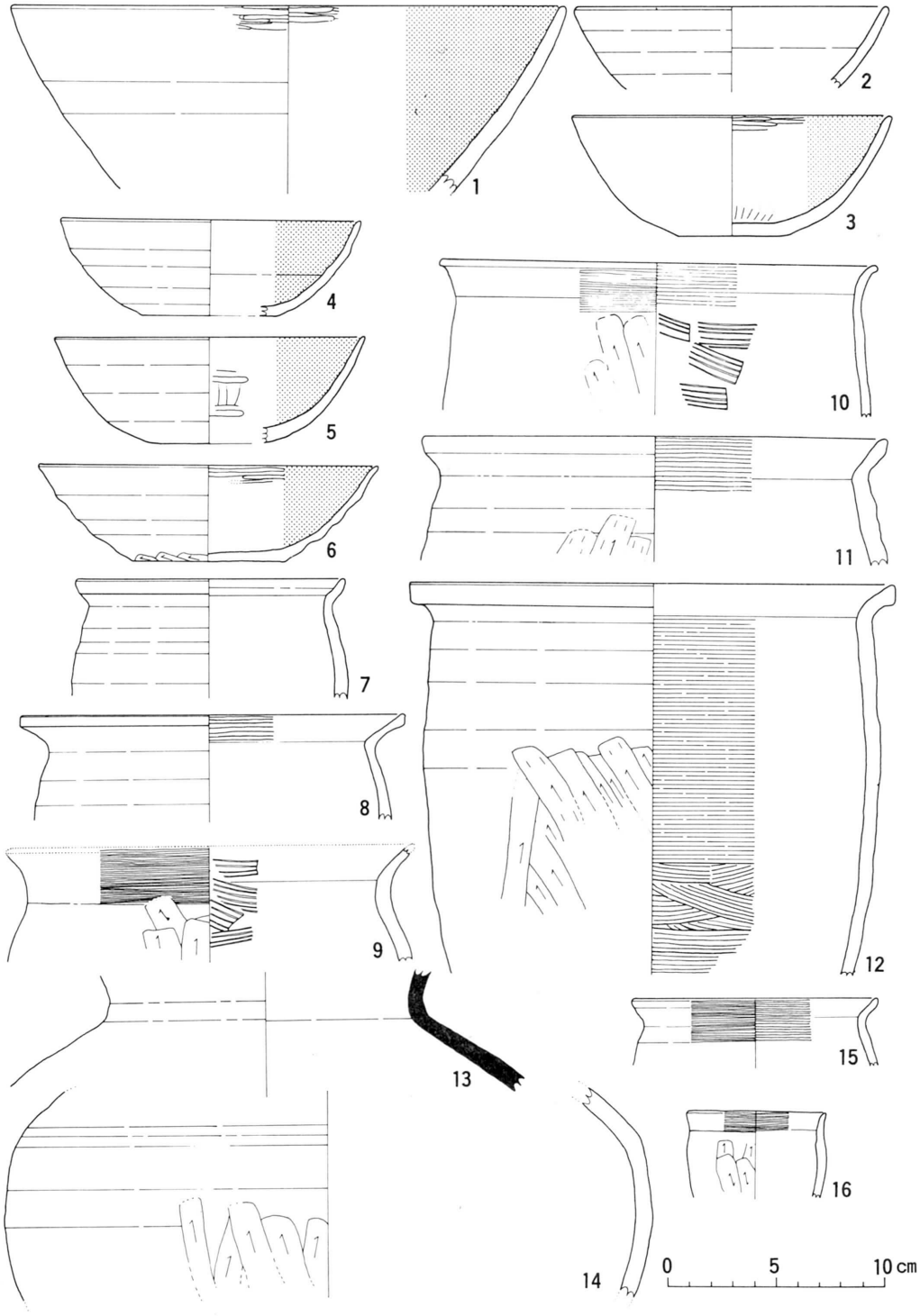
以上の各器種のうち第24図2の坏の体部には「亢」と思われる文字が墨書されている。[35] また第24図10の坏は灯明皿として転用されたものらしく、その体上部から口辺部にかけて帯状の炭化物の付着が5～6ケ所に認められた。



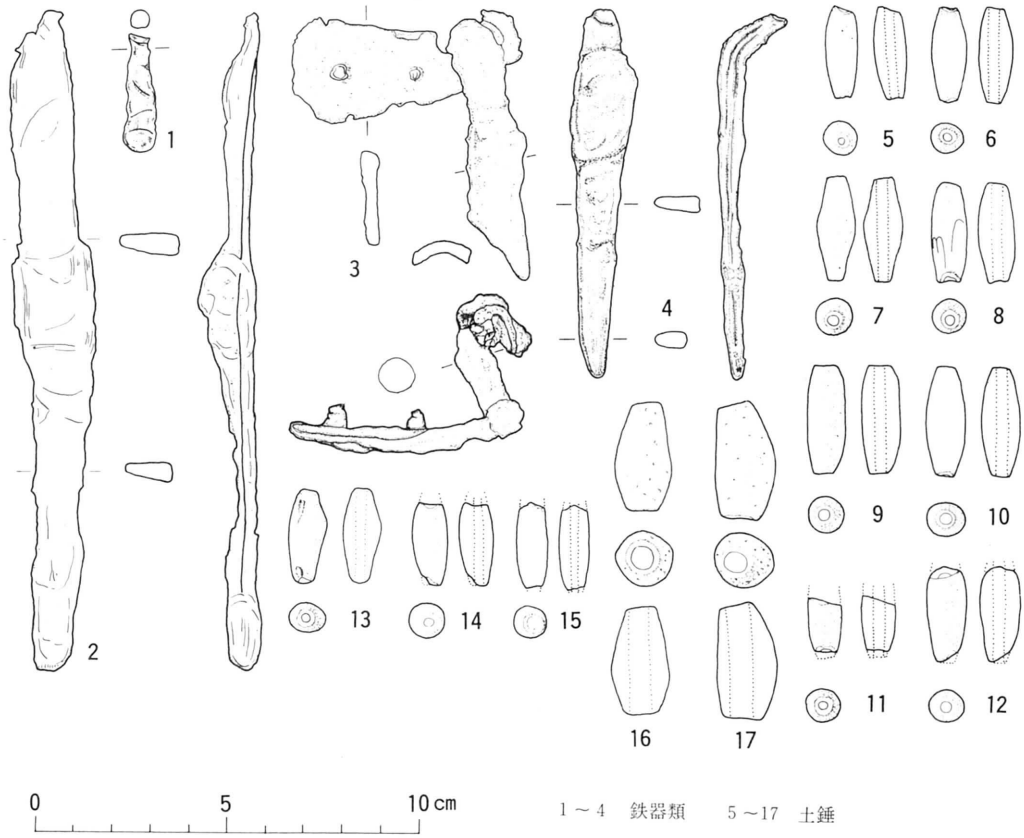
第26図　FC09住居跡出土遺物実測図(4)　0　5　10cm

（鉄器）　第28図１～４は鉄製品である。そのうち１は断面円形を呈した棒状の鉄製品の破片であるが性格は不明である。２、４は刀子と思われる。２の全形は比較的良く知られるが銹化が著しく膨れている。４は柄部の部分が折れ曲っていてその先端部が失なわれている。３は性格不明の鉄製品である。この鉄製品は平面が不整楕円形状の平板部分と平面が細長の四辺形状の曲板部分および両者を結ぶ円い棒状の部分よりなる。以上の３部分は図では平板部分に対して曲板部分がほぼ直交する形に復元されているが、宮地遺跡の第14号（旧ＥＨ03）の住居跡から出土した類品で見るとむしろ両者が平行する形で連絡されるものらしい。そして、両者とも内側部分には１～２ケ所釘状突起の痕跡があり、何らかの器物に付属する部分であった事を伺わせるものの確固たる性格付けは今のところ困難である。

（土製品）　土製品としては第28図５～17に掲げた様な土錘が13点出土している。図でもわかる様に出土した土錘は大きさと形態の上から長さ2.8cm未満、最大径0.8～1.0cmのものと長さ3.0cm内外、最大径1.5cm内外のものの２種に分けられるが、各々別々の綱の部分として用いられていた事を示唆するものであろう。



第27図　FC09住居跡出土遺物実測図(5)



第28図　FC09住居跡出土遺物実測図(6)

FG06住居跡　(第29～32図、第10、11表、写真5－1・2、16、18)

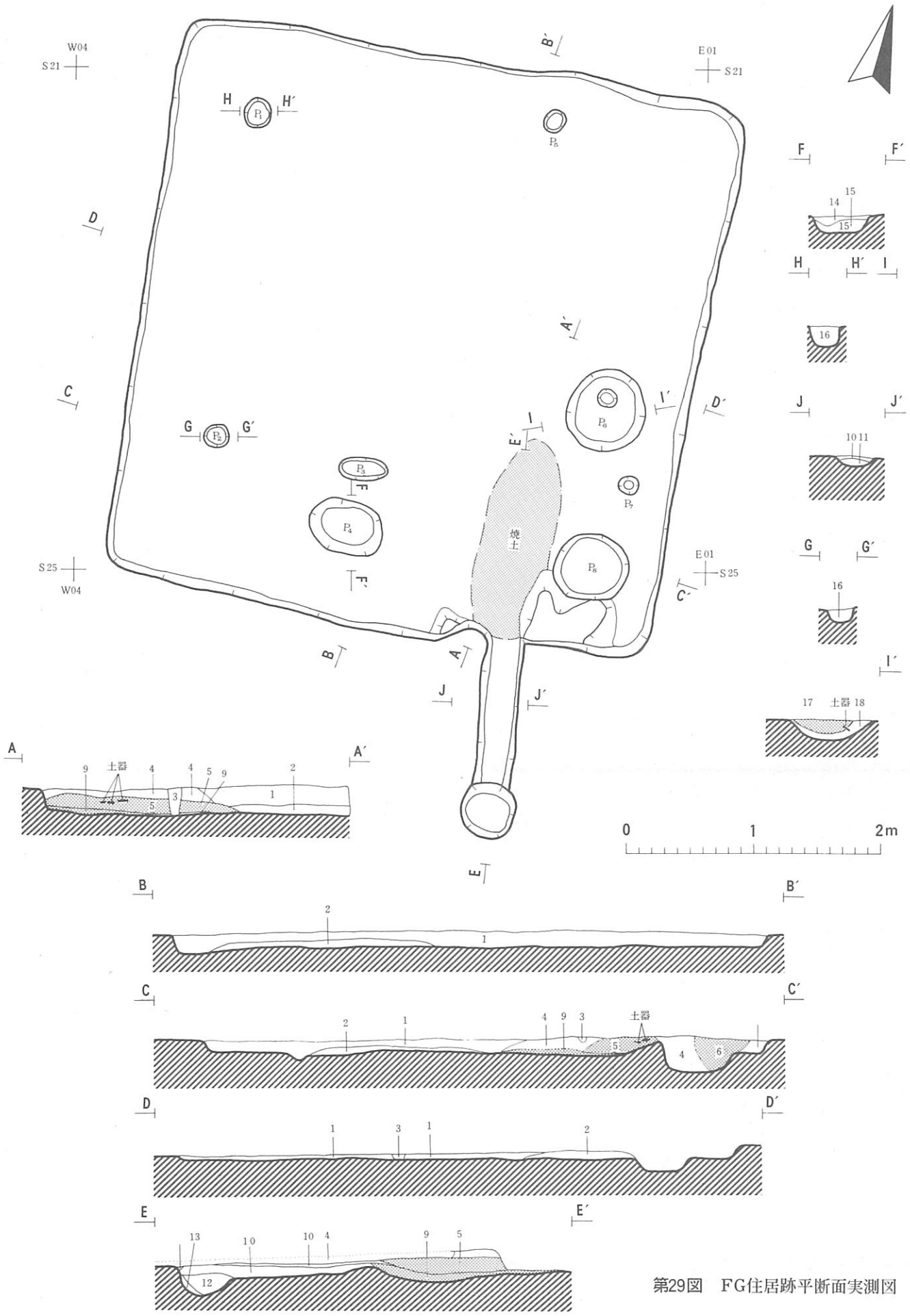
〔**位置**〕　調査区中央部南寄りに位置している、すぐ南東部にはFI50住居跡がある。

〔**規模、形状**〕　一辺約4.3m、検出面からの深さ0.1～0.14mの隅丸方形の竪穴住居跡である。その東西辺はほぼ真北の方向に一致し南壁の東端部分にかまどが設けられている。床面はほぼ平坦で柱穴状のピット4とその他のピット4がそれぞれ検出されている。

(**柱穴**)　柱穴状ピットは床の辺縁部に散らばる直径0.2～0.25m、深さ0.1～0.25m内外の丸底の円筒状ピットで中は褐色～暗褐色のシルト質軽埴土の単層で埋められている。柱穴間の距離は心々距離でP_1～P_2が2.6m、P_5～P_7が2.94m、P_1～P_5が2.35m、P_2～P_7が3.3mをそれぞれ測る。これらの柱穴状ピットの配置形は台形になっているが、上屋に関連する支柱穴群であるかはっきりしない。

〔**付属遺構**〕　上記のピット以外の住居跡付属遺構としては、かまど1基とピット4がある。

(**かまど**)　南壁東端部分に設けられたかまどは、保存状態が悪くその全形を検出できなかっ



第29図　FG住居跡平断面実測図

層	土色		土性	特徴
1	褐	Hue10YR4/6	シルト質軽埴土	木炭や焼土を少量含む。
2	明褐	Hue10YR3/4	〃	木炭、焼土片を多量に含む、土器片も若干含む。
3	にぶい黄褐	Hue10YR4/3	〃	攪乱土層
4	褐	Hue10YR4/4	〃	焼土混入。火を受けた痕跡あり。他の層より粘が強い。
5	褐～暗褐	10YR4/6～10YR3/4	〃	多量の焼土、木炭片、土器を含む。
6	暗褐	Hue10YR3/4	〃	焼土、木炭片を多量に含む。
7	〃	Hue10YR3/4	〃	砂が若干混入している。
8	褐	Hue10YR4/6	〃	1とほぼ同色同質。
9	橙	Hue5YR6/8	シルト質焼土	
10	褐	Hue10YR4/4	シルト質軽埴土	粘性有り、少量の焼土片混る、砂を混入。
11	黒褐	〃	〃	黒褐色（Hue5YR2/2）焼土を多く含む。
12	暗褐	Hue10YR3/3	〃	11と同色の焼土を含み、それよりやや粘りが強い。
13	褐	Hue10YR3/4	砂質軽埴土	11、12に含まれる焼土を少量含む、粘性有り。
14	〃	Hue10YR4/6	シルト質軽埴土	木炭、土器片を混える。
15	〃	Hue10YR5/6	〃	木炭を混えるが、その量ははるかに少ない。
16	褐～暗褐	Hue10YR4/4～3/4	〃	
17	褐	Hue10YR5/6	〃	多量の焼土（2.5YR5/8）明赤褐色（2.5YR3/4）赤黒色を含む、土器片を含む。
18	〃	〃	〃	17よりも焼土、木炭の含有量のはるかに少ない層。

たが、かまどの火床部および焚口部付近には1.6m×0.58mの範囲で多量の焼土層が堆積している。また、かまど西壁の残存部付近からは壁体の補強に使われた土師器の小型カメの底部破片が出土している。さらにかまどの南方部には全長約1.14mの煙道が延びているがその先端部直径約0.3mの平面円形、深さ0.25mの丸底ピットになっている。なお、かまど付近の土層堆積状況からこのかまどが二次にわたる重複遺構である事も予想された。

（ピット類）　柱穴状ピット以外のピットはP_3、P_4、P_6、P_8であるが、いずれもかまど部周辺に位置し、混焼土層などで埋められている。そのうち西側に位置するP_3、P_4の両ピットは深さ0.1～0.2mの楕円形の浅い皿状のピットである。東側に位置するP_6、P_8はいずれも深さ約0.20mの平面円形の浅いビーカー状ピットであるが、P_6ではさらにその底部に直径0.2m、深さ0.15mの円筒状ピットが見られる。P_8はかまどの東裾部分に位置するが、その西側はかまどの壁土で埋めたてられている。以上の4ピットの性格はいずれも不明であるが、位置関係や埋土などから灰捨て穴などの機能が想定される。

第10表　FG06住居跡のピット一覧表

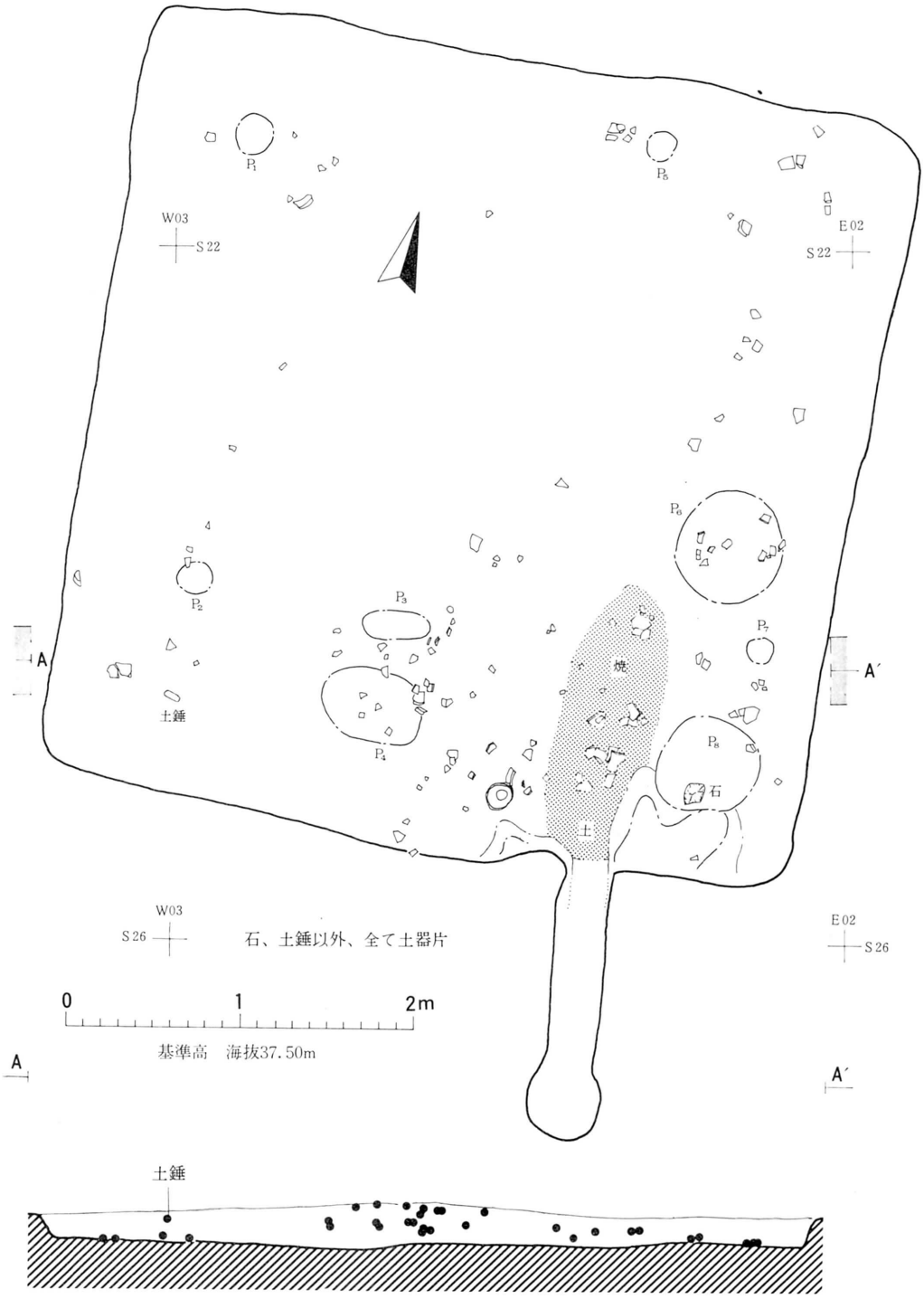
ピット名	平面形	断面形	平面規模(m)	深さ(m)	埋土状況	出土遺物
P_1	円形	U字形	0.22×0.24	0.14	暗褐色シルト質軽埴土単層。	なし
P_2	〃	〃	0.2 ×0.18	0.10	〃	〃
P_3	楕円形	鍋底形	0.39×0.19	0.05	焼土、炭化物混り褐色土層。	〃
P_4	〃	〃	0.6 ×0.42	0.13	〃	焼物類
P_5	円形	U字形	0.18×0.16	0.25	暗褐色シルト質軽埴土単層。	なし
P_6	〃	鍋底形	0.66×0.62	0.15	焼土、炭化物混り褐色土層など。	焼物類
P_7	〃	U字形	0.16×0.15	0.23	暗褐色土シルト質軽埴土単層。	〃
P_8	〃	鍋底形	0.59×0.54	0.14	焼土、炭化物混り褐色土層など。	〃

〔埋土〕　住居跡は主に褐色系のシルト質軽埴土で覆われ、ところにより焼土層や炭化物層および前記二者の混合土層が卓越している。

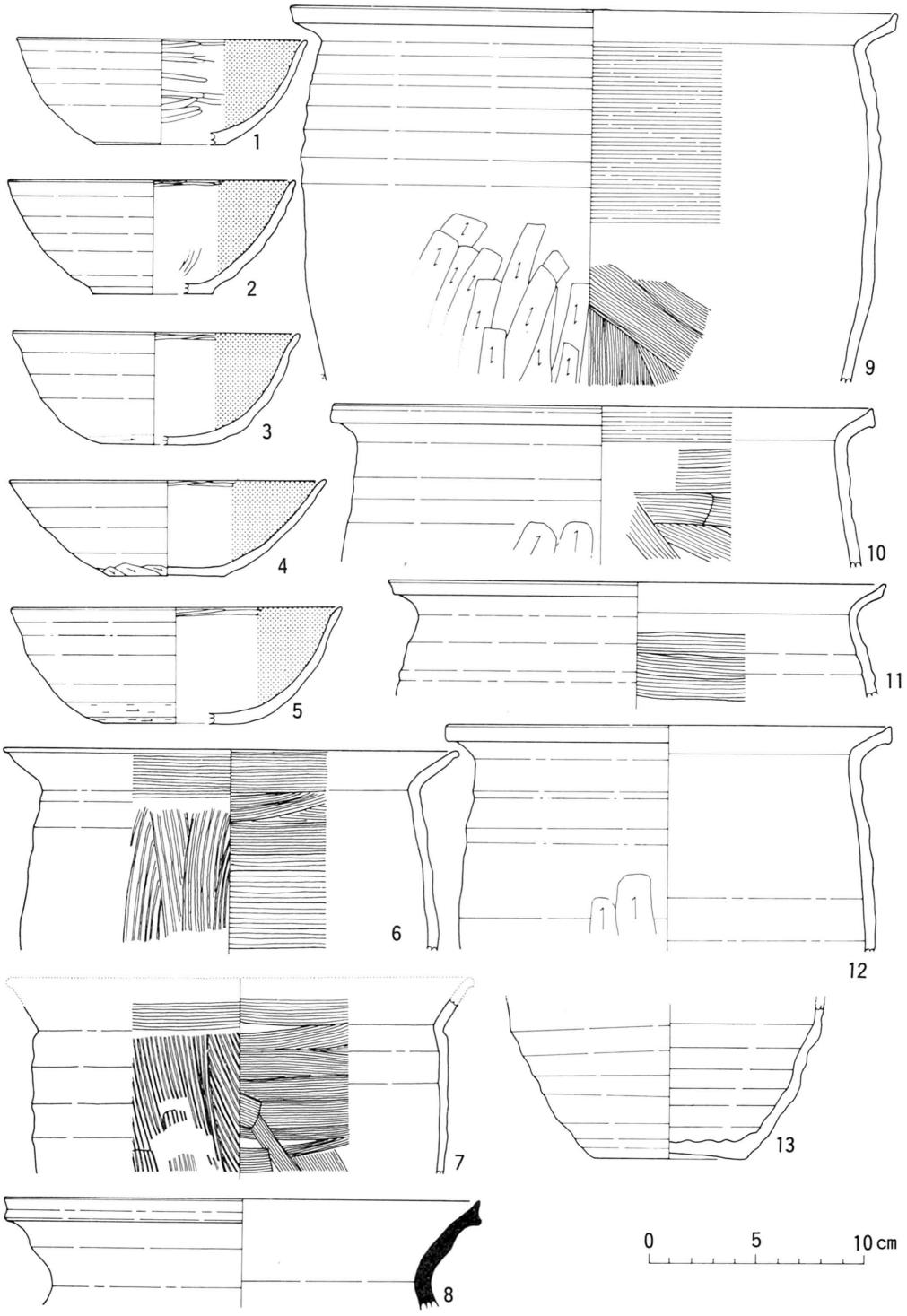
〔遺物出土状況〕　古代の焼物類の破片を主とする住居跡内の遺物はP_2、P_6、P_8などのピットからも出土しているが、大部分は床面と床面を覆う各埋土中から出土している。遺物はかまど周辺部に集中し、住居跡中央部で希薄になる傾向が見られる。なお南西隅付近の埋土中からは土錘が1個発見されている。

〔遺物〕　（第31、32図、第11表、写真16－1～3、18－3）

大部分が復元不能な焼物類の細片であるが、比較的形状のよく知られるものを図示した。



第30図　FG06住居跡遺物出土状況平断面図



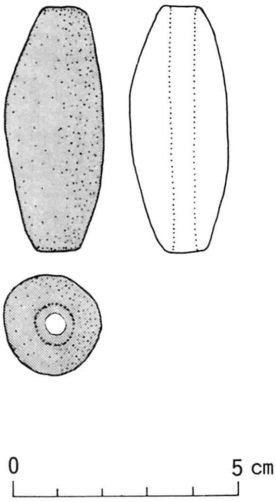
第31図　FG06住居跡出土遺物実測図

（焼物類）　坏類　第31図１～５はＡ群の坏類であるが、１、２はＩ－１類、３、４はＩ－2a類である。そのうち３は磨滅しているが、形状からＩ－$2a_1$類、４はＩ－$2a_2$類に分類される。５はＩ－2b類に含まれる。

長胴カメ類　６、７、９～12はＣ群の長胴カメ類である。そのうち６、７はＩ－1c類ないしそれに近似したタイプのカメ、９、10、11、12はII－$2a_1$および$2a_3$類のカメである。

壺、小型カメ類　８はＦ群III－2c類相当の口辺部破片資料である。13はＢ群III－1a類に含まれる小型カメの底部破片資料である。

（土製品）第32図は住居跡南西隅より出土したやや大型の土錘である。この土錘は細長い紡錘形を呈し、その中心部に管状の孔が穿けられており、全体が黒色を帯びている。



第32図
ＦＧ06住居跡出土土錘実測図

第11表　ＦＧ０６住居跡出土遺物一覧表

焼　物

実測図番号	写真番号	焼成による分類	器種名	出土遺構層	口径	底径	器高	その他の法量値	外壁色調	胎土の状況	残存部位
31－１	—	土師器	内黒坏	Ｐ３埋土	推13.5cm	推 6.0cm	4.9cm	cm	にぶい黄橙	細砂少量混入	口縁部～底部
2	—	土師器	内黒坏	かまど付近	推13.3	推 5.6	5.3		にぶい黄橙	〃	〃
3	16－１	土師器	内黒坏	Ｐ３埋土	推13.4	推 5.0	5.2		にぶい褐色	〃	〃
4	16－２	土師器	内黒坏	床部埋土	推14.8	5.4	4.5		橙	砂少量混入	〃
5	—	土師器	内黒坏	かまど付近	推15.4	推 6.2	5.4		にぶい黄橙	〃	口縁部～体部
6	—	土師器～須恵質土器	長胴カメ	〃	推21.2	—	残 6.2	体部径推 19.5	橙	砂混入	口縁部～体部
7	—	須恵質土器	長胴カメ	床部埋土	推20.0	—	残推 8.0	頚部径推 17.8 体部径 19.0	にぶい橙	〃	口縁部
8	—	焼き損じの須恵器	大壺	Ｐ３埋土	推22.0	—	残 5.0	頚部推 17.6	淡黄	〃	口縁部
9	—	土師器	長胴カメ	かまど付近	推28.0	—	残17.5	体部径推 27.2	橙	〃	
10	—	土師器	長胴カメ	〃	推25.1		残推 7.4	体部径推 24.1	にぶい橙	〃	口縁部～体部
11	—	土師器～須恵質土器	長胴カメ	〃	推23.0	—	残 5.5	体部径推 22.3	橙	〃	口縁部～体部
12	—	土師器	長胴カメ	〃	推20.7		残10.5	体部径推 19.4	橙	〃	口縁部～体部
13	16－３	土師器	小型カメ	かまど袖	—	7.0	残 7.0	体部径残 14.0	赤橙	〃	体部～底部

土製品

実測図番号	写真番号	器種名	出土遺構層位	最大長	最大径ないし巾×厚	端部直径	孔径	重量	保存状況	色調	胎土の状況	黒斑	磨滅その他
32－１	18－３	土錘	床部埋土下層	5.5cm	cm 2.1～2.2	cm 0.9～1.1	cm 0.4～0.5	22.2g	一部欠損	黒色	細砂少量混入	全体黒化	著しい

ＦＩ50住居跡　（第33～36図、第12、13表、写真５－１・３・４、15、18、21）

〔**位置**〕　調査区中央部南寄り東半部に位置し、ＦＧ06住居跡の南東部に隣合っている。

〔**重複関係**〕　南東部がＦＪ03溝に切られている。

〔**形状、規模**〕　一辺3.8～4.0ｍ内外、検出面からの深さ0.2ｍ前後の隅丸方形の竪穴住居跡である。その南北辺は真北に対し約22.5°西に偏っている。床面は、ほぼ平坦でかまどが南壁の東寄りの部分に設けられている。

（**柱穴**）　上屋に関連した支柱穴と思われるピットはP_1～P_4の４ピットである。これらのピットは直径0.20～0.25ｍ、深さ0.15ｍ未満の平面円形の鍋底状ピットで焼土や炭化物が少量混入した褐色ないし暗褐色のシルト質軽埴土層によって埋められており、床の中央部に台形状に配置されている。その心々距離はP_1～P_2が1.6ｍ、P_3～P_4が2.0ｍ、P_1～P_4、P_2～P_3が2.3ｍをそれぞれ測る。

〔**付属遺構**〕　住居跡に付属する遺構としては、かまど１基と床中央部の不整楕円形ピット１がある。

（**かまど**）　南壁東寄りに築かれているが、火床部を囲む壁体の残存状況は比較的良好である。壁体は地山層とほぼ同色同質のシルト質軽埴土の単層よりなっているが、地山層を削り出してかまど壁体の基部としたものの様に見受けられる。火床部には支脚として用いられた土器片と焼石、焼土塊が２～３散らばっている。煙道部は長さ1.2ｍ、検出面よりの深さ0.05ｍ内外でその基部付近には長径0.3ｍ、短径0.12ｍ、深さ0.05ｍ内外の小ピットがある。

（**P_5**）　住居跡の中央部に位置する、北西－南東方向に長い不整楕円形の皿状ピットである。その規模は長径2.14ｍ、短径1.3ｍ、床面からの深さ約0.2ｍを測る。埋土や遺物の出土状況から住居跡に、ある時期伴なった遺構である事は確実であるが用途は不明である。

第 12 表ＦＩ50住居跡柱穴状ピット一覧表

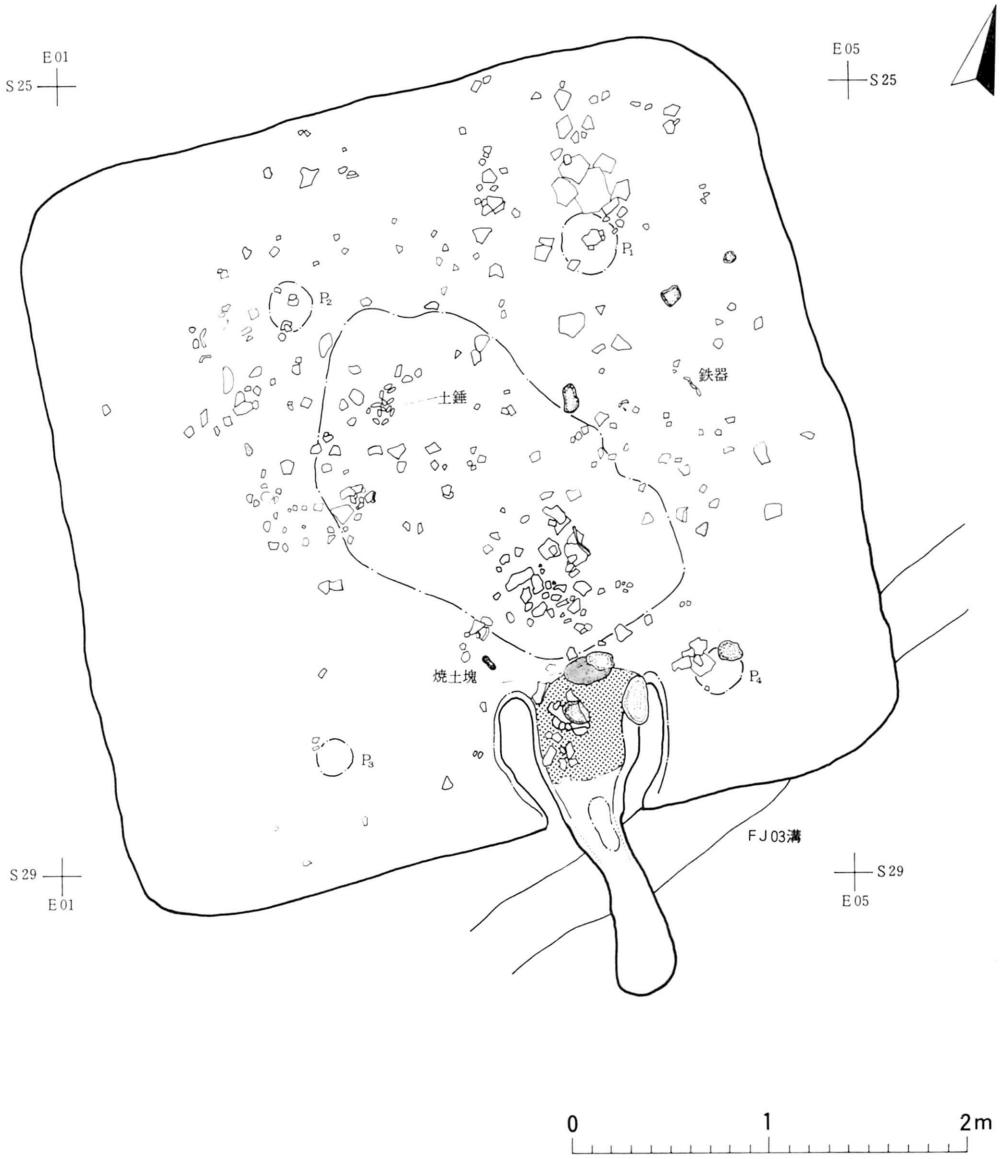
ピット名	平面形	断面形	平面規模(m)	深さ(m)	埋土状況	出土遺物
P_1	円形	鍋底形	0.32×0.28 0.25×0.22	0.16 0.12	暗褐色系のシルト質軽埴土層	なし
P_2	〃	〃	0.25×0.22	0.12	〃	〃
P_3	〃	〃	0.2 ×0.2	0.10	〃	〃
P_4	〃	〃	0.24×0.21	0.15	〃	〃

〔**埋土**〕　住居跡を覆う主な埋土は暗褐色のシルト質軽埴土ないしはシルトの層であるが、ところによっては焼土や黒褐色土層などの各層が卓越する。また、P_5の埋土は３層よりなるが、

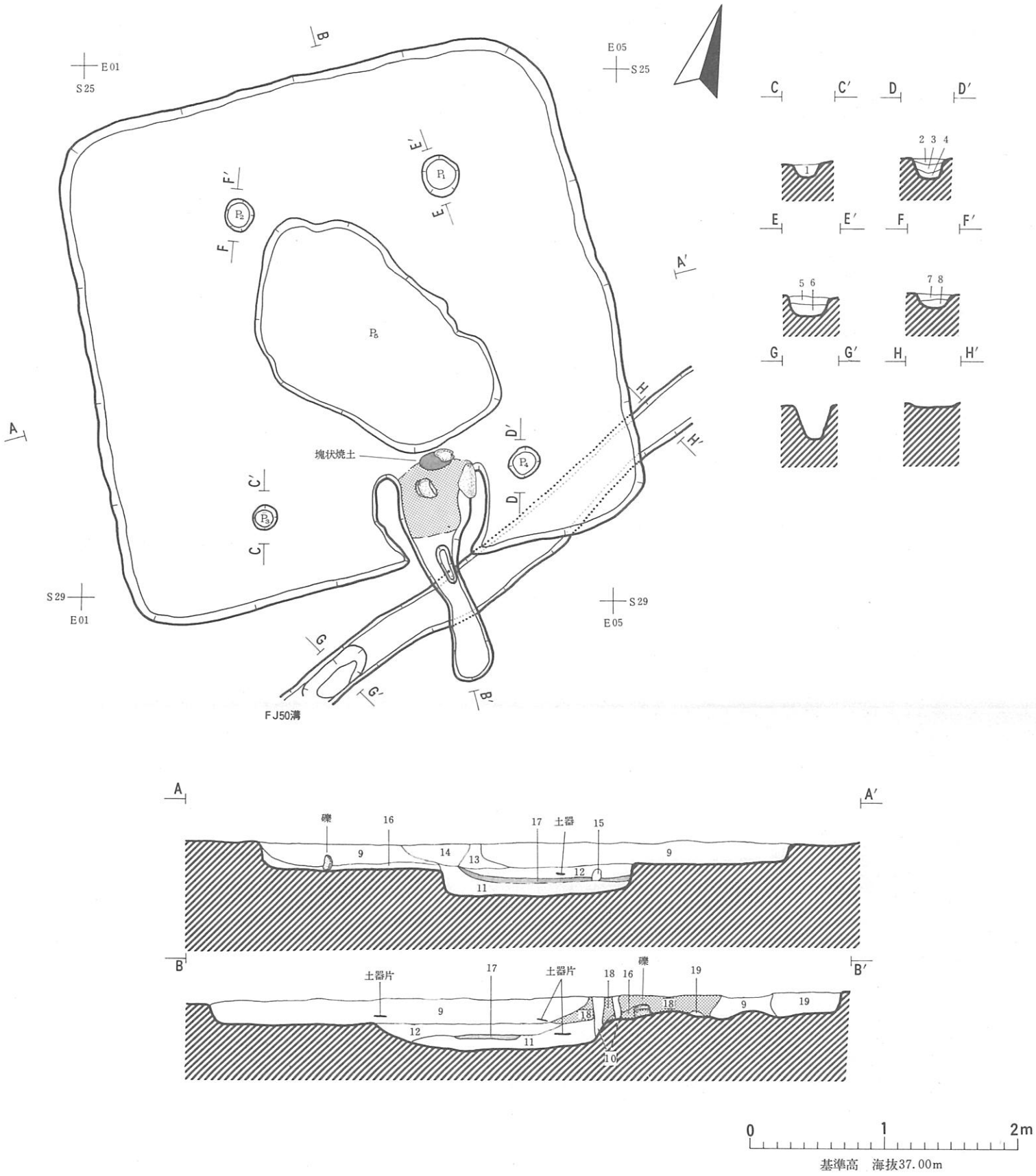
そのうち下部の２層はやや自然堆積に近い様子を示すが、最上層土は貼土として用いられた形跡が認められる。

〔**遺物出土状況**〕　住居跡内の遺物は主としてP_5およびかまど火床部と床面を覆う埋土各層から分散した形で多数出土している。埋土の遺物は住居跡の中央部に集中する傾向が見られるがそのほとんどは接合不能な古代の焼物類の破片である。他に鉄器破片や土錘が若干出土してい

〔**遺物**〕（第35、36図、第13表、写真15～１～３・６～13、18－１、21－８）



第33図　FI50住居跡遺物出土状況平面図



1. 暗赤褐　5YR3/3　シルト質軽埴土 炭化物、焼土を少量含む	7. 褐　10YR4/4　シルト 焼土を含む	14. 暗褐　10YR3/4　シルト 13と同質であるがしまりが粗である
2. 褐　10YR5/4　シルト質軽埴土 塊状焼土、炭化物を含む	8. 暗褐　10YR3/4　砂質シルト 炭化物を少量含む	15. 暗褐　7.5YR3/4　砂土 粒子の荒い砂の層
3. 褐　10YR5/6　シルト質軽埴土 炭化物を含む	9. 暗褐　7.5YR3/4　シルト質軽埴土 炭化物、焼土を少量含む	16. 暗褐　7.5YR3/4　焼土 炭化物と大量の塊状焼土を含む
4. にぶい黄褐　10YR5/3　シルト質軽埴土 やや粘り強く、炭化物を少量含む	10. 黒褐　10YR3/3　シルト質軽埴土 攪乱土	17. 赤黒　2.5YR2/1　炭化物 灰と焼土を少量含む
5. 褐　10YR5/4　シルト質軽埴土 焼土を含む	11. 暗褐　7.5YR3/4　細砂混りシルト	18. 暗褐　7.5YR3/3　炭化物 大量の炭化物と焼土を含む
6. 暗褐　10YR3/4　砂質シルト 炭化物を少量含む	12. 灰黄褐　10YR5/2　シルト質埴土	19. 黒褐　7.5YR3/2　シルト
	13. 暗褐　10YR3/4　シルト 塊状焼土、炭化物を含む	

第34図　FI50住居跡平断面実測図

第13表　Ｆ１５０住居跡出土遺物一覧表

焼　物

実測図番号	写真番号	焼成による分類	器種名	出土遺構層	口径	底径	器高	その他の法量値	外面色調	胎土の状況	残存部位
35－1	15－7	土師器	内黒坏	床部埋土	13.3cm	5.6cm	4.6cm	cm	にぶい橙色	粘土	口縁部～底部
2	15－6	土師器	内黒坏	床部埋土	12.9	4.8	4.8～4.6		浅黄橙～にぶい橙	細砂少量混入	完形
3	—	土師器	内黒坏	床部埋土	推13.4	6.4	5.0		暗赤褐色		口縁部～底部
4	15－8	土師器	内黒坏	P_5	推15.0	推6.0～6.5	5.2		にぶい橙色	細砂少量混入	口縁部～底部
5	15－3	土師質土器	高台付坏	床部埋土	12.0＋α	7.2	5.0＋α		浅黄橙色	砂混入	口縁口～底部
6	—	土師質土器	坏	床部埋土	15.5	5.6～5.8	4.7～5.5		橙色～にぶい橙	細砂混入	口縁部～底部
7	15－2	土師質土器	坏	床部埋土	推16.2	5.7～6.0	6.0		にぶい橙（部灰）	細砂混入	口縁部～底部
8	12	須恵質土器	坏	床部埋土	15.0	6.0	4.5		にぶい橙～浅黄橙	細砂少量混入	口縁部～底部
9	—	土師質土器	坏	床部埋土	推17.0	—	残 3.4	体部径 推9.0	にぶい橙	砂混入	口縁部～体部
10	15－3	須恵質土器	坏	床部埋土	10.4	5.5	4.3～4.5		橙～にぶい黄褐	砂混入	口縁部～底部
11	10	土師質土器	坏	床部埋土	推13.1～13.8	推 4.2	4.2～4.5		浅黄橙	細砂少量混入	口縁部～底部
12	—	須恵器	坏	床部埋土	推13.2	推 6.4	推 3.1		灰白	砂混入	口縁部～底部
13	15－9	土師質土器	坏	P_5	推13.1	5.2	3.2～3.5		橙～浅黄橙		口縁部～底部
14	11	須恵器	坏	床部埋土	12.4	4.4	3.8～4.0		灰～にぶい橙		口縁部～底部
15	1	須恵器	大型壺	床部埋土	—	残39.5	推32.0	体部径推45.3	灰	砂混入	体部～底部
16	—	土師器	小型カメ	床部埋土	推18.9	—	残12.0	体部径推17.9	浅黄橙	砂混入	口縁部～体部
17	—	土師器	小型カメ	床部埋土	推18.1	—	残 9.2	体部径推17.2	にぶい褐	砂混入	口縁部～体部
18	—	土師器	長胴カメ	床部埋土	推23.6	—	残 8.0	体部径推22.0	にぶい橙	砂混入	口縁部～体部
19	—	土師器	長胴カメ	床部埋土	24.0	—	残13.5	体部径 24.8	にぶい黄橙	雲母、石英分の多い砂混入	口縁部～体部
20	—	土師器	長胴カメ	P_5	推23.6	—	残11.5	体部径推21.8	浅黄橙	砂混入	口縁部～体部
21	—	土師器	長胴カメ	P_5	推23.8	—	残17.5	体部径推20.1	灰白～橙		口縁部
22	—	土師質～須恵質土器	長胴カメ		推24.0	—	残12.6	体部径推23.8	浅黄橙～にぶい橙	砂混入	口縁部～体部
23	—	土師器	長胴カメ	床部埋土	推26.2	—	残14.8	体部径推24.8	橙～浅黄橙	砂混入	口縁部～体部
24	—	土師器	長胴カメ	P_5、かまど	推26.0	—	残14.8	体部径推23.1	橙	砂混入	口縁部～体部

土製品

実測図番号	写真番号	器種名	出土遺構層位	最大長	最大径ないし巾×厚	端部直径	孔径	重量	保存状況	色調	胎土の状況	黒斑
35－25	18－1	土錘	床面	4.5cm	1.4cm	cm 0.4～0.5	cm 0.25～0.3	5.8g	端部の一部欠損	浅黄橙	砂少量混入	有り
26	〃	〃	〃	4.4	1.2cm	0.5	0.3～0.4	5.15		浅黄橙	細砂少量混入	
27	〃	〃	〃	4.4	1.4cm	0.4～0.5	0.3	5.1		浅黄橙一部明黄褐色	細砂少量混入	有り
28	〃	〃	〃	4.6	1.6	0.55	0.35	6.9		浅黄橙一部明黄褐色付色	細砂少量混入	
29	〃	〃	〃	4.1	1.2	0.5	0.35～0.4	4.0		浅黄橙	細砂少量混入	
30	〃	〃	〃	4.35	1.7	0.5～0.6	0.3 内外	8.8		浅黄橙	砂少量混入	内黒

実測図番号	写真番号	器種名	出土遺構層位	最大長	最大径ないし巾×厚	端部直径	孔径	重量	保存状況	色調	胎土の状況	黒斑
35−31	18−1	土錘	床面	4.7cm	1.4cm	cm 0.4～0.5	cm 0.3～0.4	6.5g		浅黄橙	細砂少量混入	有り
32	〃	〃	〃	4.4	1.4	0.5	0.35～0.4	4.1	端部の一部欠損	浅黄橙	細砂少量混入	
33	〃	〃	〃	4.6	1.5	0.4～0.5	0.3～0.3	6.65	端部の一部欠損	浅黄橙	細砂少量混入	
34	〃	〃	〃	4.7	1.5	0.55	0.3 内外	6.7		浅黄橙	細砂少量混入	痕跡有り
35	〃	〃	〃	4.9	1.7	0.5	0.3～0.4	8.7		浅黄橙	細砂少量混入	痕跡有り
36	〃	〃	〃	4.9	1.6	0.6	0.3～0.4	7.15		浅黄橙	細砂　混入	大きい
37	〃	〃	〃	4.8	1.6	0.6	0.2～0.3	8.5		浅黄橙	細砂少量混入	
38	〃	〃	〃	4.8	1.7	0.6	0.2～0.3	8.0		浅黄橙	細砂少量混入	極少に有り
36−1	〃	〃	〃	4.2	1.5	0.5～0.6	0.25～0.3	6.7				

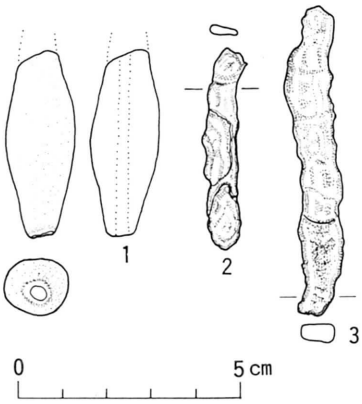
鉄　器

実測図番号	写真番号	器種名	出土遺構層	最大長	最大巾	最大厚	体部横断面形	保存状況	備　考
36−2	21−8	?	床部埋土下層	4.55cm	cm 0.6～0.8	cm 0.1～0.2	円　形	不　良	
3	〃	?	床部埋土下層	7.0	0.7～1.1	0.3～0.4	不整長方形	〃	

出土した焼物類の破片のうち、比較的形状の良くわかるものを第35図、第36図に図示した。

（焼物類）　**坏類**　第35図１～14はＡ群の坏類である。そのうち１、２はＩ−1a類、３、４はＩ−2a類、４はＩ−3a類、６はII−2a類、７～11、13はII−1a～III−1a類のそれぞれ各種である。また12はIV−1a類、14はIV−2a類である。

小型カメ、長胴カメ類　同じ第35図16、17はＢ群II−1a類の小型カメ類の上半部破片である。18～24はＣ群の長胴カメ類である。そのうち19、23はＩ−1a類、24はＩ−1e類、24はII−2b類、20もII−2b類、21、　24 22はII−$2a_1$類のそれぞれ上部破片資料である。



第36図
FI50住居跡出土遺物実測図(2)

（土製品）　土製品としてはP_5などから第35図25～38、第36図１に掲げたような土錘15個が出土している。これらの土錘はいずれも細長い紡錘形を呈し、その中心部に管状の孔が穿けられている。いずれも土師器類似の焼物でにぶい浅黄橙色を呈し風化が著しい。

（鉄器）　鉄器としては、第36図２、３に掲げる様な性格不明の細長い板状の鉄製品が２点出土している。

ＩＨ06住居跡　（第37～42、第14、15表、写真６、16、18、20～22）

〔**位置**〕　調査区南方部のＩ区にありＩＪ03ピット(1)やＪＡ06溝などの北西部に位置している。

〔**重複**〕　北西部がＩＨ06溝によって切られている。

〔**形状、規模**〕　西側約⅓が工事用道路の下に埋もれているため、正確な形状は把握できなか

第35図　FI50住居跡出土遺物実測図(1)

第35図　FI50住居跡出土遺物実測図(2)

ったが、発掘部分の形状から一辺約4.8m、検出面からの深さ0.2m前後の平面隅丸方形の竪穴住居跡と推定される。住居跡の東壁は東北に対し約26°東に偏っている。

（柱穴）　図でも解るように住居跡内に多数のピットが群在しているが上屋構造に関連した柱穴と思われるピットは確認できなかった。

〔付属遺構〕　住居跡に付属する遺構としてはかまど1基とP_1～P_{16}までの各ピットおよび炉跡と思われる焼土遺構2が確認されている。

（かまど）　住居跡の北壁に設けられた長さ1.3m、検出面からの深さ0.04～0.07mの煙道、煙出し部が北々東方向に延びている。全体として保存状態が悪く既に埋没以前に破壊されていたらしく、わずかに火床部と壁体の痕跡が見られるだけである。

そのうち火床部は長径1.26m、短径0.8m内外の楕円形の範囲を占めるがその下には2つの浅い皿状ピットP_8、P_9が見られる。ピットと火床部の土層断面の観察の結果この火床部がほぼ同一場所に重複する二ないし三期のかまどの火床部である事が判明した。2つのピットのうちP_8はあきらかにかまど火床部の掘り込み部分と思われる。

壁体は煙道の基部付近にわずかに残っているが、西側の方にやや多く残っている。その最大長は0.46m、最大巾0.36m、残存高約0.05mを測、南端部に長さ0.36m、巾0.16m、厚さ0.1m前後の川原石が置かれていた。

（ピット類）　住居跡に付属するピットとして確認できる遺構はP_8を除いて全部で15確認されているが、そのうちP_1～P_{11}、P_{16}は住居跡北側かまど周辺部に重複し合う形で集中している。P_{13}～P_{15}は住居跡の南東隅付近にやはり重複し合う形で存在している。

以上のピットの形状はさまざまであるが、概して平面不整円形の深皿状の形態のものが多い。ピット内の遺物から見る限り、これらのピットの時期差は認められないが埋土の観察によって幾つかのピットについてはある程度まで前後関係を確認する事ができ、それを列記すると下記のとおりである。

P_{16}＞P_7、P_8＞P_{16}＞P_8＞最終期のかまど、P_4＞P_3、P_{16}＞P_7、P_{16}＞P_6＞P_5、P_{11}＞P_{10}＞P_2、P_{16} P_2＞P_{16}、P_{14}＞P_{13}＞P_5

いずれ、これらのピットがどういう順序で築かれたか詳細は不明であるが、その機能を考えた場合に、一種の貼床部分であるP_{16}とかまど火床部の一部をなすP_8を除いて、多くの場合焼土や炭化物の混入した各種の埋土を伴なっている。その事から、これらのピットの機能として一種の灰捨て穴の様な施設が推測される。ただし、P_1、P_{15}の様にやや直径が大きく、直径が1.1m内外のピットは埋土の状況が、他のピットと若干異なり完形に近い坏なども出土している。この事から、これらの機能をむしろ貯穴様施設と見なすのが妥当かも知れない。

（焼土遺構）　一種の地床炉と思われる直径0.5m未満の平面円形の焼土遺構が床面の中央部

と南東隅寄りの部分で発見されている。この２つの部分では床土が強火を受けて橙色に変色しやや固くなっている。

第14表　ＩＨ06住居跡ピット一覧表

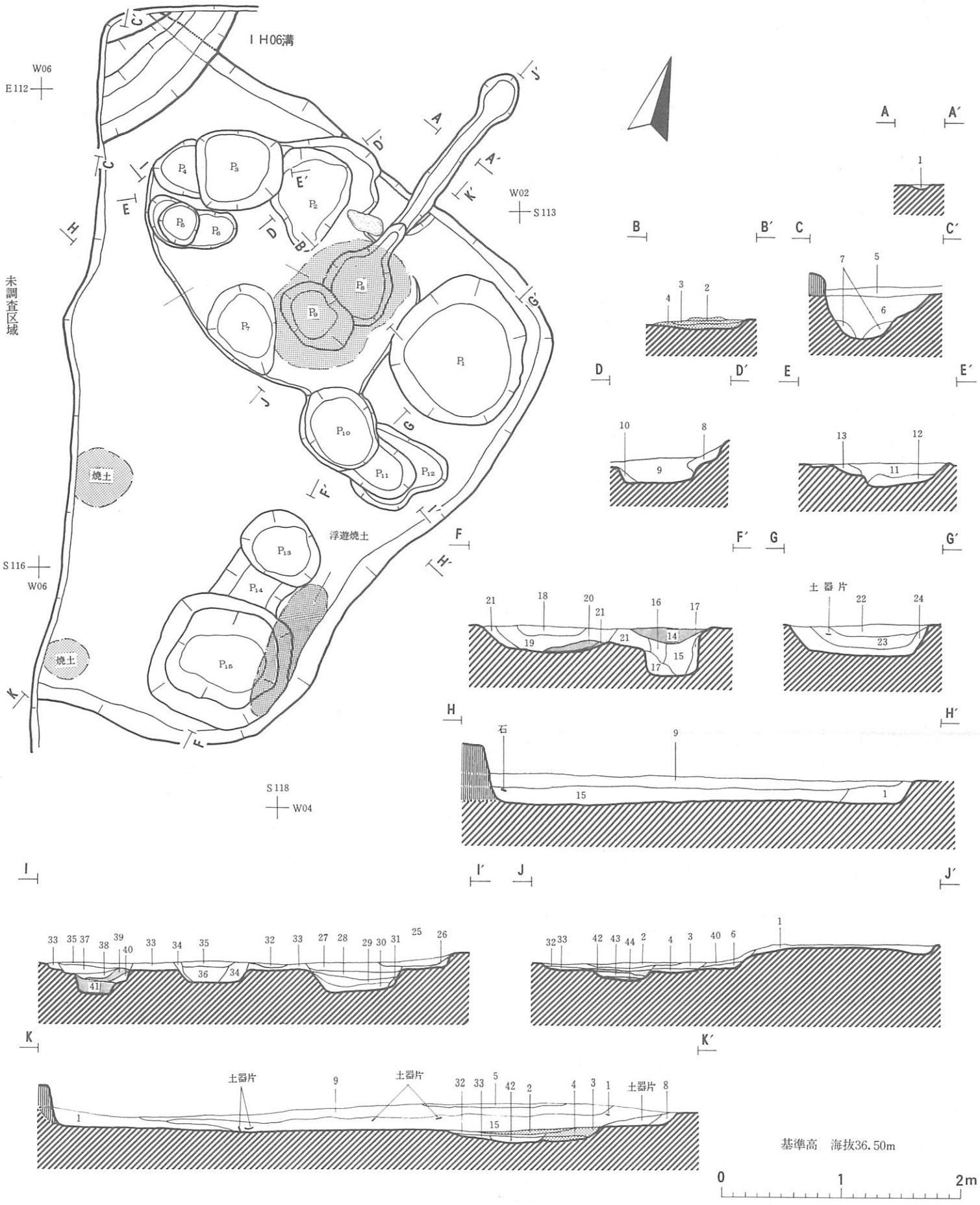
ピット名	平面図	断面図	平面規模	深さ	埋土状況	出土遺物	備考
			(m)	(m)			
P_1	楕円形	鍋底形	1024×1.10	0.23	自然堆積様の３層	土器片、骨片	P_{15}と重複している
P_2	〃	鍋底形	0.84×0.64	0.15	３層	土器片	P_3と重複している
P_3	〃	鍋底型	0.72×0.66	0.20	２層	〃	重複している
P_4	〃	浅い鍋底形	0.36×0.48	0.08	１層	〃	
P_5	〃	ビーカー形	0.34×0.32	0.20	１層	〃	重複している
P_6	楕円形	鍋底形	0.76×0.32	0.16	５層	〃	
P_7	不整円形	浅い鍋底形	0.78×0.56	0.09	３層	〃	
P_8	〃	浅い鍋底形	0.84×0.60	0.06	３～４層	〃	重複している
P_9	楕円形	緩やかな鍋底形	0.66×0.42	0.26	４～５層	〃	
P_{10}	〃	鍋底形	0.73×0.58	0.3	４層	〃	P_{11}、P_{12}と重複している
P_{11}	〃	浅い鍋底形	0.4 ×0.42	0.12	１層	〃	P_{10}、P_{12}と重複している
P_{12}	不整円形	浅い鍋底形	0.72×0.64	0.02	１層	〃	P_{10}、P_{11}と重複している
P_{13}	楕円形	ビーカー型	0.7 ×0.55	0.42	４層	〃	重複している
P_{14}	〃	鍋底形	1.12×1.06	0.22	自然堆積様の３層	〃	
P_{16}	不整形		2.52×2.08	0.06	一部暗褐色貼土	土器片、炭化種	P_2～P_9まで包含してる

〔**埋土**〕　住居跡を埋める主要な埋土はピット部やかまど部の各種の組成土を除き、大部分が焼土や炭化物の少量混入した暗褐色のシルト質軽埴土層である。この層は床部分では～黒褐色大体色の濃淡により上下二層に分かれる。さらに住居跡の辺縁部には褐色系の壁面崩壊土が少量堆積している。

〔**遺物出土状況**〕　住居跡内の遺物は第39図でも示される様に遺構全域から多数出土しており、図では良くわからないが、各ピットの埋土中からも多数出土している。遺物の大多数は古代の焼物類であるが、その中では遺物説明の項でも述べる高台付内黒坏や小型非内黒の坏などが特に多く見られる。

〔**遺物**〕　（第39～42図、第15表、写真16－４～９、18－６、20－７、21－２、22－３）

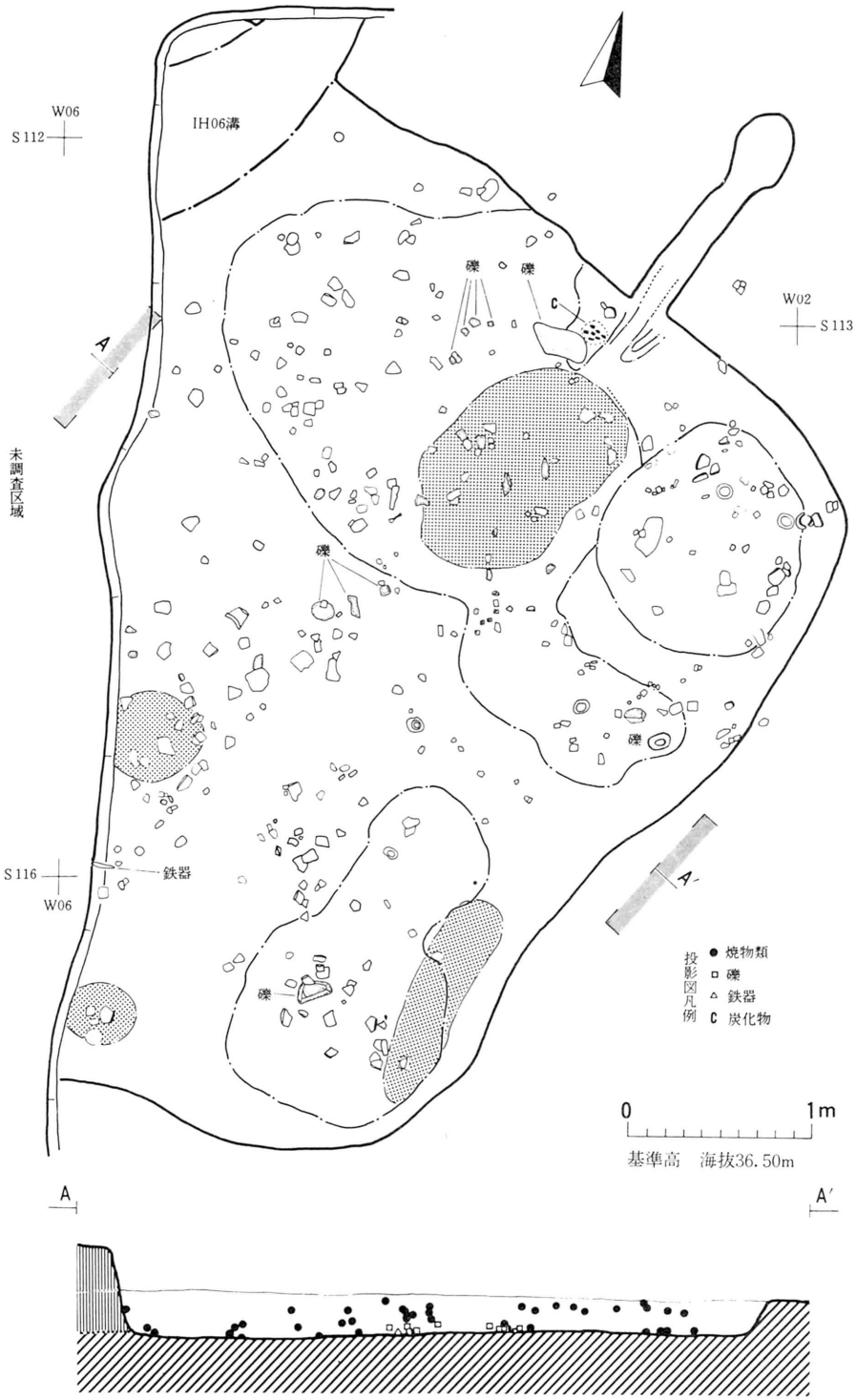
住居跡内から出土した遺物、特に焼物類は埋土中のものも床面およびピット内のものも観察の結果、形態・技法上の差異がほとんど認められなかったので一括して扱った。そのうち形状のよくわかる資料を第39～42図に図示した。この中には高台付内黒坏や小型坏などの様に他の住居跡ではごくわずかしか発見されていない器種が特に多く見られる。



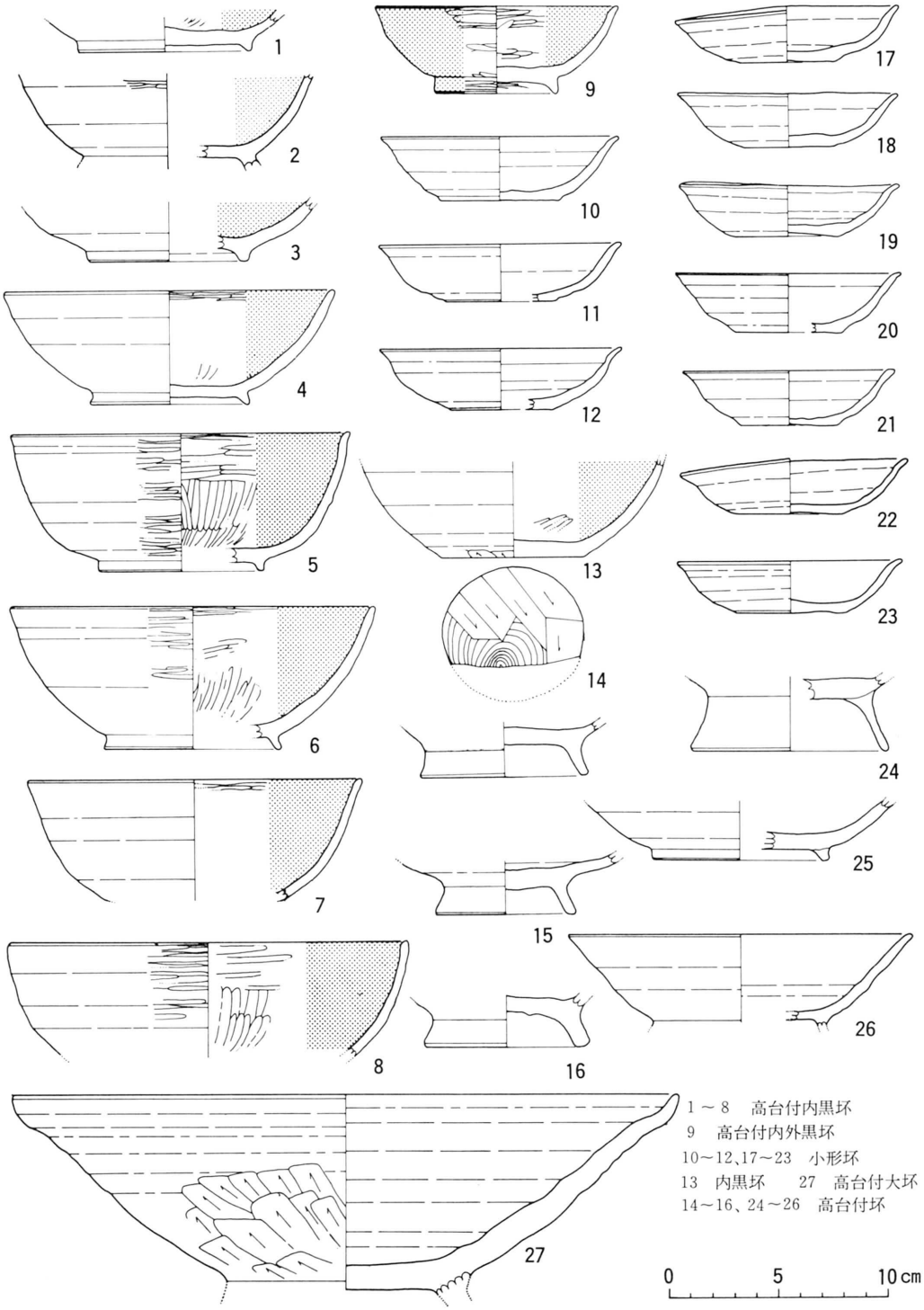
層	土色		土性	特徴
1	褐	Hue7.5YR4/4	シルト質軽埴土	焼土、炭化物少量混入。
2	極暗褐	Hue7.5YR2/3	〃	塊状焼土を主とし炭化物を少量含む。
3	極暗赤褐	Hue 5 YR2/3	〃	焼土を主とし、炭化物を少量含む（遺物あり）
4	暗赤褐	Hue 5 YR3/4	焼土	下部は硬く焼きしまっている（遺物あり）
5	にぶい赤褐	Hue2.5YR4/3	シルト質軽埴土	水田底土、ややグライ化が進んでいる。
6	暗褐	Hue10YR3/3	〃	焼土少量混入（遺物あり）
7	にぶい黄褐	Hue10YR5/4	シルト質埴土	炭化物少量混入。
8	褐	Hue10YR4/4	シルト質軽埴土	焼土、炭化物少量混入（遺物あり）
9	暗褐	Hue7.5YR3/4	〃	炭化物少量混入。
10	褐	Hue7.5YR5/4	シルト質埴土	
11	褐＋暗褐	10YR4/4＋10YR3/4	シルト質軽埴土	焼土、炭化物を多く混入（遺物あり）
12	褐	Hue10YR4/4	〃	焼土、炭化物を少量混入（遺物あり）
13	〃	Hue10YR4/6	〃	焼土、炭化物少量混入。
14	黒褐	Hue10YR3/2	砂質シルト	炭化物を含む（スス？）
15	〃	Hue10YR3/2	シルト質軽埴土	炭化物、焼土を少量含む。
16	にぶい黄褐	Hue10YR4/3	シルト質埴土	団粒状埴土層に焼土少量混入。
17	暗褐	Hue10YR3/3	軽埴土	やや粘り強く、塊状焼土を含む。
18	〃	Hue10YR3/4	砂質シルト	炭化物少量混入。
19	黒褐	Hue10YR3/3	シルト質軽埴土	炭化物を含む。
20	黒	Hue10YR2/1	炭化物	木炭片や焼土暗褐色粘土粒を少量含む。
21	にぶい黄褐	Hue10YR4/3	埴土	団粒状埴土層に焼土が少量混入しているが、固くしまっている
22	暗褐	Hue10YR3/3	シルト質軽埴土	焼土少量混入（遺物あり）

層	土色		土性	特徴
23	黒褐	Hue10YR3/3	シルト質軽埴土	炭化物、焼土を少量含む（遺物あり）
24	褐＋暗褐	10YR4/4＋10YR3/4	〃	焼土、炭化物を多く混入（遺物あり）
25	暗褐	Hue10YR3/3	〃	焼土少量混入（遺物あり）
26	明黄褐	Hue10YR7/6	シルト質埴土	褐色シルト質軽埴土、焼土、炭化物少量混入。
27	暗褐	Hue10YR3/4	シルト質軽埴土	塊状焼土、炭化物少量含む。
28	褐	Hue10YR4/4	〃	黄褐シルト質埴土と炭化物を少量混入。
29	にぶい黄褐	Hue10YR5/3	シルト質埴土	炭化物少量混入。
30	〃	Hue10YR5/3	〃	塊状焼土を少量混入。
31	褐	Hue10YR4/4	シルト質軽埴土	焼土を少量含む。
32	〃	Hue7.5YR4/3	〃	焼土、炭化物を少量含む。
33	黄褐	Hue10YR5/6	シルト質埴土	貼土の底部に炭化物の薄層のある場合もある。
34	〃	Hue10YR5/6	〃	33とほぼ同質同色であるがやや明るい。
35	にぶい黄褐	Hue10YR4/3	〃	16とほぼ同じ
36	〃	Hue10YR4/3	〃	炭化物、塊状焼土を多く含む。
37	暗褐	Hue10YR3/3	シルト質軽埴土	炭化物を少量含む。
38	黒褐	Hue10YR3/3	〃	炭化物、焼土を少量含む。
39	黒	Hue10YR2/2	炭化物	塊状、焼土を含む。
40	暗褐	Hue7.5YR3/4	シルト質軽埴土	炭化物、焼土を多く含む。
41	黒	Hue10YR2/2	炭化物	やや埴土分を含み粘りがある。
42	黒褐	Hue 5 YR2/1	〃	
43	明黄褐	Hue10YR6/6	シルト	
44	黒褐	Hue 5 YR2/1	炭化物	やや埴土分を含み粘りがある。

第37図　IH06住居跡平断面実測図



第38図　IH06住居跡遺物出土状況平断面図



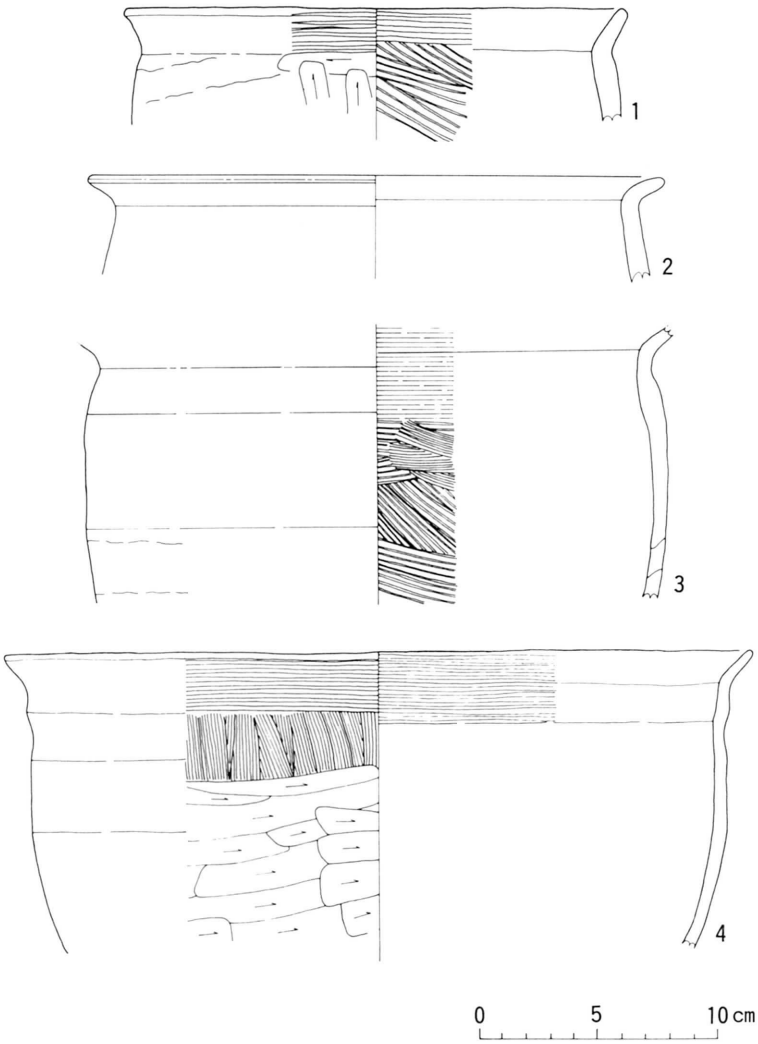
第39図　IH06住居跡出土遺物実測図(1)

（焼物類）　坏類　第39図１～26に示したのは坏類である。そのうち１～６はＡ群Ｉ－3a類の資料であるが１、３、５はその中のＩ－3a類に含まれる。２、４、６は前者とＩ－$3a_2$類の中間形態の坏と言えよう。７、８は形状の類似から１、６と同じグループに含められるであろう。９はＩ－4b類に含まれる坏であるが今回の出土品の中では内外黒色処理された坏が少ないだけに珍らしい例である。10～12、17～23はII－４類に含められる小型坏類であるが、今回調査された住居跡の中ではここからしか出土していない。主にP_1やその他の床部から発見されている。13はＩ－2a類の体～底部破片資料であるが、この種の器型はこの住居跡では少ない。14～16、24～26はＡ群II－3a類の坏類の破片資料であるが、そのうち25、26はII－$3a_1$類、14～16はII－$3a_2$類、24はII－$3a_3$類に含められる資料である。

盤類　27はＤ群Ｉ－２類に分類される器種で分類基準の項では盤としたが、むしろ高台付大坏と言いうる様な形態のものであるがその高台部は欠落している。

長胴カメ類　第40図１～３は長胴カメ類であるが、そのうち１、２はＣ群Ｉ－ｅ類に含まれるものと思われる。また３は胴体部破片資料であるがII－$2a_2$類に入るものであろう。

埚類　４は今回の調査で得られた資



第40図　ＩH06住居跡出土遺物実測図

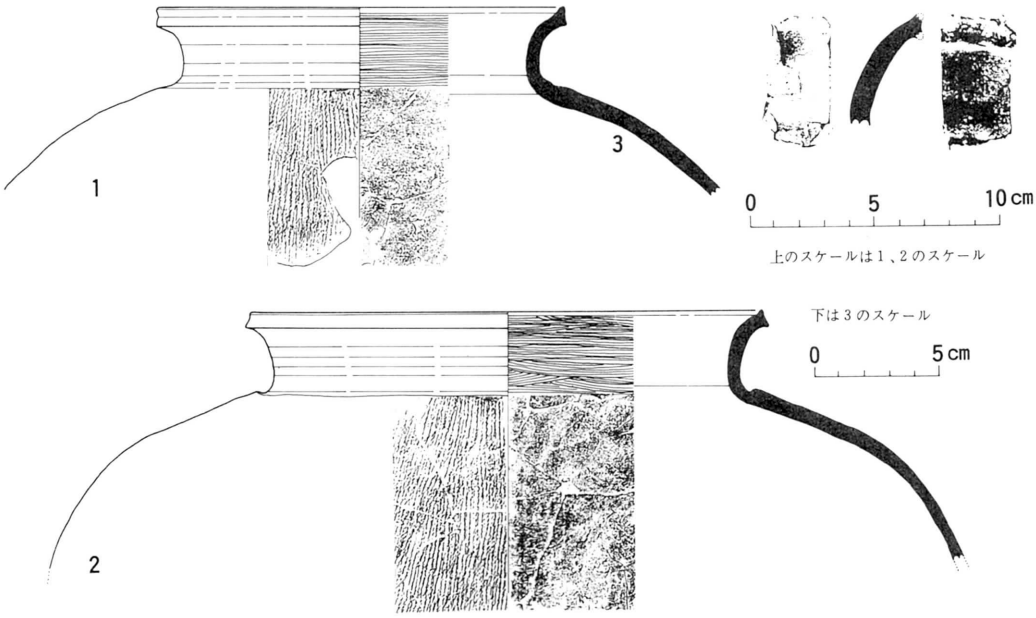
第15表　ＩＨ０６住居跡出土遺物一覧表

土　器

実測図番号	写真番号	焼成による分類	器種名	出土遺構層	口径	底径	器高	その他の法量値	外壁色調	胎土の状況	残存部位
39－1	—	土師器	高台付内黒坏	床部埋土	— cm	6.6cm	cm	脚部径 7.9cm	黒～橙	砂混入	体部～脚部
2	—	土師器	高台付内黒坏	P_1	—	7.9	残 4.0	体部径13.5 脚部径残 8.4	橙　色	砂混入	体部～脚部
3	—	土師器	高台付内黒坏	P_1	—	推 7.5	2.1	体部径残13.1 脚部径推 7.3	にぶい橙	砂混入	
4	—	土師器	内黒高台付坏	P_1	推15.0	7.2	5.2	脚部径　7.3	浅黄橙～にぶい褐	細砂混入	完形
5	16－10	土師器	内黒高台付坏	P_1	推15.4	推 7.5	6.3	脚部径推 7.5	にぶい黄橙	砂少量混入	口縁部～脚部
6	9	土師器	内黒高台付坏	床部埋土	推16.6	7.9	5.2	脚部径　8.1	浅 黄 橙	砂少量混入	体部～脚部
7	—	土師器	内黒坏	床部埋土	推15.2	—	残 5.5	体部径残 8.4	にぶい褐～にぶい橙	砂混入	口縁部～底部
8	—	土師器	内黒坏	床部埋土	推18.0	—	残 5.2	体部径残13.5	浅黄橙	粒子の細いい土	体部
9	16－4	土師器	内外黒小型高台付坏	P_1	推11.1	5.6	推 4.0	脚部径　5.7	黒	砂混入	口縁部～脚部
10	—	土師質土器	小型坏	かまど	推10.8	推 5.4	2.9		にぶい橙	細砂少量混入	口縁部～底部
11	—	土師質土器	小型坏	P_4	推11.0	推 6.0	2.6		にぶい橙	細砂混入	口縁部～底部
12	—	須恵質土器	小型坏	かまど	推10.8	推 4.6	2.8		にぶい橙～橙	細砂少量混入	口縁部～底部
13	—	土師器	内黒坏	床部埋土	—	6.5	残 4.2	体部径推13.7	橙	砂混入	口縁部～底部
14	—	土師質土器	高台付坏	P_3	—	7.1	残 2.3	体部径推 8.8 脚部径　7.7	にぶい橙～橙	砂混入	底部～脚部
15	—	須恵質～土師質土器	高台付坏	P_4	—	5.6	残 2.8	脚部高　1.4 脚部径　6.8	浅黄橙	砂混入	体部～脚部
16	—	土師質土器	高台付坏	床部埋土	—	—	残 2.4	体部径推 7.8 脚部高　1.3 脚部径　7.5	浅黄橙	砂混入	底部～脚部
17	16－6	土師質土器	小型坏	床部埋土	10～10.2	4.4	1.9～2.6		橙	細砂混入	口縁部～底部
18	5	土師質土器	小型坏	床部埋土	10.0	4.2	2.4～2.5		橙	細砂混入	口縁部～底部
19	8	土師質土器	小型坏	P_1	10.0～10.2	4.4～4.6	2.3～2.5		赤　橙	細砂混入	完形
20	—	土師質土器	小型坏	P_4	推10 2	推 4.8	2.7		浅黄橙～橙		口縁部～底部
21	—	土師質土器	小型坏	床部埋土	推 9.6	推 4.4	2.5		にぶい橙		口縁部～底部
22	—	土師質土器	小型坏	P_1	7.8～10.1	4.6～4.9	1.8～2.5		橙	細砂混入	完形
23	16－7	土師質土器	小型坏	P_4	推11.0	推 6.0	2.6		にぶい橙	細砂混入	口縁部～底部
24	—	土師質土器	高台付坏	P_1	—	7.5	残 3.0	脚部高　2.4 脚部			
25	—	須恵質土器	高台付坏	P_1	—	推 8.1		体部径推 8.1 脚部径推 8.1	橙	砂混入	体部～脚部
26	—	須恵質～土師質土器	高台付坏	P_2	推15.6	推 7.8	4.0		灰　黄	細砂少量混入	口縁部～脚部
27	—	土師器	高台付盤	床部埋土	推30.4	推 8.0	残 8.9		にぶい橙	砂混入	口縁部～底部
40－1	—	土師器	カメ類	床部埋土	推21.0	—	残 4.8	体部径推20.5	にぶい橙～橙	砂混入	口縁部
2	—	土師器	長胴カメ	床部埋土	推24.1	—	残 4.2	体部径　22.8	にぶい褐	砂混入	口縁部
3	—	土師器	長胴カメ	床部埋土	推12.4	—	残11.4	頸部径　11.4 体部径推12.1	にぶい橙		口縁部、体部
4	—	土師器	鍋	かまど	推31.2	—	残12.2	体部径推29.0	灰～灰褐	砂混入	口縁部～体部
41－1	—	須恵器	大　壺	床部埋土	推32.6	—	残15.0	体部径推57.4	灰　白	砂混入	口縁部～体部
2	—	須恵器	大　壺	床部埋土	推41.0～41.8	—	残20.0	頸部径　18.5 体部径推63.0～65.0	浅黄橙	砂混入	口縁部、体部
3	—	須恵器	大　壺	P_3	巾 2.8	—	長推 4.5	体部径厚0.5～0.6		砂混入	口縁口

鉄　器

実測図番号	写真番号	器種名	出土遺構層	最大長	最大巾	最大厚	体部横断面図	保存状況	備考
41－1	21－2	紡錘車	床面	11.4cm	5.3cm	0.2内外cm 0.5 0.4	不整円形	片側のねじり部分欠損	
2	〃	刀子	床部埋土	3.7	1.65～2.0	1.65内外	円筒状になっている	不良	
3	〃	刀子の破片？	床部埋土	3.1	2.1	0.2～0.6	隅丸の変形長方形	〃	
4	〃	？	床部埋土	5.1	1.1～1.7	0.2～0.3	不整長方形	〃	



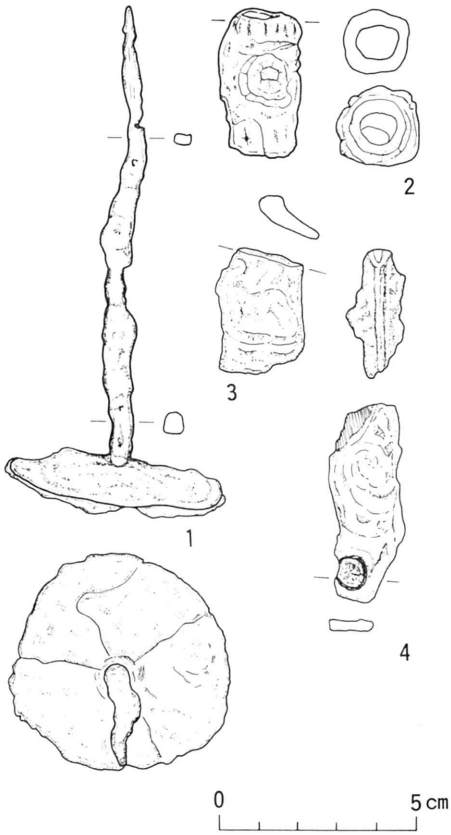
第41図　IH06住居跡出土遺物実測図(3)

料のうちでH群Ⅰ－1類の資料と知られる唯一の例である。

壺類　第41図1、2はF群Ⅲ－1a類に含められる大型壺類の上半部破片資料である。この様な叩き目を有する壺は本住居跡以外にはほとんど見られない。

長頸瓶類　G群に属すると思われる口辺部の資料が一点出土している。この破片は焼成不良の須恵器と思われ胎土の色調はにぶい褐色を帯びかなり柔らかい。

（鉄器）　床面および埋土下部から合計4点の鉄器が採集されている。そのうち第42図1は紡錘車であるが、住居跡南壁寄りの埋土下部より棒部分と円盤部分が別々に発見されたものである。もう一方側の棒部分は発見できなかった。2は管玉状の鉄製品であるが、管孔の内部は銹瘤のためふさがれている。類例は宮地遺跡の10号溝[36]や力石遺跡のH－2住居跡[37]の埋土中から出



第42図　IH06住居跡出土遺物実測図(4)

土しているが、今のところ性格不明である。3、4は刀子の刃部破片と思われる。

（その他）　P_{15}の埋土中からは炭化した野桃の種子が1個出土している。またP_1からは中型哺乳類の骨片1点が出土している。

ＪＧ03住居跡　（第43～46図、第16、17表、写真7、17～21）

〔位置〕　調査区南方Ｉ区の北寄り中央部に位置している。

〔形状、規模〕　一辺約4.8mの隅丸方形の竪穴住居跡であるが、開田工事によってその上端部が削られているため、床面は浅く、検出面から深さ0.08～0.1mを測る。その南北辺は真北に対して約40度西に振れている。

（柱穴）　上層に関連する支柱穴状のピットはP_1～P_3の合計3個発見されている。もとは床の西壁寄りに四角形をなす様に配置されていたと思われるが、住居跡の南西隅が概に攪乱されていたため確認できなかった。各柱穴は深さ0.18mの円い円筒形を呈している。

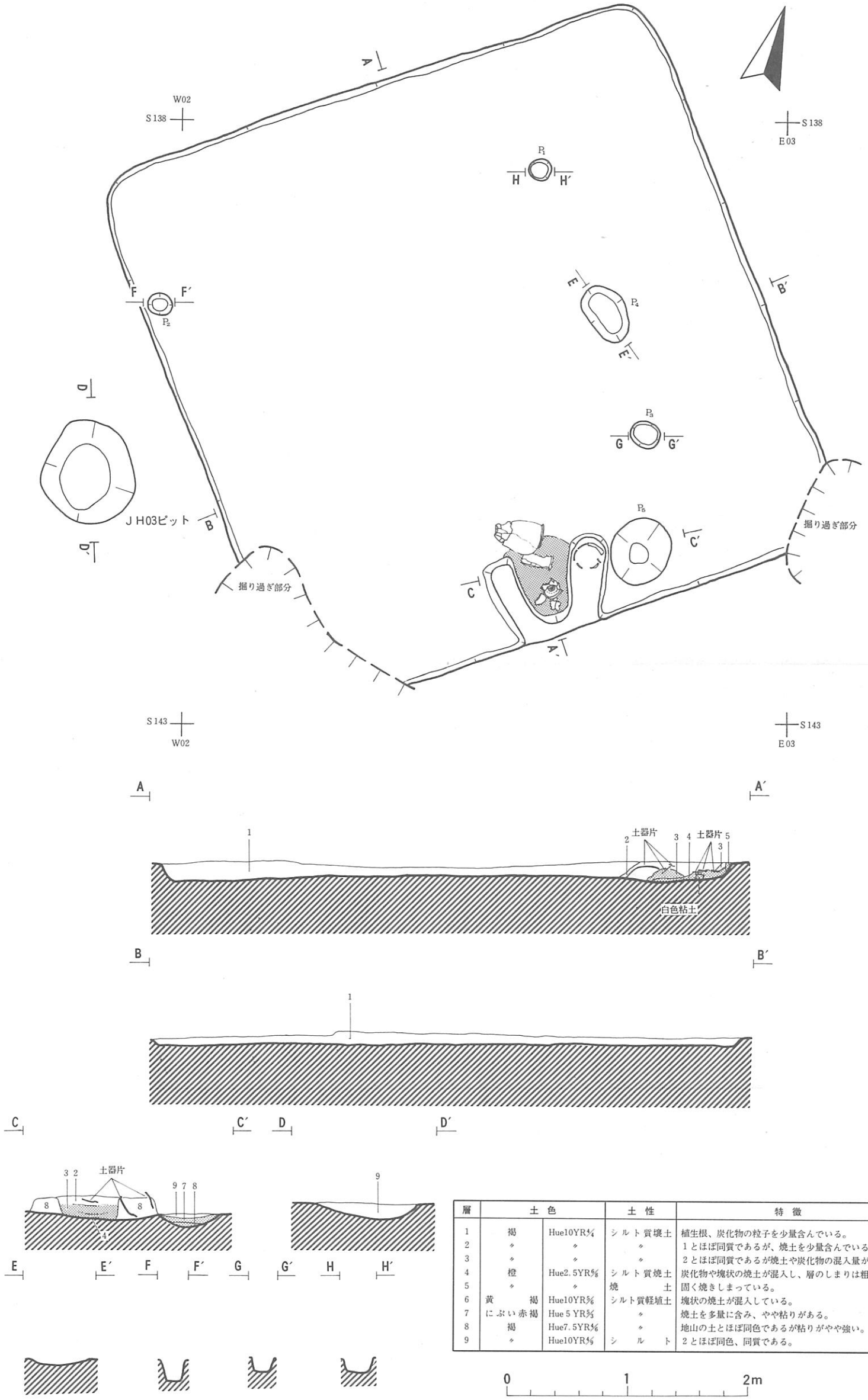
〔付属遺構〕　柱穴状ピット以外の住居跡付属遺構としては、かまど1基、ピット2がある。

（かまど）　南壁中央部に位置し、本体残存部で最大巾約0.98m、巾約0.8mを測る。煙道は確認されていないが、周辺部一帯が削平されている事情から見ると、かつて存在していた可能性が強い。

壁体は埋土や地山層とほぼ同色の褐色シルト軽埴土よりなるが、その東側部分には補強材として倒立した土師器の長胴カメ一個体が埋め込まれている。火床部中央には倒立した須恵器の坏一個体分の破片が見られる。おそらく支脚として用いられたものであろう。

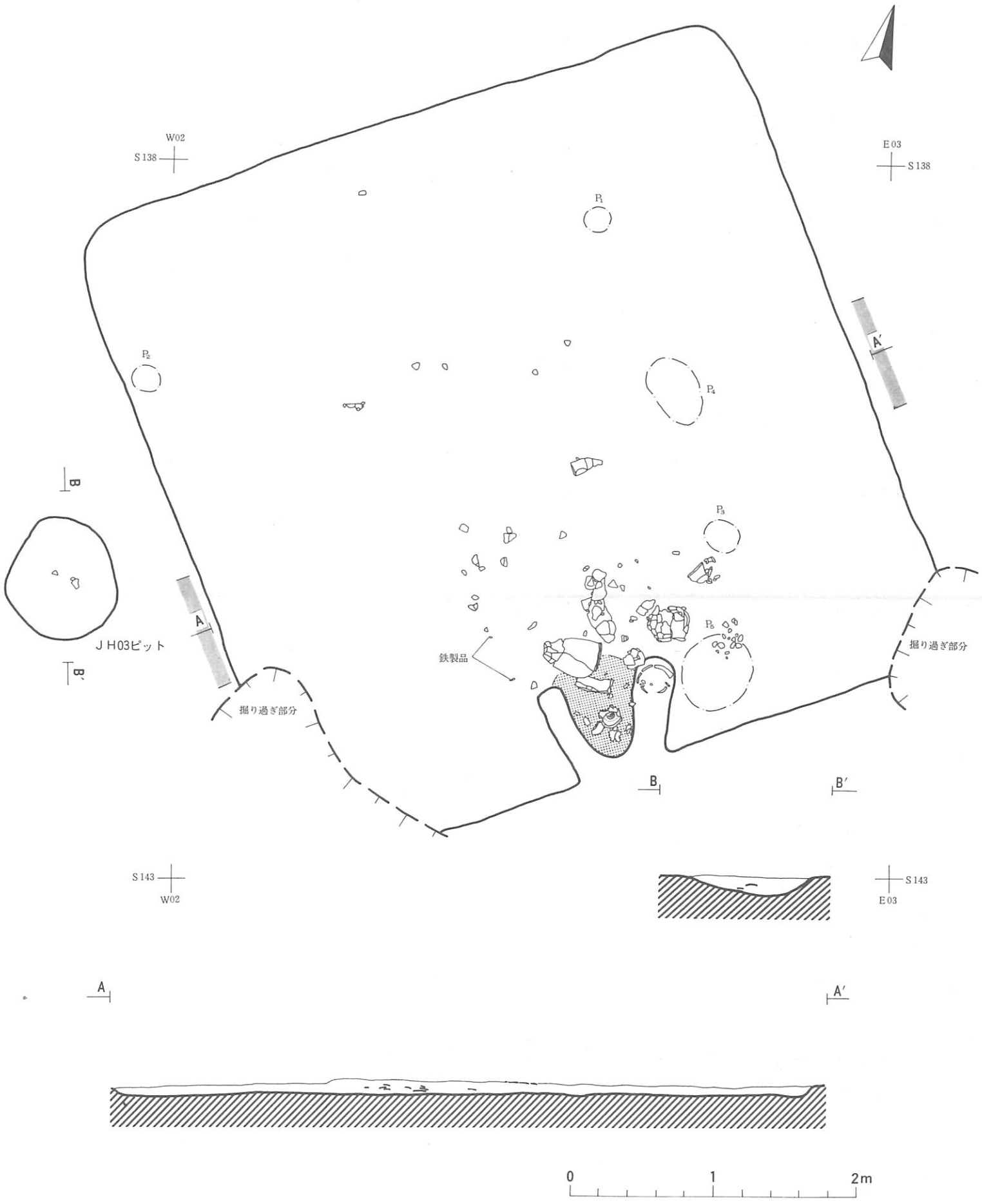
（ピット類）　柱穴状ピット以外のピットはP_4、P_5であるが、いずれも浅い皿状ピットである。そのうち、P_4は床の東壁寄りのP_1とP_3に挟まれた中間部に位置し、平面楕円形を呈している。性格は不明である。P_5は、かまどの東壁に隣接し、平面円形を呈している。位置関係及び埋土から見て、灰捨て穴と推定される。

〔埋土〕　かまど部やピット内の埋土を除いて、住居跡の大部分を被う埋土は木炭を微量に混



層	土色		土性	特徴
1	褐	Hue10YR4/4	シルト質壌土	植生根、炭化物の粒子を少量含んでいる。
2	〃	〃	〃	1とほぼ同質であるが、焼土を少量含んでいる。
3	〃	〃	〃	2とほぼ同質であるが焼土や炭化物の混入量が多い。
4	橙	Hue2.5YR6/8	シルト質焼土	炭化物や塊状の焼土が混入し、層のしまりは粗である
5	〃	〃	焼土	固く焼きしまっている。
6	黄褐	Hue10YR5/6	シルト質軽埴土	塊状の焼土が混入している。
7	にぶい赤褐	Hue 5 YR5/4	〃	焼土を多量に含み、やや粘りがある。
8	褐	Hue7.5YR4/6	〃	地山の土とほぼ同色であるが粘りがやや強い。
9	〃	Hue10YR5/6	シルト	2とほぼ同色、同質である。

第43図　JG03住居跡平断面実測図



第44図　JG03住居跡遺物出土状況平断面図

入した褐色のシルトであるが、この土層は地山の土とほとんど同質同色であるため、遺構の境界部の肉眼的な判別はほとんど不可能である。

第16表　JG03住居跡ピット一覧表

ピット名	平面形	断面形	平面規模(m)	深さ(m)	埋土状況	出土遺物
P_1	円形	鍋底形	0.2 ×0.18	0.11	褐色～暗褐色シルト層	なし
P_2	〃	U字形	0.2 ×0.18	0.18	〃	〃
P_3	〃	〃	0.26×0.22	0.12	焼土層〃	〃
P_4	楕円形	浅いレンズ状	0.51×0.34	0.05	焼土層	焼物類
P_5	円形	レンズ状	0.55×0.48	0.1	〃	

〔遺物出土状況〕　住居跡内の遺物はほとんど古代の焼物類であるが主に、かまど部分と、その周辺部から出土している。その中には先に述べた長胴カメや坏の他にかまど焚口部付近から完形に近い長胴カメ一個体と、やや大きな別の長胴カメの大破片一個体分が出土している。

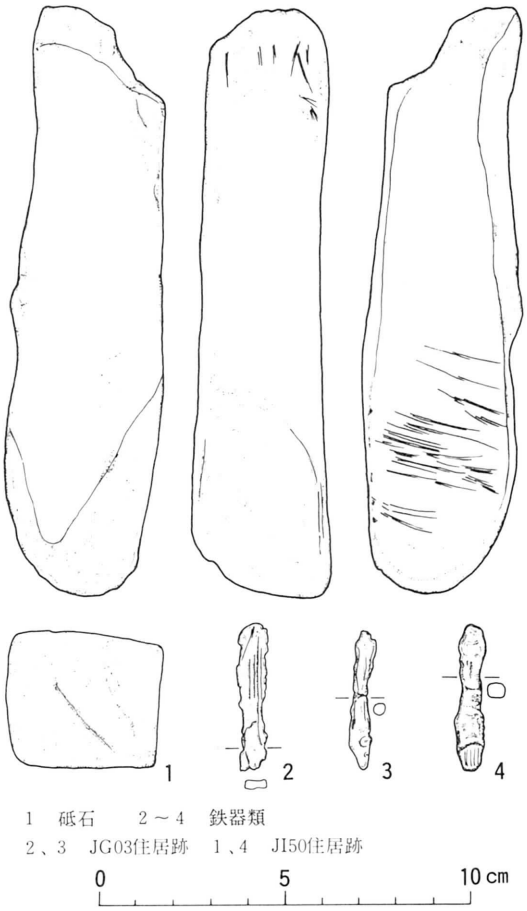
第17表　ＪＧ０３住居跡出土一覧表

焼　物

実測図番号	写真番号	焼成による分類	器種名	出土遺構層	口径	底径	器高	その他の法量値	外壁色調	胎土の状況	残存部位
45－1	17－4	土師質～須恵質土器	長胴カメ	床面	推26.5cm	推 8.0cm	36.8cm	cm	淡黄	砂混入	口縁部～底部
2	5	土師器	長胴カメ	〃	21.4		残20.5	体部径 21.6	にぶい橙	〃	口縁部、体部
3	—	土師器	長胴カメ	〃	推23.0	推 7.6	32.8推	頸部径推22.0	橙	〃	〃
4	17－2	土師器	内黒坏	P 1	推13.4	6.2	4.9		にぶい橙		口縁部～底部
5	3	甘焼き須恵器	坏	かまど支脚	1414.4	6.0	4.7～4.8		灰白	砂少量混入	〃
6	18－7	土師質土器	小型カメ	〃		推 7.0	推 5.0	体部頸推12.8	赤橙	砂混入	底部
7	17－1	須恵器	大型壺	床面		10.4	残14.2	体部径推14.9	灰	〃	体部～底部

鉄　器

実測図番号	写真番号	器種名	出土遺構層	最大長	最大巾	最大厚	重量	材質	備考
46－2	21－9	?	床面	3.9cm	cm 0.5～0.8	cm 約0.2内外	円形	不良	風化している
3	〃	?	〃	3.25	0.3～0.6	0.3内外	〃	〃	〃



1　砥石　　2～4　鉄器類
2、3　JG03住居跡　1、4　JI50住居跡

第46図　ＪG03住居跡出土遺物実測図(2)
および　ＪＩ50住居跡出土遺物実測図(1)

〔**出土遺物**〕　（第45、46図、第17表、写真17－１～５、18－７、・11、19－３、20－６、21－９）

住居跡内の主な遺物は第45図および第46図２、３に掲げる通りである。

（焼物類）　長胴カメ類　第45図１～３は長胴カメ類であるがいずれもＣ群II類に属する資料である。そのうち、１はII－２a_1類、２はII－１類、３はII－２a_2類にそれぞれ入れられるもので、１と３はかまど焚口部周辺から、２はかまど東壁体内かそれぞれ出土している。

小型カメ、坏類　６はＢ群III類下半部の破片資料であるが、底部に籾の圧痕が残っている。４、５は坏類である。そのうち、４はＡ群Ｉ－1a類５はIV群II類に入れられる資料であるが、焼きが甘く底部の糸切り痕の渦の中心部が、他の多くの例と異なり、底面の中央に偏っている。いずれもかまど火床部に支脚として用いられたものである。

〔**鉄器**〕　第46図、２、３の釘状の鉄製品はかまど焚口部の西方床面から出土したもので、いずれも性格不明である。

ＪＩ50住居跡　（第46－１、４、47～49図、第18、19表、写真８－１、２、17、19、21）

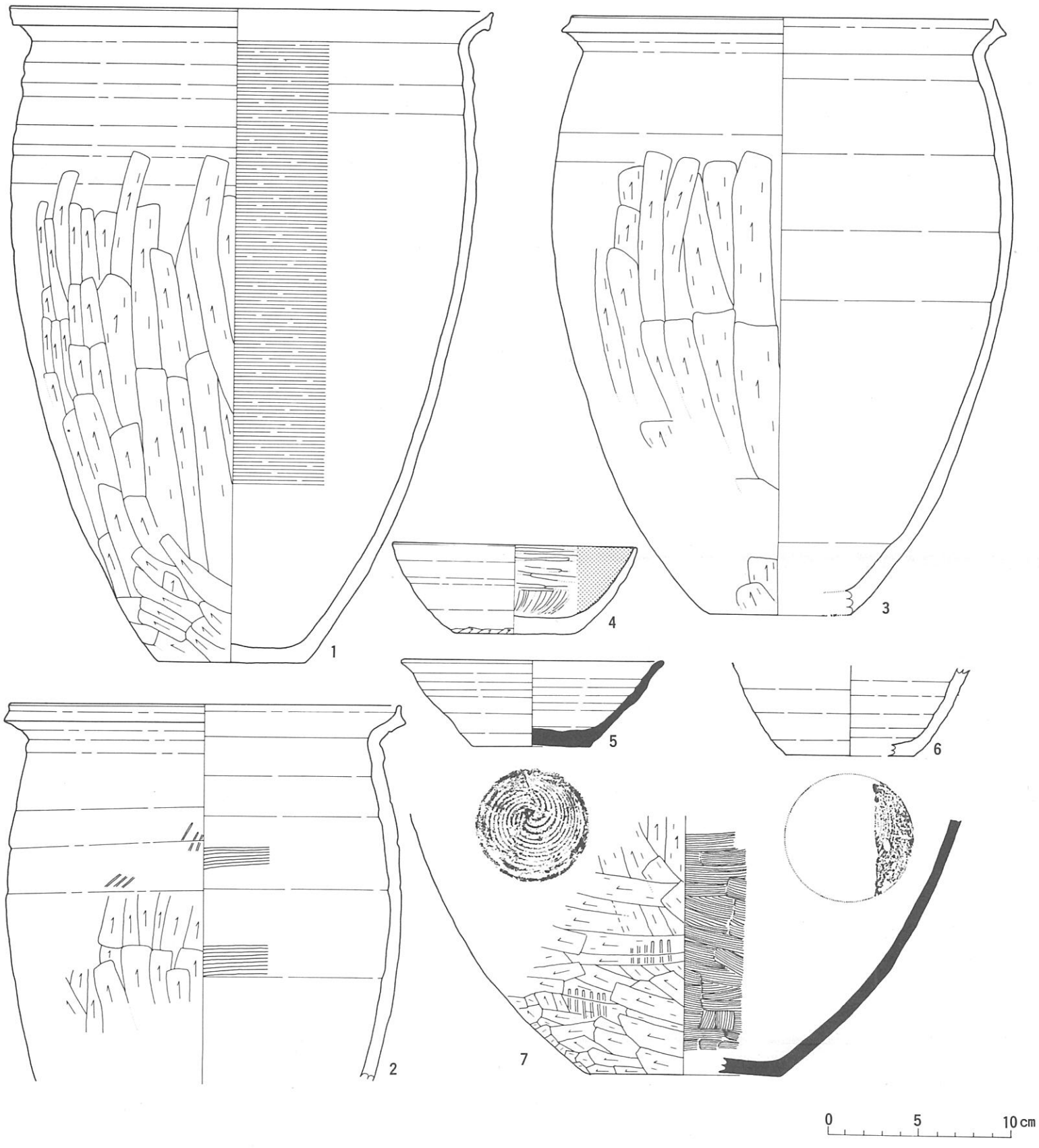
〔**位置**〕　調査区の南方ＪＧ03住居跡の南南東に近接した位置にある。

〔**形状、規模**〕　検出面に一部破壊されているが一辺約 4.0m、検出面からの深さ0.05m内外の平面偶丸方形の竪穴住居跡である。その南北辺は約11°東に偏っている。

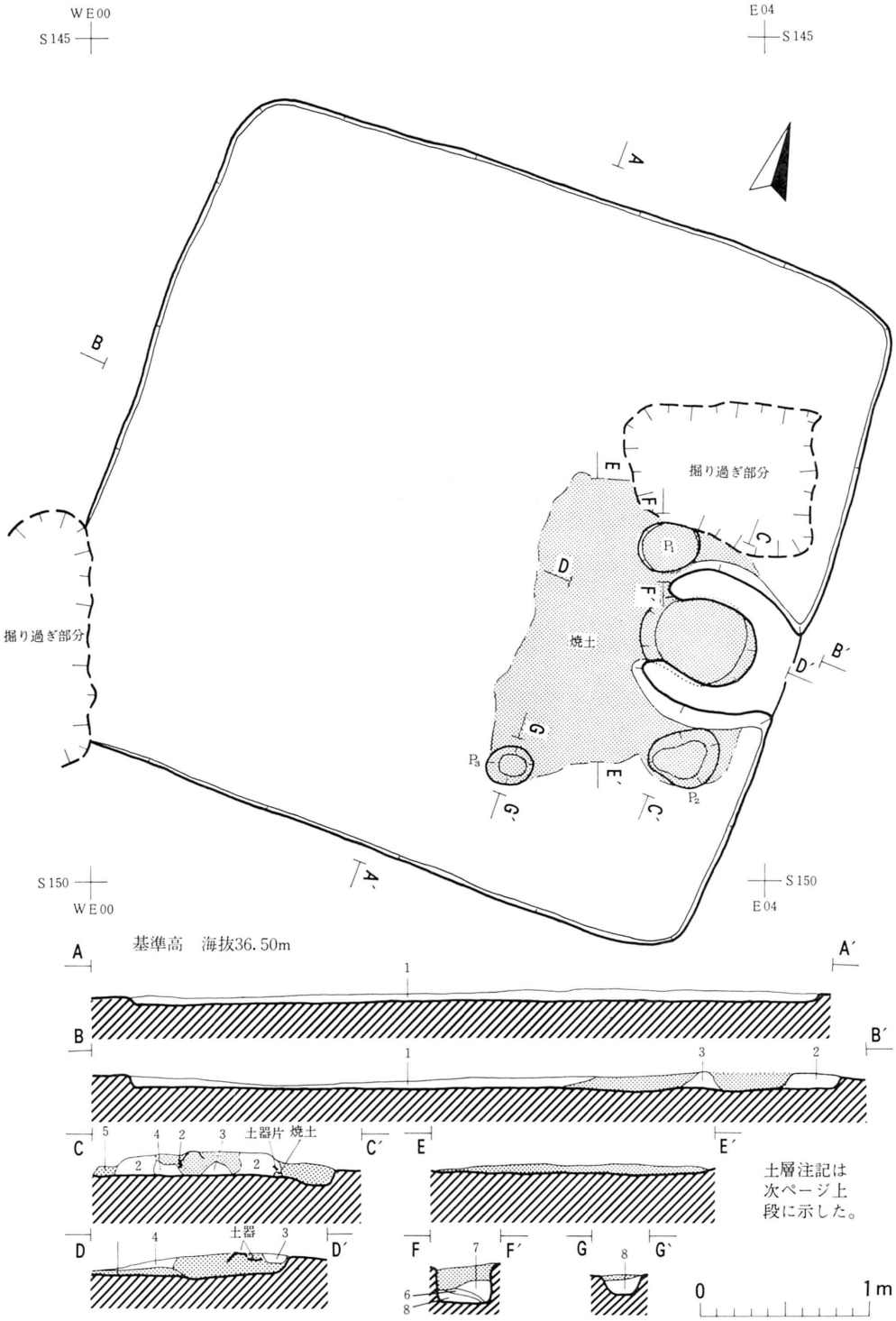
（柱穴）　柱穴に相当するピットは検出されなかった。

〔**付属遺構**〕　住居跡に付属する遺構としては、かまど１とピット３がある。

（かまど）　東壁に接して作られたかまどであるが、全体的に削平が著しく煙道部は失なわれ、



第45図　ＪＧ03住居跡出土遺物実測図(1)



第47図　JI50住居跡平断面実測図

第47図付表　土層注記

層	土色		土性	特徴
1	褐	Hue10YR4/6	シルト	ほとんど粘性なく、植生根がわずかに含まれている。
2	〃	〃	〃	焼土を少量含んでいるが、3より少ない。
3	〃	〃	〃	焼土を少量含んでいる。
4	〃	〃	〃	混入物がほとんどない。
5	赤褐	Hue2.5YR5/8	シルト質焼土	焼土を主体とした土。
6	褐	Hue10YR4/6	シルト	混入物ほとんどなし。
7	〃	〃	〃	6と同質の土にブロック状の焼土と灰混りの土が混入している。
8	〃	〃	〃	ごく微量の焼土が含まれている。

壁体の基部と火床部のみ残存している。その規模は最大巾約1.0 m、長さ約0.9 mを測り、火床部から焚口部周辺の床面にかけて焼土層が広がっている。この焼土層は南北1.9 m前後、東西1.5 m前後、床面上で0.05m前後の厚さを測る。

なお、火床部は長径0.7 m、短径0.5 m前後、深さ0.04m未満の浅い皿状の陥ち込みになっているが、その中央部には支脚として用いられたと思われる土師器の坏一個体分が倒立状態でつぶれていた。

（ピット類）　かまどの周辺部からは最大径0.42m未満の平面ないし不整円形小型ピットがが3つ発見されている。そのうちP_1、P_2はかまどのわきに位置し灰捨て穴と考えられる。P_3は性格がよくわからない。

第18表　J I 50住居跡付属ピット一覧表

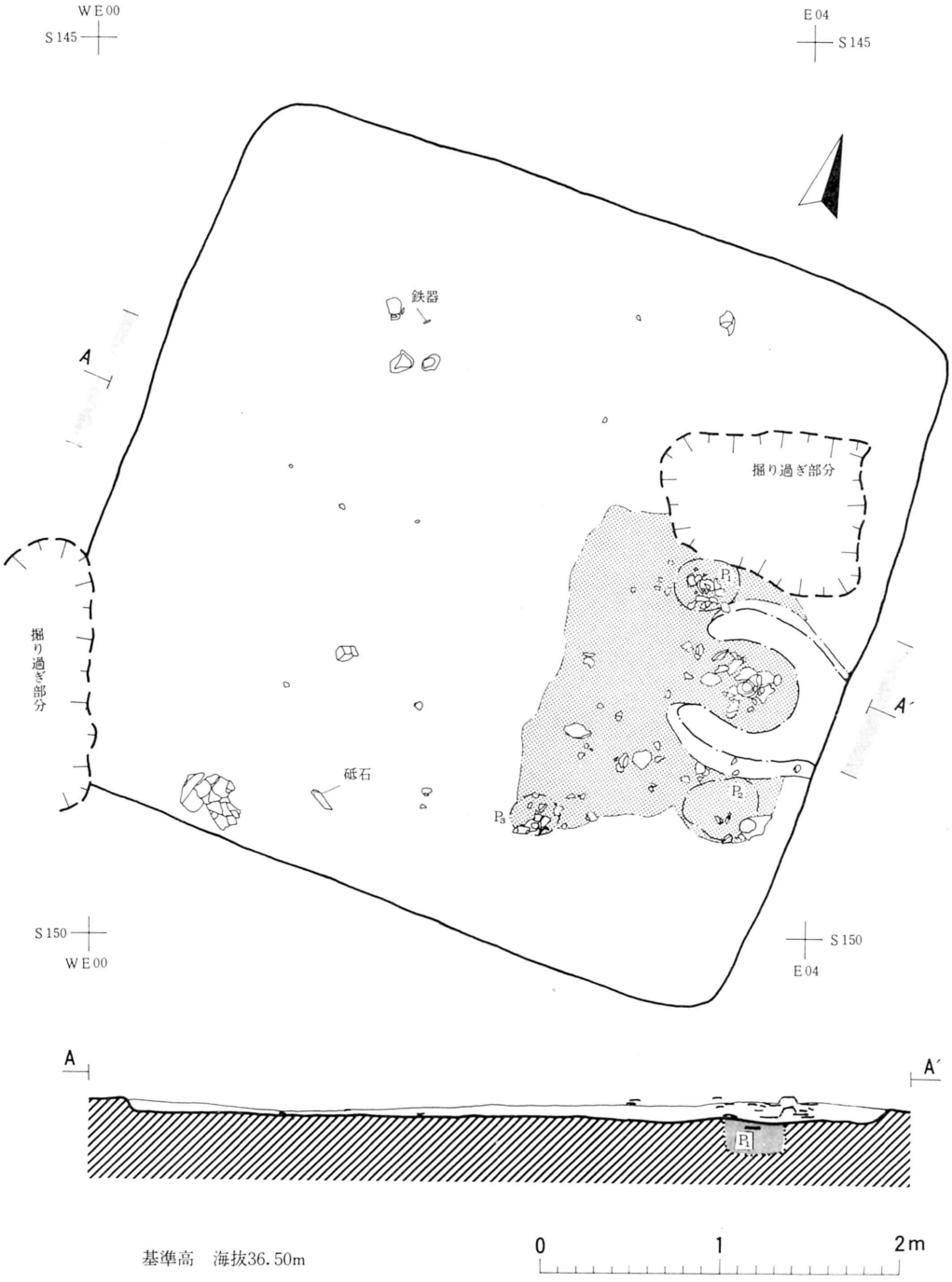
ピット名	平面形	断面形	平面規模(m)	深さ(m)	埋土状況	出土遺物
P_1	円形	円筒形	0.38×0.3	0.22	焼土層、褐色土など	焼物類
P_2	不整円形	〃	0.42×0.32	0.1	〃	〃
P_3	楕円形	鍋底形	0.28×0.22	0.12	〃	〃

〔埋土〕　かまど部やピットを除く住居跡の主要埋土は周辺部の地山層と同質同色の褐色シルトである。そのため、遺構の範囲は都部分不明瞭である。

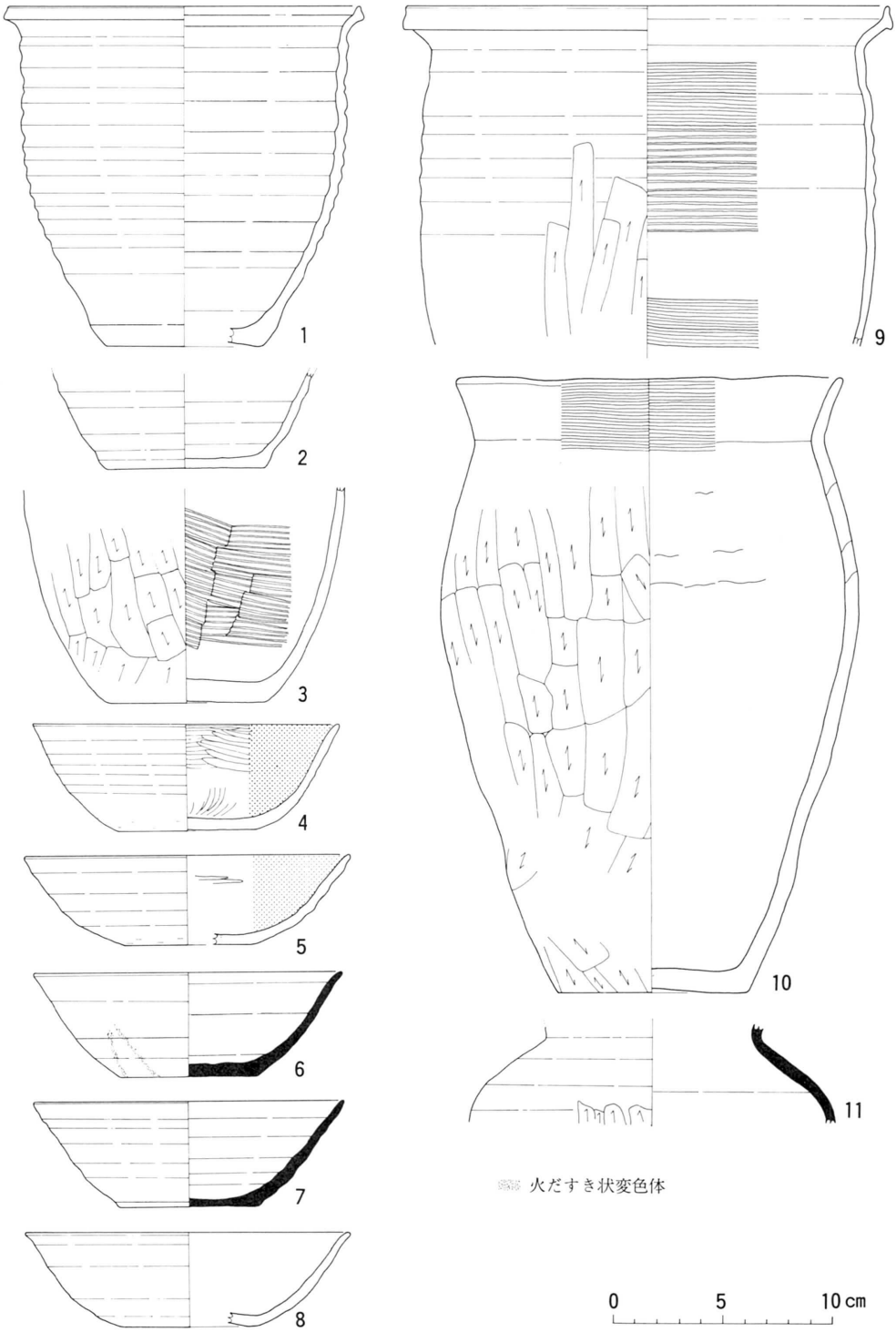
〔遺物出土状況〕　遺物はかまどとその周辺部を中心に床を被う埋土の各所から出土しているが、P_1～P_3の各ピットからも若干出土している。大部分は土器類の破片であるが、他に南側床面から砥石が1点北側床面からは鉄器が1点それぞれ発見されている。

〔遺物〕　（第46－1・4、49図、第19表、写真17－6～9、19－7、21－10）

出土遺物のうち比較的形状のよく知られるものを一括して第46、49図に図示した。



第48図　JI50住居跡遺物出土状況平断面図



第49図　JI50住居跡出土遺物実測図(2)

（焼物類）　小型カメ類　第49図１～３は小型カメ類の破片である。そのうち１、２はＢ群Ⅲ類、３はⅡ－1a類のそれぞれ破片資料である。

坏、壺類　４～８は坏類でありそのうち４はＡ群Ⅰ－2a類、５はⅠ－2a類に入るがいずれも全体的に磨滅が著しい。６、７はⅣ－２類に属する坏であるが６の体部下半には暗褐色の火だすき状の線形変色帯が見られる。８はⅢ－１類の破片資料である。11はＦ群Ⅱ－４類に分類される小型壺である。

（石器）　石器としては第46図１に示す様なにぶい褐色の凝灰岩製の砥石一個がある。この砥石は四角柱状の角礫を素材とし最低４面の研磨面を有している。

（鉄器）　鉄器としては第46図４に示す様な細長い板状の鉄製品が一点出土している。おそらく刀子柄の部分であろう。

第19表　Ｊ１５０住居跡出土遺物一覧表

焼　物

実測図番号	写真番号	焼成による分類	器種名	出土遺構層	口径	底径	器高	その他の法量値	外壁色調	胎土の状況	残存部位
49－1	—	須恵質土器	小型カメ	床面	推16.0cm	7.0 cm	15.5cm	体部径推14.8cm	灰白	砂混入	口縁部～底部
2	—	土師質土器	小型カメ	床面		推 7.2	推 4.2	体部径推 5.8	灰白～にぶい褐	砂混入	底部
3	17－6	土師器	小型カメ	かまど		6.6	9 9 6	体部径残推14.6	にぶい褐 褐	砂混入	体部、底部
4	7	土師器	内黒坏	かまど	14	6.0	4.8~5.0		にぶい橙	細砂微量混入	口縁部～底部
5	16－11	土師器	内黒坏	Ｊ１－53住床埋土	推14.8	推 5.8	4.1		にぶい黄橙	砂少量混入	口縁部～底部
6	16－12	須恵器	坏	〃	推13.7	6.0	4.6~4.8		灰白	砂少量混入	口縁部～底部
7	17－9	須恵器	坏	かまど	推14.2	6.4	4.8		緑灰	砂混入	口縁部～底部
8	9	須恵器?	坏	床面	推14.8	推 6.3	4.3		黄白	砂混入	口縁部～底部
9	—	土師質土器	長胴カメ	床面	22.0		推15.8	体部径推20.9	浅黄橙	砂混入	口縁部～体部
10	—	土師器	長胴カメ	床面	推17.6	推 8.6	推27.9	頸部径推14.9 体部径推19.0	にぶい黄橙	砂混入	口縁部～底部
11	—	須恵器	小型つぼ	床面			推 4.5	頸部径推 5.0 体部径推16.8	灰	砂混入	体部

石　器

実測図番号	写真番号	器種名	出土遺構層	最大長	最大巾	最大径	重量	材質	備考
46－1	19－7	砥石	床面	15.7cm	4.1cm	3.7cm	350g	淡緑色細粒凝灰岩	研磨面４面（若干の差あるが４面共擦痕あり）

鉄　器

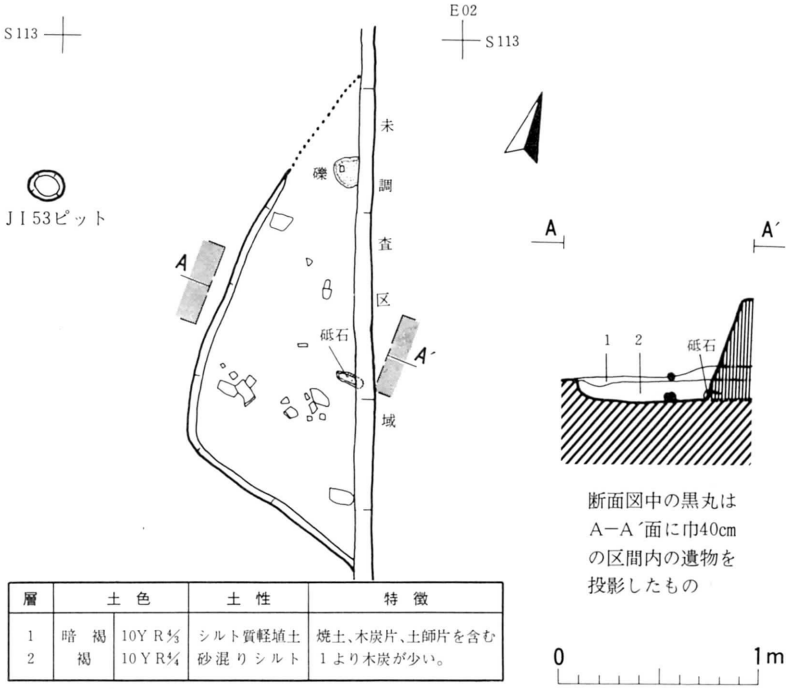
実測図番号	写真番号	器種名	出土遺構層	最大長	最大巾	最大厚	横断面形	保存状況	備考
46－4	21－10	釘？	床面	3.9cm	0.5～0.8cm	0.4内外cm	方形	不良	

Ｊ１53住居跡　（第50、51図、第20表、写真８－３、16、19）

〔位置〕　調査区の南方にあり、ＪＧ03住居跡、ＪＩ50住居跡の東方に位置している。

〔**形状、規模**〕　遺構の大半が調査区域外にあるため、その全形は不明であるが、検出部分で南北約2.5ｍ、東西約0.9ｍ、検出面からの深さ0.12m内外を測る。一辺２ｍ以上の隅丸方形の竪穴住居跡と思われる。

〔**埋土**〕　炭化物の少量混った暗褐色のシルト質軽埴土と褐色のシルトの上下二層よりなる。



層	土色		土性	特徴
1	暗褐	10Y R 5/3	シルト質軽埴土	焼土、木炭片、土師片を含む
2	褐	10Y R 5/4	砂混りシルト	1より木炭が少い。

第50図　ＪＩ53住居跡平断面実測図

〔**遺物出土状況**〕　遺物は主として上層の埋土中から分散した形で出土している。遺物の大半は土師器の破片であるが、砥石や礫も見られる。

〔**遺物**〕　（第51図、第20表、写真16−11・12、19−４）

（焼物類）　遺物としては、接合不能のＣ群II類相当の破片やＡ群Ｉ類相当の破片が見られる。

（石器類）　その他に、第51図に掲げる様な緑色凝灰岩製の砥石一点が出土している。この砥石は四角柱状の角礫の３面に研磨面を有するものである。

第20表　ＪＩ５３住居跡出土遺物一覧表

石　器

実測図番号	写真番号	器種名	出土遺構層	最大長	最大巾	最大厚	重　量	材　質	備　考
51−１	19−４	砥　石	ＪＩ53住	12.6cm	3.4cm	3.15cm	148g	淡緑色細粒凝灰岩	〃　３面（３面共擦痕あり）

（ｂ）やや大型のピット

ＥＩ50ピット　（第14、15、62図、写真９−５、22）

〔**位置**〕　調査区中央部北寄りの東辺部に位置し、ＥＪ53住居跡と隣接している。

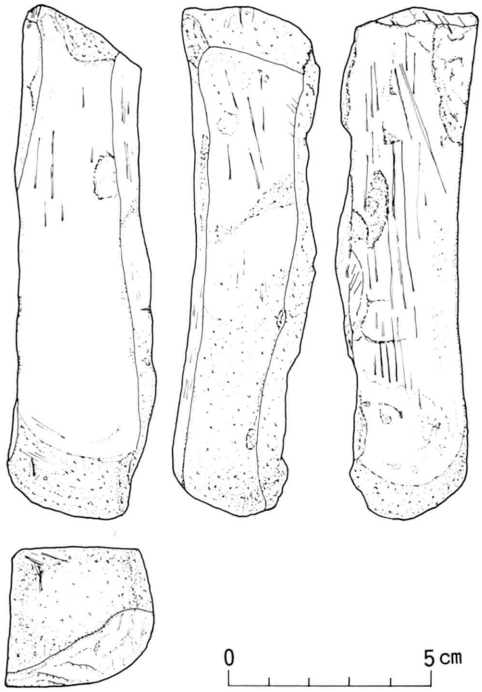
〔**重複関係**〕　東辺部がＥＪ53住居跡と不明瞭な形で続いていたが、出土遺物から、明らかに

ＥＪ50ピットの方が古い事が判明した。

〔**規模、形状**〕　隅丸の不整五形状の浅い舟底状ピットである。ピット内には、最底２～３のテラス状の平坦～緩斜面が認められるが、最深部は中央の不整隅丸五～六角形の部分で、検出面より0.32～0.4ｍを測る。他の浅い部分では0.08～0.15ｍを測る。

ピット全体の規模は、南々東－北々西方向で最大長約4.5ｍ、東北東－西南西方向で最大約3.2ｍを測り、最深部分の規模は上記と同一方向にそれぞれ、約3.8ｍ、約2.5ｍを測る。

〔**埋土**〕　埋土は暗褐色の砂質壌土ないし軽埴土の単層である。この層は場所によって幾分砂の混入量が異なっているが、層的な区別は困難であった。



第51図　JI53住居跡出土遺物実測図

〔**遺物出土状況**〕　遺構の埋土中からは、磨滅した古代の焼物の破片が計10点前後と近世以降の陶器類破片６点が、各々混在した形で出土している。以上の他にも礫や木炭片が２～３出土している。いずれの遺物も、ピットそれ自体に付随した形ではなく、ピットが埋没する過程で混入堆積した様相を呈している。

〔**遺物**〕　（第62図３～４、第24表、写真22－６）

木炭や礫を除く人工遺物は、いずれも焼物類の細片であるが、古代のものとしてはＡ群Ｉ、II類、Ｂ、Ｃ類、Ｆ類の口辺ないし体部の破片が見られる。また、近世以降の陶器類としては第62図に掲げた様な暗褐色の摺鉢の体部や底部破片が見られる他、４や５に掲げた上釉塗りの陶器類も見られる。（４、５の遺物についての詳細は近世以降の遺物の項を参照）

（ｃ）中型のピット類

ＢＪ06ピット　（第52～54図、第21表、写真９－２、10－３、16－13～17）

〔**位置**〕　調査区北部のＢ区とＣ区の境界部付近の西辺に位置している。

〔**重複関係**〕　ＢＪ06構に切られている。

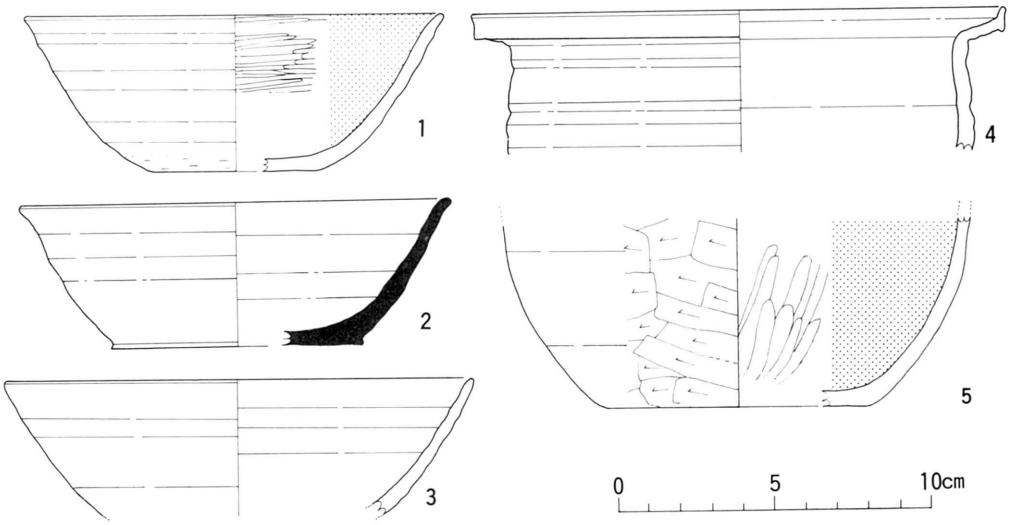
〔**形状、規模**〕　長径1.28ｍ、短径1.08ｍ、検出面よりの深さ0.12ｍ内外の平面不整円形の浅い皿状ピットである。

〔**埋土**〕　埋土は焼土の混った褐色のシルト質壌土などの上層土と炭化物と焼土の混合した黒

褐色の下層土からなる。

〔**遺物出土状況**〕　上記の１、２層中からは分散した形で、礫と多数の古代の焼物類の破片が出土している。その中には全形修復可能な資料はないが、概して大きな破片が多く、しかもあまり磨滅していないものが見られる。以上の事実から、焼物類がこの遺構に伴なうものである事が予想された。

〔**出土遺物**〕　（第54図、第21表、写真16－13～17）



第54図　BJ 06ピット出土遺物実測図

第21表　ＢＪ０６ピット出土遺物一覧表

焼　物

実測図番号	写真番号	焼成による分類	器種名	出土遺構層	口径	底径	器高	その他の法量値	外壁色調	胎土の状況	残存部位
54－1	16－14	土師器	内黒坏	ＢＪ06ピット	推13.4cm	5.0cm	5.0cm	cm	橙	砂混入	口縁部～底部
3	16－13	須恵器	坏	ＢＪ06ピット	推15.0	推8.4	残推4.4	体部径残 9.4	オリーブ灰	砂混入	口縁部～体部
4	—	土師質～須恵質土器	小型カメ	ＢＪ06ピット	推17.0	—	残推4.4	体部径推残14.9	浅黄橙	〃	口縁部
5	—	土師器	内黒小型カメ	ＢＪ06ピット	推14.8	推8.4	残推6.0		浅黄橙＋黒	〃	体部～底部
2		須恵器	坏	ＢＪ06ピット	推13.8	推8.0	推4.6		灰	砂少量混入	口縁部～底部

出土遺物のうち、ある程度形状の判明するものを第54図に図示した。

（焼物類）　坏類　1～3はA群の坏類であるが、そのうち1はⅠ－2a類である。磨滅しているため、ヘラ削り痕が不明瞭になっている。2はⅣ－2類であり、3はⅢ－1類であると思われるが底部の欠落した資料である。

小型カメ類　以上の坏類の他、4、5の様な小型カメ類の破片と思しき破片も出土している。そのうち、4はB群Ⅲ－1類の上半部破片である。5は全体の形状からして、おそらくB群のⅠ－1～2類に含まれる小型カメ類の下半部破片であろう。

CA06ピット　（第52、53図、写真10－3）

〔位置〕　調査区北部B区とC区の境界部付近のやや西寄りに位置している。

〔重複関係〕　BJ06溝に切られている。

〔形状、規模〕　南東－北西方向に長い楕円形状の浅い皿状ピットと思われる。ただし、その北西部がBJ06溝に切られているので、正確な形状は不明である。残存部で長径約1.4m、短径1.0m、検出面からの深さ0.08m内外を測る。

〔埋土〕　埋土は黒褐色と黒色の混合した炭化物混りのシルト質の軽埴土の単層である。

〔遺物出土状況〕　ピットの中央部付近の埋土下層から床面にかけて、分散した状態で5点の土師器の細片が出土している。ピットに伴なうものか否かは資料不足で確認できなかった。

〔出土遺物〕　出土したのは土師器の長胴カメ類の体部細片であるが、接合不能であった。

EB03ピット　（第55図、写真9－3）

〔位置〕　調査区全体のやや北寄りのE区北端部の中央に位置している。

〔形状、規模〕　平面が北西－南東方向に長いやや不整な長楕円形状の舟底形ピットである。その規模は検出面で長径2.28m、短径0.8m内外、検出面からの深さ0.2m内外を測る。

〔埋土〕　ピット内の埋土は色調や成分を幾分異にする焼土層と暗褐色のシルト質軽埴土層の2層群からなる。

〔遺物出土状況〕　遺物は主として焼土層中から分散した形で合計13点出土している。

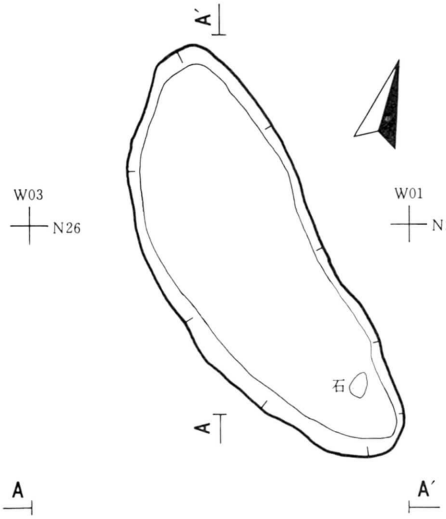
〔遺物〕　出土遺物は、すべてA群Ⅰ類、C群Ⅱ類、F群Ⅲ類などに含まれる土師器、須恵器の細片である。

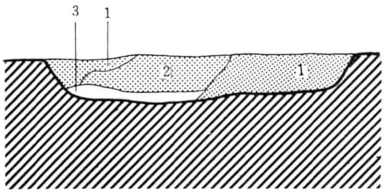
EC53ピット　（第55図、写真9－1）

〔位置〕　調査区全体のやや北寄り、EB03ピットの南東方向に位置している。

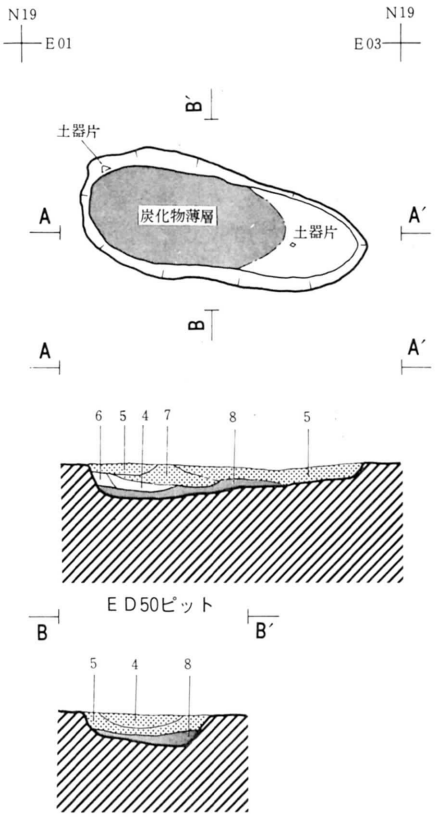
〔形状、規模〕　検出面上で直径0.9～1.04m、検出面からの深さ0.3m内外を測る、平面円形の鍋底状ピットである。

〔埋土〕　埋土は煤混りの黒褐色焼土や暗褐色～褐色のシルトや砂土層よりなるが、そのうちの10層から12、13層にかけて直径0.3m、厚さ0.1m内外の円板状の塊状焼土が平置されてあ

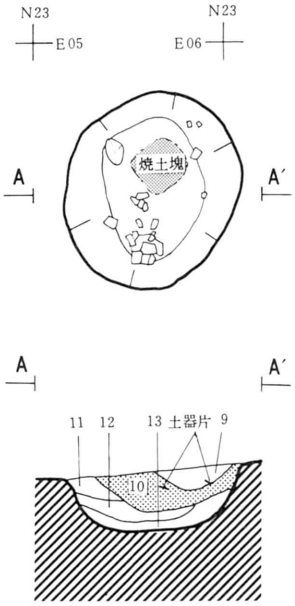




ＥＢ03ピット



ＥＤ50ピット



ＥＣ53ピット

層	土色		土性	特徴
1	暗赤褐	Hue 5 YR3/3	シルト質焼土	粘性なく、焼土塊を多く含んでいる
2	〃	Hue 5 YR3/2	シルト質焼土	焼土と炭粒を少量含んでいる。
3	暗褐	Hue7.5YR3/4	シルト質軽埴土	焼土塊を少し含んでいる。
4	暗赤褐	Hue 5 YR3/3	シルト質焼土	焼土塊を多く含んでいる。
5	〃	Hue 5 YR3/2	シルト質焼土	炭粒や焼土塊を多く含み、5より粘りがある。
6	褐	Hue7.5YR4/4	シルト質砂土	炭粒を少量含んでいる。
7	黒褐	Hue7.5YR3/2	シルト質軽埴土	2よりやや粘り強く、焼土や炭粒を多く含んでいる。
8	暗褐	Hue7.5YR3/3	シルト質軽埴土	炭をやや多量に含んでいる。
9	〃	Hue7.5YR3/4	シルト質砂土	焼土が少量含まれている。
10	黒褐	Hue7.5YR3/2	シルト質焼土	多量の煤が混入している。
11	褐	Hue10YR4/3	砂土	少数の小石が混入している。
12	暗褐	Hue7.5YR3/4	砂土	焼土が少量含まれている。
13	〃	Hue7.5YR3/3	砂土	混入物なし。

基準高　海抜37.50m

0　1　2cm

第55図　E区各ピット平断面実測図

った。

〔**遺物出土状況**〕　遺物は焼土層を中心とする各層から出土しているが、特に南側に集中する傾向が見られた。

〔**遺物**〕　遺物は18点あるが、全てＢ、Ｃ群などに相当する焼物類の細片である。

ＥＤ50ピット　（第55図、写真９－４）

〔**位置**〕　調査区全体のやや北寄り、ＥＢ03ピットの南東方向に位置している。

〔**形状、規模**〕　検出面上で、長径1.5m、短径0.66ｍ、検出面からの最大深約0.2ｍを測るピットの底部は、東北東方向で浅くなる。平面が西南西－東南東方向に長い長楕円形の舟底状ピットである。

〔**埋土**〕　ピット内の埋土は上層をなす２段の焼土層をなす炭化物層よりなる。

〔**出土遺物**〕　遺物として５の焼土層中からＡ群相当の土師器の破片２点が出土している。

ＦＣ06ピット　（第21、22図、写真４－１、９－７）

〔**位置**〕　調査区中央部のやや西寄りに位置している。

〔**重複関係**〕　ＦＣ09住居跡の北東部に西半部が切られている。

〔**規模、形状**〕　口径1.6m、底径1.2m内外、住居跡検出面よりの深さ0.5m内外の浅い筒形ピットである。

〔**埋土**〕　ピット中の埋土は砂質ないしシルト質の軽埴土を主体とした３～４層で被われている。それらの土層の中には焼土や炭化物を含むものもあるが、全体として自然堆積の様相を呈している。最上部を被う２層はＦＣ09住居跡の周辺に広がる地山の土層土と同質同色で、このピットがＦＣ09住居跡の構築以前に埋没した様子を示している。

〔**遺物出土状況**〕　遺物としては古代の焼物類の破片が各埋土に混って少数出土している。

〔**遺物**〕　調査後、最下層部出土の遺物以外所在不明なので詳細はわからないが種類としてはＡ群Ｉ類、Ｂ群、Ｃ群などに相当する器形が認められる。

ＩＪ03ピット　（第56図、写真９－６、10－１）

〔**位置**〕　調査区南方のＩ区南端部に位置し、ＩＪ06ピット（１）の東側に位置している。

〔**重複関係**〕　ＩＪ03溝とＩＡ06溝の両溝と重複している。そのうち、埋土の堆積状況の観察からＪＡ03溝はこのピットより新しい事がわかった。ＩＪ03溝との関係は、埋土の関係から、ＩＪ03溝が幾分新しい様にも思われたが、調査時点では充分な確認ができなかった。

〔**形状、規模**〕　直径1.36m内外、検出面からの深さ0.48m内外の、浅い円筒状ピットである。

〔**埋土**〕　ピット内の埋土は３層よりなる。そのうち、最上層はＩＪ03溝と共通する褐色のシルト質軽埴土であるが、炭化物の混入量はＩＪ03溝よりも幾分少ない。中層は草灰と木炭末の混合層で黒色を呈し、主としてピットの西半分に分布している。最下層は暗褐色のシルト質軽埴土層

で、その底に、長さ0.26m、巾0.18m、厚さ0.08m内外の直方体状の礫が一個横たわっていた。

〔**遺物出土状況**〕　埋土２、４層中から、焼物の破片が合計３点、分散した形で出土している。

ＩＪ06ピット（１）　（第56図、写真10－１）

〔**位置**〕　調査区南方のＩ区南端に位置し、すぐ北西部にはＩＨ06住居跡があり、南側にはＪＡ06溝やＩＪ06ピット（２）、東側には、ＩＪ03ピットがそれぞれ位置している。

〔**形状、規模**〕　直径1.3～1.44m、検出面からの深さ0.2m内外のやや歪んだ円形の皿状ピットである。

〔**埋土**〕　炭化物の少量混入した褐色のシルト質軽埴土の単層よりなる。

〔**遺物出土状況**〕　埋土中からは古代の焼物細片が４片、分散して出土している。

〔**遺物**〕　出土した焼物はいずれもＡ群Ⅰ、Ⅱ類の口辺及び体部細片である。

ＩＪ06ピット（２）　（第56図、写真10－１）

〔**位置**〕　調査区南方のＩ区南端に位置し、ＩＪ06ピット(1)のすぐ南方に位置している。

〔**重複関係**〕　ＪＡ06溝と重複しているが、埋土が同じで新旧関係は不明である。

〔**形状、規模**〕　長径約1.8m、短径0.9m、検出面からの深さ0.16m内外の平面楕円形の浅い皿状ピットである。

〔**埋土**〕　埋土は少量の炭化物の混入したやや粘りの強い黒褐色のシルト質軽埴土の単層よりなる。埋土中にはおとなのこぶし大の礫が２個混入していた。

〔**遺物**〕　人工遺物は発見されなかった。

ＪＨ03ピット　（第43、44図、写真９－９）

〔**位置**〕　調査区南方部、ＪＧ03住居跡の西側に位置している。

〔**形状、規模**〕　最大径0.84m、検出面からの最大深0.13mの平面不整円形の皿状ピットである。

〔**埋土**〕　埋土はＪＧ03住居跡の床の埋土層１と同じ炭化物を微量に混えた褐色のシルトである。

〔**遺物出土状況**〕　埋土中からは、土師器の破片が３点出土している。

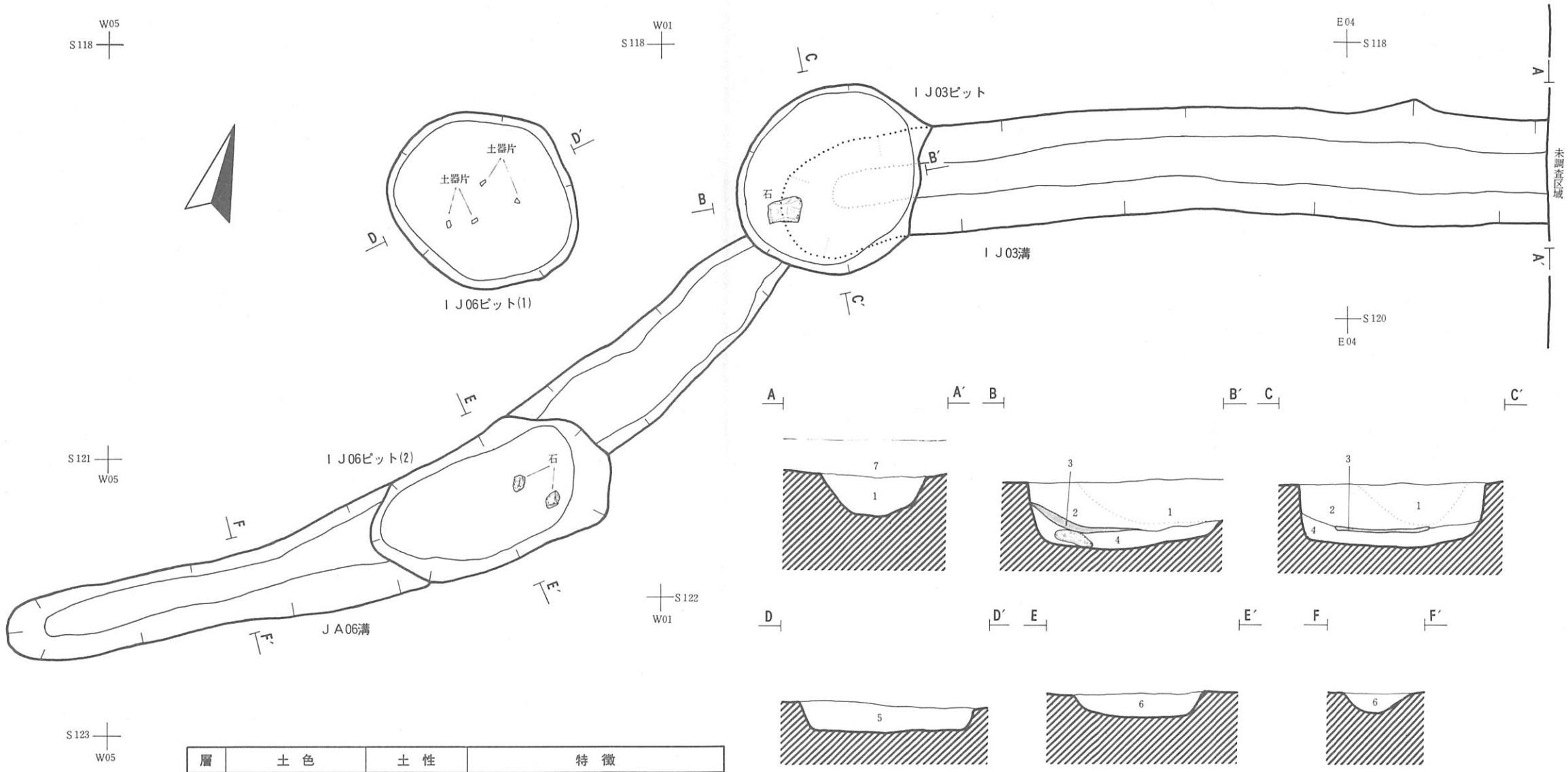
〔**遺物**〕　出土した土師器はＣ群Ⅰ類ないしⅡ類の胴体部細片である。

（ｄ）小型のピット類

ＪＩ53ピット　（第50図）

〔**位置**〕　調査区の南方にありＪＩ53住居跡の西方に１ｍほど離れた位置にある。

〔**形状、規模**〕　直径0.18m内外、検出面からの深さ0.15mほどの円筒状ピットである。柱穴の一種と思われるが、調査された範囲内ではＪＩ53住居跡その他の遺構との関連性を確認できなかった。



層	土色		土性	特徴
1	褐	Hue7.5YR3/4	シルト質軽埴土	炭化物少量含む。
2	〃	〃	〃	1とほぼ同質であるが、炭化物が少ない。
3	黒	Hue7.5YR2/1	炭化物	草炭に木炭の混入した薄層。
4	暗褐色	Hue10YR3/3	シルト質軽埴土	炭化物を少量含む。
5	褐色	Hue10YR5/4	〃	地山層より幾分暗く、炭化物を少量含む。
6	黒褐色	Hue10YR3/2	〃	やや腐植質を多く含み炭化物を少量含む。

基準高　海抜37.00m

0　1　2m

第56図　IJ03溝・IJ03ピット・IJ06ピット(1)(2)溝平断面実測図

〔**埋土**〕　暗褐色のシルト質埴壌土の単層である。

〔**遺物**〕　発見されていない。

ＭＤ50グリッド及びＭＥ50グリッド内のピット群　（第57～59図、第22～23表、写真９、19）

〔**位置**〕　調査区南端部に集中している。

〔**検出面**〕　この付近では土層が地下約0.5ｍ付近まで耕作による攪乱を受けており、MD505ピット以外、いずれも地下約0.5ｍ付近で検出されている。これらのピットはいずれも、ＭＤ505ピットは盛土層下の旧地山層中に掘り込まれており、上記各ピットの検出面より、約0.3ｍ下で検出された。

〔**重複**〕　各ピット間の重複は認められない。

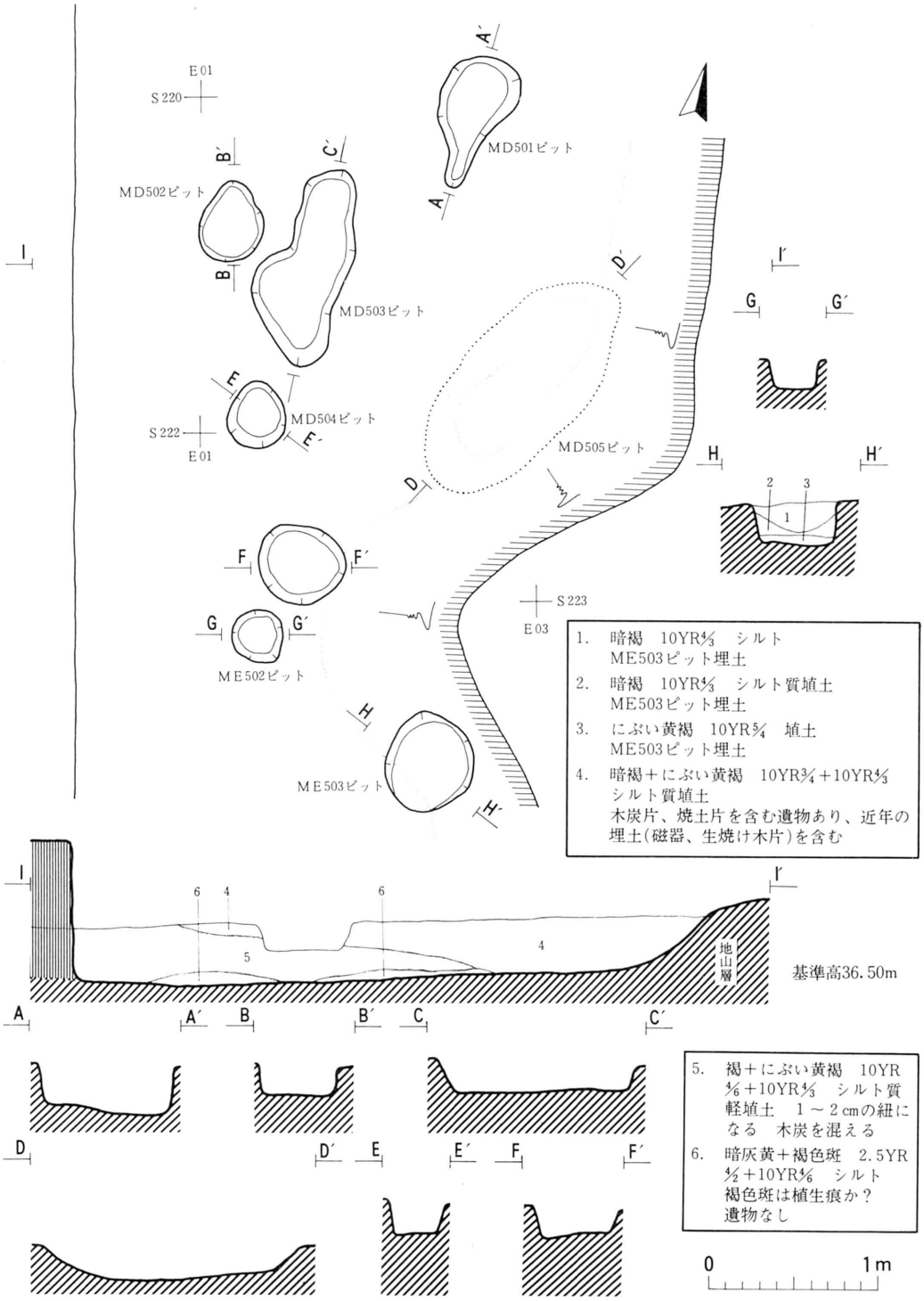
第22表　ＭＤ50・ＭＥ50グリットのピッド一覧表

ピット名	平面形	断面図	平面規模(m)	深さ(m)	最大深(m)	埋土状況	出土遺物
ＭＤ501ピット	不正形	筒形	0.45×0.8	0.45	0.3	暗褐色シルトの単層よりなる	須恵器破片 1
ＭＤ502ピット	円形	〃	0.4 ×0.48	0.45	0.2	〃	なし
ＭＤ503ピット	長円形	舟底形	0.5 ×1.2	0.45	0.22	〃	なし
ＭＤ504ピット	円形	筒形	0.35×0.4	0.45	0.24	〃	なし
ＭＤ505ピット	長円形	舟底形	0.75×1.55	0.75	0.2	〃	なし
ＭＥ501ピット	円形	筒形	0.45×0.5	0.5	0.22	〃	なし
ＭＥ502ピット	〃	〃	0.3 ×0.3	0.55	0.2	〃	なし
ＭＥ503ピット	〃	〃	0.52×0.6	0.5	0.25	暗褐色シルト、暗褐色シルト質埴土にぶい黄褐色埴土の3層からなる	砥石状礫片 1

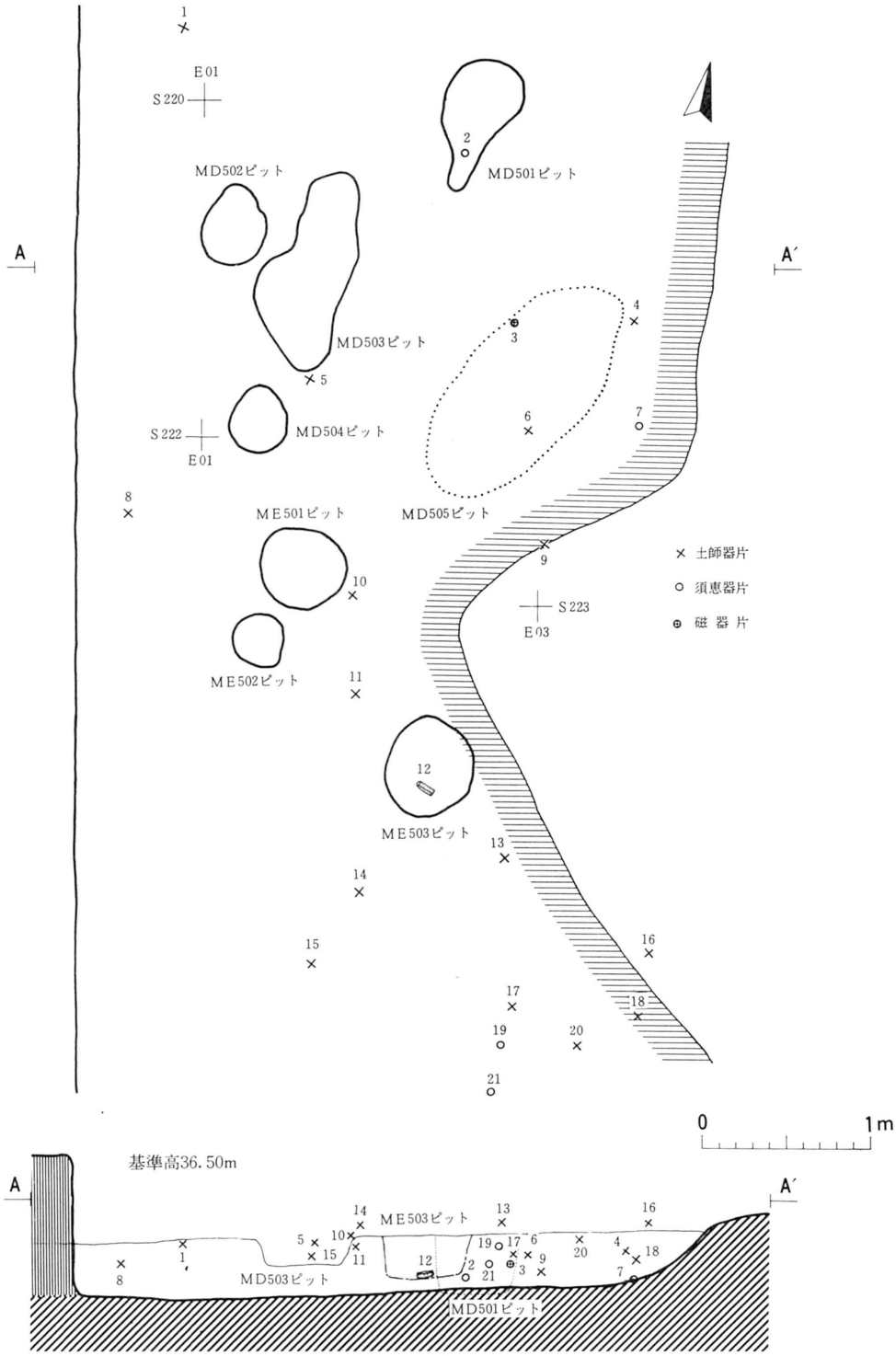
〔**形状、規模**〕　発見されたピットは全部で８あるが、その形状や規模は第57図、第22表に示した通りである。以上の図表からもわかる様に形状や規模に若干の差が見られるものの、いずれも検出面で、最大径1.2ｍ、検出面からの深さ0.3ｍ内外の小型ピットである。それに対して、ＭＤ505ピットは、ピット自体の深さは他のピットと同じであるが、規模は、長径1.54ｍ短径0.76ｍとやや大きい。

〔**埋土**〕　ピット内の埋土は第22表にも示した様にＭＥ503ピットの埋土は３層の埋土よりなる。他はいずれも単層である。そのうち、ＭＤ505ピットは第57図の４層と同じ土で埋められている。その他の各ピットは、すべて、1層と同じ暗褐色のシルト質軽埴土層で埋められている。

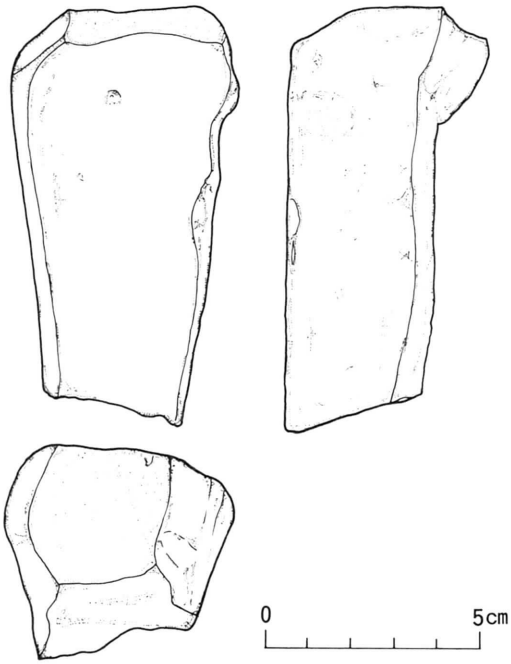
〔**遺物出土状況**〕　各ピット及びその周辺部の遺物出土状況は第58図に示した通りである。図からもわかる様に、ピット内からの遺物の出たのはＭＤ501ピットとＭＥ503ピットの２ピットのみである。そのうち、ＭＤ501ピットの埋土中からは須恵器の壺類の破片１個が、またＭＥ



第57図　MD50グリッド付近ピット群平断面図



第58図　MD50グリッド付近の遺物出土状況の平面図・A－A′面投影図



第59図　ME503ピット出土の砥石状石片実測図

503ピットの底面からは砥石状の石片１個がそれぞれ出土している。その他、ピット周辺の埋立盛土中からは、分散混入した形で木片や木炭片、それに、土師器や須恵器、及び近世以降の磁器の各破片が19点出土している。

〔**遺物**〕　（第59図、第23表、写真19－６）

（**焼物類**）　ピット及びその周辺部から出土した20点の焼物類の破片はいずれも胴体部細片である。器形としては、須恵器ではＦ群相当の壺、カメ類、土師器ではＣ群II類の長胴カメ類、磁器では茶碗類がそれぞれ見られる。

（**石器**）　ＭＥ503ピットからは第59図に示した様な一部暗赤褐色をおび珪化した灰色の凝灰岩の砥石状石片が出土している。この石片は、角柱形を呈し、一部に平坦面を有するが、研磨痕が認められないので、果して、人工遺物であるかどうか疑問である。

第23表　ＭＥ５０３ピット内出土遺物一覧表

石　器

実測図番号	写真番号	器種名	出土遺構層	最大長	最大巾	最大厚	重　量	材　質	備　　考
59－１	19-6a、b	砥石？	床　面	9.9cm	5.3cm	4.6cm	250g	細粒凝灰岩	人工品かどうか疑わしい

（ｅ）溝

ＢＪ06溝　（第52、53図、写真10－３・５）

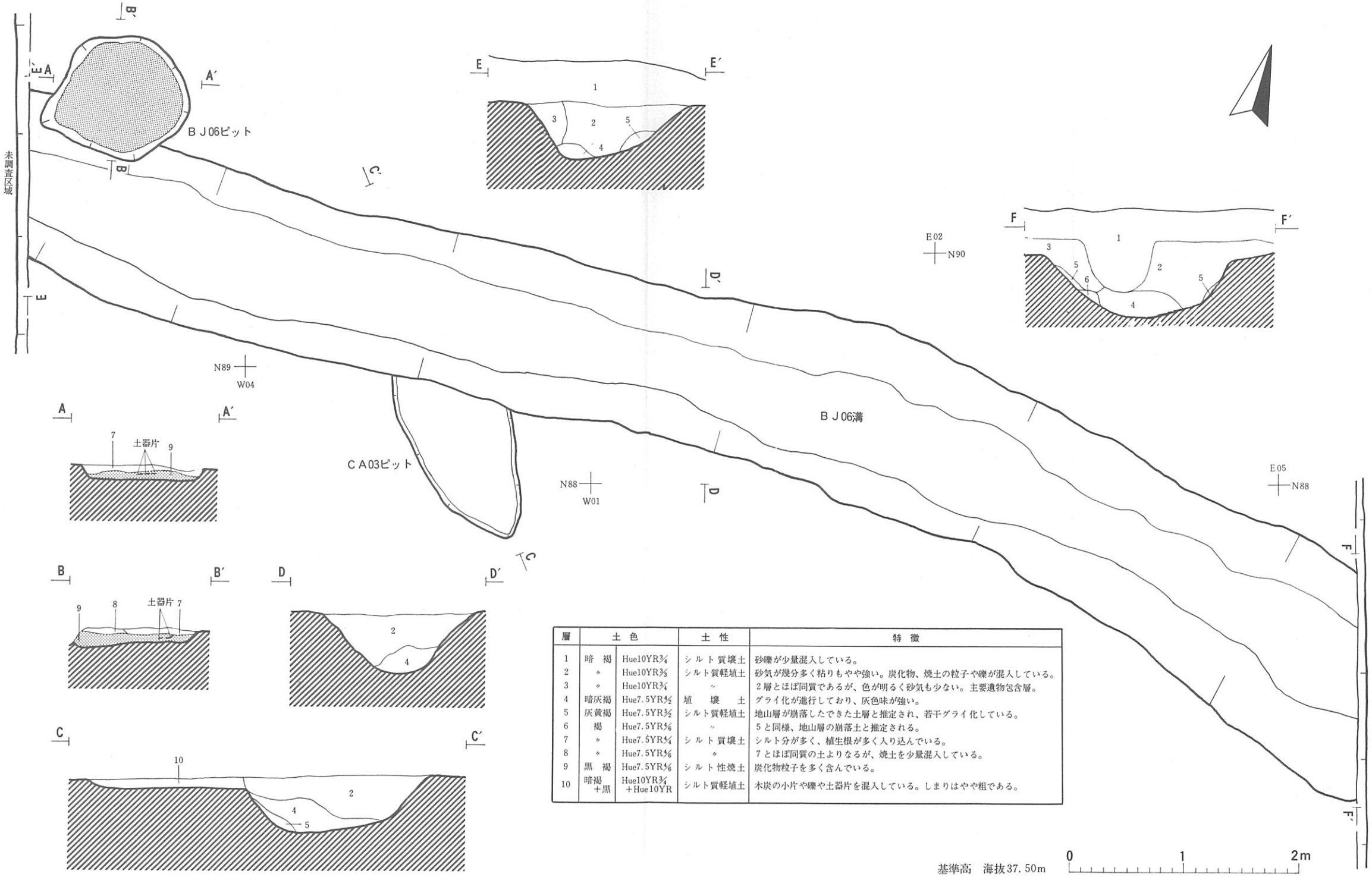
〔**位置**〕　調査区北部のＢ区とＣ区の境界部付近に位置している。

〔**重複関係**〕　ＢＪ06溝及びＣＡ03ピットを切っておりそれより古い。

〔**形状、規模**〕　調査区をほぼ東西に横切る形で直線的に延びる溝で断面が緩いＵ字形を呈している。その規模は検出面上での上巾1.26～1.66m、底巾0.48～0.8m、検出面からの深さ0.46～0.56m、調査区域内での長さ約12.5mを測る。

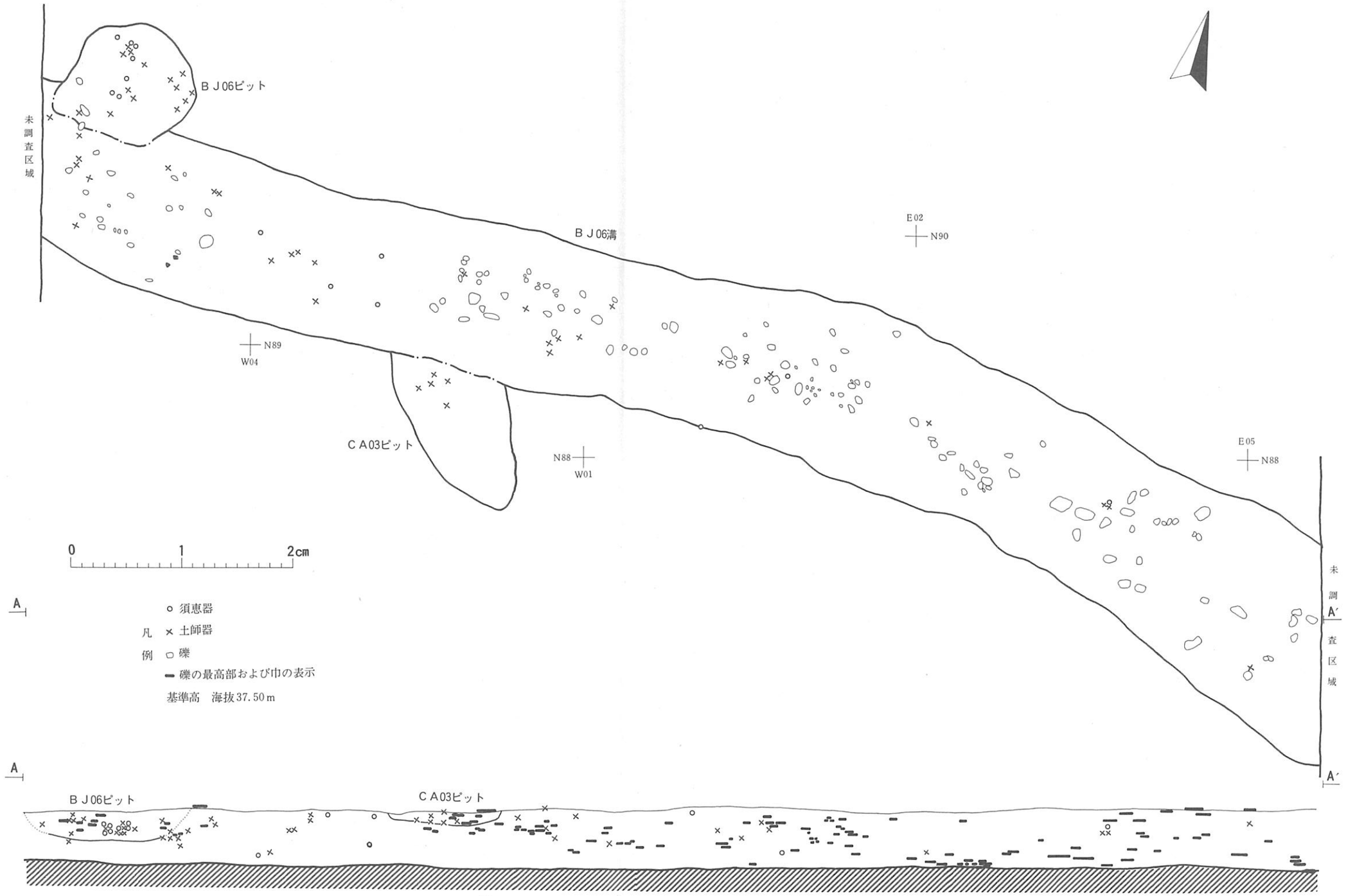
〔**埋土**〕　埋土は主に暗褐色のシルト軽埴土や暗灰褐色のグライ化した埴壌土で占められ、ところどころに地山層の崩壊土と思われる灰黄褐色のシルト質壌土層が見られる。

〔**遺物出土状況**〕　溝の埋土中には上下層を問わず多量の礫の混入が認められた。礫は付近の川から運んで来られたと思われる川原石で、その大きさは大人の足大のものから、ピンポン玉



層	土色		土性	特徴
1	暗褐	Hue10YR3/4	シルト質壌土	砂礫が少量混入している。
2	〃	Hue10YR3/3	シルト質軽埴土	砂気が幾分多く粘りもやや強い。炭化物、焼土の粒子や礫が混入している。
3	〃	Hue10YR3/4	〃	2層とほぼ同質であるが、色が明るく砂気も少ない。主要遺物包含層。
4	暗灰褐	Hue7.5YR5/2	埴壌土	グライ化が進行しており、灰色味が強い。
5	灰黄褐	Hue7.5YR5/2	シルト質軽埴土	地山層が崩落したできた土層と推定され、若干グライ化している。
6	褐	Hue7.5YR4/6	〃	5と同様、地山層の崩落土と推定される。
7	〃	Hue7.5YR4/4	シルト質壌土	シルト分が多く、植生根が多く入り込んでいる。
8	〃	Hue7.5YR4/6	〃	7とほぼ同質の土よりなるが、焼土を少量混入している。
9	黒褐	Hue7.5YR4/6	シルト性焼土	炭化物粒子を多く含んでいる。
10	暗褐＋黒	Hue10YR3/4＋Hue10YR	シルト質軽埴土	木炭の小片や礫や土器片を混入している。しまりはやや粗である。

第52図　BJ06溝・BJ06ピット・CA03ピット平断面図実測図



第53図　BJ06溝・BJ06ピット・CA03ピット土器出土状況平面図およびA－A′面投影図

大のものまでいろいろであった。それに混じる様な形で土師器や須恵器などの古代の焼物類の磨滅した細片が少数出土している。礫の水平分布を見ると、調査区の西側では一部希薄になるが溝の中央部よりにほぼ等密度に分布している。土師器や須恵器の破片は西側にやや多く分布する傾向が見られるものの全域にわたって分布している。以上の様な出土状況の観察からこれらの土師器や須恵器がこの遺跡に直接的に伴なったものではなくて、破片になってから後のある時期に埋土や礫と一緒に混合堆積したものであると推測された。

〔**遺物**〕　図示し得る資料はないが、A群Ⅰ－1～2類やB、C、F群に属する体部細片資料が見られる。

FⅠ03溝　（第33、34図、写真5－1・3）

〔**位置**〕　調査区の中央部南寄りのFⅠ50住居跡南辺部に位置する。

〔**重複関係**〕　FⅠ50住居跡の煙道と南東部を切っておりそれよりも新しい。また溝の一部には長径約0.6m、短径約0.24m、検出面からの深さ0.26mほどの平面楕円形の摺鉢状ピットが見られるが両者の新旧関係は確認できなかった。

〔**埋土**〕　暗褐色と褐色の混合したシルト質軽埴土の単層である。

〔**遺物**〕　遺物は発見されなかった。

ⅠH06溝　（第37、38図、写真6－1）

〔**位置**〕　調査区域の南方ⅠH06住居跡所在地付近に位置している。

〔**重複関係**〕　ⅠH06住居跡の南北隅付近を切って掘られている。

〔**形状、規模**〕　長さ1.5mしか、検出していないので溝の全形は不明であるが、調査された範囲で見ると検出面上で巾0.5～0.7m、底部で巾0.2m内外を測り、横断面は西に緩い逆台形を呈し、やや弯曲しながら南西から北東方向に走っている。

〔**埋土**〕　主要部分の埋土は暗褐色のシルト質軽埴土とにぶい黄褐色のシルト質埴土の二層よりなっている。

〔**遺物**〕　埋土中からは人工遺物が検出されなかった。

JA03溝　（第56図、写真10－1）

〔**位置**〕　調査区南方のⅠ区南端部に位置し、ⅠJ03ピットの東側に接している。

〔**重複関係**〕　ⅠJ03ピットの項でも述べた様に埋土の堆積状況からは、この溝がやや新期のに属するという事以外、両者の新旧、共存関係を明らかにする資料は得られなかった。

〔**形状、規模**〕　上巾0.74m内外、底巾0.3m内外、検出面からの深さ0.3m内外の断面がU字型の浅い溝で、調査区の中央部から東北東方向に約4.8m～5.8m延びさらに調査区外に達している。

〔**埋土**〕　ピット中の埋土は炭化物を含む褐色のシルト質軽埴土の単層である。

〔**遺物出土状況**〕　埋土中からは須恵器と土師器の磨滅した細片が混入した形で約５点出土している。

〔**遺物**〕　出土した焼物類の器形として須恵器ではＦ群相当の胴体部、土師器ではＣ群の胴体部の破片が見られる。

ＪＡ06溝　（第56図、写真10－１）

〔**位置**〕　調査区南方のＩ区南端からＪ区北端の西寄りに位置している。

〔**重複関係**〕　ＩＪ06ピット（２）と重複しているが、その前後関係は不明である。

〔**形状、規模**〕　上巾0.5～0.7ｍ、下巾0.2～0.5ｍ、検出面からの深さ0.5～0.15ｍを測る断面が浅い皿状の溝で、調査区の南西から北東方向に約6.2～6.4ｍ延びている。

〔**埋土**〕　溝の埋土はＩＪ06ピット（２）と同じ黒褐色のシルト質軽埴土の単層である。

〔**遺物**〕　遺物は出土していない。

ＬＡ03溝　（第60図、写真10－２）

〔**位置**〕　調査区南部のＬ区北端に位置している。

〔**検出面**〕　Ｋ区南部からＬ区北部にかけて、一時工事用の土石置場として使用されていたため、表土層から地山上層にかけて土層が攪乱されていた。そのため、遺構の検出は、通常の検出面より0.05～0.1ｍ下げた面で行なった。

〔**形状、規模**〕　調査区をやや南北に偏りながら、ほぼ直線的に東西に横切る溝である。調査区域内に於ける溝の規模は、上巾0.52～0.56ｍ内外、下巾0.34～0.46ｍ内外、長さ7.9ｍを測り、その横断面は逆台形ないし、丸い皿状を呈している。

〔**埋土**〕　溝の埋土は褐色のシルト質軽埴土に暗褐色のシルト質軽埴土が斑状に混合した土の単層よりなる。

〔**遺物出土状況**〕　埋土中には、遺物がほとんど含まれておらず、わずかに磨滅した土師器片３点が溝の西寄りと東側で埋土中に混入した形で発見されている。

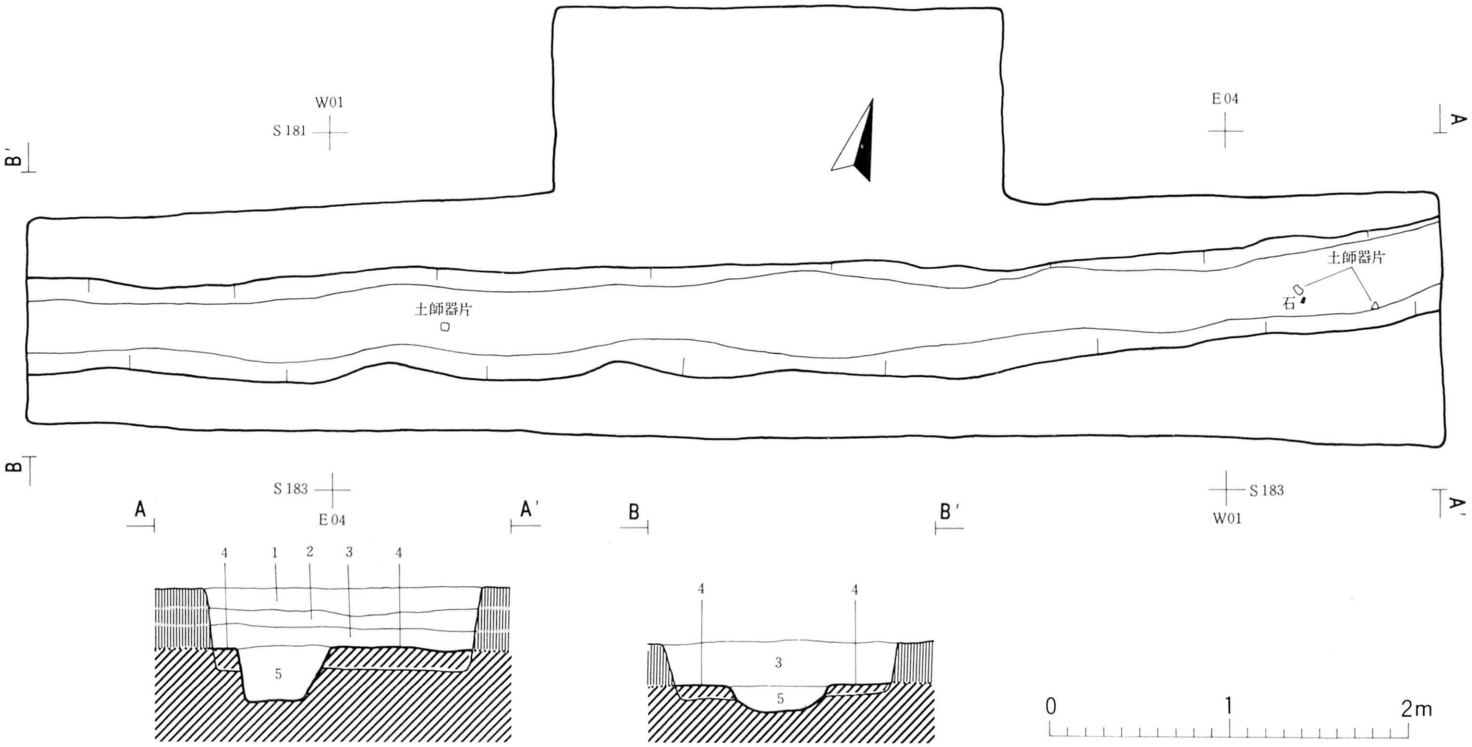
〔**遺物**〕　発見された土師器片はいずれもＢ群ないしＣ群に含まれる器形の胴体部破片である。

（ｆ）　遺構外出土の遺物

以上述べてきた各遺構以外にも検構検出作業に伴なって、表土層ないし平安時代の遺物包含層の上面付近から、幾つかの遺物が採集された。その主なものを第61～63図と第　表に示した。この中には、整理作業時の不注意により、出土遺構が不明になった遺物も含まれているが、一応、遺構外採集として、時期及び器種別に補足説明を行ないたい。

平安時代の遺物　（第61、63図、第24表、写真16－15～17、18－10、19－2・8、20－4・8、21－１）

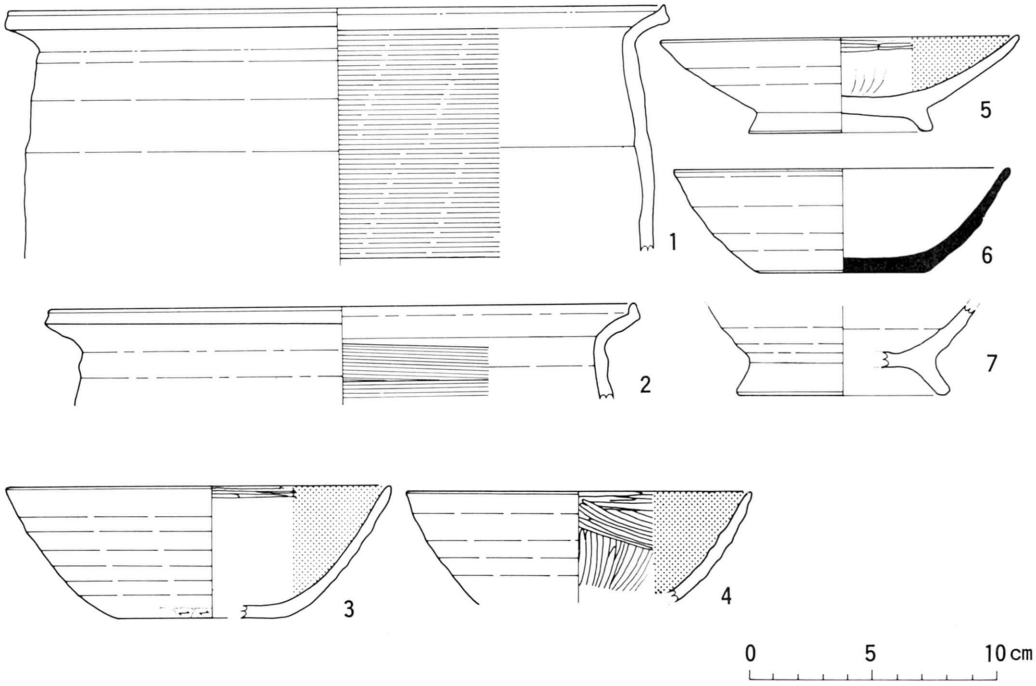
（焼物類）　遺構検出作業時の出土遺物の大半は平安時代の土器類である。その大部分は細片で図示し得る資料は少ないが、第61図に示したものを見ると、Ａ群Ｉ－$2a_1$、$3b_1$類、II－３類、



No.	土色		土性	特徴
1	黒褐～暗オリーブ褐色	Hue2.5YR3/2～3/3	シルト質軽埴土	やや粘りあり、1cm内外のヒモになる、砕石をまじえる、工事用盛土。
2	オリーブ褐、褐色	Hue2.5YR3/3～10YR5/6	〃	0.5cm内外のヒモになる。水田耕作土、植生痕あり。
3	にぶい黄褐	Hue10YR5/3	〃	1、2よりさらさらしていて、粘りが少ない、硬くしまり、圧痕つかない。
4	褐	Hue10YR4/4	〃	1cm内外のヒモになる。地山？
5	褐＋暗褐	Hue10YR4/4～3/3	〃	斑層、溝の埋土。

第60図　LA03溝平断面実測図

Ⅳ－1b類、Ｃ群Ⅱ－２類、Ａ群Ⅳ－２類などの器種が見られる。そのうち、６に掲げたＡ群Ⅳ－２類の坏は今回の調査では出土点数が少なく、本例１点のみである。これらの焼物類は時期的には、近接する各住居跡から出土したものとそう大差のない時期の所産であると推定される。

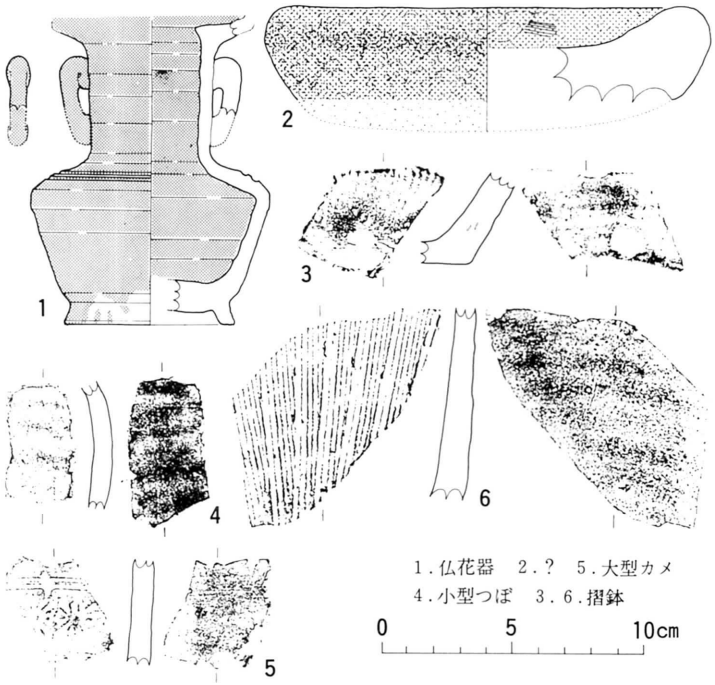


第61図　各グリッド内遺物検出作業時出土遺物実測図(1)

（土製品）　土器類と同時期に入ると思われる土製品は、63図、14の土鈴と写真19－２のフイゴ羽口破片が出土している。土鈴は下半部が欠損し、中の土玉が失われているが、全体的にやや扁平な球形を呈し、上端には、つまみがつきそれに径３㎜大の紐通し孔がついている。

（鉄器類）　63図、９～13は上記の遺物と同時期と思われる鉄製品の破片である。12、13を除いて、いずれも刀子状鉄製品の破片と思われる。しかし12、13は何の破片かよくわからない。これらの遺物は、主としてＦＣ09住居跡周辺部から出土したものであるが、中には10のように明らかにＦＣ09住居跡内から出土した疑いのあるものも含まれている。

（その他）　その他、ＦＣ09住居跡の検出作業時に、ＦＣ09住居跡部分の埋土上面付近から、第62図２に示した様な、胎土内部まで黒化し土師器類似の厚手皿型土器が発見されている。この土器は手捏ねによって作られたと思われ、胎土は粗雑で、中には砂や植物繊維が含まれている。その用途はよくわからないが、一種の灯明皿の様にも思われる。所属時期は、周辺部に近世以降の遺物散布も見られ、特定することは難しいが、一応、平安時代と考えておきたい。



第62図　各グリッド内遺構検出時出土遺物実測図(2)(近世以降)

近世以降の遺物

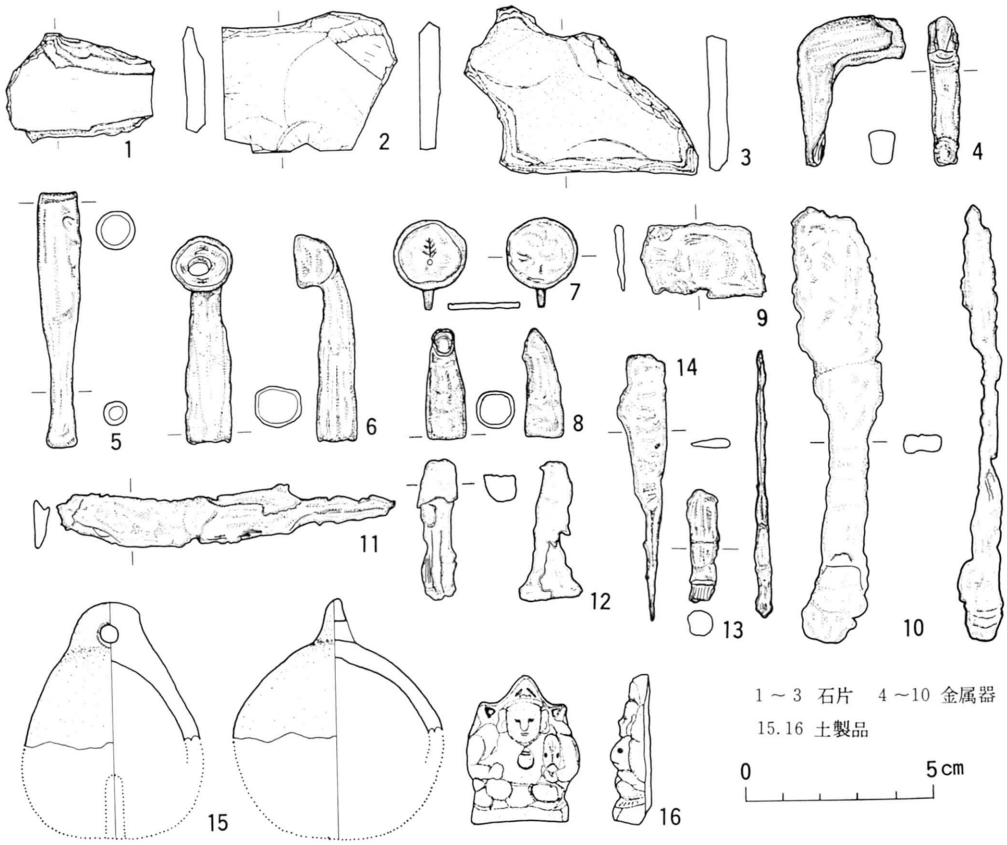
（第62、63図、第24表、写真21－1、22－5～8）

（焼物類）　近世以降の遺物が少量ながらＦ区を中心に出土しているので、そのいくつかを第62図に図で示した。図示したものはいずれも近世中期以降の焼物である[38]。そのうち、第62図1は高台及び耳付きの陶製仏花器の破片である。その器高は推定約13cmで、内外両面とも、オリーブ黒の鉄釉が施されているが、一部火を受け、二次的に胴体の肩部には沈線が2条囲っている。3～6はＥＪ50ピット出土の遺物であるが、図巾の都合上、ここで説明を述べる。3～6のうち、6は暗赤褐色を呈した陶器の摺鉢の破片である。6の外面は鏡の様に釉がかかっている。4は小型の陶器の壺の胴体部破片と思われ、内外両面に黒色の釉がかかっている。5は赤褐色を呈した大型のカメの胴体部破片である。その内外両面には透明な灰釉が施され、内側には花状文をはさんで沈線が2条ずつめぐっている。

（土製品）　第63図、16は赤褐色を呈した、陶質の扁平な板状の小型神像である。その形容からすると、恵比寿を型取ったものと思われる。

（金属器）　近世以降の金属製品と思われる遺物は第63、4～8に図示した通りである。そのうち、4は鉄製品でカスガイの破片鉄器と思われる。5、6、8は青胴製のキセルの破片である。そのうち、5は吹口、6、8は雁首（がんくび）である。7は扁平円形の板状青銅製品で、一銭銅貨を使用した装飾具と思われるが、はっきりした事はよくわからない。

（石器）　第63、1～3は近世以降の粘板岩製の瓦ないし硯の破片で、いずれも全形がわからないほど砕かれている。



第63図 各グリッド内遺構検出時出土遺物実測図(3)

第24表 各グリット内遺構検出時出土遺物一覧表

焼 物

実測図番号	写真番号	焼成による分類	器種名	出土遺構層	口径	底径	器高	その他の法量値	外壁色調	胎土の状況	残存部位
61－1	—	土師質～須恵質土器	長胴カメ	AG06グリッド	推26.8cm	cm	残推 9.7cm	体部径推25.4cm	灰白～にぶい褐	砂混入	口縁部～体部
2	—	須恵質土器	長胴カメ	AE06グリッド	推23.7	5.4	残推 3.8	体部径残推21.7	浅黄橙	砂混入	口縁部
3	16－15	土師器	内黒坏	E区	14.4	5.4	5.3		橙～灰	砂混入	口縁部～底部
4	—	土師器	内黒坏	DJ03グリッド	推14.0		残推 4.4	体部径推 9.0	にぶい黄橙	細砂混入	口縁部～体部
5	16－17	土師器	内黒高台付坏	JB06グリッド	推14.5	6.9	残 3.8	脚部高 0.8 脚部径 7.5	にぶい橙	細砂混入	口縁部～脚部
6	—	須恵器	坏	JJ03グリット	推13.5	6.8	4.2		灰色	細砂少量混入	口縁部～底部
7	—	土師質土器	高台付坏	IJ03グリット		残 7.6	残 3.5	体部径残推10.7 脚部径残 8.6 脚部高 1.7	にぶい橙	細砂少量混入	底部～脚部

陶　器

実測図番号	写真番号	焼成による分類	器種品	出土遺構層	口径	底径	器高	その他の法量値	外壁色調	胎土の状況	残存部位
62－1	22－8	施彩陶器	仏花器	F区	推 7.1＋2 cm	6.0cm	残11.3cm	高台径推 6.4cm		灰白色粘土	体部～脚部
2	—	土師器？	灯明皿？	F区	推15.6			体部径大 16.8 下 14.6	黒色	砂と粘土多量混入	口縁部～体部
3	22－8	陶器	摺鉢	EJ50ピット			推 6.2		極暗赤褐	—	底部
4	—	陶器	小型つぼ	〃			4.0		オリーブ黒灰色	砂混入	体部
5	22－8	施彩陶器	つぼ	〃	長 4.0			厚 0.9	暗赤褐	灰釉	体部
6	〃	〃	摺鉢	〃			残 7.6	脚部厚 1.2	極赤暗褐	砂混入	体部

石　器

実測図番号	写真番号	器種名	出土遺構層	最大長	最大巾	最大厚	重量	材質	備考
63－1	—	硯か屋根瓦	EC53グリッド	3.8cm	2.8cm	0.5cm	8.1g	黒色粘板岩	擦痕なし
2	—	〃	EG03グリット	4.6	3.7	0.5	13.7	黒色粘板岩	擦痕1面
3	—	〃	F区	6.9	3.6	0.6	23	黒色粘板岩	擦痕なし

土製品

実測図番号	写真番号	器種名	出土遺構層	最大長	最大巾	最大厚	色調	胎土の状況	黒斑
63－15	19－8a・b	土鈴	E区				浅黄橙一部にぶい橙	石英砂少量混入	有り
16	22－7	土偶（小型神像）	F区	3.8cm	4.7(巾狭部) 5.5(巾広部)cm	0.5～0.6cm	赤褐～極暗赤褐～黒褐	細砂少量混入	やや黒ずんでいる

鉄　器

実測図番号	写真番号	器種名	出土遺構層	最大長	最大巾	最大厚	体部横断面図	保存状況	備考
63－4	21－1	?	F区	3.9cm	0.5～0.7 cm	0.8cm	長方形	良	破損品
5	〃	煙管	〃	6.8	0.6～1.15	0.6～1.1	不整円形（輪状）	〃	唐草状の陰刻文あり
6	〃	〃	〃	5.4	0.7～1.2	0.1	〃	〃	
7	〃	?	〃	1.4	1.9	0.15	薄い長方形の板状	〃	銭貨を使用した装飾品？
8	〃	〃	KA53グリッド	2.95	0.7～1.0	1.0	不整円形		
9	〃	刀子の一部	F区	2.6～3.1	1.7～2.0	0.1～0.25	細長い環状		
10	〃	刀子	出土地不明	11.5	1.0～0.2	0.4内外	長方形		
11	〃	?	F区	8.9	0.5～1.3	0.1～0.4	不整三角形	不良	
12	〃	〃	〃	3.7	約 0.8	約 0.7	半円形	〃	
13	〃	〃	〃	3.0	0.5～0.7	0.65	不整円形	〃	
14	〃	〃	JH50グリッド	7.1	0.3～1.3	0.1～0.2	細長い板状	〃	

注記

(35)　「亢」読みはコウ、字義として、角川書店発行の簡野道明編「字源」では、①のど、くび　②つよいつよくする　③さからう　④たかぶる、あがる、のぼりすぎる　⑤あみぼし（二十八宿の一）　⑥ふせぐ　⑦あたる　⑧あやまる　⑨きわまる　⑩棟（むね）　⑪高い　などを掲げている。

(36)　岩手県教育委員会　1980　「東北新幹線関係埋蔵文化財調査報告書」Ⅳ

(37)　岩手県埋蔵文化財センター　1979　「主要地方道一関、北上線関連遺跡発掘調査報告書」

(38)　時期については昆野靖氏の教示によった。

Ⅳ．ま　と　め

今回の調査で知られた事実は前章で述べた通りであるが、次にそれらの事実をもとに２～３のまとめを行なってみたい。

１．住居跡について

〔１〕　形態

〔形状、規模〕　発見された10の住居跡のうち、形状の知られるものはすべて平面隅丸方形状の竪穴式住居跡であるが、いずれも重複せず、独立している。竪穴の方形の向きは住居跡毎に一定せず、東西南北の正方位に対して各々５°～45°未満の不規則な角度で振れている。

各住居跡の広さも一定せず、ＡＦ03住居跡で最大約40.96㎡、ＦＩ50住居跡で最小約15.37㎡を測るが、概して20～25㎡の範囲内に入る小型住居跡が多い。

床には多くの場合、柱穴状ピットを伴なうが、ＪＩ50住居跡の様に全く検出されない例もある。さらに柱穴状ピットが検出された住居跡でも、上屋に関連した柱穴数や柱配置は一般に不明瞭で、ＡＦ03住居跡の様に４～８を基本とする整然とした配置形を示す例はむしろ珍らしい。

〔付属遺構〕　（周溝、入口施設）　竪穴の側壁部には、土留め工作がなされ、入口施設が設けられたものと推定される。しかし、調査時の観察では、その様な施設の存在を示す周溝や杭穴などは確認できなかった。従って、住居跡自体の向きや壁部の構造は各住居跡とも、今のところ不明である。

（かまど）　以上の施設以外に、住居跡に伴なう主要な施設としてかまどがある。かまどは、普遍性が高く、完掘されたすべての住居跡で発見されているが、いずれも、竪穴の側壁に接して築かれており、ＪＧ03住居跡やＪＩ50住居跡以外の住居跡ではすべて長さ1.5ｍ未満の煙道を伴なっている。煙道は住居跡の壁にほぼ直交する形で、水平ないしやや上り勾配気味に延びている。その長さは、ＦＣ09住居跡の南壁東かまどの様0.5ｍ未満の極端に短い例もあるが、大抵は1.0～1.5ｍの規模を持つ。煙道部の先端には、ＡＦ03住居跡の東かまどの様に円筒形ないし摺鉢状のピットが設けられる例もあるが、同じ住居跡の南かまどの様に設けられない例もある。ＪＧ03住居跡やＪＩ50住居跡の場合はかまど付近の地盤が削平されているため、煙道の有無は不明であるが、存在していた可能性が大きい。

かまどの保存状態は一般に不良で、原形を止めている例はほとんど無いが、観察の結果次の様な事が知られた。まず、かまどの壁体であるが、これは主として、周辺の地山層から得られた、褐色系のシルトないしシルト質の軽埴土が用いられている。壁体の中には、ＦＧ06住居跡やＪＧ03住居跡の場合、壊れた小型のカメないし長胴のカメが補強材として埋め込まれている。壁にかこまれた火床部には良く焼けた橙色の焼土が溜まっているが、ＪＧ03住居跡などでは浅いピットが見られる。火床部の中央には支脚が設けられたものと推測されるが、その具体的状況は多くの場合、はっきりしない。ただ、ＪＧ03住居跡やＪＩ50住居跡では倒立した小型カメや坏類を支脚に用いた例が発見されている。

以上の様なかまど本体は住居跡の大抵南壁際か東壁際の、どちらかの隅に寄った位置に築かれている。しかし、ＩＨ06住居跡だけが例外的に北壁際中央部にかまどが築かれている。築かれたかまどの数は１住居跡当り普通１基であるが、ＡＦ03住居跡やＦＣ09住居跡の様に２基見られる例もある。ただし２例とも、２基のかまどが同時期に併用されたものではなく、一方が廃された後一方が新たに築かれ、使用された例である。なお、かまどの改築はＡＦ03住居跡では東壁かまど→南壁かまど、ＦＣ09住居跡では南壁東寄りかまど→同中央部かまどの順で行なわれている。

（貯蔵穴、灰捨て穴）　かまどの脇ないし焚口部周辺からは必ずといっていいほど、貯蔵穴ないし灰捨て穴と思しき平面円形ないし楕円形のピット１ないし２～３が発見されている。その規模は住居跡によって一定しないが、直径0.5～1.0ｍの範囲内に収まる例が多い。同種のピットは必ずしも、かまど近くに設けられるとは限らない様で、ＦＡ06住居跡ではかまどからか

なり離れた東北隅の位置に前記ピットのうちの１つが設けられている。

（他のピット）　かまどに付属するピット以外にも、竪穴の内部や周辺部には各種の形状と規模を有する。性格不明のピットが掘られている。ピットの数は住居跡によって一定しないが、普通２～３であり、ＩＨ06住居跡の様に10以上のピットを有する例はやや異例である。

（炉）　その他にＡＦ03住居跡、ＦＡ06住居跡、ＩＨ06住居跡では床面が橙色に焼けた焼土遺構が発見されており、地床炉と推定されている。ただ、ＡＦ03住居跡の場合には、焼土遺構とその周辺部から、土製のフイゴ羽口、鉄器、多量の鉱滓などが発見されており、この事から、むしろ北上市相去遺跡群[39]や西野遺跡[40]で見られる様な小型の鍛冶炉様の施設跡と推定される。

〔２〕　埋土状況

住居跡を埋める埋土は各種あるが、大部分は、周辺の地山層と同質同色の褐色～暗褐色のシルト、砂、シルト質軽埴土層などで占められている。これらの埋土は多くの場合、遺構自体が浅い上に、土自体の肉眼的な識別が難しく土層構成の把握が困難である。しかし、概観した限りでは、発見された住居跡はいずれも自然堆積に近い状態の埋土層で埋められている。ただ、ＦＩ50住居跡やＩＨ06住居跡では、一部に例外的に貼床が見られ、ＦＣ09住居跡では土層堆積状況にやや疑問な点が見られる。しかし、住居跡全体が一気に埋め込まれた形跡は、どの住居跡でも認められなかった。

従って発見された住居跡に関する限り、落合Ｉ遺跡のＢＪ09住居跡などに見られる様に貼床して二期に渡って使用している例は無いといえよう。

〔３〕　遺物出土状況

住居跡内の出土遺物は既にⅢ章１でも述べた様にほとんど大部分が古代の焼物類の破片で占められ、それに若干の鉄器、土製品、鉱滓などが伴なう。これらの遺物は浅い住居跡の場合、埋土の各層から分散した形で出土するが、遺物の平面的な分布を見るとＡＦ03住居跡の様に住居跡全域に広く均等に分散するタイプと、ＪＧ03住居跡の様に、かまど部周辺や付属するピット類に多く集中するタイプの２者が見られるが、全体的には後者の類例が多い。２者の例に見られるこの様な遺物出土パターンの違いは、住居跡廃絶後の再利用のあり方に起因するものと推定される。

やや深い竪穴を有するＦＣ09住居跡の場合には、住居跡の付属するピット及び埋土下層下部と埋土の中～上層部に多数の遺物が見られる。この事はＦＣ09住居跡が廃絶後にある一定時間を経て、埋没しかけた時に、焼物類を主とする廃棄施設として再利用された事実を示唆しているといえよう。

〔４〕　出土遺物の特徴

各住居跡内の遺物相互の共伴関係は遺物出土状況に関する資料の乏しい住居跡もあるので、

やや正確を期し難いが、一応各住居跡出土の主な遺物を分類別に列記すると次の通りである。

（◎印……特に多い、○印……多い）

ＡＦ03住居跡　◎Ａ群Ⅰ－2a、2b、Ⅱ－1a、Ⅳ－2a、Ｂ群Ⅱ－１、２、◎Ｃ群Ⅰ－1c、1d、Ⅱ－$2a_1$、$2a_3$、Ｄ群Ⅰ－１、Ｆ群Ⅲ－1b、2b、2c、Ｇ群Ⅰ－１、

（刀子、鏃、釘、その他の鉄器類、砥石、土錘、土製フイゴ羽口、その他土製品、鉱滓）

ＥＩ53住居跡　Ａ群Ⅰ－１、2a、Ⅱ、Ⅳ、Ｂ群、Ｃ群、Ｆ群、Ｊ群

ＦＡ06住居跡　Ａ群Ⅰ－1a、2a、3a、Ⅱ－２、○Ｂ群Ⅱ－2a、Ⅲ－１、○Ｃ群Ⅱ、Ｆ群Ⅲ－1b、

（鋤先金具、刀子、釘、土錘、鉱滓）

ＦＣ09住居跡　Ａ群Ⅰ－1a、$2a_1$、$3b_1$、$3b_2$、Ⅱ－１、Ⅲ－２、Ⅳ－２、○Ｂ群Ⅰ－１、Ⅱ－1a、2a、Ⅲ－１、Ｃ群Ⅰ－1e、1f、Ⅱ－1a、$2a_2$、Ｆ群Ⅰ－１、Ⅱ－１、Ⅲ－2c、Ｅ群Ⅱ－１、Ｉ群Ⅰ－１、Ｊ群Ⅰ－１

（刀子、性格不明の金具、釘状鉄製品、土錘、鉱滓）

ＦＧ06住居跡　Ａ群Ⅰ－１、$2a_1$、$2a_2$、2b、Ｂ群Ⅲ－1a、Ｃ群Ⅰ－1c、Ⅱ－$2a_1$、$2a_3$、Ｆ群Ⅲ－2c、

（土錘）

ＦＩ50住居跡　○Ａ群Ⅰ－1a、2a、3a、Ⅱ－1a、2a、Ⅲ－1a、Ⅳ－1a、2a、Ｂ群Ⅱ－1a、○Ｃ群Ⅰ－1a、1e、Ⅱ－$2a_1$、2b

（釘状鉄製品、土錘）

ＩＨ06住居跡　Ａ群Ⅰ－2a、◎$3a_1$、◎$3a_2$、４、◎Ⅱ－４、○Ⅱ－$3a_1$、$3a_2$、$3a_3$、○Ｃ群Ⅰ－1e、Ⅱ－2e、Ｄ群Ⅰ－２、Ｆ群Ⅲ－1a、Ｇ群、Ｈ群Ⅰ－１

（紡錘車、管状鉄製品、刀子、鉱滓、骨片、炭化種子）

ＪＧ03住居跡　Ａ群Ⅰ－1a、Ⅳ群Ⅱ、○Ｃ群Ⅱ－1a、Ⅱ－$2a_1$、$2a_2$

（釘、フイゴ羽口、鉱滓）

ＪＩ50住居跡　Ａ群Ⅰ－2a、Ⅲ－１、Ⅳ－２、Ｂ群Ⅱ－１、Ⅲ、Ｆ群Ⅱ－４

（刀子、砥石）

ＪＩ53住居跡　Ａ群Ⅰ－1a、Ｂ群、Ｃ群、Ｆ群

（砥石）

以上の結果を見ても明らかな様に出土した遺物は大部分が焼物類である。その中には、出土点数も少なく、普遍性の乏しい器種も見られるが、Ａ群Ⅰ、Ⅱ類、Ｂ群Ⅱ、Ⅲ類、Ｃ群Ⅰ、Ⅱ類、Ｆ群Ⅲ類などに属する幾つかの器種はかなり普遍的で、ほとんどの住居跡で見られる。ただそのうちでも、たとえばＦＣ09住居跡ではＡ群Ⅰ－2a類の内黒坏が特に多く、ＩＨ06住居跡

ではＡ群Ｉ－3a_1類の内黒坏やII－４類の小型坏が多いという様な住居跡毎の器種組成の違いは若干認められる。

焼物類と共伴する形で、大部分の住居跡からは、刀子、鏃、鋤先金具などの各種の鉄器類が出土している。その出土点数は住居跡によって寡多があるものの、ほぼ普遍的に見出される。

以上の鉄器類に伴なって、ＡＦ03住居跡やＪＧ03住居跡からは鉱滓フイゴ羽口の破片が出土している。鉱滓は上記の住居跡以外にも、ＦＡ06住居跡、ＦＣ09住居跡、ＩＨ06住居跡などからも出土している。その他、鉄器類を研磨したと思われる砥石が、ＪＧ03住居跡などから合計４点ほど出土している。土製品としては特記すべきものとして土錘が、ＡＦ03住居跡以下５住居跡から出土しており、網漁の存在が知られる。

〔5〕　住居跡の時期

次に、出土した遺物をもとに、各住居跡の所属時期について考えてみたい。一般に住居跡の所属時期を決める場合には、住居跡自体の形態の変化から時期的な位置を求める場合もあるが多くは伴出遺物をもとにして時期決定する。その際、遺物の平面位置、層位あるいは遺物相互の組成比等の検討を予め経ておく事が必要である。しかし、今回の調査ではその方面の資料的な準備が充分にできなかった。従って、上記の項目に関してこれ以上の検討を加える事はできない。ただ、全体を通じて見た場合ＦＣ09住居跡以外の住居跡ではいずれも床面が浅く発見された遺物も大部分が床面に近接した位置から出土している。以上の事実から、流れ込みや投棄によって、新旧の遺物が多少混入するにしても、大部分の遺物が、住居跡それ以前時期にかなり近接した時間内の所産である事が予想された。ＦＣ09住居跡の場合は埋土の状況から、住居跡の営まれた時期の遺物と埋土中の遺物の間にやや時間的な隔りがある様に思われた。しかし坏などの遺物の観察結果からすると、両者の間にはほとんど形態、技法上の違いが見られず、ほぼ同一様式の存続期間内に収まる資料と推定された。

かかる事情を考慮しながら、各住居跡出土の遺物の所属時期について考えて見てゆくと次の様な事がいえる。まず、坏類であるが、各住居跡出土の坏はいずれもロクロ成形技法によったものである。しかも、大部分の坏は底部に回転糸切り痕を有するか、一担糸切りしたものにヘラ削り調整を加えたタイプのものである。それ以外のものとしてはわずかにＪＧ03住居跡、ＦＩ50住居跡出土の須恵器の坏の中に底部に回転ヘラ切り痕を有する個体が１～２見られるだけである。以上の坏類は、かつて東北南部で、表杉ノ入式、東北北部で後期土師器、II期土師器[39]などの各称で様式化された土師器類の一部をなすか、あるいはそれらに共存する坏類と思われる。その所属時期としては従来広く平安時代という年代が与えられているが、近年、調査資料の増加とともに、各地の研究者によってさらに資料の再検討と細分化が試みられている[40]。同種の試みは、鴻ノ巣館遺跡のある北上川中流域の古代の焼物類についてもなされ、既に何人かの

研究者の手でその成果が公表されている。[41]

それによると、岩手県内で搬入品は別として、ロクロ成形された坏類が生産され普及するようになるのは、須恵器生産の開始普及と胆沢城が置かれた9世紀初頭以降の時期であると見なされている。その以前坏類はほとんど土師器で占められ、粘土紐の巻き上げないし輪積み技法によって作られ、器面に磨き調整されている事が多い。この段階では全器種に占める須恵器の割合は極端に少なく、しかもほとんど全部搬入品で占められている。

岩手県地方に於けるロクロ成形技術の導入はまず須恵器の坏で始まり、後に土師器の坏に応用されるという経過をたどる。技術伝播の初期の段階では成形後の切り離しがヘラで行なわれるために坏の底部に渦巻状の回転ヘラ切り痕を有し、しばしば底部～周辺部にヘラ削り調整が伴なっている。かかる坏類と共存する形で回転糸切り痕を有し、しばしばヘラ削り調整を伴なう坏類も見られる。以上の坏類のうち技法発生の順序からいうと前者の技法の方が早く現われる。そして、後者の技法が出現した後一時両者が併用される時期もある様である。なお両技法の坏類には数的には少ないが、いずれも高台付坏が共伴している。

いずれ前者の技法はかなり早くすたれてしまい、以後もっぱら後者の技法のみが行なわれる様になる。特に、須恵器の坏類ではヘラ削り調整も早い時期にすたれてしまい、底部無調整の回転糸切り底の坏のみが見られる様になる。以上の経過の中で全坏類の中で須恵器の坏それ自体占める割合も、9～10世紀代にかなり大巾に普及するなどの様相を見せながらも漸次低落してゆく。それに比べて、内黒処理された土師器の坏類では、底部～周辺部のヘラ削り調整技法がかなり遅くまで残り、一時期住居跡内から出土する坏類の大半がヘラ削りされた内黒の坏類で占められる様にさえなる。しかし、やがて須恵器の坏と同様ヘラ削り調整されなくなり、内黒の坏類自体が全坏類の中で占める割合も、須恵器の坏類と同様急速に低下してゆき、11世紀段階にはほとんど痕跡程度しか見られなくなってゆく。

以上の坏類に比べて、焼成技法上、両者の中間に位置すると思われる酸化炎焼成のやや軟質～硬質の坏類のたどる経過は前二者とは著しく対照的である。この種の坏類は鴻ノ巣館遺跡の分類では一応、A群II、III類に分類されている坏類であるが、焼成技法上の位置づけとか技術伝播の系譜の上で、かなり問題のある一群である。底部の切り離し技法は概して回軽糸切り無調整のものが多いけれども、高台の付いた例も知られる。その他、まれには、底部周辺にヘラ削り調整の施されたものがある。ともかくこの種の坏類は、前二者の衰退に伴なって除々に拡大し、11世紀代には坏類の大部分がこの種の坏で占められる様になる。

以上、坏類に限って技法的な流れを大まかにたどって来たが、坏類と他の器種との関係はどうであろうか。ロクロ技術が導入される以前に在地生産された焼物類は、坏類の場合と同様大部分が粘土紐の輪積みないし、巻き上げ技法によって成形されたものと思われる。成形後の器

面調整技法としては、土師器の坏類では磨き調整が多用され、カメ類では刷毛目削り、ヘラ削り、磨き、ナデなど、各種の技法が混用される。ロクロが導入されると、当初小型の坏類の成形に利用されていたロクロ技法が、やがて小型の鉢、カメ類や長胴カメ類、小型の壺類にまで応用される様になる。勿論大振りの器種では、器体を直接成形する事は技術的に困難であったと見えて、かなり長い期間利用範囲が整形後の器面、特に器体の上半部内外面の仕上げ調整のみに限られている。

また、かかる一連の技法は除々に普及していったものと考えられ、長胴カメ類や小型カメ類では、ロクロ技術が完全に定着するまでのしばらくの間新旧両技法の併用関係が認められる。共伴する坏類の技法上、その時期は回転ヘラ切り盛行期から回転糸切り＋ヘラ削りの盛行期にかけての期間内に中心を置くものと見られる。勿論、以上の様な技術的な推移の経過は各遺跡の置かれている地理的、社会的諸条件によって必ずしも一様ではなく、場所によってはかなり遅くまで旧技法が併用される様である。

いずれ北上川中流域ではこの過渡期段階、特にその初期に特有な現象として、ロクロ調整された長胴カメ類の外側上半部に、須恵器の壺類で見られるのと同様の平行線上の叩き目が施されるという事実が知られている。今のところ、すべてのロクロ調整カメ類に叩き目を伴なうかどうかわからないが、かなり一般的に行なわれており、次の段階ではほとんど確実に見られなくなる。

以上の変遷をたどる中で、須恵器の大型壺類にはほとんど在地生産開始の前後を通じて、成形技法上の差異がほとんど認められない。ただ、器面に施される叩き目や当て痕には幾つかの変化が認められる。これが時間的な経過の中にどう位置付けられるかという事は今のところよくわかっていない。

さて、以上の技法的な変遷の経過の中で、鴻ノ巣館遺跡の各住居跡は一体どの段階に位置付けられるであろうか。先にも述べた様に各住居跡出土の各焼物類については共伴関係について充分な検討を経ていないので、やや正確さを欠くが、一応図示した各器種を住居跡に伴なう共伴遺物と見なした場合、およそ次の事がいえる。つまり、発見された住居跡はいずれも各器種の組み合わせ上、明らかにロクロ技術伝播後の過渡期的様相を示している。細かく見ると住居跡毎に器種組成上の若干の違いは認められ、ある程度の時間差を考慮しなければならないが、大まかに見て、沼山（1978）、伊藤（1976）、高橋（1977）、佐久間（1978）各氏の所説の如くほぼ9世紀末～10世紀代の年代が与えられよう。

前記期間内に於ける各住居跡の時間的前後関係については、今のところあまりよくわからない。ただＩＨ06住居跡で、他の住居跡と異なるかまど配置が見られたり、Ａ群Ｉ－２類に相当する底部ヘラ削りの内黒が少なく、かわりにII－3a類の高台付内黒坏やIII－４類の小型坏が多

い事などから、かなり新期の様相が伺われ、場合によっては11世紀代に降りる事も予想される。また、ＪＧ30住居跡では、かまどの壁に叩き目のある長胴カメが転用されていたり、底部ヘラ切り＋ヘラ削りの坏が見られたりする事により、やや古い様相が伺われる。いずれ、住居跡相互の時期的な関係については、今回の調査だけでは明らかにし得ない面があり、今後の成果に期待せざるを得ない。

２．ピット類

今回の調査ではＥＪ50ピットをはじめ、幾つかのピットが発見されている。ＥＪ50ピットは大型のピットであるが、その伴出遺物のうち、最新期のものは近世中期以降の陶器類なので、時期的にはそれ以降の所産と考えられるが、用途や機能については良くわからない。

ＢＪ06、ＥＢ03、ＥＣ53、ＥＤ50の各ピットは、焼土や炭化物のつまった浅い楕円形ないし円形の皿状ピットであるが、その性格としては、野外に設けられた掘り込み炉ないしは土器焼成窯といったものが推定される。時期としては、やや確実性を欠くが、ＥＢ03ピットの遺物出土状況などから類推して、大体住居跡等と同時期に位置付けられよう。埋土からははっきりしなかったが、ＣＡ03ピットも同種の遺構であろうか。

ＦＣ06、ＩＪ03、（１）、（２）、の各ピットはいずれも円形の皿ないし、ビーカー形のピットであるが、その性格については、いずれも良くわからない。ただＩＪ03ピット（２）の場合ＩＪ03溝との関連から、一種の水溜め穴様の施設の可能性も考えられる。時期的にはＦＣ06ピットがＦＣ09住居跡より古く、確実に平安時代と考えられるものの、他の２ピットについてはよくわからない。

ＪＡ06ピットはＪＡ06溝と重複する楕円形の皿形ピットであるが、その性格も時期も全くわからない。ただ埋土の状況から見ると、かなり時代が下りそうである。埋土状況や遺物から時期的には住居跡とほぼ同時期と考えられる。

ＪＨ06ピットはＪＧ03住居跡の西に隣接する浅い皿状ピットであるが、住居跡の付属遺構であろうか。

ＪＩ50ピットは柱穴状ピットであるが、性格も時期も今のところよくわからない。

３．溝　　類

溝類は調査区域内で合計６条ほど発見されているが、いずれも調査範囲がせまいため全貌を

明らかにする事ができなかった。したがって、ほとんどの溝は時期も性格もよくわからない。

そのうち、ＢＪ06溝は、中に礫が多数埋った溝であるが、礫の間には古代の焼物破片が若干混っている。この溝はＢＪ06、ＣＡ03の両ピットを切っているが、性格としては一種の排水溝ないしは、埋土層中の礫の存在から暗渠施設の可能性が考えられる。同種の溝は、同じ江刺市内の落合Ｉ、宮地、鶴羽衣台、水沢市石田などの各遺跡でも発見されており、その時期と機能の解明が待たれる。

ＦＩ03溝は浅い溝であるが、やはり排水溝であろうか、埋土層が表土層とほぼ同質であり、比較的新期の遺構といえる。

ＩＨ06溝はＩＨ06住居跡を切っているが、埋土は住居跡の埋土と似ており、比較的、時期の古い溝であることを示唆している。しかしその性格は今回の調査では明らかにできなかった。

ＪＡ06溝、ＪＡ03溝はＩＪ03ピット（２）を挟んで東西に位置する溝であるが、埋土から見るとＪＡ06溝の方が遥かに新しい様相を呈している。ＪＡ03溝は排水溝と考えられる溝であるが、埋土はＩＪ03ピット（２）の上層部埋土とほぼ同色である。この事から両遺構が何らかの関連を持って共存していた可能性も考えられる。

ＬＡ03溝は排水溝と考えられるが、時期はよくわからない。ただ埋土から見ると、ごく最近のものではないかと考えられる。

４．ま　と　め

（１）　今回の調査は東北新幹線の予定地内という限られた範囲を対象に行なったため、遺跡の全貌は明らかにできなかった。しかし調査の結果、（２）以下に示す事柄が知られた。

（２）　調査の結果鴻ノ巣館遺跡が沖積平野の微高地上に営まれた平安時代の集落跡を中心とする遺跡である事がわかった。平安時代の集落跡の存続期間は発見された各住居跡内の出土遺物の年代から、９世紀後半～10世紀末くらいの時期と推定された。

（３）　同じく調査の結果、当集落跡では鏃、刀子、鋤先金具などの各種鉄器類が広く普及している事がわかった。鉄器類の大部分は集落内で生産されたと思われ、それに関連したフイゴ羽口や鉱滓の遺物と焼土遺構が、ＡＦ03住居跡など多くの住居跡で検出されている。鉄器ばかりでなく土器類の自家生産が行なわれていた事も、ＢＪ06ピットなどの焼土ピットの存在によって推測される。また、当集落が農業集落である事は立地形や鋤先金具の存在によってある程度知られるが、多数の土錘の存在はこの集落に住む人々の生活の中で網を使った漁業も、かなり重要な位置を占めていた事を示唆している。さらに、鏃の存在は数の上から一概にいえない

にしても、弓を使った狩猟の存在を予測させる。あるいはもっと大担な推理が許されるならば、当集落跡が胆沢城等との地理的、時間的な関連から、単なる自然発生的な農業集落ではなくて、むしろ、武装植民集落であった可能性を示唆する資料ともいえよう。

（4）　鴻ノ単館遺跡以外にも、周辺の微高地上には落合Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ、兎、力石、朴ノ木宮地、中屋敷などの時期的に近接する集落跡が多数知られている。これらの各集落と当遺跡との性格的な関連性について知る事は、(2)、(3)で述べた当集落のありかたとも関連して、当地方の9～10世紀代の社会状況を知る上で非常に重要な問題である。しかし今回の調査では、この点について充分究明する事はできなかった。当地方に於ける古代史解明の重要課題として今後の研究の発展に大いに期待したい。

（5）　なお、発見された住居跡は大部分がシルト質軽埴土などの河川氾濫起源の滞水地性堆積物で被われている。この事は、鴻ノ巣館の微高地上に古代の集落が営まれていた期間中、付近一帯が洪水のためしばしば冠水する機会のあった事を示唆するものと思われる。

（6）　ＢＪ06ピットなどの焼土ピット以外の溝類やピット類は大部分、時期と性格が不明である。しかし、その一部は埋土や出土遺物の関係から、ＢＪ06ピットなどの様に平安時代の集落跡に関連した遺構と思われるものもある。それらのうち、ＢＪ06溝は礫などの埋没状況から暗渠排水施設としての機能が憶測される。

（7）　明らかに近世以降に属する遺構としてＥＪ50ピットやＭＤ50、ＭＥ50グリッド内のピット群が発見されたが、その性格はいずれも不明である。

（8）　「江刺郡志」所収の「鴻の巣」伝説に関連した中世ないし近世初頭の館跡遺構は調査区の範囲内では全く確認されなかった。また、採集された遺物も平安時代に属するもの以外、すべて近世中期以降の遺物であった。したがって、現在のところ、「鴻ノ巣」伝説を実証する資料は皆無であり、伝説の正否の確認は今後の問題として持ち越された。

注記

(39) 北上市教育委員会、他 1973 「相去遺跡現地説明会資料」
北上市教育委員会、他 1974 「高前田遺跡現地説明会資料」
(40) 岩手県教育委員会 1979 「東北新幹線関係埋蔵文化財調査報告書」II
(41) 氏家和典 1953 東北土師器の型式分類とその編年 「歴史」第14輯
(42) 草間俊一 1958 先史期 「盛岡市史」第一分冊の1 盛岡市
(43) 桜井清彦 1958 東北地方北部の土師器と竪穴に関する諸問題 「館址」東大出版会
(44) 工藤、藤原 1972 東北地方における古代土師器生産の展開 「考古学雑誌」第57巻3号
岡田、桑原 1974 多賀城周辺における古代坏形土器の変遷 「研究紀要」I 多賀城跡調査研究所
桑原滋郎 1976 須恵系土器について 「東北考古学の諸問題」 東北考古学会
小笠原好彦 1976 東北地方における平安時代の土器について二、三の問題 東北考古学会
(45) 沼山源喜治 1968 北上市出土土師器考－北上川中流域を中心として－「北上市史」第一巻 北上市史刊行会
沼山源喜治 1978 「東北北部の歴史時代の土器」 東日本に於ける歴史時代土器シンポジウム発表資料
伊藤博幸 1976 岩手県の古代土器生産について 「－須恵器とロクロ土師器の素描－」岩手史学研究会
高橋信雄 1977 岩手県のロクロ使用土器について 「考古風土記」第2号
佐久間豊 1978 奈良、平安期土器の型式学的分析 「考古学研究」
八重樫、他 1979 下羽場遺跡「東北縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告書」II 岩手県教育委員会

参考文献

盛岡市教育委員会 1978～1979 太田方八丁遺跡各年度調査概報
宮城県教育委員会 1974 「東北新幹線関係遺跡調査報告書」I
水沢市教育委員会 1975～1979 胆沢城跡各年度調査概報
岩手県教育委員会 1974 「鴻ノ巣館遺跡現地説明会資料」
同 上 1979 「東北新幹線関係埋蔵文化財報告書」IIIII

第25表　鴻ノ巣館出土焼物類観察表

ＡＦ03住居跡

実測図番号	写真番号	内面調整 口辺部	内面調整 体部上半	内面調整 体部下半	内面調整 底部	内面調整 脚部	外面調整 口辺部	外面調整 体部上半	外面調整 体部下半	外面調整 底部	外面調整 脚部	黒化処理 内	黒化処理 外	磨滅	底部切離技法
12－1	－		ヘラナデ・当て痕					平行タタキヘラケズリ				－	－	進んでない	
2	－	ロクロ痕	ロクロ痕									－	－	進行してない	
3	－		ロクロ痕					折り返し口縁	ロクロ痕			－	－	進行していない	
4	11－2	手ズレ・ロクロ痕	ロクロ痕・接合痕	〃	指ナデつけ痕		ロクロ痕	〃	〃	〃	付高台	－	－	進んでいない	
5	－	平行タタキ目タテ丸斜め？	〃					菊花状タタキ	〃			－	－	進行してない	
6	－			カキ目					ヘラケズリタタキ目	平底		－	－	進行してない	
7	－			タテカキ目				タテヘラケズリ	平行タタキ目			－	－	進行してない	
8	－		横カキ目	タテカキ目				タテヘラケズリ	タテヘラケズリ			－	－	進行してない	
9	－		無文当て痕	〃				平行タタキ	平行タタキ目			－	－	進行してない	
11－1	11－4	横ヘラミガキ		放射状ヘラミガキ	〃		ロクロ痕	〃	手持ちヘラケズリ	糸切り痕		○	－	やや著しい	回転糸切り　体下、口辺に黒斑内側口辺部にカーボン付着
2	11－3	横ヘラミガキ	横ヘラミガキ	放射状ヘラミガキ	放射状ヘラミガキ				回転ヘラケズリ	回転ヘラケズリ		○	－	著しい	回転糸切り
3	11－6	横ヘラミガキ			放射状ヘラミガキ		ロクロ痕		手持ちヘラケズリ	手持ちヘラケズリ糸切り痕		○	－	やや進んでいる	回転糸切り
4	11－8	ロクロ痕	〃				ロクロ痕	〃		糸切り痕		－	－	著しい	回転糸切り
5	11－7	ロクロ痕	〃				ロクロ痕	〃		糸切り切りっぱなし		－	－	進行していない	回転糸切り
6	－	横ナデ	横ヘラケズリ	〃								－	－	著しい	
7	－	横ナデ	横ハケ目	？			横ナデ	タテヘラケズリ	？			－	－	あまり進行してない	
8	－	ハケ目状横ヘラケズリ	〃				横ナデ	タテヘラケズリ				－	－	あまり進んでいない	
9	－	？	磨滅				ロクロ痕					－	－	著しい	
10	11－1	横ヘラミガキ	〃	磨滅のため不明	放射線状ヘラミガキ				タテヘラケズリ	〃		○	－	著しい	
11	－	ヘラ状工具による横方向ロクロナデ					横ナデ	ヘラ状工具による横方向ロクロナデ				－	－	進行してない	
12	－	ロクロ痕	〃				ロクロ痕	〃				－	－	進んでいない	
13	－	ロクロ痕	〃				ロクロ痕					－	－	－	回転糸切り？
14	－	ロクロ痕	〃				ロクロ痕	〃				－	－	やや著しい	
15	11－9		ロクロ痕						斜横ヘラケズリ	平底		－	－	やや進行	

ＥＪ53住居跡

実測図番号	写真番号	内面調整 口辺部	内面調整 体部上半	内面調整 体部下半	内面調整 底部	内面調整 脚部	外面調整 口辺部	外面調整 体部上半	外面調整 体部下半	外面調整 底部	外面調整 脚部	黒化処理 内	黒化処理 外	磨滅	底部切離技法
16－1	15－4	横ヘラミガキ			放射状ヘラミガキ		ロクロ痕		手持ちヘラケズリ	〃		○	－	やや著しい	回転糸切り
2	15－5						ロクロ痕	〃				○	－	著しい	回転糸切り
3	－	横ヘラミガキ	？	？			ロクロ痕	〃	手持ちヘラケズリ	〃		○	－	著しい	回転糸切り
4	－	横ヘラミガキ		？			ロクロ痕		横ヘラケズリ	〃		○	－	著しい	磨滅著しい　回転糸切り
5	－			放射状ヘラミガキ			ロクロ痕	〃				○	－	著しい	回転糸切り
6	－	ロクロ痕	〃				ロクロ痕	〃				－	－	やや進んでいる	
7	－	横ズレ	横ミガキ？	〃			ロクロ痕	〃	ヘラケズリ			－	－	少々進行	回転糸切り？
8	－	横ナデ	ヘラナデ	〃			横ナデ	横ケズリ	ケズリ	ヘラケズリ		－	－	あまり進行してない	

ＦＡ06住居跡

実測図番号	写真番号	内面調整 口辺部	内面調整 体部上半	内面調整 体部下半	内面調整 底部	内面調整 脚部	外面調整 体部部	外面調整 体部上半	外面調整 体部下半	外面調整 底部	外面調整 脚部	黒化処理 内	黒化処理 外	磨滅	底部切離技法
19－1	－	横ヘラミガキ	ヘラミガキ		放射状ヘラミガキ		ロクロ痕		手持ちヘラケズリ	糸切り痕		○	－	著しい	底辺に黒斑あり　回転糸切り
2	－	横ヘラミガキ	？				ロクロ痕		ヘラケズリ	ヘラケズリ		○	－	著しい	口辺に黒斑あり　回転糸切り
3	12－6	横ヘラミガキ？ロクロ痕	〃	放射状ヘラミガキ	〃				横ヘラケズリ			○	－	著しい	回転糸切り

実測図番号	写真番号	内面調整 口辺部	内面調整 体部上半	内面調整 体部上半	内面調整 底部	内面調整 脚部	外面調整 口辺部	外面調整 体部上半	外面調整 体部下半	外面調整 底部	外面調整 脚部	内	外	磨滅	底部切離技法・その他
19－4	12－5	横ヘラミガキ		放射状ヘラミガキ	〃				手持ちヘラケズリ			○	－	著しい	底部に黒斑　回転糸切り
5	12－4	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ			ロクロ痕			一部ヘラケズリ		○	－	著しい	口辺に黒斑あり　回転糸切り
6	－	横ヘラミガキ	斜め～横ヘラミガキ	放射状ヘラミガキ	〃							○	－	やや著しい	底～体下に黒斑　回転糸切り
7	12－9	?	?	?	?		ロクロ痕	?	?	糸切り切りっぱなし		?	－	著しい	回転糸切り
8	12－8	ロクロ痕	〃	〃	回転手ズレ痕		ロクロ痕	〃	〃	糸切り切りっぱなし		－	－	あまり進行していない	回転糸切り
9	12－10	ロクロ痕	〃				ロクロ痕			糸切り切りっぱなし		－	－	著しい	口縁部～底部　回転糸切り
10	－			ヘラナデ			ロクロ痕			糸切り切りっぱなし		－	－	あまり進んでない	回転糸切り
11	12－7						ロクロ痕					○	－	内外共著しい	回転糸切り
12	12－12						ロクロ痕	〃	ヘラケズリ?	糸切り痕		－	－	進行している	回転糸切り
13	12－11	ロクロ痕	〃				ロクロ痕	〃		糸切り切りっぱなし		－	－	ほとんど進行してない	回転糸切り
14	－	ロクロ痕	〃				ロクロ痕	〃		糸切り切りっぱなし		－	－	著しい	回転糸切り
15	－			ロクロ痕	ロクロ痕				ロクロ痕	糸切り痕		－	－	あまり進まない	回転糸切り
16	－	指ナデ					ヘラケズリ					－	－	やや進行している	ヘラ切?
17	－	ロクロ痕	〃				ロクロ痕	〃		糸切り切りっぱなし		－	－	著しい	回転糸切り
18	－	横刷毛目状ヘラケズリ	〃	?			横ナデ	タテヘラケズリ	?			－	－	－	
19	－	横ナデ	ナデ?				横ナデ	タテヘラケズリ	〃			－	－	やや著しい	口辺に黒斑あり
20	－								横ヘラケズリ	ヘラケズリ?		－	－	やや著しい	
21	12－1	横ナデ	ハケ目	ハケ目			ヨコナデ	タテヘラケズリ	ヘラケズリ			－	－	あまり進行してない	
22	12－2						ロクロ痕	タテヘラケズリ	ヘラケズリ			－	－	あまり進んでいない	内側口辺～胴土にカーボン付着
23	12－3		ハケ目	ハケ目				ヘラケズリ	ヘラケズリ			－	－	－	
24	－	横ナデ	ヘラ横ナデ				横ナデ	ロクロ痕				－	－	あまり進行してない	内外体部にカーボン付着
25	－	横ナデ	無文圧痕	〃			ロクロ状ナデ	平行タタキ目ゴザ目状タタキ	〃			－	－	少ない	底部切離技法その他

FC09住居跡

実測図番号	写真番号	内面調整 口辺部	内面調整 体部上半	内面調整 体部下半	内面調整 底部	内面調整 脚部	口辺部	外面調整 体部上半	外面調整 体部下半	外面調整 底部	外面調整 脚部	内	外	磨滅	底部切離技法・その他
23－1	13－8	横ヘラミガキ	放射状ヘラミガキ	〃	〃		ロクロ痕		横ヘラケズリ	ヘラケズリ		○	－	やや著しい	回転糸切り?
2	14－5	平行ヘラミガキ		放射状ヘラミガキ	〃		ロクロ痕	手持ちヘラケズリ	〃			○	－	やや著しい	回転糸切り
3	14－7	横ヘラミガキ					ロクロ痕			手持ちヘラケズリ		○	－	著しい	回転糸切り
4	14－6	横ヘラミガキ		放射状ヘラミガキ	放射状ヘラミガキ		ロクロ痕		手持ちヘラケズリ	〃		○	－	やや著しい	回転糸切り
5	14－9						ロクロ痕					○	－	やや著しい（内面）	回転糸切り
6	14－4		横斜めヘラミガキ		放射状ヘラミガキ		ロクロ痕		手持ちヘラケズリ	〃		○	－	やや著しい	回転糸切り
7	14－13	横ヘラミガキ	やや斜め横ヘラミガキ		放射状ヘラミガキ		ロクロ痕		手持ちヘラケズリ	〃		○	－	若干進行	回転糸切り
8	14－15	横ヘラミガキ	斜め横方向ヘラミガキ	放射状ヘラミガキ	〃		ロクロ痕		手持ちヘラケズリ	〃		○	－	やや進行	回転糸切り
9	14－11	横ヘラミガキ	〃	〃	放射状ヘラミガキ							○	－	やや進んでいる	回転糸切り
10	－	ヘラミガキらしい					ロクロ痕	〃		糸切り		?	－	著しい	回転糸切り
11	14－10						ロクロ痕		ヘラケズリ			○	－	著しい	回転糸切り
12	－	横ヘラミガキ	?	?	?				ヘラケズリ	〃		○	－	著しい	回転糸切り
13	14－3						ロクロ痕		手持ちヘラケズリ	糸切り切りっぱなし		○	－	著しい	回転糸切り
14	－	横ヘラミガキ					ロクロ痕		手持ちヘラケズリ	〃		○	－	やや著しい	回転糸切り
15	14－1	横ヘラミガキ		放射状ヘラミガキ	〃				手持ちヘラケズリ	〃		○	－	著しい	回転糸切り
16	14－2	横ヘラミガキ					ロクロ痕		手持ちヘラミガキ	糸切り		○	－	著しい	回転糸切り
17	14－8	横ヘラミガキ	磨滅	磨滅	放射状ヘラミガキ		ロクロ痕		手持ちヘラケズリ	〃　（磨滅）		○	－	著しい	回転糸切り
18	－	横ヘラミガキ										○	－	著しい	回転糸切り

実測図番号	写真番号	内面調整 口辺部	内面調整 体部上半	内面調整 体部下半	内面調整 底部	内面調整 脚部	外面調整 口辺部	外面調整 体部上半	外面調整 体部下半	外面調整 底部	外面調整 脚部	内	外	磨滅	底部切離技法・その他
24－1	－								ヘラケズリ？			○	－	著しい	回転糸切り
2	14$^{16}_{12}$	横ヘラミガキ		放射状ヘラミガキ	〃		ロクロ痕		回転ヘラケズリ	〃		○	－	若干進行している	回転糸切り
3	18－14	横ヘラミガキ	斜め横ヘラミガキ	〃	放射状ヘラミガキ		ロクロ痕	〃		糸切り 切りっぱなし		○	－	やや進行	回転、静止糸切り？
4	14－	横ヘラミガキ	？	？			ロクロ痕	？		糸切り 切りっぱなし		○	－	かなり著しい	回転糸切り
5	13－12	ロクロ痕	〃				ロクロ痕	〃		糸切り 切りっぱなし		－	－	－	回転糸切り
6	13－11	ロクロ痕	〃	〃			ロクロ痕	〃		糸切り 切りっぱなし		○	－	－	回転糸切り
7	13－12	横ヘラミガキ					ロクロ痕			糸切り 切りっぱなし		○	－	やや著しい	回転糸切り
8	14－6	横ヘラミガキ					ロクロ痕					○	－	著しい	回転糸切り
9	14－10			ロクロ痕	ロクロ痕				横～斜めヘラケズリ	ヘラケズリ		－	－	あまり進んでない	回転糸切り
10	13－13	ロクロ痕	〃				ロクロ痕	〃		糸切り 切りっぱなし		－	－	やや進行している	回転糸切り
11	13－9	ロクロ痕	〃	〃	〃		ロクロ痕	〃		糸切り 切りっぱなし		－	－	少々進行	回転糸切り
12	13－		ロクロ痕					ロクロ痕		糸切り 切りっぱなし		－	－	進行していない	回転糸切り
13	－	横ヘラミガキ					ロクロ痕			糸切り 切りっぱなし		○	－	やや著しい	回転糸切り
14	－	横ヘラミガキ					ロクロ痕					○	－	著しい	回転糸切り
15	13－7	横ヘラミガキ	磨滅	脱色			ロクロ痕	磨滅	脱、白	糸切り、付高台		○	－	著しい	回転糸切り
16	13－	横ヘラミガキ					ロクロ痕	〃				○	－	著しい	回転糸切り
17	－		ロクロ痕					ロクロ痕		糸切り痕		－	－	やや著しい	回転糸切り
18	－		ロクロ痕						ロクロ痕	糸切り 切りっぱなし		－	－	やや著しい	回転糸切り
19	－	横ヘラミガキ					ロクロ痕					○	－	やや進行	回転糸切り
20	－	横ヘラミガキ					ロクロ痕					○	－	やや進行	回転糸切り？
21	－	横ヘラミガキ										○	？	著しい	
22	13－5	横ナデ	横ヘラケズリ	？			横ナデ	タテヘラケズリ	？			－	－	少々	
23	13－	横ナデ	横ナデ				横ナデ	タテヘラケズリ				－	－	なし	
24	－	横ナデ	ヘラナデ？				横ナデ	タテヘラケズリ				－	－	－	
25	－	ロクロ痕					ロクロ目横ナデ	タタキ目				－	－	ごく少	
25－1	13－2	横ナデ、ロクロ痕	ハケ目	〃	指横ナデ タテハケ目		ロクロ痕、横ナデ	タテヘラケズリ	斜めヘラケズリ			－	－	著しい	
2	13－	ロクロ目横ナデ	横ヘラケズリ（ハケ目）				横ナデ	タタキ目				－	－	ごく少	
3	13－3		横方向指ナデ	〃	〃		横ナデ	ヘラケズリ	〃	木の葉底		－	－	著しい	木葉底
4	13－1	ロクロ痕	〃	〃			ロクロ痕	〃	〃	糸切り 切りっぱなし		－	－	ほとんど少ない	回転糸切り
5	13－4							ヘラケズリ	〃			－	－	やや著しい	ヘラ切り
26－1	13－	ロクロ痕	横ナデ	斜めナデ横ナデ			ロクロ痕	タテヘラケズリ	〃			－	－	極微	
27－1	－	横ヘラミガキ	？	？			横ヘラミガキ	ロクロ痕				○	－	著しい	回転糸切り？
2	－						ロクロ痕	〃				○	－	著しい	回転糸切り？
3	－		横ヘラミガキ	放射状ヘラミガキ			ロクロ痕					○	－	著しい(外)	回転糸切り
4	－	横ヘラミガキ		磨滅					手持ちヘラケズリ	〃　（磨滅）		○	－	著しい	回転糸切り
5	－	ロクロ痕	ロクロ痕				ロクロ痕	〃				－	－	ややあり	回転糸切り？
6	－		指ズレ痕				ロクロ痕					－	－	やや進んでいる	
7	－	横ハケ目					横ナデ	タテヘラケズリ				－	－	著しい	
8	－	磨滅	著しく不明	〃								－	－	著しい	
9	－											－	－	著しい	
10	－	ロクロ痕	〃				ロクロ痕	〃				－	－	あまり進行してない	回転糸切り
11	16－16	横ヘラミガキ			放射状ヘラミガキ		ロクロ痕	ミガキ	〃	〃		○	－	やや著しい	回転糸切り
12	－	横ナデ	横刷毛目					タテヘラケズリ				－	－	内部が著しい	
13	－	横ナデ、ロクロ痕					横ナデ、ロクロ痕	ヘラケズリ	〃			－	－	－	

実測図番号	写真番号	内面調整 口辺部	内面調整 体部上半	内面調整 体部下半	内面調整 底部	内面調整 脚部	外面調整 口辺部	外面調整 体部上半	外面調整 体部下半	外面調整 底部	外面調整 脚部	黒化処理 内	黒化処理 外	磨滅	底部切離し技法・その他
27－14	－	ロクロ痕横ナデ	横ナデ(指ナデ、カキ目？)				横ナデロクロ痕	タテヘラケズリ	〃			－	－	やや著しい	
15	－	横ナデ					横ナデ					－	－	やや著しい	回転糸切り？
16	－	横ナデ	？				横ナデ	タテヘラケズリ				－	－	やや著しい	

ＦＧ06住居跡

実測図番号	写真番号	内面調整 口辺部	内面調整 体部上半	内面調整 体部下半	内面調整 底部	内面調整 脚部	外面調整 口辺部	外面調整 体部上半	外面調整 体部下半	外面調整 底部	外面調整 脚部	黒化処理 内	黒化処理 外	磨滅	底部切離し技法・その他
31－1	－		横ヘラミガキ	〃			ロクロ痕			糸切り 切りっぱなし		○	－	著しい	回転糸切り
2	－	横ナデ								糸切り 切りっぱなし		○	－	やや著しい	回転糸切り
3	16－1	横ヘラミガキ		ヘラケズリ			ロクロ痕	〃	ヘラケズリ			○	－	やや著しい	回転糸切り
4	16－2	横ヘラミガキ		？					手持ちヘラケズリ	糸切り痕		○	－	著しい	回転糸切り
5	－	横ヘラミガキ						回転横ヘラケズリ	〃			○	－	著しい	回転糸切り
6	－	手づくり横ナデ	横刷毛目状ナデ	〃								－	－	－	
7	－	横ナデ	横ナデ(刷毛目？)				横ナデ	縦刷毛目				－	－	あまり進行してない	
8	－	不明					不明					－	－	著しい	
9	－	横ナデ	横ナデ	指ナデ	〃		ロクロ痕	縦ヘラケズリ	縦ヘラケズリ	〃		－	－	やや著しい	
10	－	横ナデロクロ痕	横ヘラナデ				横ナデロクロ痕	ヘラケズリ	縦ヘラケズリ	〃		－	－	著しい	
11	－	ロクロ痕	ヘラナデ					横ヘラナデ				－	－	外面やや著しい	
12	－						ロクロ痕	縦ヘラケズリ	〃			－	－	著しい	
13	16－3			ロクロ痕					ロクロ痕	糸切り 切りっぱなし		－	－	著しい	回転糸切り

ＦＩ50住居跡

実測図番号	写真番号	内面調整 口辺部	内面調整 体部上半	内面調整 体部下半	内面調整 底部	内面調整 脚部	外面調整 口辺部	外面調整 体部上半	外面調整 体部下半	外面調整 底部	外面調整 脚部	黒化処理 内	黒化処理 外	磨滅	底部切離し技法・その他
35－1	15－7	平行ヘラミガキ	放射状ヘラミガキ	〃	〃		ロクロ痕	〃	ヘラケズリ			○	－	少ない	回転糸切り
2	15－6	平行ヘラミガキ			放射状ヘラミガキ							○	－	やや著しい	回転糸切り
3	－								手持ヘラケズリ			○	－	著しい	回転糸切り
4	15－8	平行ヘラミガキ	－	放射状ヘラミガキ					ヘラケズリ			○	－	かなり進行	回転糸切り
5	15－3											○	－	著しい	回転糸切り
6	－								手持ヘラケズリ			－	－	やや著しい	回転糸切り
7	15－2									糸切り 切りっぱなし		－	－	やや進行	回転糸切り
8	15－12	ロクロ痕					ロクロ痕			糸切り 切りっぱなし		－	－	なし	回転糸切り
9	－	ロクロ痕					ロクロ痕					－	－	著しい	回転糸切り
10	15－13	ロクロ痕					ロクロ痕			糸切り 切りっぱなし		－	－	少ない	回転糸切り
11	15－10									糸切り 切りっぱなし		－	－	著しい	回転糸切り
12	－									糸切り 切りっぱなし		－	－	ほとんどなし	回転糸切り
13	15－9											－	－	やや著しい	回転糸切り
14	15－11	ロクロ痕					ロクロ痕					－	－	ほとんどなし	回転糸切り
15	15－1		菊花状タタキ目	〃	指ナデ 無文タタキ目			斜め方向平行タタキ目	〃	タタキ目丸底		－	－	あまり進行してない	
16	－	横ナデ	横指ナデ				横ナデ	タテヘラケズリ				－	－	著しい	
17	－	横ナデ	横ヘラナデ				横ナデ	ヘラケズリ				－	－	著しい	体部外側に黒斑あり
18	－	横ズレ	ヘラ状工具による横ナデ	〃			横ズレ	ロクロ痕	ロクロ痕			－	－	やや進行	鉄サビ状の付着物が口辺部－体上部にあり
19	－	横ナデ	横ヘラナデ				横ナデ	タテヘラケズリ	〃			－	－	－	やや口辺部が暗色化
20	－	ロクロ痕	タテヘラナデ				ロクロ痕	タテヘラケズリ				－	－	やや著しい	体上部三次的な炭素の吸着で黒化

実測図番号	写真番号	内面調整 口辺部	内面調整 体部上半	内面調整 体部下半	内面調整 底部	内面調整 脚部	外面調整 口辺部	外面調整 体部上半	外面調整 体部下半	外面調整 底部	外面調整 脚部	黒化処理 内	黒化処理 外	磨滅	底部切離し技法・その他
34－21	15－1					ロクロ痕						—	—	内面	
22	—	横ナデ				ロクロ痕 横ナデ	ヘラケズリ 巻き上げ痕					—	—	あまり進行してない	
23	—	横ナデ	タテ指ナデ			横ナデ	タテヘラケズリ	タテヘラケズリ				—	—	著しい	
24	—	横ナデ	横刷毛目			横ナデ	タテヘラケズリ					—	—	やや進行	体部上半に黒斑

ⅠH06住居跡

実測図番号	写真番号	内面調整 口辺部	内面調整 体部上半	内面調整 体部下半	内面調整 底部	内面調整 脚部	外面調整 口辺部	外面調整 体部上半	外面調整 体部下半	外面調整 底部	外面調整 脚部	黒化処理 内	黒化処理 外	磨滅	底部切離し技法・その他
39－1	—			放射状ミガキ		ロクロ痕						○	—	著しい	回転糸切り
2	—			不明			ロクロ痕	横ヘラミガキ				○	—	内面著しい	回転糸切り
3	—			不明			不		明			○	—	著しい	回転糸切り
4	—	横ヘラミガキ	〃		放射状ヘラミガキ		ロクロ痕	〃	〃			○	—	著しい	回転糸切り　黒の磨滅著しい
5	16－10	横ヘラミガキ	横ヘラミガキ	放射状ヘラミガキ	放射状ヘラミガキ		横ヘラミガキ	横ヘラミガキ	横ヘラミガキ		横ナデ	○	—	やや進行している	回転糸切り
6	16－9	横ヘラミガキ	放射状ヘラミガキ	〃	〃		横ヘラミガキ	〃	〃			○	—	やや著しい	回転糸切り
7	—	横ヘラミガキ	〃				不明	〃	〃	〃		○	—	著しい	回転糸切り
8	—	横ヘラミガキ		放射状ヘラミガキ	〃		横ヘラミガキ	〃				○	—	やや著しい	回転糸切り
9	16－4	横ヘラミガキ	〃	〃	〃	〃	横ヘラミガキ	〃	〃	糸切り痕	横ヘラミガキ	○	○	やや著しい	回転糸切り
10	—	ロクロ痕	ロクロ痕				ロクロ痕	ロクロ痕	糸切り 切りっぱなし	糸切り 切りっぱなし		—	—	著しい	回転糸切り
11	—	ロクロ痕	〃				ロクロ痕	〃		糸切り 切りっぱなし		—	—	著しい	回転糸切り
12	—											—	—	—	
13	—	ロクロ痕	斜めヘラミガキ	〃			ロクロ痕		手持ちヘラケズリ	〃		○	—	やや著しい	回転糸切り
14	—		ロクロ痕	〃				ロクロ痕	〃	糸切り痕回転手ズレ痕		—	—	あまり進行していない	回転糸切り
15	—		ロクロ痕					ロクロ痕		回転手ズレ痕		—	—	やや進行している	回転糸切り
16	—		ロクロ痕							回転手ズレ痕		—	—	著しい	回転糸切り
17	16－6	ロクロ痕	〃				ロクロ痕	〃		糸切り 切りっぱなし		—	—	やや進んでいる	回転糸切り
18	16－5	ロクロ痕					ロクロ痕			糸切り 切りっぱなし		—	—	やや進行している	回転糸切り
19	16－8	ロクロ痕					ロクロ痕					—	—	やや進行している	回転糸切り
20	—	ロクロ痕	ロクロ痕				ロクロ痕	ロクロ痕		糸切り 切りっぱなし		—	—	やや著しい	回転糸切り
21	—						ロクロ痕			糸切り 切りっぱなし		—	—	著しい	回転糸切り
22	—	横ナデロクロ痕	〃	〃			ロクロ痕	〃	〃	糸切り 切りっぱなし		—	—	やや進んでいる	回転糸切り
23	16－7	ロクロ痕	〃				ロクロ痕	〃		糸切り 切りっぱなし		—	—	著しい	回転糸切り
24	—				ロクロ痕							—	—	著しい	回転糸切り
25	—								ロクロ痕	糸切り痕		?	—	進んでない	回転糸切り
26	—	ロクロ痕	ロクロ痕				ロクロ痕	ロクロ痕		糸切り痕		—	—	進んでない	回転糸切り
27	—	ロクロ痕	ロクロ痕		指ナデ		ロクロ痕	ロクロ痕	タテヘラケズリ			—	—	著しい	
40－1	—	横ナデ	斜め刷毛目	斜めハケ目			横ナデ	タテヘラケズリ				—	—	著しい	巻き上げ痕　内外にあり
2	—		不明					不		明		—	—	著しい	
3	—	ロクロ痕	横ハケ目状ヘラケズリ	〃			ロクロ痕	ロクロ痕(横ナデ)				—	—	著しい	
4	—	横ナデ	不明				ヘラナデ	横方向ケズリ				—	—	やや著しい	
41－1	—	横ナデ	無文当て痕	?			横ナデ	縦縄目タタキ	?			—	—	進行していない	
2	—	指による横ナデ	タタキ目	タタキ目			横ナデ	縦縄目タタキ				—	—	少々	
3	—	ロクロ痕					ロクロ痕					—	—	やや進行している	

ＪＧ03住居跡

実測図番号	写真番号	内面調整 口辺部	内面調整 体部上半	内面調整 体部下半	内面調整 底部	内面調整 脚部	外面調整 口辺部	外面調整 体部上半	外面調整 体部下半	外面調整 底部	外面調整 脚部	黒化処理 内	黒化処理 外	磨滅	底部切離技法・その他
45－1	17－4	横ナデ	〃	〃			ロクロ目横ナデ	タテヘラケズリ	ヘラケズリ			－	－	あまり進んでいない	
2	17－5	横ナデ	横方行ヘラナデ	〃			ロクロ痕	タタキ、ヘラケズリ	ヘラケズリ			－	－	著しい	
3	－	横ナデ					横ナデ	タテヘラケズリ	ヘラケズリ	タテ、ナナメヘラケズリ		－	－	著しい	ヘラ切？
4	17－2	横ヘラミガキ	〃	放射状ヘラミガキ	〃		ロクロ痕	〃	手持ちヘラケズリ	糸切り痕		○	－	やや著しい	回転糸切り？
5	17－3	ロクロ痕	〃				ロクロ痕	〃		糸切り切りっぱなし		－	－	やや進行している	静止糸切り
6	18－7			ロクロ痕					ロクロ痕			－	－	外面著しい	内面と底部あまり進んでない　回転糸切り
7	17－1			指ナデ					タタキタテヘラケズリ	ヘラケズリ		－	－	進行してない	

ＪＩ50住居跡

実測図番号	写真番号	内面調整 口辺部	内面調整 体部上半	内面調整 体部下半	内面調整 底部	内面調整 脚部	外面調整 口辺部	外面調整 体部上半	外面調整 体部下半	外面調整 底部	外面調整 脚部	黒化処理 内	黒化処理 外	磨滅	底部切離技法・その他
49－1	－	ロクロ痕	〃				ロクロ目	〃		糸切り切りっぱなし		－	－	あまり進行しない	回転糸切り
2	－			ロクロ痕						糸切り切りっぱなし		－	－	やや進んでいる	回転糸切り
3	17－6		刷毛目	〃	指ナデ		ヘラケズリ	〃	〃			－	－	外側著しい	
4	17－7	横ヘラミガキ	横一斜めヘラミガキ	〃	放射状ヘラミガキ				手持ちヘラケズリ			○	－	やや進行している	回転糸切り
5	16－11	横ヘラミガキ	〃〃	？	？		ロクロ痕	〃	ヘラケズリ	〃		○	－	著しい	回転糸切り
6	16－12	ロクロ痕	〃	〃	〃		ロクロ痕	〃	〃	糸切り切りっぱなし		－	－	ほとんど進んでない	回転糸切り
7	17－9	ロクロ痕	〃	〃	〃		ロクロ痕	〃	〃	糸切り切りっぱなし		－	－	ほとんど進行してない	回転糸切り
8	17－8									糸切り痕		－	－	あまり進行行してない	回転糸切り
9	－	ロクロ痕	横ナデ、刷毛目	横ナデ、刷毛目				ヘラケズリ	ヘラケズリ			－	－	やや著しい	ヘラ切？
10	－	横ナデ	？	？	指ナデ		横ナデ	ヘラケズリ	〃	〃		－	－	著しい	
11	－		ロクロ痕	〃				ロクロ痕				－	－	－	

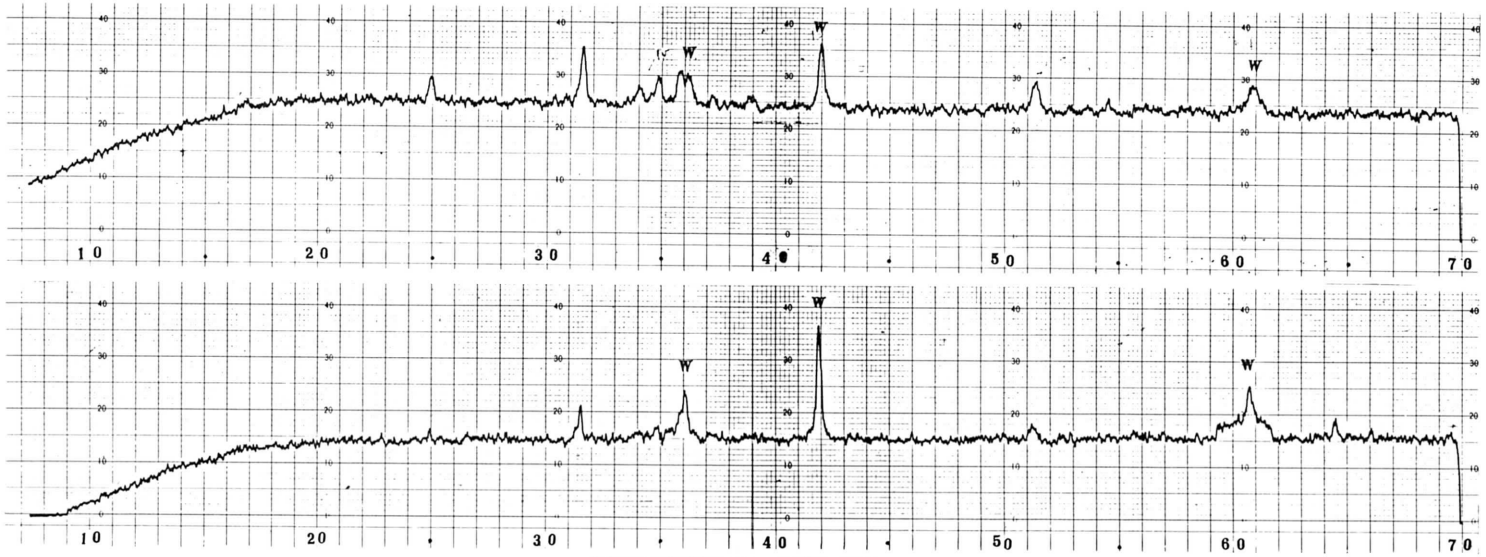
ＢＪ06ピット

実測図番号	写真番号	内面調整 口辺部	内面調整 体部上半	内面調整 体部下半	内面調整 底部	内面調整 脚部	外面調整 口辺部	外面調整 体部上半	外面調整 体部下半	外面調整 底部	外面調整 脚部	黒化処理 内	黒化処理 外	磨滅	底部切離技法・その他
54－1	16－14	横ヘラミガキ	〃				ロクロ痕		ヘラケズリ	〃		○	－	著しい	回転糸切り？
3	16－13	ロクロ痕	〃				ロクロ痕	〃				－	－	進行してない	回転糸切り
4	－	ロクロ痕					ロクロ痕					－	－	著しい	回転糸切り？
5	－	？	？	放射状ヘラミガキ（残分）	〃		？	？	手持ちヘラケズリ	〃		○	－	やや進行	
54－2	－	ロクロ痕	〃	〃			ロクロ痕	〃	〃	糸切り切りっぱなし		－	－	ほとんどなし	回転糸切り

各グリッド内

実測図番号	写真番号	内面調整 口辺部	内面調整 体部上半	内面調整 体部下半	内面調整 底部	内面調整 脚部	外面調整 口辺部	外面調整 体部上半	外面調整 体部下半	外面調整 底部	外面調整 脚部	黒化処理 内	黒化処理 外	磨滅	底部切離技法・その他
61－1	－	ロクロ目（横ナデ痕）	〃				ロクロ目（横ナデ痕）	〃				－	－	やや著しい	
2	－	ロクロ痕	手ズレ横ナデ				ロクロ痕					－	－	あまり進行してない	木葉底？
3	16－15	横ヘラミガキ		放射状ヘラミガキ	〃		ロクロ痕		手持ちヘラミガキ	〃		○	－	著しい	回転糸切り
4	－	横ヘラミガキ	斜メヘラミガキ	放射状ヘラミガキ	〃		ロクロ痕	〃	〃			○	－	やや著しい	回転糸切り？
5	16－11	横ヘラミガキ	不明				ロクロ痕	〃		糸切り痕回転手ズレ痕	付高台〃	○	－	著しい	回転糸切り
6	－	ロクロ痕								手持ちヘラケズリ		－	－	少々	ヘラ切り？（ヘラケズリのため不明）
7	－			ロクロ痕	〃				ロクロ痕	〃	付高台	－	－	著しい	回転糸切り
62－1	－		ロクロ痕					2耳つきロクロ痕	〃		削り高台	－	－	－	
2	－	横ナデ、カキ目	〃	〃			？	指ナデカキ目	？			○	○	著しい	
3	－			条線（摺溝）								－	－	やや進行	回転糸切り
4	－											－	－	やや進行	
5	－		花状文圧痕	平行沈線灰釉				無文一部灰釉	〃			－	－	あまり進行してない	
6	－		条線(摺溝)釉	〃				無文釉				－	－	－	

第26-1表　鉱滓のX線回折グラフ



X.Ray Diffractometer №

Specimen	№13
Target	Cu
Filter	Ni
Voltage	35kv
Current	10mA
Count Full Scale	2,000⁄s
Time Consant	2 sec
Scanning Spead	1 °/min
Chart Speed	1 cm/min
Divergency	1°
Receiving Slit	0.3mm
Detector	P.C
Date	54.7.20
Operator	M.Y
鉄滓 ;鴻ノ巣館遺跡	

X.Ray Diffractometer №

Specimen	№1
Target	Cu
Filter	Ni
Voltage	35kv
Current	10mA
Count Full Scale	2,000⁄s
Time Consant	2 sec
Scanning Speed	1 °/min
Chart Speed	1 cm/min
Divergency	1°
Receiving Slit	0.3mm
Detector	P.C
Date	54.7.4
Operator	M.Y
鉄滓 ;落合Ⅰ遺跡	

グラフのうち上は鴻ノ巣館遺跡、下は落合Ⅰ遺跡

岩手工業試験場

鴻ノ巣館遺跡ＡＦ03住居跡および落合Ｉ、宮地両遺土の鉱滓の成分分析を岩手県工業試験場に依頼したところ、第26-１.２表等に示す様な分析鑑定結果が得られた。

第26-２表　鉄滓の組成

検査法成分表 ＼ 遺跡名		落合Ｉ ＣＣ09溝	宮地 ＣＧ06住居跡	鴻ノ巣館 ＡＦ03住居跡
Ｘ線回折	Wustite	○	○	○
化学分析	FeO　酸化第一鉄	84.96%	72.52%	64.05%
	MnO一酸化マンガン	0.06	0.13	0.06
	SiO_2 二酸化ケイ素	8.43	14.52	22.25
	TiO_2 二酸化チタン	0.07	0.15	0.27
	C　炭素	0.15	0.11	0.05
蛍光Ｘ線分析による検出元素(微量)		Cr、Ca、K	Cr、Ca、K、Al、Ba、Sr	Cr、Ca、K、Al、Ba、Sr

落合Ｉ、宮地、鴻ノ巣館の試料共、大体同質のものであり、砂鉄等の原料に木炭を混ぜて製鉄する、タタラ吹法と呼ばれる方法で得られた鉄滓と思われる。Ｘ線回折によれば、その主成分はWustite(Feo)である。

※ウィスタイト〔英Wuestite 独Wustite〕
鉄の酸化皮膜中の内層にできるFeOの組成の固相に対して名づけられた名称。鉱物名ではない。ガンエン型構造の結晶格子をつくるが、Fe：Oの組成比は一定せず、化学分析にかかる程度のFe欠損を示すものもある。格子定数a4、30A、Fe1−xOのxの減少とともに格子定数も減少する（Fe47.68 原子%のものでa4.28A）酸素原子の立方の密なパッキングのまま酸化されると、$FeO \rightarrow Fe_3O_4 \rightarrow \gamma\text{-}Fe_2O_3$とスピネル型構造に変わる。

第27表　鴻ノ巣館遺跡出土遺物集計表（焼物類）

（注）表中の斜線部は集計作業の都合により記載を省略した事を示す

品種 / 出土地＼残存部	A I 口	A I 体	A I 底	A I 高台	A I 計	（A Iのうち内外黒）口	体	底	高台	計	A II 口	A II 体	A II 底	A II 高台	A II 計	A III 口	A III 体	A III 底	A III 高台	A III 計	A IV 口	A IV 体	A IV 底	A IV 高台	A IV 計	A群総計 口	体	底	高台	計	A a 口	A a 体	A a 底	A a 高台	A a 計	A I総計（含Aa）口	体	底	高台	計	B．C 口	B．C 体	B．C 底	B．C 計	D 口	D 体	D 底	D 高台	D 計	E 口	E 体	E 底	E 計
AF03住居跡	80	98	21		199						5	8	4		17	8	2	3		13	41	29	7		77						32	18	16		66						57	367	31	455						2	4		6
EJ53 〃		2	1		3																																						1	1									
FA06 〃	197	247	68	9	521						76	110	34		220						8	11	1	5	25						5	14	7		26						38	261	20	319									
FC09 〃	159	242	128	9	538						78	109	53		240	13	19	2		34	9	3	4		16							1			1						82	394	43	519						6	1	1	8
FG06 〃	17	29	10		56								1		1						2				2						3	7	2		12						23	127	6	156							1		1
FI50 〃	46	39	23		108						42	36	17	1	96							1			1																19	75	3	97									
IH06 〃	99	79	30		208						124	127	47	8	306						1				1																10	176	7	193	1			1	1	1			1
JG03 〃	5	3	1		9						5	3	2		10	1				1																																	
JI50 〃	2				2						15	4	2		21																										4	21	6	31									
JI53 〃	4	2	1		7																												1		1							1		1									
BJ06ピット			1		1																1				1																2	8	2	12									
CA03 〃	1				1																																					4		4									
EB03 〃												1			1																											2		2									
EC03 〃	1	1			2								1		1																										1	4	2	7						2	1		3
ED50 〃		1	1		2																																				1			1									
EJ50 〃		2			2																																														6		6
IJ06 〃		1			1							1	1		2																											1		1							6		6
BJ06 溝	4	2	2		8							1	3		4						1		1		2							2			2							2		2									
IJ53 〃	1	1			2							2			2																										1	16	4	21							9		9
LA06 〃	1		1		2								1		1																																				1		1
AD06グリッド	1				1																																					1		1									
AE03 〃		1			1						1	2			3																																				2		2
AE06 〃																																										8		8									
AF06 〃	4	2			6																																				1			1									
AI03 〃		1	1		2							1			1																											5	1	6								1		1
AJ06 〃																																										2	1	3									
BA50 〃																																																				1		1
BGH53 〃	2				2						2				2	1				1											2	1			3							1		1									
CB50 〃																																										1		1						1	4		5
CC50 〃	1				1							2			2																																				2		2
CD06 〃												2			2																										4	4		8									
CD50 〃																																																				1		1
CE03 〃																																									1	4		5									
CI50 〃																																																				3		3
CJ03 〃																																																				2		2
DB50 〃																																																				1		1
DC03 〃																																										1		1									
DC50 〃																																																				1		1
DD03 〃																																									1	6		7									
DJ03 〃	1				1	1																																					1	1									
EC53 〃																																										2		2									
ED03 〃			1		1																																																1		1
ED06 〃																																																						
EE06 〃		1			1																																																1		1
EE09 〃	3				3																																																1		1
EE56 〃																																										1	1	2									
EF03 〃																1				1																						1		1									
EG03 〃			1		1							1			1																																						1		1
EJ03 〃											1	2			3																											2	1	3									
FA50 〃	1	4	4		9																																					1		1									
FC50 〃																																1			1						2	4		6									
FC53 〃			1		1																																								1			1						
FD03 〃																																										2		2									
FD53 〃	1	1	1		3																										1				1							4		4									
GB03 〃		2			2																																					3		3									
GB53 〃																																																						
GD53 〃		1	2		3						1	3			4																											1		1									
IA03 〃																																										1		1									
ID53 〃																																																				1		1
IE50 〃																																									2	1		3									
IF03 〃													1		1																										2	3		5									
IF50 〃																																										2		2									
JB03 〃													1		1																											1		1									
JB06 〃			1		1																																																1		1
JD03 〃			1		1																																					1	1	2									
JJ53 〃																						1			1																											1		1
KA53 〃		1			1																																					1		1									
MC53 〃	1	1	1		3							2	2		4																1				1																			
MI50 〃		1			1																																					1		1									
F区各地																																										1	1	2									
出土地不明粗		1	1		2																	1			1																	1		1									
出土地不明(E-146)	8	14			22						1	2			3						1	1			2																6	36	2	44									
	640	780	303	18	1,741						351	419	170	9	949	24	21	5		50	64	45	15	5	129						42	45	27		114						257	1,561	134	1,952	1	1			2	9	6	1	16

品種 / 出土地＼残存部	F I 口	F I 体	F I 底	F I 計	F II 口	F II 体	F II 底	F II 計	F I～IV 口	F I～IV 体	F I～IV 底	F I～IV 計	F群 総計 口	体	底	計	G－IV 口	G－IV 体	G－IV 底	G－IV 計	I 合計	I 口	I 体	I 底	I 計	J 口	J 体	J 底	J 計	K 口	K 体	K 底	全計
AF03住居跡									7	62	1	70					2			2													905
EJ53 〃										2		2																					6
FA06 〃										2		2																					1,113
FC09 〃									2	43	3	48										1			1	1	1		2				1,407
FG06 〃										4		4						1		1													233
FI50 〃										16	1	17																					319
IH06 〃									3	14		17																					726
JG03 〃										4	1	5																					25
JI50 〃									1			1																					55
JI53 〃																																	9
BJ06ピット										4		4																					18
CA03 〃										2		2																					7
EB03 〃									2	1		3																					11
EC03 〃																																	4
ED50 〃										6		6																					8
EJ50 〃										6		6																					9
IJ06 〃																																	5
BJ06 溝										9		9																					46
IJ53 〃										1		1																					5
LA06 〃																																	4
AD06グリッド										2		2																					3
AE03 〃																																	12
AE06 〃																																	1
AF06 〃										1		1																					13
AI03 〃																																	6
AJ06 〃											1	1																					1
BA50 〃									1	4		5																					9
BGH53 〃										2		2																					8
CB50 〃										1		1																					1
CC50 〃																																	11
CD06 〃										1		1																					3
CD50 〃										3		3																					8
CE03 〃										2		2																					2
CI50 〃										1		1																					1
CJ03 〃																																	1
DB50 〃										1		1																					1
DC03 〃										1		1																					7
DC50 〃																																	1
DD03 〃																																	2
DJ03 〃																																	1
EC53 〃																																	2
ED03 〃										1		1																					1
ED06 〃										1		1																					1
EE06 〃										1		1																					2
EE09 〃										1		1																					6
EE56 〃									1	1	1	3																					4
EF03 〃										1		1																					2
EG03 〃																																	5
EJ03 〃										1		1																					5
FA50 〃										1		1					1	1		2													19
FC50 〃										1		1																					2
FC53 〃										1		1																					4
FD03 〃										1		1																					5
FD53 〃																																	7
GB03 〃																																	2
GB53 〃										1		1																					2
GD53 〃																																	8
IA03 〃										1		1																					1
ID53 〃										1		1																					4
IE50 〃																																	5
IF03 〃																																	3
IF50 〃																																	1
JB03 〃										1		1																					2
JB06 〃																																	1
JD03 〃										1		1																					4
JJ53 〃																																	1
KA53 〃																																	1
MC53 〃																																	8
MI50 〃																																	2
F区各地										1		1																					3
出土地不明粗										2		2																					6
出土地不明(E-146)									1	7		8																					79
									18	219	8	245					3	2		5		1			1	1	1		2				5,206

以上の他に平安時代の遺物として、土錘－ＡＦ03住居跡２、ＦＡ06住居跡１、ＦＣ09住居跡12、ＦＧ06住居跡１、ＦＩ50住居跡15、フイゴ羽口－ＡＦ03住居跡１、ＪＧ03住居跡１、Ｆ区１、鉄器－ＡＦ03住居跡15、ＦＡ06住居跡４、ＦＣ06住居跡４、ＦＩ50住居跡２、ＩＨ06住居跡４、ＪＧ03住居跡２、ＪＩ50住居跡１、遺構外７、砥石－ＡＦ03住居跡１、ＪＩ50住居跡１、ＪＩ53住居跡１、ＭＤ503ピット１、（但し疑わしい）、銅製品－遺構外４、石片３、炭化米－ＦＣ09住居跡１、炭化野桃種子－ＩＨ06住居跡１、骨片－ＩＨ06住居跡１、鉱滓はＡＦ03住居跡、ＦＡ06住居跡、ＦＣ09住居跡、ＪＧ06住居跡およびＦ区、Ｉ区の各グリッド内より出土している。近世以降の陶磁片はＥ、Ｆ、Ｌ、Ｍ各区のグリッドおよびＥＩ50ピット内より合計17点出土している。（焼物類の破片数は明らかに接合するものについては片数にかかわらず１片として扱った。）

高畑遺跡（たかばたけ）

遺跡記号：ＴＢ

所在地：稗貫郡石鳥谷町字五大堂第16地割62－１他

調査期間：昭和49年10月25日～12月20日

調査対象面積：2,720㎡

平面測量基準点：東京起点 462,444km（ＧＡ50）

基準高：海抜 43.70m

Ⅰ．遺跡の位置と環境

1．立地と現状

高畑遺跡は石鳥谷町字五大堂地内に所在し、石鳥谷町の中心部より直線にして南々東約8km花巻市の中心街よりは北東約 6.5km程に位置しており、国鉄釜石線矢沢駅の北約 2.5kmの地点、県道矢沢二枚橋線の西に隣接する。

石鳥谷町は岩手県の中央部、稗貫郡の西部にあたり、東西約49.5km、南北約17.5kmと東西に長い区画を有し、118.22km²程の面積をもっている。

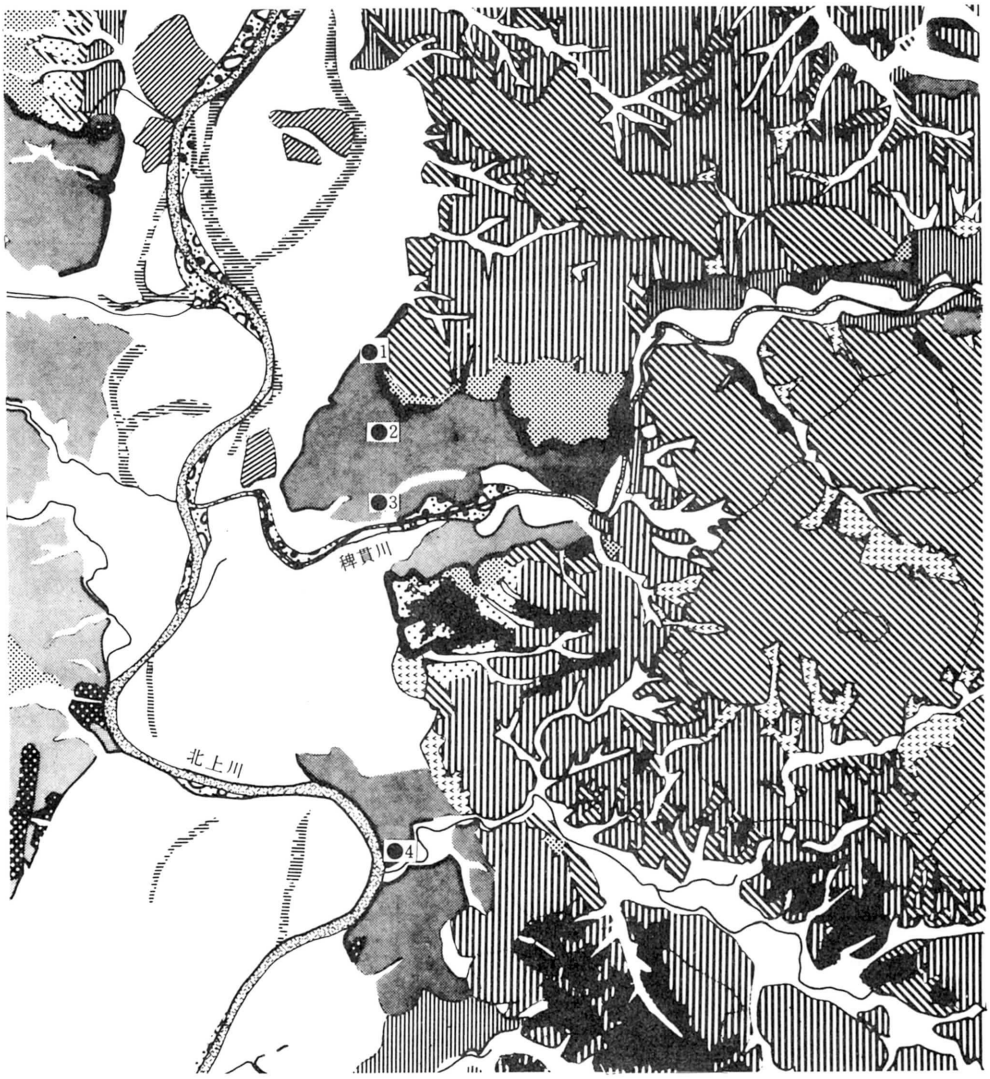
地形的には、東部の北上山地と西部の奥羽山脈とにはさまれた北上平野のほぼ中央部に位置し、北上川とその支流による冲積面とほぼ平坦に広く分布する段丘面とからなる。町の中央部を国鉄東北本線および国道4号線が貫通し、やや東寄りを北上川が南流する。

東北新幹線は北上川の東岸、北上山系丘陵地帯の西側を南北に縦断する。新幹線に関係する遺跡は町内においては4遺跡調査されており、北より幅遺跡、大曲遺跡、大明神遺跡、それに高畑遺跡となっている。これらの遺跡はすべて北上川に注ぐ支流の河川によって形成された段丘上に立地する。

北上川の左岸[注1)]では、北上山地に源流をもつ数本の河川が、山地、丘陵地からの出口付近にやや顕著な段丘を形成しており、特に稗貫川、添市川の両岸にその発達をみる。こうした比較的大きな河川の出口付近に発達する段丘は、そのほとんどが平坦な低位の段丘面であり、小規模ながら比較的広範囲に分布する。そのほか支流沿いにも、小面積の低位段丘が点在する。中位段丘はそのまま河岸段丘面として断片的に分布し、山側は麓屑面などの緩傾斜地となっている場合がある。

これに対して北上川の右岸[注2)]では、急峻で起伏の大きな奥羽山脈より流入する河川は、その勾配が急であり、段丘は扇状地性の台地として発達している。少なくとも新旧の異なる3段以上に分類され、特に中位、低位の段丘が広面積を占めて保存される。

以上のように北上川の左岸の段丘は小規模な河岸段丘面として残され、一般にその発達は不良であり、北上川の右岸に広く発達する段丘との対称性はあまり認められない。石鳥谷町内の新幹線に関連する遺跡のうち、幅、大曲、大明神の3遺跡は稗貫川によって形成された段丘上に乗り、高畑遺跡は添市川によって形成された段丘上に立地する。いずれも低位の段丘に比定される。

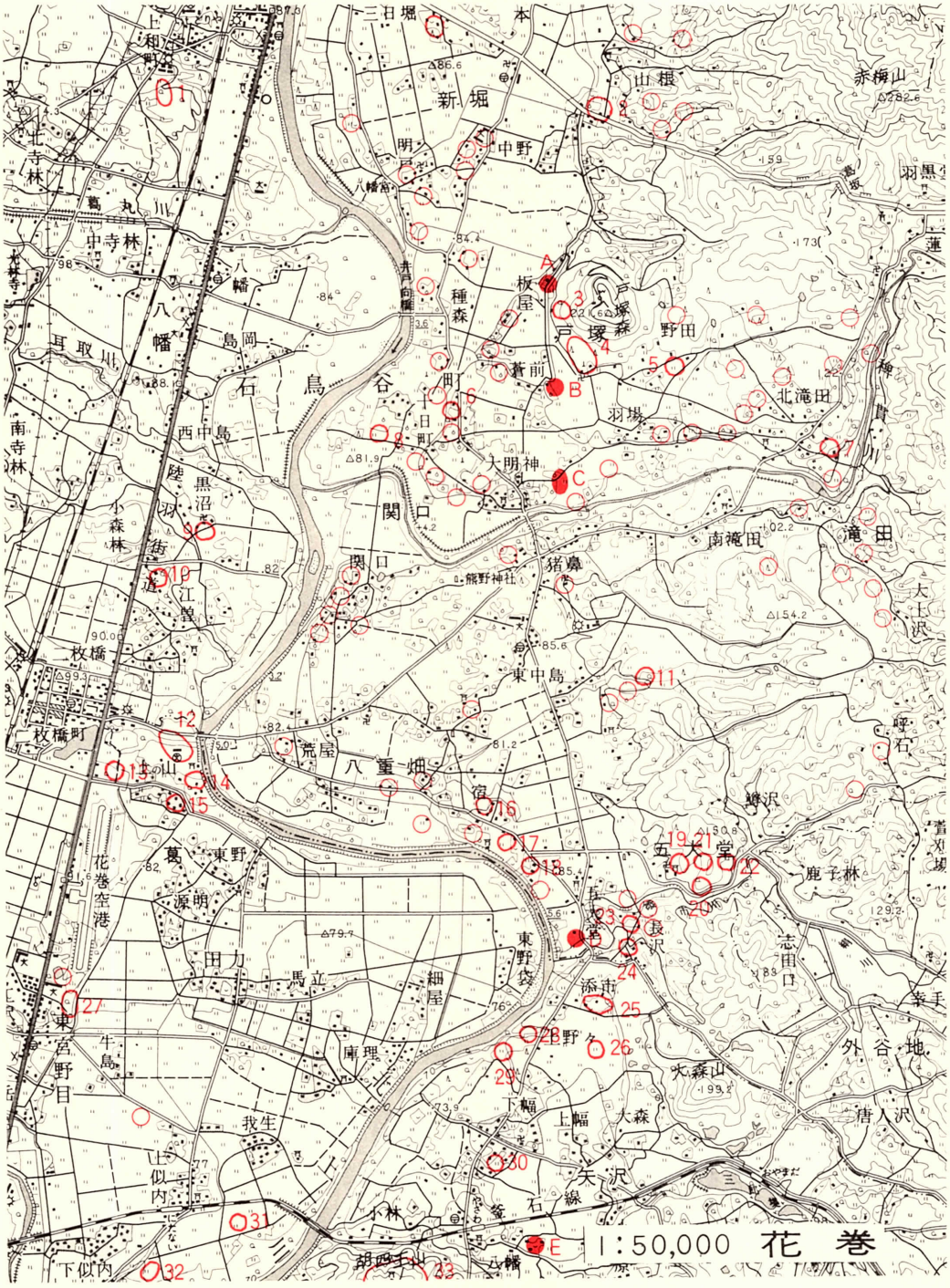


1.幅遺跡　2.大曲遺跡　3.大明神遺跡　4.高畑遺跡

0　2 km

山地および丘陵地急斜面
丘陵地
扇状地
高位段丘
中位段丘
低位段丘
沖積台地
河岸低地
自然堤防
旧河道
河　原
人工改変地
崖
川

第1図　石鳥谷地区地形分類概念図



A. 巾遺跡　B. 大曲遺跡　C. 大明神遺跡　D. 高畑遺跡
E. 八幡遺跡（A. B. C. Eの各遺跡は第Ⅲ分冊収録）

第2図　遺跡の位置と周辺の遺跡

高畑遺跡

添市川は大迫町の上小山田に源をもち、鷹巣山丘陵を開折して西流し、高畑遺跡の南西0.2km付近で北上川に合流する。延長約11.4kmで、合流点付近では花巻市との境界をなしている。河川の出口付近では左右の両岸に段丘が発達し、遺跡の乗る右岸の段丘は比較的広面積を占める。

遺跡付近の現状は、宅地や畑地、水田等となっているが、そのうち水田が広い面積を占めている。かつてはそのほとんどが畑地であったが、昭和34年度の団体営非補助農地造成事業にともなって水田化され、遺跡周辺も一部を除いてはかなりの削平を受けて旧地形が幾分変容している。遺跡の地目は現在、果樹園と水田になっており、標高は保存状態の良い果樹園で約83.4m、削平の最も少ない北側水田面で83.0mを測り、南側水田面とは約1mの比高をもつ。西側水田は約1m程の落差をもって階段状に下がる。なお、遺跡の南約0.1km程の地点を流れる添市川との比高は12.0～12.5mを測る。

なお、第1図の地形分類概念図は岩手県企画開発室発行の北上山系開発地域土地分類基本調査『花巻』を参照した。

2．周辺の遺跡

現在石鳥谷町内での周知の遺跡として登録されているのは、36個所を数えるが[注3)]最近の分布調査の実施により、周知の遺跡に数倍する遺跡が発見されている。[注4)]。

北上川左岸に限って周知の遺跡をみていくと、縄文時代のものとしては、野沢川遺跡、七ツ森遺跡、大川原館遺跡、宿遺跡、長沢遺跡、安堵屋敷遺跡など多くの遺跡があり、弥生時代の遺物を出土する遺跡には、大明神遺跡[注5)]がある。平安時代に属するものとしては島遺跡、手塚遺跡、寺場遺跡、光勝寺遺跡などがある。また館跡が多く残っていることにも特色があり、八重畑館、すみこ館、新堀館、赤口館、関口館、笹原館、大川原館、猪鼻館などの中世以降の館跡が知られている。

量的には縄文時代の遺跡が多くを占めており、平安時代のものはやや少ない。北上川左岸のこれ等の遺跡を占地、地形環境から、立地の関係を概観すると縄文時代の遺跡はほとんどが段丘上に立地し、特に稗貫川沿いや、添市川と北上川の合流点周辺部および添市川沿いに集中する。平安時代の遺跡はややばらつきがみられ、段丘上に立地するものと河岸低地上の自然堤防や微高地状の沖積台地などに立地するものとに分かれる。

なお、行政区は異なるが高畑遺跡と添市川をはさむ花巻地区には、縄文時代の添市遺跡、平安時代の古堂遺跡、下巾遺跡などが知られ、新幹線関連遺跡として八幡遺跡[注6)]が調査されている。

第1表　周辺の遺跡地名表

番号	遺跡名	時期	番号	遺跡名	時期
1	北向い古墳群		18	ジャノメリ遺跡	平安
2	侍中館遺跡	中世	19	光勝寺鐘楼跡	平安(？)
3	島遺跡	平安	20	すみこ館遺跡	中世
4	野沢川遺跡	縄文（後、晩期）	21	光勝寺本堂跡	平安(？)
5	戸塚遺跡	平安	22	寺場古塚遺跡	平安
6	七ツ森遺跡	縄文	23	長沢遺跡	縄文（晩期）
7	大川原館遺跡	縄文（前、中期）	24	安堵屋敷遺跡	縄文（晩期）
8	十日市古墳群		25	添市古墳	
9	江曽遺跡	縄文	26	添市遺跡	縄文（中、後、晩期）、弥生
10	江曽一里塚	江戸	27	十三塚	
11	猪鼻遺跡	縄文	28	添市館遺跡	中世
12	佐渡川古墳群		29	古堂遺跡	平安
13	万八丁遺跡	平安	30	下巾遺跡	奈良、平安
14	上ノ山遺跡	縄文（前、中期）、平安	31	上似内遺跡	平安
15	山ノ神遺跡	縄文（前期）	32	下似内遺跡	平安
16	宿遺跡	縄文（中、晩期）	33	胡四王山遺跡	平安
17	八重畑館遺跡	中世			

注1）　岩手県企画開発室（1976）　『花巻』北上山系開発地域土地分類基本調査

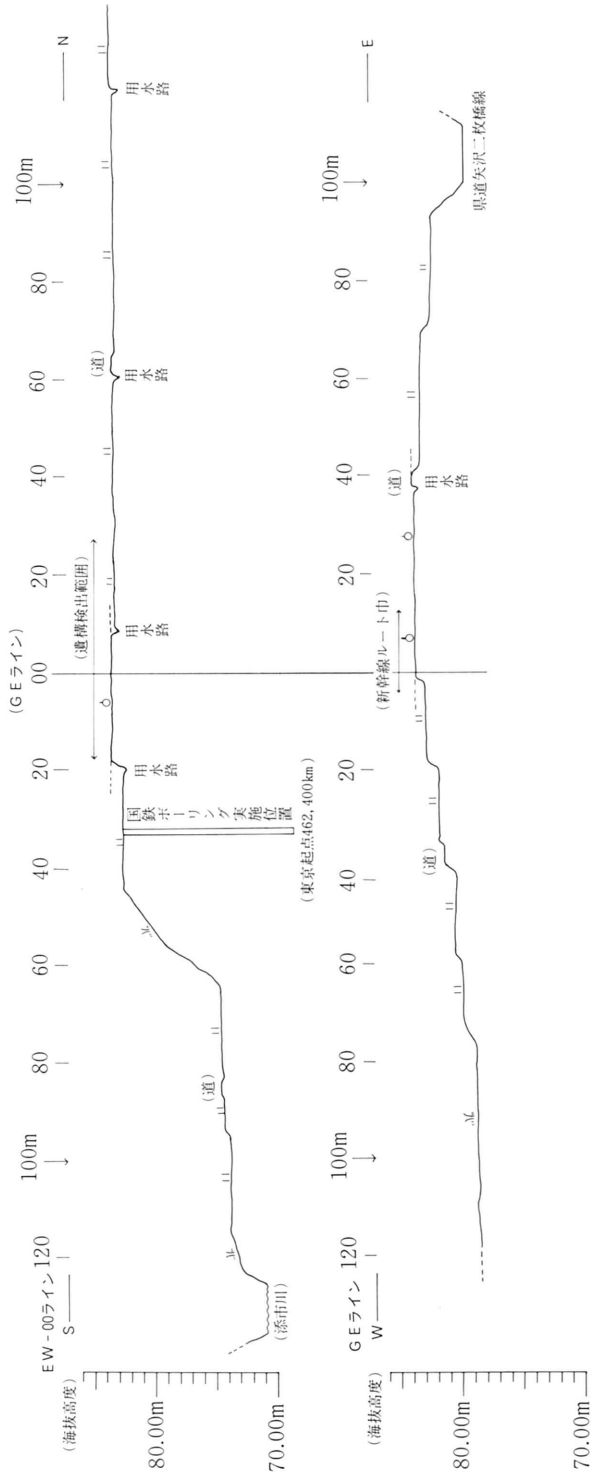
注2）　中川久夫ほか　（1963）　「北上川中流沿岸の第四系および地形」『地質学雑誌』第69巻812号

注3）　昭和52年1月31日現在で作成した「新遺跡地名表」（文化課保管）による。

注4）　昭和53年10月に石鳥谷町の左岸地区を対象に分布調査を実施した。その結果を第2図には遺跡の位置みを記載しており、第1表には遺跡名を表示していない。

注5）　岩手県教育委員会（昭54）　東北新幹線関係埋蔵文化財調査報告書II（岩手県文化財調査報告書第34集）

注6）　注5）に同じ



第３図　高畑遺跡立地模式断面図

II．調査の方法と経過

1．調査の方法

本遺跡は昭和34年度に実施された農地造成事業の際、若干の遺物出土をみてから遺跡の予想はされていたものの認知までには至っていなかったが、東北新幹線工事建設事業に伴って実施した昭和47年の路線敷内の遺跡分布調査の際、正式に確認され登録されたものである。

調査はグリッド方式を基本にした。グリッドの設定にあたっては、旧地形の変容が比較的少ない果樹園部分を中心に考慮し、新幹線の中心杭東京基点462.400 kmと462.460 kmの二点を結ぶ直線とその延長を遺跡の中心軸に定め、 462.444kmの地点を遺跡の基準点（Ｂ．Ｐ）とし、この地点をＧＡ50と名づけた。このＧＡ50を基点として、30m単位に北へＡ～Ｆの５ブロック、南にＨブロックを設定し、一辺３ｍのグリッドを定めた。

調査はＧブロックの果樹園とＥ、Ｈブロックの水田部分は３×３ｍ、Ａ～Ｆブロックは３×６ｍの市松状に表土を除去し、遺物の有無の確認、遺構の探索に努めた。その結果Ｆブロック南半分とＧブロックは全面発掘となった。

2．調査の経過

調査は路線敷内2,720㎡を対象に昭和49年10月25日から12月20日まで行なった。10月25日から28日までは調査地内の雑物撤去とグリッド設定にかかわる測量を実施し、29日より粗掘り作業に着手した。

遺跡はＧ区の果樹園部分を除いては、農地造成時の開田に伴って削平されているので、遺物分布の範囲確認も含めて、Ｆ、Ｇ、Ｈの３ブロックの粗掘りを同時に着手した。その結果、遺構、遺物共にＦ～Ｇブロックに集中している事が判明したので、調査はこの部分に集中した。

調査期間が降霜期に入っていたため、種々の困難が伴った。特に前半は11月初旬に降雪がある等天候不順に悩まされ、12月に入ってからは度々の降雪で、除雪に大半を費した日もあった。また、強風を防ぐための施設を設ける等して調査を進め、12月20日調査を終了した。

なお、冬期間に図面、写真等の第一次整理点検を実施し、49年４月21日～26日まで補足調査を実施した。

Ⅲ. 調 査 の 結 果

1．遺跡の基本層序

遺跡の基本的層序を把握するため、段丘上の路線敷内に深掘りを実施した。深掘りは遺構との重複を考慮しながら、ＦＡ53（水田面）、ＧＣ56（果樹園）それにＨＤ53（水田面）グリッドの３カ所に設定した。しかしＨＤ53グリッドでは浸透水や壁面の崩壊等により、土層観察が困難であった。従ってここではＦＡ53とＧＣ56グリッドの２カ所で土層観察をおこなった。結果は第５図に示すとおりである。

第Ⅰa層：黒褐色（7.5YR 3/2）土。耕作土で果樹園（リンゴ畑）に利用されている。木 根多く層厚は10～15cmを測る。施肥や抜根のための穴が随所にみられる。

第Ⅰb層：黒色（ 7.5YR 2/1）土。粘土質シルト。黒ボクで構成され、層厚20～30cmを測る。草根が多く混入し、炭化物、焼土粒を包含する。遺物出土層である。

第Ⅰc層：褐色（7.5YR 4/4）土。粉状雲母含みの粘土質シルト。５～10cmの層厚を測り、漸移層である。

第IIa層：褐色（7.5YR 4/6）土。粉状雲母を含むシルト質粘土。層厚５～10cmを測り、無遺物層。

第IIb層：明褐色（10YR 5/6）土。シルト。20～25cmの層厚を測る。

第IIIa層：にぶい黄褐色（10YR 5/4）の砂層。以下砂層で60～80cmの層厚を測る。

第IIIb層：IIIaよりは若干細かい褐色（10YR 4/6）の砂層で、褐色（10YR 4/4）の色調を呈する砂層を帯状に挟在する。

第IIIc層：IIIaに褐色（10YR 4/6）の色調を呈する粘土を帯状またはレンズ状に挟在する。

第Ⅳ層：褐色（10YR 4/4）土。粘土。

第Ⅴ層：にぶい黄褐色（10YR 5/3～5/4）土。砂質シルト。

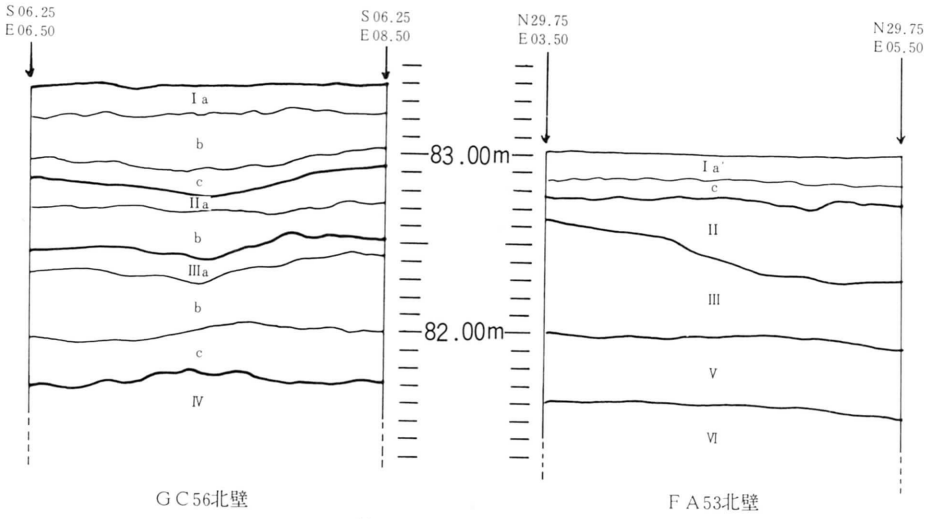
第Ⅵ層：砂礫層。

遺物の出土層はⅠaとⅠb層に限られ、Ⅰb層からはかなりまとまって出土する。従ってⅠb層が当時の生活面であり、遺構の掘り込み面もこの層であると考えられる。しかし明確なかたちでの検出はⅠc層またはIIa層の上面なっている。現在果樹園として利用されている北側の水田面では昭和34年度の農地造成時にⅠb層まで削平されている。

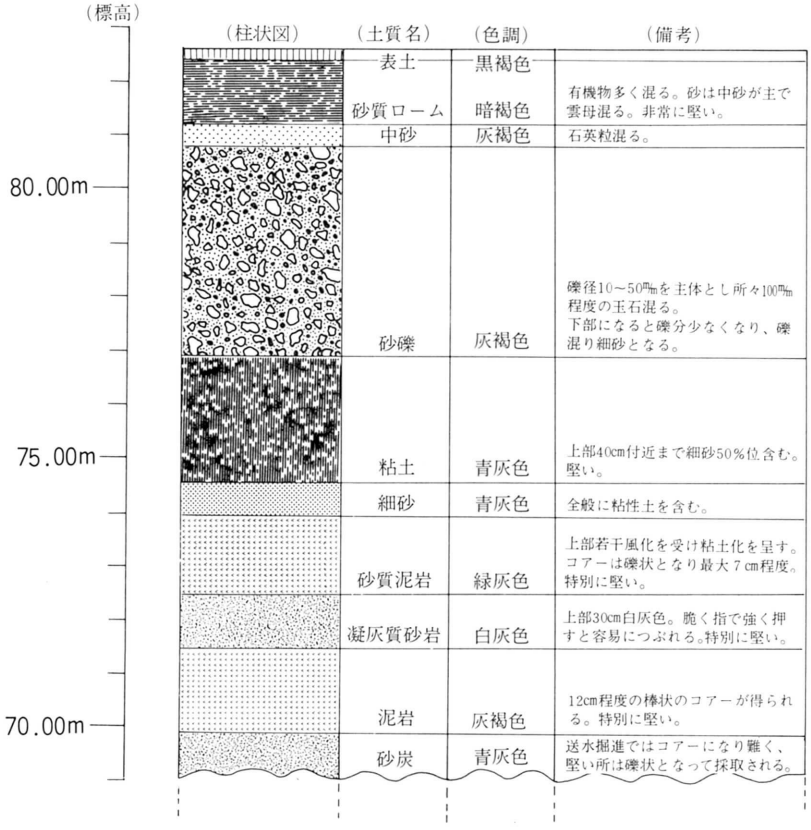
なお、本調査区域内で国鉄の実施した土質ボーリング結果は第６図のとおりである。[注1)]

注１）　株式会社菅基礎
日本国有鉄道盛岡工事局（昭48）　東北新幹線東京起点 自462Ｋ400Ｍ 至465Ｋ870Ｍ 間地質調査

第4図　高畑遺跡グリッド配置図



第５図　土層断面図



注 ボーリング地点　東京起点462,400km
孔口標高　82,735m

第６図　土質ボーリング柱状図

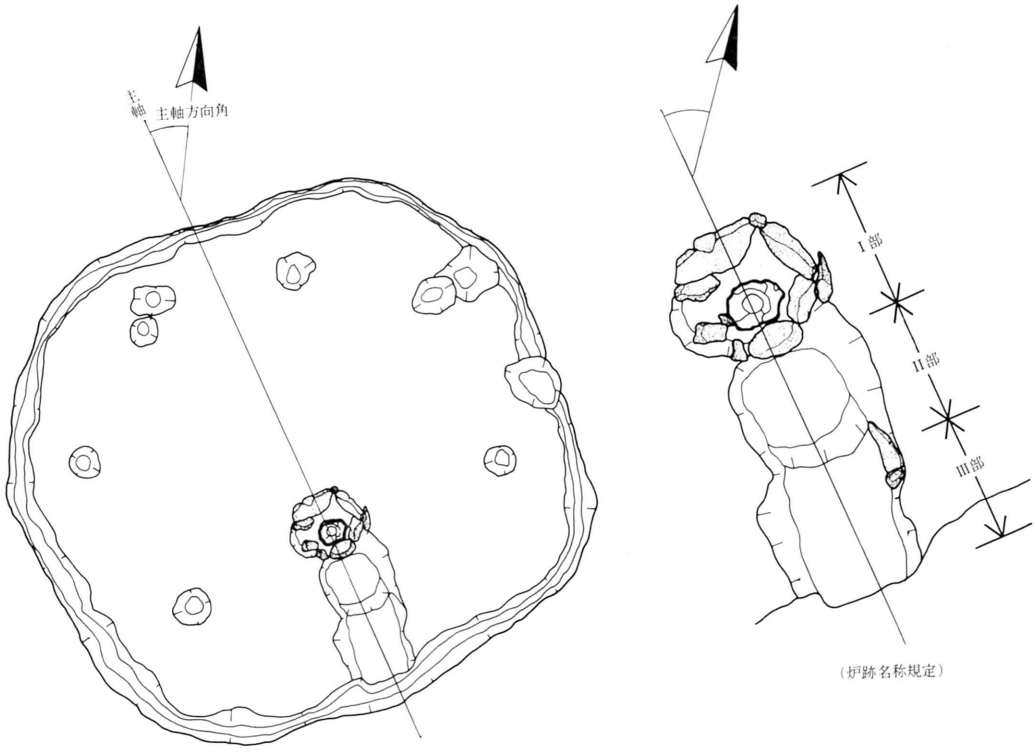
2．発見された遺構と遺物

〈報告に際して〉

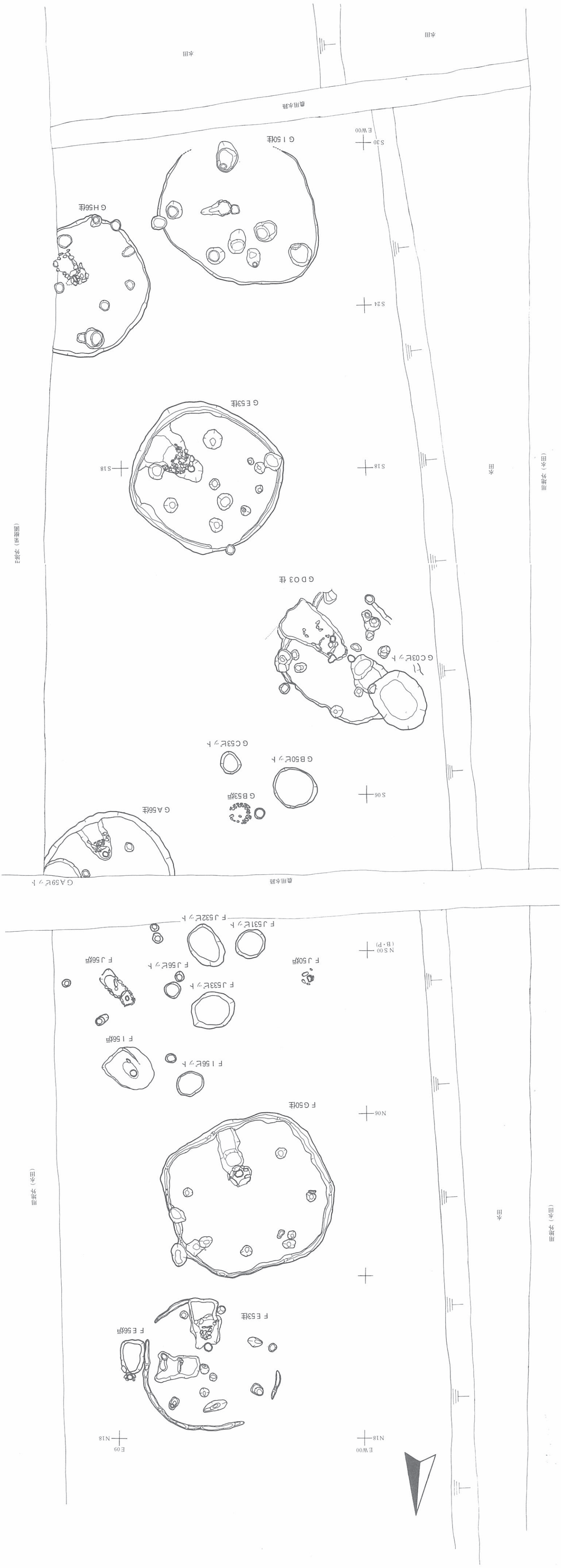
本項では個々の遺構とそれらに伴う出土遺物とを合わせて記述し、遺構と出土遺物との関係等をできるだけ関連づける様に努めた。遺構の記述に当っては細部名称や計測方法は大概従来の方法を踏襲したが、炉跡はその構造に遺構毎のバラエティが見られ、画一的な名称は使用できないため、次の様に名称規定した。従来『土器埋設部』『石組み部』等の名称で呼ばれていた個々の部分を住居跡の中心方向から壁方向（前庭部）へ向けてⅠ部、Ⅱ部、Ⅲ部とする（第7図の例参照）。 Ⅰ部、Ⅱ部の別は構造や機能が変化したと思われる個所を部分化したもので、これらの部分の構造上の記述に当っては『土器埋設』『土器埋設＋石組み』等の名称を使用した。また住居跡の方向は炉跡の中軸線の方向を持って主軸方向とし、住居跡の計測もこれに従って主軸長、幅を計測した。

遺構、遺物の図版作成に当ってはできる限り縮尺を統一し、次の通りとした。

遺構実測図……$\frac{1}{40}$



第7図　遺構模式図



EW00
N18
E09
N18
F E53住
F E56炉
F G50住
N06
F I 56ピット
F I 56炉
F J533ピット
F J56ピット
F J56炉
F J50炉
NS00
(B・P)
F J531ピット
F J532ピット
農用水路
G A59ピット
G A56住
S06
G B53炉
G B50ピット
G C53ピット
G C03ピット
G D03 住
S18
G E53住
S18
S24
G H56住
S30
EW00
G I 50住
農用水路
用地外（水田）
水田
水田
水田
用地外（水田）
用地外（果樹園）
用地外（水田）

第８図　遺構配置図

土器実測図……$\frac{1}{4}$

土器拓影図……$\frac{1}{3}$

石器・土製品実測図……$\frac{1}{2}$

剝片接合資料実測図……$\frac{2}{3}$

遺構断面図の基準高は特に記述のない場合は43,700mに統一したが、炉跡の断面図については多くは43,400mを使用した。

整理を進めていく中で、調査時に於ける問題点が指摘された。それは調査条件の劣悪さに制限されたことも手伝って、調査上の不手際がいくつか認められたことである。報告書内ではカバーでき得る部分についてのみこれを行った。

〔1〕竪穴住居跡・炉跡

ＦＥ531住居跡　（第９図、写真図版２）

〔遺構の検出〕　遺構の分布区域の北端に発見された住居跡で、第II層上面で検出された。周囲は開田工事により第II層上面まで削平されていて、住居跡の壁等は残存しない。炉跡と、周溝の残存とによって住居跡を確認したものである。

〔平面形・規模〕　周溝の残存部から平面形を推定すると、軸長4.9m ×5.1m のほぼ円形の平面形を得ることができよう。

〔主軸方向〕　N－11°－W

〔埋土〕　床面までほぼ削平されていて、住居跡の埋土は残存しない。

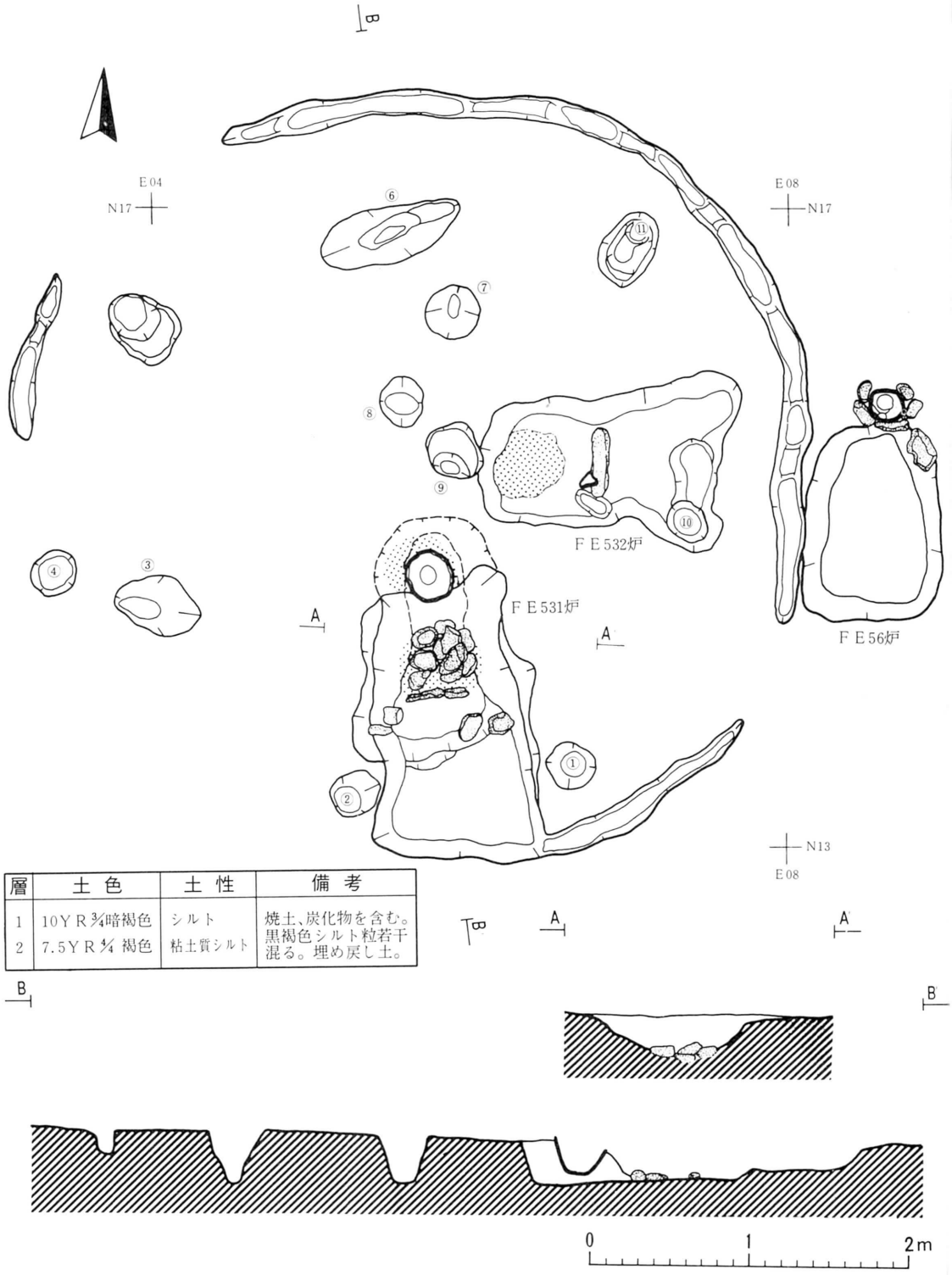
〔壁〕　残存しない。

〔周溝〕　途切れ途切れに検出された。床面からの深さは約10cmであるが底面は平坦ではなく随所が深さ15cm程の落ち込みとなっている。周溝の一部は炉に接続している。

〔柱穴〕　住居跡より11個のピットを検出した（ピットの深さ、埋土については第２表に提示)。

第２表　ＦＥ５３住居跡ピット一覧表

ピットNo.	①	②		③			④	⑤	⑥	⑦	⑧		⑨			⑩	⑪
深さ	42	49		50			40	60	43	58	34					39	40
(層)		上層	下層	上層	中層	下層					上層	下層	上層	中層	下層		
土色	黒褐色 7.5YR 3/2	黒褐色 7.5YR 3/2	暗褐色 7.5YR 3/3	黒褐色 7.5YR 3/2	黒褐色 7.5YR 3/1	暗褐色 7.5YR 3/3			黒褐色 5YR 2/1	黒褐色 7.5YR 3/2	灰褐色 7.5YR 5/4	にぶい褐色 7.5YR 5/4					黒褐色
土性	シルト	シルト	砂質土混りのシルト	シルト	シルト	シルト混りの砂質土			砂質土混りのシルト	砂質土混りのシルト					砂質シルト		シルト
備考		若干の木炭を含む		若干の木炭を含む					土器チップ少量混入								



層	土色	土性	備考
1	10YR3/4暗褐色	シルト	焼土、炭化物を含む。黒褐色シルト粒若干混る。埋め戻し土。
2	7.5YR5/4 褐色	粘土質シルト	

第9図　FE531住居跡、FE532·56炉跡平断面図

一部土性を欠いているピットもあるが、土色・土性・深さの点から柱穴を推定した。

柱穴は①、②、③、⑤、⑩、⑪と考えられ、さらに⑧のピットが炉の延長線上に位置し、ピットの壁を粘土で固めてあったことは柱の固定を意図するものと判断できたため、前記のピットに加えて7本のピットを主柱穴と考えた。この結果、炉の前庭部を挟む2個の柱穴と住居の中央部に位置する⑧ピット、さらに東西の壁付近に2個ずつというシンメトリックな柱穴配置が得られた。

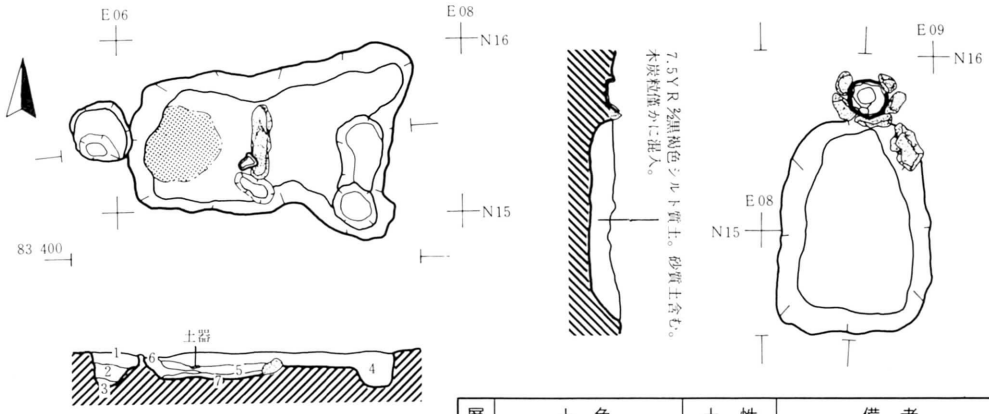
〔**炉**〕　住居跡内に2つの炉跡が発見された。周溝に接続する炉跡を1号炉、他を2号炉（図中FE532炉）として記述する。

〈**1号炉**〉　住居の南側に位置していて、前述の様に端部は周溝に接続する。形態はⅠ、Ⅱ、Ⅲ部に分れる。Ⅰ部…土器埋設の部分で、石組み、落ち込みは伴わない。埋設方法は床面を半円形状に掘り込み土器を埋設し、周囲を埋め戻し、土器の周囲を厚さ3cm程の粘土を貼り固定したものである。土器は有底の深鉢の下半部を使用したもの。土器の周辺は焼土化している。Ⅱ部…床面からの深さ20cmと最も窪んだ部分で、前方の部分（Ⅱa部）には粗く石敷がなされている。Ⅱa部は底面に10数個の石を敷いたものだが、周囲はやはり焼土化していて、石自体も加熱により脆くなっている。Ⅱb部は焼土の堆積は見られない。

〈**2号炉**〉（第10図）　住居の中央部から東壁方向に向けて位置し、炉の方向はN－92°－Wをとる。Ⅰ部…⑨ピットは炉の掘り込み部分に隣接して掘られたピットであるが、ピット内に多量の焼土ブロックが混入しており、柱穴とは性格を異にしたピットと考えられる。1号炉のⅠ部と位置関係が近似していることから、炉に附随する（例えば埋設土器の抜き取り穴）性格のピットと判断し、2号炉Ⅰ部を⑨ピットにあてた。Ⅱ部…Ⅱ部は後続するⅢ部に比べて一段低めの底面をもち、Ⅱ部とⅢ部は河原石で仕切られている。細長い河原石の隣には浅めの小さなピットが見られたが、石の抜き取り穴であろうと想定される。Ⅱ部の底面には厚さ2cmの焼土が堆積していた。

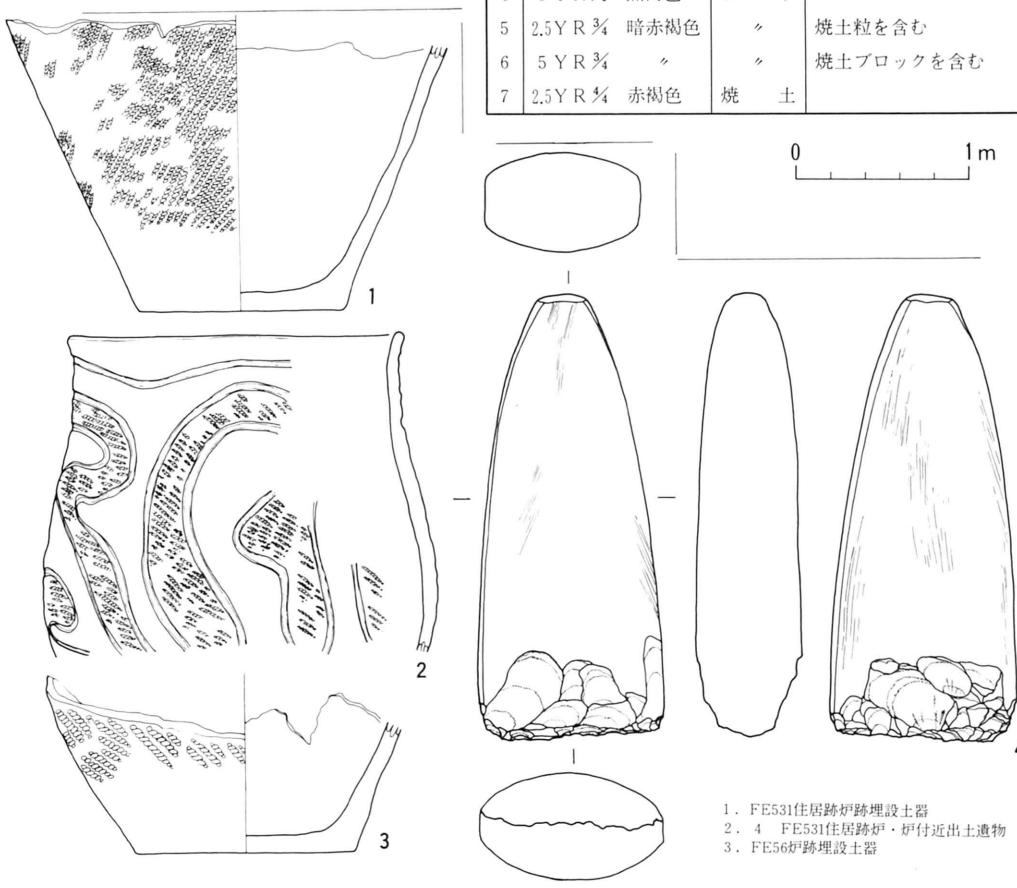
2号炉とFE531住居跡との重複関係については埋土が残存しないために断言できないが、2号炉の遺存状況から見て1号炉より古く、抜き取りの可能性から考えるならば、2号炉は廃棄され1号炉につけかえられた可能性も否定できない。

〔**出土遺物**〕　出土遺物は極めて少ない。炉跡、炉跡付近から数個の土器片と磨製石斧1点、周溝埋土からフレークが1点出土した。11図1は1号炉の埋設土器で、深鉢の下半部である。体部にはＲＬの単節縄文が施されている。加熱を受けて脆弱化しており、器面の剝落も著しい。2は胴脹らみした深鉢（？）上半部である。口縁下方に緩やかな波状沈線がめぐり、体部には沈線による曲線文が展開している。地文はＬＲの単節縄文を使用し、無文部はこれを擦り消している。4は炉跡付近から出土した磨製石斧で、石質は黒雲母玢岩を使用。器面には顕著な調



第10図　FE532炉跡・FE56炉跡平断面図

層	土色		土性	備考
1	10YR ½	黒褐色	シルト	
2		赤褐色	焼土	
3			砂質土	
4	5YR 2/1	黒褐色	シルト	
5	2.5YR ¾	暗赤褐色	〃	焼土粒を含む
6	5YR ¾	〃	〃	焼土ブロックを含む
7	2.5YR 4/4	赤褐色	焼土	



1．FE531住居跡炉跡埋設土器
2．4　FE531住居跡炉・炉付近出土遺物
3．FE56炉跡埋設土器

第11図　FE531住居跡、FE56炉跡出土遺物

整痕が見られ、刃部は両面からの剝離によって整えられている。

ＦＥ56炉跡（第10図、写真図版２－３、３－１）

ＦＥ531住居跡の東側に隣接して発見された炉跡で、住居に伴う他の施設は発見されなかった。主軸方向はＮ-３°-Ｅをとる。

Ｉ部…埋設土器と簡単な石組みとで構成される。埋設土器は地面を幾分掘り窪めた中に埋め込んだもので、周囲は５個の河原石で固められていた。土器は加熱を受けて脆くなっているが周囲はあまり焼土化していない。II部…不整形に掘り込まれた部分で、焼土の堆積は見られない。埋土は黒褐色シルトの単層で、僅かに木炭が混入されている。

〔**出土遺物**〕　Ｉ部に使用された埋設土器の他はII部床面から縄文土器片が数点出土しているが、いずれも観察不可能な細片である。11図３は埋設土器で、深鉢の体部下半から底部までが使用されている。体部外面にはＬＲの単節縄文が見られる。

ＦＧ50住居跡（第12図、写真図版５、６）

〔**遺構の確認**〕　耕土排除後、II層上面で確認された。

〔**規模・平面形**〕　主軸長5.77m、幅６ｍで、ほぼ隅丸方形を呈す。

〔**主軸方向**〕　Ｎ-25°30′-Ｗ

〔**埋土**〕　２層に大別される。上層は黒色を呈したシルトで、炭化物、土器片等を含んでいる。下層は砂質土を含んだ暗褐色シルト質土に占められるが、上層に近づくにつれ漸次黒色味を増している。

〔**壁・床**〕　壁の遺存状態は良好で77°の傾斜を持って床面に至る。床面は平坦で貼り床は行なわれていない。住居跡内の西側床面には直径30cm、厚さ2～3cmの焼土の固まりが見られた。

〔**周溝**〕　幅10～30cm、床面からの深さ10～20cm程の周溝が壁に沿って全周する。周溝底面は平坦ではなく各所に凸凹がある。また周溝底面が一段と掘り下がった小穴状の部分が各所に見られた。このうち⑪のピット内からは石片が集中して多数出土している(後述)。写真図版６－１）

〔**柱穴**〕　住居跡床面、周溝部分あわせて16個のピットが検出された。このうち柱穴に当るピットは、床面からの深さからみて①、③、⑥、⑧（あるいは⑦か）、⑨、⑩と考えられる。この結果、主軸を中心線としてほぼ左右対称の規則的な柱穴配置の形態が得られた。

〔**その他のピット**〕　主柱穴とは認定し難いピット類の中に周溝底面の小穴があるが、このピット類の中で⑪ピットの石片貯蔵例はピットの性格を把握する上で重要な一資料となり得るものである。石片類は⑪ピットの埋土中層部分から一括して出土し、その数は約90片にのぼる。石片類の９割は同一石質で占められ、チップ類の出土はなかった。この出土状況から見て、剝片類はピットに廃棄、流れ込みをしたものではなく『貯蔵』の一形態であろうと判断した。

第３表　ＦＧ５０住居跡ピット一覧表

ピットNo.	①	②	③	④		⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	⑩		⑪	⑫	⑬	⑭		⑮	⑯
深さ	64	14	59	29		34	57	49	50	50	50		27	33	19	33		24	18
(層)				上層	下層						上層	下層				上層	下層		
土色				暗褐色 7.5YR 3/3	黒褐色 7.5YR 3/2						黒褐色 7.5YR 3/2	黒褐色 5YR 2/2				黒褐色 5YR 2/2	褐色 10YR 4/4		暗褐色 10YR 3/4
土性				砂質シルト	シルト						砂質土混りシルト	シルト				シルト	シルト質砂質土		シルト砂土の混合
備考											焼土ブロック混入		剥片貯蔵						

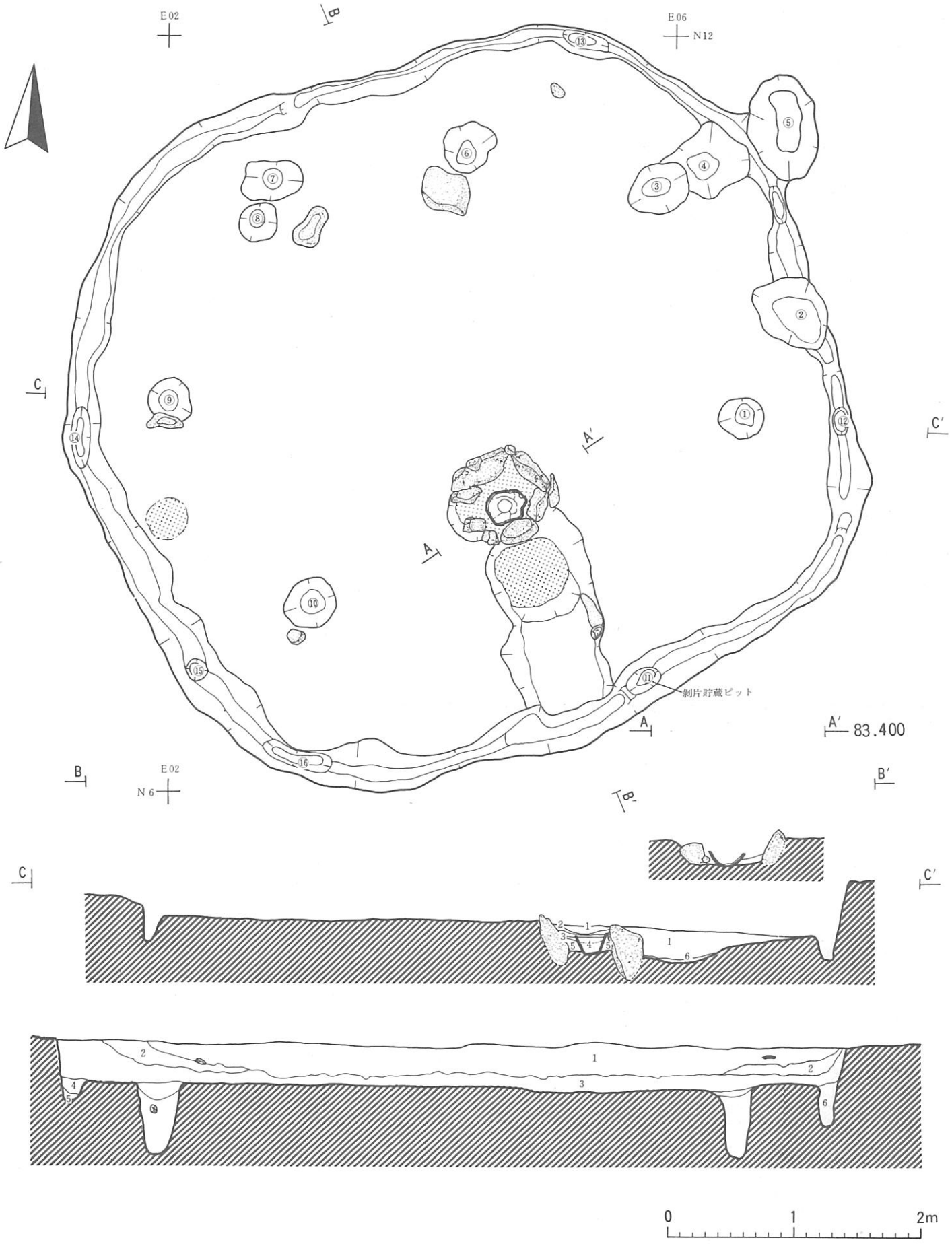
〔**炉**〕　Ｉ部、II部、III部に区分される。Ｉ部…床面を不整円形に掘り窪め、壁に大きめの礫をめぐらせ、中央部底面には埋設土器を持つ。土器の内外共に焼土が堆積していた。II部…最も深く掘り窪められた部分で、底面は固く焼土化していた。III部…周溝に接続する前庭部である。焼土の堆積は見られない。

〔**出土遺物**〕　ＦＧ50住居跡は最も出土遺物の豊富な住居跡である。特に石器、剥片類は床面、周溝部等から多数出土している。（第13図）

土器：床面からの出土土器は数少なかった。１は大型の深鉢で、底部が欠損している。体部から口縁にかけては直線的に立つ。外面にはＬＲの単節縄文が縦回転され、内面は丁寧に磨かれている。２は炉跡の埋設土器で、深鉢の体部下半を使用したもの。体部外面にはＲＬの単節縄文が施されているが、器面の剥落が著しいため明瞭ではない。３は口縁部～体部片の推定実測であるが体部に脹らみを持ち、口縁が外反する器形を取る。外面には沈線による文様区画を持ち、地文はＬＲの単節縄文で、無文部はこれを擦り消している。

土製品：13図４～９は円盤状の土製品である。いずれも土器の破片を使用し周縁を擦って形作ったものである。６は表面に沈線文が施され、他は地文のみの破片が使用されている。

石器（第14図）：１～３は石鏃（Ｉ類）で、いずれも両面から入念な加工が施され、薄手である。３点ともに無茎で、基部には抉入がある。３は比較的大形で、両側縁は幾分コンケーブしている。４－石錐（II類）。錐部は細く長く作り出され、断面は菱形を呈す。５、６、７－ツマミを有する切削器類（III類）に含められる。５は縦形剥片を使用し、両側縁に刃部を持つ（IIIａ類）。刃部、くびれ部分の作り出しは極めて単純である。２は端部に刃部を持つものでいわゆる横刃形の切削器（IIIｂ類）である。表面は入念に加工されているが、裏面は一次剥離面を大きく残している。刃部角は比較的大きく、刃部の刃潰れは顕著である。また裏面の刃部に見られる小剥離は使用による剥離と考えられる。７もやはりIIIｂ類に含められるが刃部角は



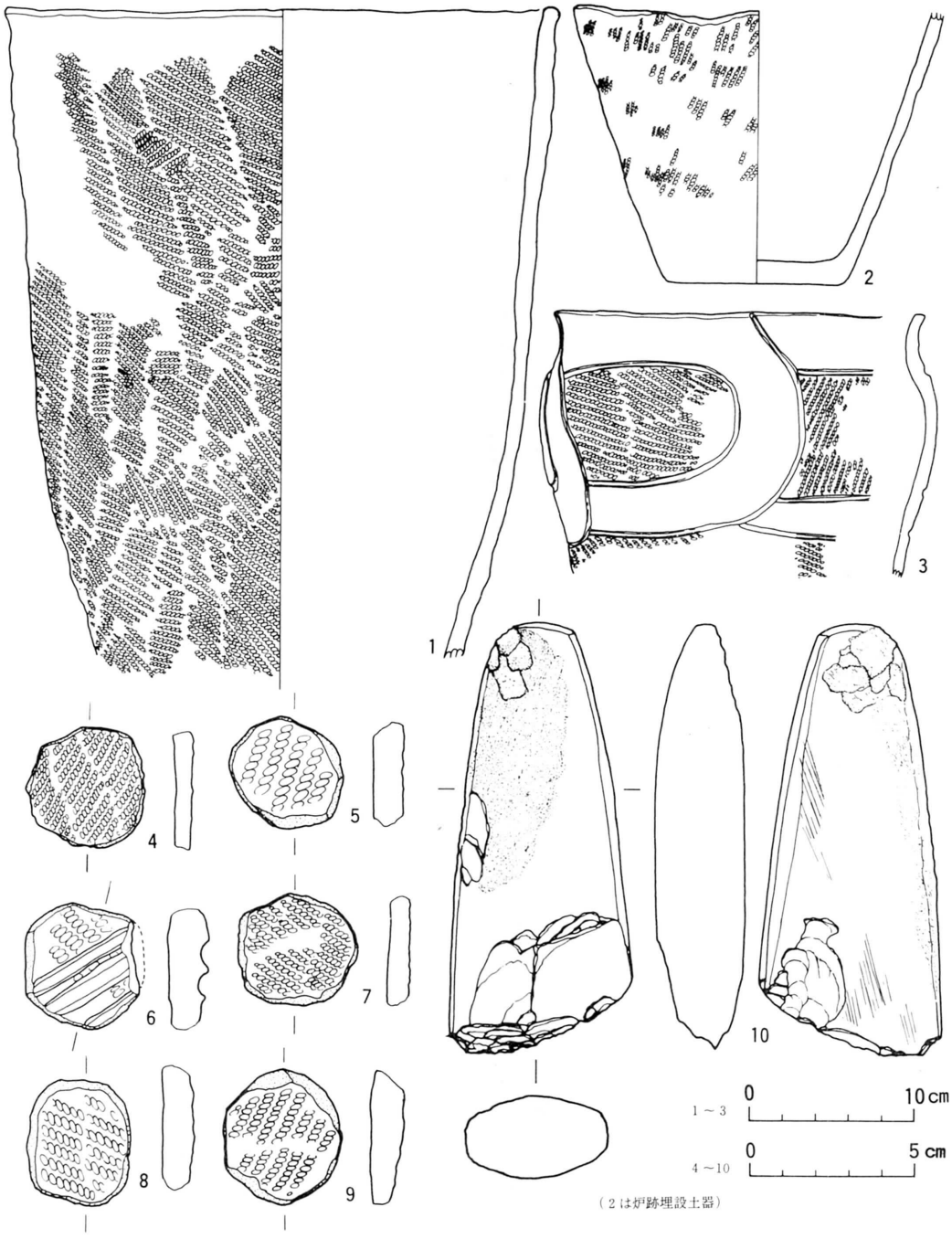
A-A'・B-B'土層注記

層	土色	土性	備考
1	7.5YR 2/1 黒色	シルト	土器細片を含む。
2	7.5YR 3/2黒褐色	シルト	砂質土若干混入。土器細片含む。
3	7.5YR 3/4暗褐色	シルト	2に比して砂質土混入量多い。土器細片含む。
4		焼土	
5			
6		焼土	

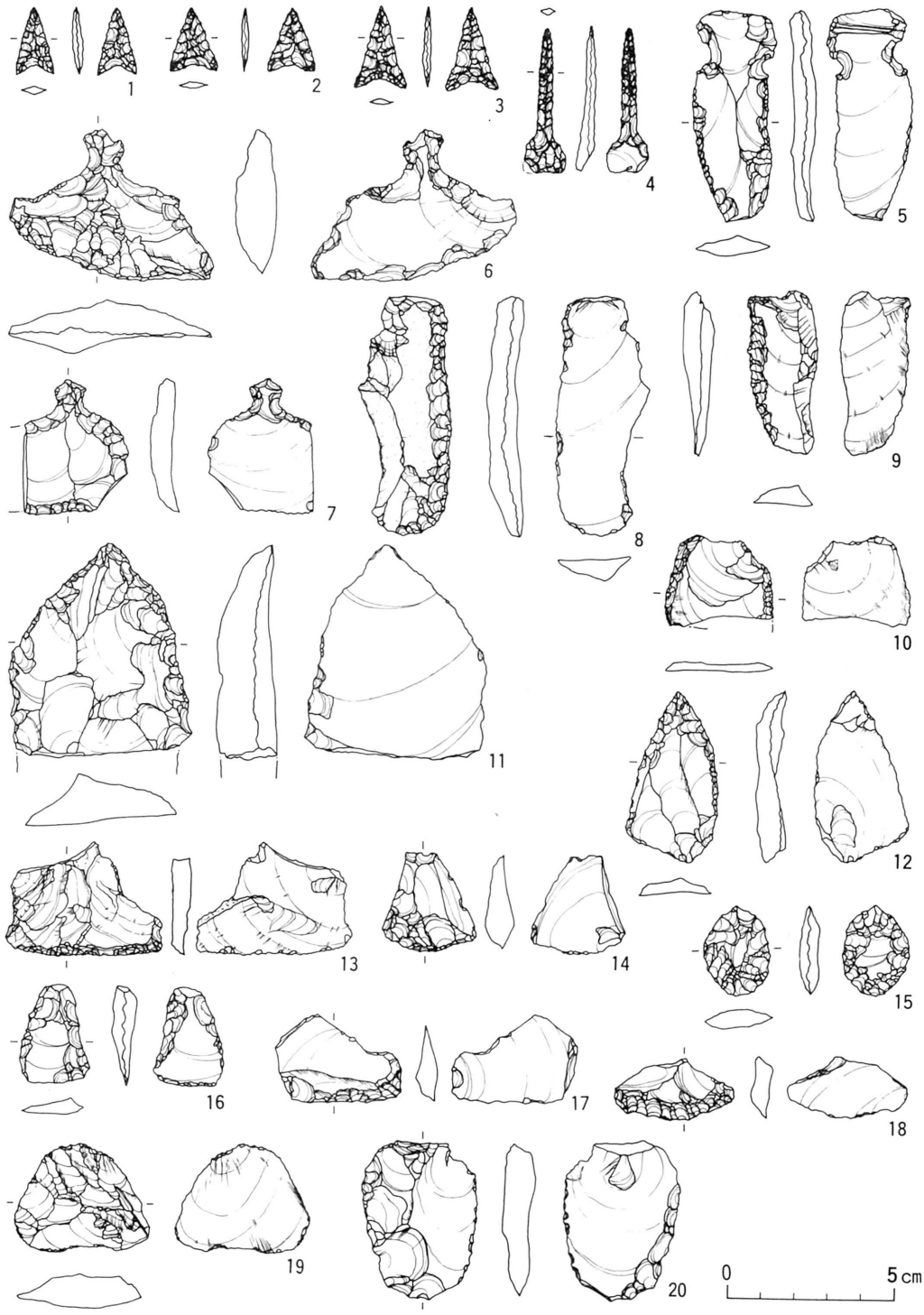
C-C'土層注記

層	土色	土性	混入物	備考
1	7.5YR 2/1 黒色	シルト	岩化物、土器片含む	住居跡埋土Ⅰ層
2	7.5YR 3/2黒褐色	〃	砂質土若干混入、土器片、礫片含む	〃 Ⅱa層
3	7.5YR 3/4暗褐色	〃	〃 〃	〃 Ⅱb層
4	5YR 3/2黒褐色	〃		周溝埋土
5	10YR 3/4 褐色	ミルト質砂質土		〃
6	10YR 3/4暗褐色	砂質シルト		〃

第12図　FG50住居跡平断面図



第13図　FG50住居跡出土遺物



第14図　FG50住居跡出土遺物

大である。一部欠損品。8、9はⅣa類の石器である。8は片面に原石面を残した縦長の剝片を使用。原石面の一側縁に刃部調整剝離を行っている。刃部角大で、刃潰れの痕跡が顕著である。他方の側縁のコンケーブ部分には使用による微小剝離が見られる。11、12－Ⅳb類である。11は分厚い石片を使用し、片面加工により整形され、尖頭形の形状を呈している。刃部調整は両側縁から先端部にかけて認められる。刃部角は大で、形状より剝掻機能を有する石器と考えた。欠損品。12はやや小形であるが、やはり尖頭形を呈している。側縁は一方が幾分カーブし、他方が直線的になっているものである。13、14、18－Ⅳc類に含めた。形態、刃部のあり方も一様ではない。13は刃部がほぼ直線を成すもので、刃部角は大である。加工は片面にのみ集中し一方の面には使用による微小剝離が見られる。14は刃部が弧状を成すもので、刃部の加工は単純である。18は小形のスクレーパーである。片面にのみ入念な刃部加工が施されている。刃部は弧状にカーブしており、刃部角は鋭角である。

この他Ⅳa～cの基準には包括できなかったがスクレーパーであろうと思われる刃部を有するものに10、15～17がある。10はサイドに刃部を有す点ではⅣa類に含められるが、肉が薄く刃部角は小さい。両サイドに片面からの刃部加工がなされている。15は用途に疑問が残る石器であるが、尖頭部使用の刺突具とは考えられず、スクレーパーと判断した。周縁に両面からの押圧剝離による刃部加工が行われているが、使用による磨耗はほとんど見られない。17は長辺の一辺と短辺とに刃部加工が施されている。短辺の刃部は特に刃部角大で、剝掻機能を有すと思われる。19、20は使用痕のある剝片である。

13図10は磨製石斧である。千枚岩を使用。表面には斜方向に走る調整擦痕が見られるが、全体に損耗が著しい。刃部は使用による破損が著しい。

ＦＩ56炉（第15図、写真図版４－２）

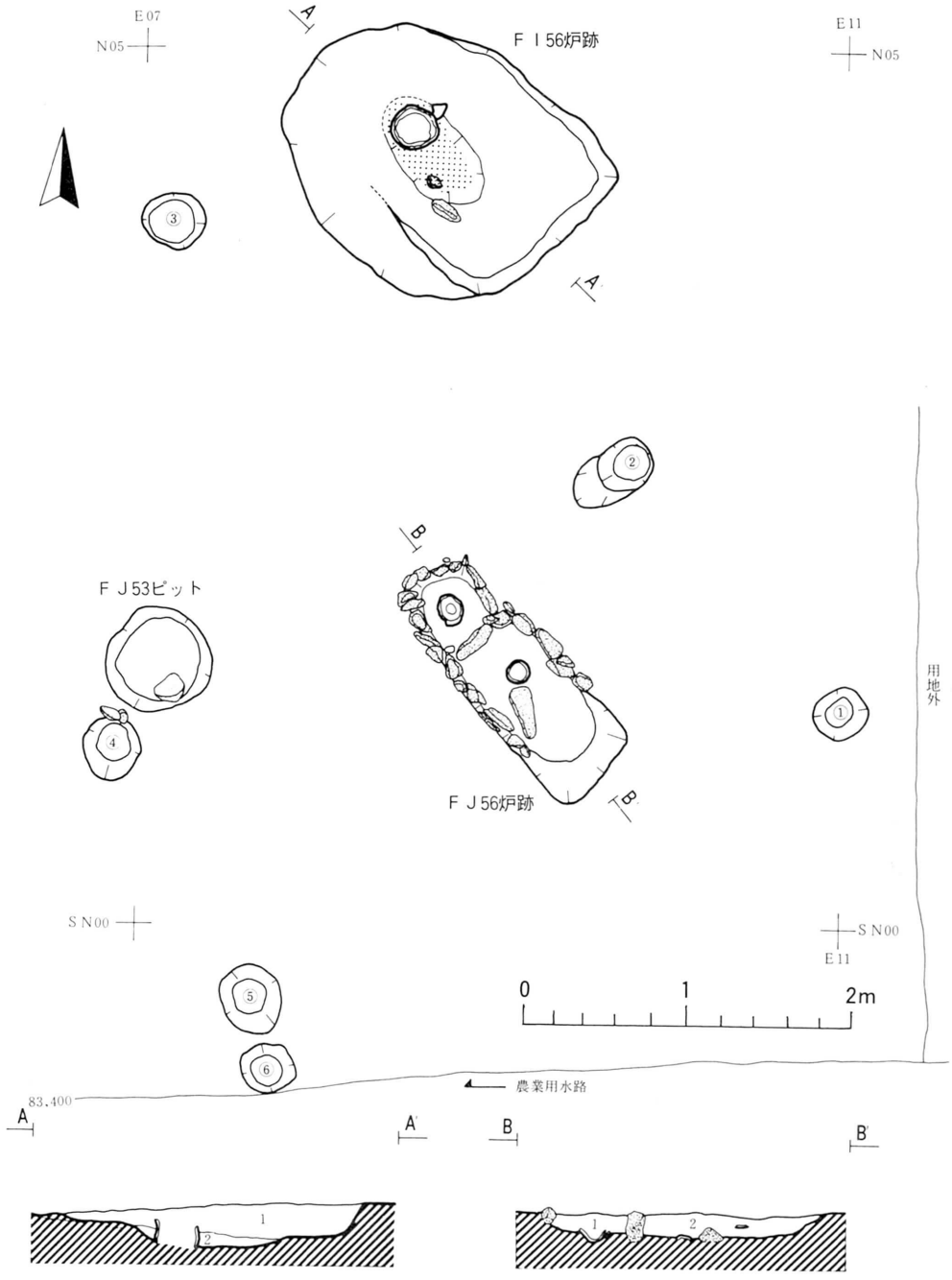
耕土排除後、ＦＩ56、59、ＦＪ56、59グリッド中に南北 6.5m、東西 4.5mの範囲に遺構の広がりが確認された。この黒色土の広がりはダルマ形の形状を呈していて、二つの遺構の存在が予想されたものである。掘り下げた結果、約４～10cmでⅢ層面に至り、ＦＩ56、ＦＪ56炉跡が検出されたものである。ＦＪ56炉跡については後述するが、この二つの遺構の切り合い関係は不明である。

〔**規模**〕　軸長1.75m、最大幅 1.4m、検出面よりの深さ12～15cm。

〔**方向**〕　W－40°－N

〔**埋土**〕　２層に大別され、上層は黒褐色シルト層で、炭化物の粒子、少量の焼土が混入している。下層は埋設土器の周囲に集中している層で砂質土混りの焼土である。

〔**形状・構造**〕　平面形は前方が半円形、後方が方形を呈す。中央部は一段低くなり、底面に土器が埋設されている。この部分は底面が焼土化し、土器も加熱を受けている。



層	土 色	土 性	備 考
1	7.5YR 3/2黒褐色	シルト	炭化物の粒子、焼土混入
2		砂質土混入の焼土	

層	土 色	土 性	備 考
1	7.5YR 3/1黒褐色	シルト	炭化物、土器片混入。下部には焼土を含む。
2	7.5YR 3/2 〃	〃	〃

第15図　FI56炉・FJ56炉跡平断面図